REBORN DIARIO

とうこ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

訳あり女主人公が日記【ＤＩＡＲＩＯ】をつけてリボーンの世界を傍観していくお話。リング争奪戦までの見通し。

目次

日常編 ― Ⅰ
親愛なるXの者へ 1
とあるダメツナの観察目録 4
頼りない炎だな 6
初仕事は球技大会 10
ダメツナの粘り 12
校舎裏スラップスティック 15
殺し屋リスト 19
印象派の彼女 23
あの男は地雷 26
ラブイベントサイレンス 29
戸惑いのボーイミーツガール 32
一方通行 34
あの娘の印象調査 37
その心は愛情に飢えていた 41
日常編 ― Ⅱ
秋、深まる人間模様 44
放課後の刺客 46
応接室で待つ男 1 51
応接室で待つ男 2 55
応接室で待つ男 3 58
沈黙する男 61
週末 1 64
週末 2 66

縮まらない距離 69
日本茶は殺意の香り 73
君想ふ、体育祭　1 75
君想ふ、体育祭　2 77
君想ふ、体育祭　3 81
君想ふ、体育祭　4 85
暮れし秋、水面揺る、君想ふ。 88
日常編　―　Ⅲ
至近距離の標的 94
１０月１０日 100
切り札 103
バースデー 108
ほんの些細なトラウマ 111
経過観察報告 118
彼女と花とリグレット 121
大晦日の報告 124
黄昏と安らかな旋律を 129
デタラメに降る雨が景色を濡らした 133
バレンタインデー　1 137
バレンタインデー　2 141
雪合戦 148
雪解け 151
春はもうすぐ 156
気づかないままでいてくれたらよかった 159
春は桜と君と 166

不安げな横顔 171
伊波、デートするってよ 174
6月の招待状 184
暗殺計画　1 191
暗殺計画　2 197
君と、初夏の頃のプールサイドで 201
ワトソンの直感 206
夜空に咲く夏の花よ 209
もう後悔しない 216
黒曜編
そして悲劇の幕は上がる 219
霧の男 221
故障 226
血に刻んだ野望 231
煩い 235
輪郭 237
君しか 242
右腕を庇う理由 245
決戦の舞台袖 248
血と復讐する者 251
小言 254
終わりとそれから 257
雨と小話
雨日和 262
夢語り 270

ＶＳ．ヴァリアー編
動き出した復讐黙示録 280
暗躍 285
過ぎる暗雲 294
それぞれの修業開始 297
偽物への報復を 305
Ｗｅ　ａｒｅ　ＶＡＲＩＡ 311
契り 318
晴男のリベンジ 321
雷への嫉妬　１ 324
雷への嫉妬　２ 326
雷への嫉妬　３ 331
雷への嫉妬　４ 336
嵐の憂鬱 342
愛の追想曲 353
恋敵　１ 360
恋敵　２ 374
流派を超えろ 391
あの夜の土砂降りの雨に願った 396
雨の一太刀 399
鎮魂歌の雨 408
霧の昔話 414
雲達の因縁　１ 419
雲達の因縁　２ 422

日常編　―　Ⅰ
親愛なるXの者へ

【これから私が見届けるこの世界で起こる一連の出来事を、この日記に詳細に綴っていくことにした。】

四畳半の湿気臭い畳部屋、木造建築物二階の一室で胡座をかいた人物が、明かりに頼らず暗がりに慣れた目を凝らし、その文字を綴る。

まだ夜が明けない外は、風がカタカタと立て付けの悪い窓を叩いている。

暗室の角に荷物を詰め込んだキャリーケースや昨晩九時頃に業者に届けさせた厚紙の箱が乱雑に山積みにされていた。

一切それらには手をつけず、人ひとり暮らすにも狭い部屋の中央にはピーナッツ型の小型テーブルが置かれているのみで、寝静まる夜の重苦しさに息が詰まりそうになりながら彼女が書き殴る内容は、日記と言うには秘めたる覚悟と意志が綴られていた。

【これが、今の私にできることのすべてだ。】

彼女自身の半生を振り返り、この日までどれだけ心を潰して耐えてきただろうと、血が通うこの心臓に投げかける。

ずっとそばで見てきたから、その人が、残酷な真実を手にして破滅していくのを見ていられない時もあった。

止められなかった。運命には、逆らえなかった。

こうするしかないとわかっていたけれど、私はただ見ていることしかできなかった。

筆を握る手が、ふと止まりそうになるのを、押し寄せる感情の波とともに奮い立たせる。引き攣りそうな痩せたその左手で、空白の紙面にこの想いを埋めていく。この手だけは、止めてはいけない。

【どこまでできるのかはわからない。それに、私のこの決断は彼らを裏切ったということだ。

詫びなら死んで償える。でも、私にはこれしか他に思いつかなかったんだ。もう後悔したくないんだ。】

彼らの怒りの表情が容易に浮かんだ。

この世界がシナリオ通りに向かうなら、構わないことだ。今すぐこの暗闇が彼女の意識を飲み込もうとも――――。

テーブルの上に立てかけたスクエア型の腕時計が、六時を回る。秒針はカチカチと規則的に音を刻み、空が日の出を迎えようとする。

【四月三日、第一月曜日、入学式当日、九時開式、新入生は八時半までに登校すること、校内掲示板に貼り出された各クラスの教室で十分程度ＨＲをした後に式入場。

彼は、まだ眠り続けているだろうか。】

誰よりも、あなたの未来を願っているから。

【標的、沢田綱吉。

ボンゴレＸ……十代目後継者候補。】

パタンと【ＤＩＡＲＩＯ】の表紙を閉じる。
赤みがかった茶表紙の、辞書ほどの厚みの紙媒体。
しばらく眺めて、それに小さな南京錠をかける。

暗がりに目が慣れた彼女は視線を上に仰ぐと、すきま風にカタカタと震える窓には、東の空に鮮やかなオレンジ色がかかる頃だった。

とあるダメツナの観察目録

体育館に響き渡るダンクと快活な生徒達の声に埋もれていたはずの彼のもとに、チームメイトがパスしたボールが彼の顔面に襲いかかる。

顔面でそれを受け取った彼はまるで情けない声で痛みに呻き、さらには重心を崩した足で体育館の床に転んだ。

「またかよー」

「頼むぜ、ツナ！」

チームメイト達のそんな励ましのような呆れたような声援を受け取る。

ツナ、と彼らに呼ばれたとんがり頭のその少年は、ハハッと愛想笑いで答えながら鼻を押さえてむくりと立ち上がる。

情けない。

伊波紫乃は体育館壁際に背中をもたれ、体育館の敷居の半分を使って行われる男子バスケの試合を一部始終見ていた。

入学からこの二ヶ月の間、その標的を今まで観察し続けてきたが、ダメツナと渾名されるのも仕方ないほどのダメっぷり。

時期が来るまでは陰ながらその行動を見守ろうと決めていたが、テストは入学以来赤点コンプリート、スポーツは彼が加わるチームは全敗という都市伝説級の話まで、とにかくやることなすこと結果を出せずじまい。

挙句、負けたという言いがかりで一人掃除を押し付けられている始末だ。

授業が解散すると、モップを手に立ち尽くす沢田綱吉は、ダメツナっぷりに開き直って体育館内を徘徊し、偶然屋外に見つけた憧れの女子生徒に心を奪われている。

まあ、彼の性格からして、几帳面に押し付けられた仕事をするタイ

プでもないので、先に着替えて出てくるのを待つことにしようと紫乃は人知れず女子更衣室に戻る。

ここ最近での体育の内容はほぼほぼバスケで、取っ掛かりが掴めていない。記憶にある時期にも体育の授業でバスケをしていたはずだが、連日のバスケの授業に沢田綱吉でなくとも飽き飽きして来る頃だ。館内でできる気軽なスポーツとして教師にはこの上なくやりやすいのだろう。

しかしもう六月も半ば、もうすぐそこまで来ているはずだ。

すでに彼女以外着替え終わり誰もいない更衣室の端で、待ちに待ったこの機会に血管の奥からうずうずと疼き始めていた。

入学初日に、クラスが同じになったのも、偶然ではない。これはもう必然なのだ。沢田綱吉を見守ることこそが、彼女の宿命であるというように告げていた。

その日の午後から沢田綱吉は授業をサボっていた。

クラスで同時に二人がサボるのも目立ってしまうので、彼女はその日の沢田綱吉の行動観察を断念して午後の授業に出る。

標的のいない教室での授業など、なんの意味もないようにくだらない時間だ。窓際の席から、どこまでも青く澄んだ空を見上げた。

頼りない炎だな

放課後、淡々と授業が終わりすぐさま学校を出て家路を歩く。
今日も滞りなく平凡な学校生活が送られた。
普段通り物静かな住宅街の家路を歩いていると、遠くから誰かの雄叫びが聞こえてくる。
どこかで身に覚えのあるようなそれに振り返ってみると、その時紫乃が歩く道の横を真っ裸の男が猛烈な勢いをつけて走り去っていく。
まるでジェット機が真横を過ぎ去る凄まじい風圧を受け、捲れそうな制服のスカートの裾とずれ落ちそうな眼鏡を掛け直す。
それはほんの一瞬の出来事だった。

――――沢田綱吉!!

すでに何もない住宅街の景色を見つめ、彼女の口角は無意識に吊り上がる。
時は来たんだ。ついに。アイツが現れた。
世界最強の殺し屋……アルコバレーノ……。

あの感じなら問題はないだろう。
明日にも誰かが言いふらして学校中が騒ぎ立ててるはずだ。

【六月十八日
ついにイタリアの殺し屋が並盛にやって来た。これからだ。明日にも体育館で決闘が行われるだろう。その時が来るまで、傍観者に徹しよう。】

紫乃は安堵していた。同時に、その胸中は言い知れない不安を募らせていた。

翌日。案の定昨日の沢田綱吉露出騒動でクラスどころか学校中が噂していた。噂の本人が登校してくるまで紫乃は教室窓際でその心境を思うと沢田綱吉にとても同情した。

……と少しふざけていたところにその本人お出ましだ。クラス中から囲まれる。

「パンツ男のおでましだー！」
「ヘンターイ」
「電撃告白！」
「持田センパイに聞いたぞーっ」
「めいっぱい拒絶されたんだってなー」

報われない主人公が登校してきたことで、教室がお祭り状態となる。

まあ主人公の宿命だと紫乃は傍観することに徹底し、浮かばれない本人は踵を返そうとしたところで剣道部に拉致され連れていかれた。

その流れで皆が道場へ足を運び、教室がカラになったところで紫乃は立ち上がり、野次馬達の後に続いた。

「来やがったな変態ストーカーめ!!　お前のようなこの世のクズは神が見逃そうがこの持田が許さん!!　成敗してやる!!!」

これがフラグというやつか。持田という先輩がすでに剣道着を着込み待ち構えていた。このあと自身のフサフサだった髪に見放されるとも知らず……。

持田とかいうよく憶えていないヤツがうるさいのは無視して、紫乃は沢田綱吉の方に目を向ける。わけもわからず連れてこられた本人は勘弁してよ～と言いたげに道場の隅で小さく怯えている。

持田が笹川京子をかけて勝負を挑んだ辺りで沢田綱吉が逃走を図り、道場がブーイングに包まれる。普段はあれだけお淑やかにしている笹川京子も賞品扱いにご立腹の様子だ。

……ここが正念場だ。世界最強の殺し屋、そう自負するなら必ず彼をこの場に寄越すんだ。

紫乃は祈るしかなかった。生徒達でごった返す道場内の一角で、傍観すると決めたから、じっと持ち堪える。

道場内の熱気がすっかり冷めて、どれくらい経っただろう。ほんの数分しか経っていなかっただろう。

すると、道場の外から何やら慌ただしい足音が響き渡る。道場全体に響く衝撃音。中にいた誰もが扉に注目していた。

「いざ！勝負!!!」

その雄叫びが場内に響き渡るとともに、熱気が再び沸き起こる……かと思えば、次に現れた沢田綱吉の格好が裸同然でお出ましたので場内は違う意味で騒ぎとなっていたのだった。

あれが……死ぬ気の炎……。

沢田綱吉が見事活躍し、無事に持田を禿げ散らかしたところで、人知れず紫乃は賞賛に包まれた道場を後にした。

人気のない廊下をひたすらに歩く。

これまで沢田家まで彼の行動を見届けていたが、今後はやめておこう。あの殺し屋の赤ん坊には勘づかれる可能性が高い。

ここからだ。沢田綱吉、ボンゴレの血を継ぐ者よ……。

【六月十九日

沢田綱吉が初めて死ぬ気の炎を灯した。まだまだ頼りない灯火だが、君の家庭教師の男が、きっと君を継承者に相応しい男にしてくれることだろう。とても楽しみだ。

必ずボンゴレXに相応しい男になってくれ。】

初仕事は球技大会

先日の一件以来、沢田綱吉に対する周囲の目が変わったのは周知だ。不気味がる生徒がいる一方、以前は彼をダメツナとからかっていた者達は、彼を見ると気さくに声をかけ、一目置くようになった。

これまでの沢田綱吉が初めて見せた成果だ。

本人は慣れない態度に照れくさくしているようだが、もう少し素直に喜んでもいいと思うんだが。

彼を入学以来ひっそりと傍観する伊波紫乃は、教室での彼の明るい表情を、窓際に寄り添って静かに見守っていた。

だが、そろそろ次のイベントが来る。

紫乃もまた気を抜かないよう経過を観察することに徹底した。

【六月二十一日。

この日も、沢田綱吉は学校に来た。あの件以来授業をサボることもなくなり改心している様子だ。

有意義な学校生活を送り始めた彼のもとに、しかしこの日の休み時間、あのことが起こる。】

廊下に出た沢田綱吉のもとに男子生徒が駆け寄る。と、何やら男子生徒が手を合わせて話し込んでいる。男子生徒が頼み込んでいるという方が正しいか。

その様子を教室の中から窺っていた紫乃はもしやと思い、その後沢田綱吉が男子生徒の頼みを了承したようで、男子生徒が明るい表情で廊下を去っていった。

教室の前で残された沢田綱吉の方は、満更でもないという顔で予鈴と同時に教室に戻り自分の席に着いた。

授業中も窓際後方席から沢田綱吉を観察していた紫乃は、やはりあのことだと察しがついていた。

授業が終わり、沢田綱吉は先程の男子生徒を含め数名と合流し、体育館へと向かった。

さすがにその後の赤ん坊との会話を盗み聞きするにはリスクがあるので、先回りし体育館で彼を待つことした。

今日行われる球技大会は生徒の出入りが自由であり、紫乃が見物しようと不自然ではないはずだ。

案の定、館内に現れた沢田綱吉はぐったりとしていた。

しかし、想像以上に彼の登場で体育館には熱気が籠っていた。盛大な歓迎とともに彼が来て間もなく試合が行われる。綱吉コールに飲み込まれ、彼の顔色は一層悪くなる。

紫乃の記憶通りなら、あの殺し屋の男に死ぬ気弾を断られたのだろう。

死ぬ気弾は死ぬ間際にやり残した後悔を糧にしてリミッターを外し極限にまで能力を高める。

天狗になっている沢田綱吉には今使用不可能な代物だ。

試合が始まると案の定ボロボロにダメっぷりを露呈し、期待していた分の試合会場は一気に静まり返る。

これはあまりに見てられない。

「情けない」

空気に溶け込むよう出入口の前で傍観していた紫乃は、間近で見るダメツナっぷりに少々頭を抱えるのであった。

ダメツナの粘り

「あれがファミリーの十代目か……」とどこかで耳にした声がする。
あの男の差金でイタリアから早々に来ていたらしいそいつも、あまりの落胆っぷりに気づけばそこに忽然といなくなっていた。
今は、見逃しておくことにする。いずれまた落ち合うことになる。

第一セットが終了、館内の空気はもー最悪だ。
それこそ殺意にも似た冷ややかな視線ばかりが彼一点に注がれている。
本人は耐えられないと言ったように片足を庇うようにして、体育館を後にする。
その背中さえ見守ることしかできないのが、少しだけ心苦しいと思うのだった。

彼が抜けた後にも試合は再開され、彼がいたチームは苦戦を強いられている。もともと数も足りていないというのでははなから難しい試合だ。
このままでは負けるだろう……館内はそんな空気に包まれていたが、彼女だけはまだチャンスがあると確信していた。

体育館の扉を再び叩く音……。

吹っ切れた顔の沢田綱吉が、そこに立っていた。
彼が戻ってきてくれただけで、チームの士気が高まっているようだった。

彼は間違っていない。
一生懸命にやったのなら、その後に後悔してもいいじゃないか。

会場が熱気を取り返した頃、館内のどこからか光の筋とともに銃声が鳴った。それが沢田綱吉の太股にヒットした。

「やられたー！」

思わず倒れ込んだ沢田綱吉だったが、その後に何も起こらず当人も会場を見回してただただ困惑している。

紫乃は、十中八九あの赤ん坊の仕業であると見抜いていた。

試合が再開される。

覚悟を決めた彼が、相手のアタックボールをブロックしようと飛んだ時――――

まるで関節がバネのようにしなやかに曲げられ、２ｍもあるネットを飛び越える勢いで飛んだ。それは飛んだ本人も、相手チームも、試合会場にいた誰もが驚くほどに高く高く飛んだのだ。

その瞬間、試合会場はこの時一番の激しい歓声と熱気に包まれた――……。

試合観賞後、紫乃は尾行することはなく、家路の途中にある沢田家の外観を見上げていた。

あの二階の窓の向こうで、きっと試合結果に大喜びしているんだろう。心做しか彼を見守るにつれて彼の成功に喜んでいる自分がいると紫乃は思った。

……まだ、心を開くわけにはいかない。

レンズ越しに拡がるこの世界を、必ず彼女は導いてみせると、制服のスカートの裾を翻して住宅街の道を歩んだ。

【死ぬ気弾に頼らず、自分の力で戦おうとした。ボンゴレXとしての素質はこの頃から芽を出していたのかもしれない。とても素晴らしいことだ。

既にイタリアからはあの男が来ているようだ。順調だ。観察を継続する。まだ死なせるわけにはいかない。】

校舎裏スラップスティック

【六月二十五日
イタリアからあの男がやって来た。見る者を切り裂くような鋭い眼光を持つ銀髪の猛獣。彼の名は……】

「イタリアに留学していた転入生の獄寺隼人君だ」

紫乃と沢田綱吉のクラスに留学生が転入してきた。
銀髪に野性的な眼差し。
彼は、獄寺隼人。

その身なりは簡素にまとめれば〝不良〟だが、良く言えば〝ワイルドなイケメン〟だ。
イケメンに帰国子女ということでクラスの女子が慌ただしい。すでに数名が浮かれまくっている。休み時間には他のクラスからも見物客が殺到するだろうなと紫乃は直感した。
沢田綱吉の反応はどんなものかと確認する。ムスッとした顔つきでその転入生を見ているようだが、その男に教壇から眼光を飛ばされたようで負け犬根性がご丁寧にビビりまくっている。
さらに教師の誘導を無視して教室を歩き出した獄寺隼人は、態々沢田綱吉の席まで宣戦布告をして自身の空いている席に座っていた。
沢田綱吉は負け犬の如く持ち堪えている。

ふと、紫乃は中央後方席に座る獄寺隼人を見た。
こちらの視線にあちらも紫乃の顔を見たが、すぐに視線を逸らされた。
その反応に紫乃は人知れず笑みをこぼした。

その後も特に興味のないフリをしてやり過ごした。ＨＲは獄寺隼人の話で持ち切りで、特に女子が大騒ぎしていた。

休み時間になり予想通り獄寺隼人を見物に来る生徒やら遠くから取り巻く輩が増えている。

紫乃は特に気にとめず、沢田綱吉が立ち上がる頃を見て人気のない校舎の廊下へと先回りしていた。ここからなら校舎裏の様子がよくわかる。

校舎三階から待っていると、脂汗をかいて裏庭に出てくる沢田綱吉の姿が見えた。独り言を言っている内容はここからでは聞き取れないが、予定通り獄寺隼人が待ち伏せていた。

よくあの取り巻きをまいてきたなとも紫乃は感心していたが、裏庭での彼らの会話を観察すると獄寺隼人が煙草に付けた火を爆弾（ボム）に引火させる。それを地面に落とす。

さあ、アルコバレーノ。君の出番だ。

風を切る音とともに導火線が鎮火した。二人が驚きを隠せていないところに紫乃がいる向かいの校舎の一階、スコープ付きのライフルを手に構える赤ん坊の姿がある。

……さすがだな。バッチリのタイミングだ。世界最強の殺し屋と恐れられるものは持っていると紫乃は肌で感じた。

さて、次は彼自身の番だ。

額を撃ち抜かれた男は、再び軟弱な炎を灯した。息を吹き返した男にたじろぐ相手の攻撃をものともせず、爆弾の消火活動に勤しんだ。のちに敵だった男が命の恩人だとあっさり寝返るのであった。

思った以上にドタバタ劇を繰り広げたが、爆弾も爆弾男も鎮火し一件落着……。

校舎三階から覗き見していた紫乃は、直後に乱入しようとしたチンピラ達の動向も観察しようと思ったが、すぐさま壁の死角に身を潜んだ。

――――沢田綱吉の家庭教師が、校舎三階の様子を窺っていた。

彼は、一瞬人の気配がしたように思ったが、校舎を見上げても人影などなく、結局獄寺隼人の馬鹿騒ぎに便乗した。

物陰に身を潜む紫乃は、つくづくやりづらい相手だと舌打ちした。あの騒ぎがある中でもこちらに気づくとは……。

沢田綱吉を今後は導いてくれる重要なキーパーソンになるが、あまりに勘が良すぎる相手だ。彼が沢田綱吉のそばに付いているお陰で教室での動向観察にも支障が出始めた。下手に動くとこちらが目を付けられる。

あの赤ん坊に、こちらの思惑を悟られるわけにはいかない。

彼らが裏庭から退避するまで、紫乃はそこでじっと身を固めていた。

【イタリアからあの男がやって来た。見る者を切り裂くような鋭い眼光を持つ銀髪の猛獣。彼の名は、獄寺隼人。

家庭教師リボーンが寄越した精鋭。爆弾のようにその男はなかなか手のつけられない問題児だ。

沢田綱吉は見事に彼を手懐けた。

あの男は見抜いているのだろう。沢田綱吉の素質。

獄寺隼人もまた、彼と今後をともにすることで幼少期を少しずつ克服していくことだろう。

厄介な相手だと思ったが、彼は家庭教師としての才能も十二分に持ち合わせていたのか。

君が、沢田綱吉と炎を導いてくれるのか。期待している】

殺し屋リスト

【ここ数日、彼の周りでは色々な出来事が起きた。
というもの、獄寺隼人が色々やらかすのである。
退学クライシスだったり、裸でダウジングをしてグラウンドをまっぷたつにしたり、あの根津という教師が学歴詐称で解任されたりと、それはもう色濃い内容である。
あの爆弾魔こと獄寺隼人が色々やらかしてくれたりするからそれはもう大変だ。

同時に獄寺隼人が忠実に暴れてくれたということでもある。感謝している。

しかし、そんな彼らの退学騒動がほんの些細なことに思えるようなとある出来事が、この日私の身に起こったのであった。】

平凡な学校生活が終了し帰宅する。
本日も沢田綱吉は転入生である獄寺隼人にしつこく絡まれ迷惑しているようだった。
ほんの少しまでヒーローだったというのに不良に見初められ、今ではすっかり影も形もない。あるのはクラスの女子からの羨望と殺意を織り交ぜた沢田綱吉への視線だけである。
イケメンとは罪深い。

紫乃はしみじみとそう沢田綱吉に同情するのが日常生活の一部のルーティーンとなっていた。
放課後は標的の観察もできなくなり早々に帰宅することにしていたのだが、紫乃は家路へと向かう道を普段より遅いペースで歩いてい

た。

……視線を感じる。

振り向かずともわかっていた。例の沢田綱吉の家庭教師だろう。

それ以外に他に理由もない。

態と気配を完全には殺さず跡をつけてくるとは……疑っているのか？　探りに来ているのか？

これくらいは想定内だった。

行き先を変更し並盛図書館に向かう。

あの赤ん坊の考えていることは予想できる。

彼は沢田綱吉のファミリーとなり得る人材を欲していた。同じクラスメイトから順々に偵察しているだろうことは容易に考えられた。

何もしなくていい。普通を演じていればいいだけのことだ。

彼のことだ。並盛中の全校生徒を候補にしているなら一人の生徒にかける時間はほんの数十分程度だろう。彼ほど優秀な殺し屋なら標的の情報を集めるのにそのくらいの時間があれば十分だ。

それに彼は沢田家の母が振る舞う手料理をとても楽しみにしている。夕食時間には沢田家の食卓についておく律儀な性格だ。余程のことがない限りは、夕食までにこの偵察を切り上げるに違いない。

そうなら何も起こらないこの数十分間……持ち堪えればいいだけだ。

図書館に着きそこではいかにも勤勉に自習する生徒を演じているところで、紫乃の予想通り夕食時間を気にしてリボーンは数分程度で紫乃の偵察を切り上げた。

気配がしなくなったところで、張り詰めていた緊張を解く。

思った以上にアルコバレーノの存在が、平常心を乱していたようだ。

やはり一筋縄ではいかない相手であると再確認するのだった。

図書館をその後出て、紫乃は日がだいぶ西の空に暮れた頃に帰路へと着く。
茜色に暮れる空を眺めて河原を歩いていた頃、コツンと足に何かが当たる。
視線を下げてそれが何かを確認すると、手のひらサイズの白い球だ。
「すいません――……ってあれ、伊波じゃねえか？」
そう声をかけてきたのは、彼女もよく知る人物だ。
足元のもともと白かったその球は、何度も何度も的にぶつかってボロボロであった。西日に反射している表面を触れた親指で撫でて、河原の景色を見下ろした紫乃は、河川敷から顔を出したその人物を眼鏡越しに睨む。
放課後の河原で制服姿で練習する山本武だ。
「悪いな、またボール転がしちまって」
学校でも他の生徒同様にほぼ話したこともない紫乃にもこんな笑顔で話しかけてくる山本武を見て、紫乃は昼休みにもこんなことがあったと思い出す。
校庭を歩いているところに、山本武の打ったボールが飛んできたのだ。紫乃の顔を直撃するスレスレのところを横切り校庭の草むらに転がっていった。

あの時と同じだ。
あの時も山本武は会話もしたことのないクラスメイトの自分を覚えていて、今と同じように気さくに話しかけてきた。
山本の方から紫乃の姿は逆光して眩しそうにしている。
あの時と同様に紫乃は何も言葉をかけず、手に拾うボールを投げた。緩くカーブするそれを河川敷の下から山本武がグローブの中央に収める。
「サンキュー！　伊波の家ってここから近くなのな」

ほぼ初対面の紫乃にも親しく話しかける山本武が、黒い烏が夕日に向かい飛び立つ頃にもこんなことを不意にこぼした。

「ハハッ、ここ最近コントロールが上手くいかねえんだ。だせえとこ見せちまってるよな」

明るく言ってみせたが、山本武の表情には普段のような柔軟さが欠けている。曇る顔で自身のグローブをはめた手を見つめていた。

「……ほぼ初めて君と話す私にそんなことはわからない」

彼女が初めて口を開いたのは冷たい一言だった。

なのに、山本武の反応は落ち込むどころか、紫乃の顔をほのかな西日の光が差す目で彼女の言葉に向き合おうとしていた。

「私ではなく、君のことを本当に理解してくれる人達がそばにいるよ。君は彼らのためにも、野球に打ち込むといい」

紫乃にはこれくらいしか言えなかった。生きてくれ、なんて言えるはずもない。本当に導くのは彼ら自身だ。自分は所詮傍観者に過ぎない。

山本武と別れた数キロ先の河原に立ち止まって、水面に反射する並盛の町を眺める。

【想定していたアルコバレーノの偵察だ。問題なくかわした。

想定外だった山本武と二度の接触。

二度目の接触はかわしきれなかったが、彼に自分のメッセージは届けられたように思う。

もうすぐ次のことが起こる……。】

印象派の彼女

【六月二十九日
　その数日後にも山本武の自殺騒動が起きる。しかし、沢田綱吉のまるで謝罪のような説得で山本武を救った。私も後列に同席していたが、ダメツナの彼らしい心に染みる言葉だと思った。】

　その日の放課後にも、沢田家にダメツナと帰宅していた彼の家庭教師リボーンは、あることについて逡巡していた。
「なあ、ツナ」
「な、なんだよっ」
　山本武と友達になれたことですっかり浮かれていた沢田綱吉は、不意打ちの鬼の家庭教師の呼びかけに恐る恐る返事を返した。
　リボーンは少し考えた後、沢田綱吉にこう聞き返した。
「お前んとこのクラスにいる伊波紫乃についてどう思ってんだ?」
　またボコられると構えていた沢田綱吉は予想外の質問にヘンテコな構えのまま固まった。
「え……?　い、伊波さん?」
　最初はリボーンが何を言っているのかわからなかったが、自室の天井を見上げぼんやりとクラスメイトの伊波紫乃について考えを触れてみた。
　静かで、教室でもよく一人で窓際の席にいる女子生徒だ。ダメツナの頃、なんとなくそう思っていた。自分のように孤独ではなく、自ら一人を選んでいるような凛とした横顔に少し憧れていた。
「う～んと……よ、横顔が綺麗な子だよね?」
「バカツナ!」
「いでーっ!」
　やっぱり殴られた!　というか蹴られた!　理不尽と叫びたそうにしている沢田綱吉を無視してリボーンは言った。

「俺はそんなこと聞きたいんじゃねーぞ。ツナの変態」
「なんでだよ！　俺は別にそんな意味で言ったんじゃ……！」
全く下心などはなかったが、そう言いかけて顔から火が噴き出した。
「い、伊波さんがなんだよ？　まさか伊波さんまでマフィアにするとか言い出すんじゃ……女の子だぞ⁉」

横でオドオドしながら騒がしい沢田綱吉の親指を第二関節まで曲げて一旦黙らせたところで、リボーンは一人考え込んでいる。
ほんの数日前にファミリー候補を探して偵察した沢田綱吉と同じクラスの女子生徒だ。
肩で切り揃えた黒髪、重い前髪、銀縁の眼鏡によく見ると鼻筋の通った端正な顔立ち、運動を知らない白い透明肌、校則に従ったスカート丈の制服……。

どこを見ても真面目な優等生だ。
中身も外見に伴い、成績は学年で十番以内、教師からの信頼は厚く、沢田綱吉にも是非見習ってほしいくらいだ。
彼女を数日後につけた時も、図書館で自習をする勤勉さを見せていた。
リボーンは数分程度観察し、ママンの夕食に間に合うよう早めに切り上げたが、その印象に残っている生徒のことを逡巡する。
何故だ。彼女のような生徒は普通なら影に埋もれるタイプだ。何故この時も印象に残っているんだ？
常に教室で一人でいることは知っているが、彼女の性格ならそう違和感のあることでもない。クラスに一人くらいそういう類の生徒はいるものだ。女子生徒というのが少し珍しいくらいだが。
そういえば、数日前の山本武の自殺騒ぎがあった時も、さほど興味のない素振りをしていたのに屋上には来ていたな、とリボーンは思い出す。さすがにクラスメイトの自殺は彼女も心動くものがあるのか。
待てよ……確か球技大会の時も、彼女は観覧席に来ていた。球技大

会の行事は彼女の性格なら欠席するはずだが……。さらにリボーンは、初日にあった騒動にも彼女が道場に来ていた姿を思い出した。
全て沢田綱吉が死ぬ気弾を撃たれた場面である。

その女子生徒の顔つきを思い起こして、リボーンはふと気づいた。

彼女の瞳。まるで眼鏡越しに隠すかのように鋭利で真っ赤な伊波紫乃の”目”だ。
それはマグマのように、錆のように、血管を裂いて噴き出した鮮血のように赤い赤い目をしている。

リボーンは、どこかであの目を見たことがある気がした。昔にどこかで……。
しかし、どこで見たと言うんだ？　あの女を……。

「リボーン？」

夕食の時間を知らせに来た沢田綱吉の声にも反応せず、その赤ん坊は伊波紫乃という女に思考を奪われた。

あの男は地雷

【七月六日

七月に入った。イタリアからアイツがやって来て、沢田綱吉の周りは騒がしくなった。山本武の自殺の件があった後は笹川京子と以前より親しくなった部分があり、私が把握していないところでも忠実に進んでいるようだ。

そして、この日は数日ぶりに進展するのをこの目で見ることになる。】

今朝、紫乃が通学路を登校すると、偶然前方に山本武と仲良く歩く沢田綱吉がいた。肩を小突かれている。

仲睦まじい光景を後ろから見守るが、別の場所で見ている自称沢田綱吉の右腕はこのことに今朝から激おこプンプン丸状態だろう。あの短気ならムカ着火ファイヤーしているかもしれない。

ふざけているわけではないが、紫乃の思う通りリボーンの横でギシギシと歯を軋ませる獄寺隼人がいた。あんななよなよしたのがファミリーに入るのかと憤慨していたが、リボーンはそれよりも彼らの後方を歩く彼女に注目していた。……はずだが途中から意識がなかった。

寝てる……と獄寺隼人の心のツッコミが入っていた。

登校して間もない休み時間にも、山本武の入ファミリー試験が執り行われた。校庭の一角で山本武と獄寺隼人が火花を散らしている……正確には獄寺隼人の一方的だが、山本武もあれで負けん気が強いからな。

紫乃はまた人気のない校舎の眺めのいい三階通路を選んで傍観していた。

残念ながら距離の関係で彼らの会話は聞けないが、予定通り試験という名目のドンパチが始まった。ここなら被害もなく高みの見物ができるので紫乃はしたり顔だ。

しかし、想像以上に激しい攻撃にまだ出番ではない風紀委員がすっ飛んでくるのではとハラハラもする一方だ。あくまで彼女は傍観に徹しているのでそれはないと信じたい。

「ガハハハハ！　リボーン見ーーっけ!!」

沢田綱吉らへの攻撃が過激になるその最中に子供の声がした。学校の校庭には似つかわしくないその声の主は、紫乃が見守る校舎に併設された非常階段の手摺に立っていた。

手本のように見事なほど登場がから回りしているが、仔牛の登場に紫乃は満足していた。事は上手く回っていると確かめられたからだ。

校庭の沢田綱吉からはうざいのが出たと虐げられているが、本人は全く気づかずあの殺し屋に自分をアピールしている。

すぐにガン無視されたが。

ガ、マ、ン……と自分を慰めている仔牛に苦笑する紫乃は、窓際で肘をついてその後の経過を見守っていた。

寂しさのあまりミサイルランチャーまで取り出した仔牛に五歳でどんな風にヤンデレを拗らせたのかと心配にもなるが、校庭での銃乱射劇がさらに加速している。

ついにフィナーレだと言うように獄寺隼人がダイナマイトを取り出した。さらには非常階段から狼煙が上がり、そこにいた仔牛が牛柄のシャツの青年へと変貌していた。

……10年バズーカ。そして思いのほか10年野郎もノリノリである。やはりマフィアの血が通っているわけか。

仕上げの集中攻撃を喰らい、校庭が大破した。

ちょっとやり過ぎだ。風紀委員が飛んでこないか心配する。

間一髪で二人が生還するが、心臓に悪い。もしここでズレていたら何もかも終わりだった。

深い息を落として、校庭で和気藹々と語る彼らの様子を傍から見守る。ふと横に視線を逸らせば、非常階段に一人取り残された大人ランボが少し気の毒そうだ。あと数分で帰れるだろうから堪えろ。

……なんて事後に気を抜いていたら、パチッと大人ランボの片方開いた目と目が合ってしまった。

ドキッとしたが、その直後煙に巻かれ仔牛の姿に戻ったランボがわけがわからないようにしていたので、安堵の息を漏らした。その後は少し考え込みながら、非常階段とは反対の方向に退避していった。

【山本武と沢田綱吉が無事に生還した。

ひとつ気になるとすれば、10年後ランボのことだが……問題ないだろう。少し様子を見ながら監視を続行する。】

命からがら爆発から生還した沢田綱吉は、二人の意地の張り合いを止める気力もなく成り行きにまかせることにした。

ふと、校庭から晴れ空に聳える白い校舎の一角に、人影を見つける。非常階段の方向を睨むその女子生徒の姿を……。

――――い、伊波さん……？

沢田綱吉が動揺している間に、伊波紫乃は校舎の奥へと消えていった。

ラブイベントサイレンス

【七月八日
明日は家庭科でおにぎり実習をする。
ということは、イタリアから来たあの女が暗殺を謀る。見守りたいが、休日に沢田綱吉を監視するのはさらにリスクが大きい。明日、無事に登校して来ることを祈る。】

そして翌日に笹川京子と一緒に教室へ入ってくる沢田綱吉を見て、紫乃は至って普段通りに学校生活をこなした。

午後におにぎり実習が始まり、幸か不幸か絶対的ヒロインである笹川京子、ついてはヒロインに華を持たせる友人黒川花と同じ班で作ることになってしまった。
こんな知識にない部分など端折りたいのだが、そんなご都合が叶うはずもない。彼女のいるこの世界が現実であるのだからマンガのようにページをめくって次へなんて上手いこといくわけがない。非常に無念だ。
かくして、実習が始まる。
紫乃はできる限りヒロインと距離を置く位置を確保し、おにぎりを三つ握っていく。
班の中ではガールズトークが盛り上がるが、紫乃は一人空気に溶け込むように気配を消す。
このまま淡々と実習が終わってくれればいいが、しかしヒロインの宿命か、一人の女子生徒を放っておけないという謎の世話焼きスキルが発動してしまう。

「あ、伊波さん、眼鏡が落ちそうだよ」
彼女達と絶対に目を合わせないよう自分で首がもげるほど下を向

いていたんだ。そりゃそうなる。しかし、それくらいのことにも気がついて手を伸ばし紫乃の眼鏡を直そうとしてくれる。
その手を、紫乃は拒む。

「……自分で直せる。ベタベタした手で触らないで」

「あ……ごめんね」
「何よ、感じ悪い女ね」
気を悪くしたと思い笹川京子は素直に謝ってくれるが、取り巻きの黒川花は紫乃の冷めた一言に友人を庇い批難している。

別にこれでいいと紫乃は思った。なんと言われようと構わない。あなた達を、大切な人々を導くため、自分という存在なんて必要ないと。

その後の実習はヒロイン達と微妙な距離を置き、実習を終えた。
適当に近くにあった具材を詰めたおにぎりを完成させ、お腹がすいたら自分で食べようと教室に戻った。まあ、あの後に沢田綱吉に食われても差し支えないが。

教室では既にすり替えられたおにぎりと沢田綱吉が格闘している。
今の沢田綱吉の方が命懸けでおにぎりを食おうとしているのだから、主人公というのは大変だ。こんな自分には生涯務まらない苦労だと改めて思う。
沢田綱吉が食べるのを焦らしているので、両隣の二人がヒロインの握り飯を手に取る。

「食べたら死ぬんだぞーーーっ!!!」
ああ、この発言がのちに誤解に繋がるとも知らず、沢田綱吉は学校から数キロ先に建つビルディングの屋上に潜んでいた殺し屋に死ぬ気弾を撃たれた。

騒ぎが鎮火した後、放課後となった。
紫乃のおにぎりは幸いにも難を逃れ、すっかり手持ち無沙汰状態となってしまった。やむなく自分の胃に流し込むことにする。
放課後の廊下を一人歩いていた時だった。

「よっ、伊波」
後ろから聞き覚えのある声を聞いてしまった。しかも自分の苗字を呼ばれている。聞き流す手がない。
部活に行く途中である山本武がいた。後ろから紫乃を見つけて態々声をかけてきた。人気者の余計な親切心である。
「いやあ、ツナにはやられたぜ。みんなの分のおにぎり食われちまって空けといた胃がスッカスカだぜほんと」
知ってる、と冗談のように笑い飛ばしている山本武に心で投げかけた。どこまでも平和ボケしているこの男が羨ましいと不意に思う紫乃であった。
ふと、自分達だけしかいない廊下を見回して、鞄の中にあるものを山本武に差し出す。

「うん……伊波？」
「……やる。食べないなら別に捨ててもらって構わない。それじゃあ」
ただ、空っぽの腹で放課後野球に打ち込めなくなるのを想像して、事前に安全策をとっただけである。これくらいは響かないだろうと、紫乃は山本武をその場に残して靴箱まで向かった。

もう自殺なんて御免だ、それだけの理由で彼らと接してしまった。
今後の自分は、持ち堪えることができるだろうか？

戸惑いのボーイミーツガール

【七月十日

本来なら、沢田綱吉暗殺劇をこの目で見届けるべきなのだが、何せ分が悪い。沢田家で起こることまではこの時点で沢田綱吉達と関わりのない私には確認できない。

そして、ビアンキの件であるなら、高確率で10年後ランボが登場する。一応警戒しておいた方がいいと判断した。

しかし、私の不安もとうに杞憂であった。

たまたま外を徘徊していると、浜名湖に向かっていくビアンキの自転車とすれ違った。愛の力は強いのだな。

その不安も払拭した私は、夕暮れの頃、ちょうどこの間と同じ夕日の色に染まる河原で、再び出会ってしまった。あの男に……。】

「うっす、伊波！」

通りかかった河原の河川敷で、自主練中のようである山本武がこちらに気づいたようで手を振った。

面倒くさい……と思った紫乃は、直感的に無視することにした。

「おいおい、無視はねーだろ！」

どうやら直感は外れたようだ。彼のようには上手くいかないようだな。ほんの少し彼の持つ才能が羨ましいと思ってしまった。

そんな紫乃の考えなどまるで露知らず、山本武がこちらにまでやって来た。180cmもあるこの長身の男が、自分に一体何の用だと思わず身構える。

「この間は色々あんがとな。美味かったぜ、あん時の握り飯」

なんだ、そのことか……と紫乃は内心落ち着きを取り戻し、適当な相槌でその場を離れようとした。

しかし、野球で鍛えた直感か、紫乃の内面を見透かしたように山本

武が食い下がる。
「キャッチボールやんね？　ちょうど暇してたんだよ」
なんでお前とキャッチボールなんだよ、と内心激しく抵抗するが、相手はその屈託ない笑顔を夕焼けのほのかなオレンジ色に照らしている。
「私なんかが務まる相手じゃない。遠慮しておくよ」
「いいじゃねえかちょっとくらい、なっ？」
逃げ道を作らないようにか、咄嗟に紫乃の腕を掴む。
ただの野球しかない男だと獄寺隼人同様に考えていたが、こいつはこう見えて人の心に付け入る隙を狙っているんじゃないかと思った。単に一人っ子の甘え上手かもしれないが……。
もともと気さくで分け隔てなく人に接する人が良い男だ。もっと注視しておくべきだった。
「……離してくれ」
少し震えた声でそう返事をすれば、ピクリとそれに反応を示した山本武は、あっさりと引いてくれた。
「そっか。悪い。んじゃまたな、伊波」
彼は、紫乃を見送る最後まで、あの人柄の良い笑顔だった。

【河川敷で、山本武と遭遇した。
二度目はないと思っていたが、不覚だった。彼の人柄に触れて、そいつに呑み込まれそうになった。
教室でも目立たない女にもその手を差し伸べる。
彼はきっと、イイヤツなんだろう……。
『じゃあな』なんて言っていたが、君と次はもうないと思いたい。
縺れて、取り返しがつかなくなる前に……。】

一方通行

翌日、いつもの通学路を歩くと、朝から塀をよじ登る不審極まりない女子生徒とすれ違った。緑中の制服を着ていた。

三浦ハル……。

知っていたが、朝から凄い光景を目撃してしまった。

恐らくこの後、沢田綱吉の家庭教師リボーンに告白するもあっさりフラれ、沢田綱吉に八つ当たりしていく展開だろうと予想する。予想するまでのことでもないが。

まあ、順調に事が運んでいくのはいい兆候だ。

彼らにまかせ紫乃は先に学校へと登校する。

クラスの教室を開けると、数名のクラスメイトが既に登校している中、あの男の姿もあった。

明らかにこちらを意識して声をかけようとするが、紫乃は一切視線を合わすことなく窓際席の定位置に着く。

紫乃が言わずとも醸し出す空気に山本武も下手に声をかけることは止め、いつもの日常が刻々と過ぎていくのだった。

【七月十二日

先日に引き続き主要人物の一人である三浦ハルが現れた。登場からキャラが濃い。

今後笹川京子に勝るとも劣らない主人公のヒロインポジションを築き上げるだろう。今後、彼の精神安定剤の役割を見事全うしてほしいと願う。

追記――あの男の視線がずっと気に障るが、少し時間を置けば向こうも諦めてくれるだろう。そういえば彼にはこれと言った女の子がいないのだったな。非常に面倒だ。】

その翌日、通学路の橋を渡ろうとする道中に今度もまた三浦ハルと遭遇した。

昨日に引き続き凄まじい光景を見てしまったと思う一方、順風満帆だと呑気に紫乃は離れた場所からそれらの光景を眺めていた。

獄寺隼人が応戦し、鎧を着た三浦ハルが川に真っ逆さまだ。すぐさま溺れた彼女を助けようと死ぬ気弾が飛び出す。

「死ぬ気でハルを救う!!!」

川に飛び込む裸男という珍妙な光景を前にして、朝から壮絶なものを見たと既に一日を終えたような脱力感がある。

それにしても、あんなので女というのはコロッと落ちるものなのかと、同性としてどこか理解し難い。

既に濃いワンシーンを目撃してあとは家に帰って寝たいと思ったところに、後ろからトンッと肩を叩かれる。

「よっす、伊波」

――――ッ、山本武!?

それは不意打ちだった。朝早くからにこやかな笑顔を見せる山本武が立っていたのだ。思わず思考が固まる。

挨拶をする山本武にそれに言い返す言葉が何も見つからない。

あんな明らかに態度に示したというのに、まさかこんな自然体で挨拶をされるとは紫乃は思ってもいなかった。なんて男だ。

そしてすぐ橋の下には、彼らがいる。

「あっ、山本!」

「よーっ、ツナ、獄寺!」

「げっ、またアイツかよ……」
橋の下から彼らが気づき、手を振っていた。
そして、山本武と橋の上にいる伊波紫乃を見て、沢田綱吉が目を丸くしている。

「あれ？　伊波さんも……」
「っ……」
沢田綱吉が何かを言いかける前に、山本武を振り切り橋を一気に駆け下り通学路を逆走していく。

「あっ、伊波！」

河川敷まで響き渡る山本武の声だが、この時の彼女に届いてはいなかった。

【七月十三日
しくじった。まさかあの男と出くわし、再び干渉するとは……。
二度も失態し、今後巻き返しが利くかどうか……。
もう、手遅れなのか？
いや、怖気づくな。事は期待通りに向かっている。必ず、やり遂げてみせる。
誰も死なせない。そして、彼の未来を守るため……】

あの娘の印象調査

【七月後半になり、学校は夏休み。
しばらく彼らと会うこともなく安定した生活を送る。
一年の夏休みに起こる主なイベントはふたつある。
期末テストで成績が悪かった生徒は補習に出るようだ。成績が特に悪い二人は無論出席し、その後沢田家で提出課題を一緒に解くのだろう。
こちらはノーマークだ。私が介入しない方が上手く事が運ばれるだろう。
そして、こちらがやはり本命だ。１０年前の入江正一……しばらくは、彼を見張ることにする。】

沢田家に集まった者は、皆課題に出されたとある問題に苦戦していた。問７の問題に難関エリート緑中に在籍する三浦ハルを加えた四人で問題を解こうと四苦八苦していたところだ。
ふと、沢田綱吉の家庭教師リボーンが、こんな口を挟んだ。

「ところで山本」
「うん？」
「お前、伊波紫乃のこと、どう思ってるんだ？」

突然の質問に山本武より聞いていた沢田綱吉の方が妙に焦り出したが、山本武はあっけらかんとそれに答える。

「伊波のことか？　イイヤツなんだぜ、この頃はちょっとなんかあるみてえだけど……」
少し照れくさそうに頬をかいてそう語る山本武。
ここ最近の山本武が、クラスでもおとなしい女子の伊波紫乃にご執

心であるのは誰の目にも明らかであることだった。
沢田綱吉はそんな簡単に話していいものかと他人事なのに頬を赤らめながら、ある意味山本武を賞賛するのであった。
しかしそう話す語尾は煮え切らないようであった。

「はひっ？　どちらさまですか？」
「ん、ほら、この間俺と一緒に橋にいた女子だよ」
「あのグラースィズのガールですか！　ハルはほんの少ししかお会いできませんでした！　是非今度ご挨拶したいです！」
先日のことを思い出した三浦ハルは、クールな印象の伊波紫乃を思い浮かべ今度また会う機会があれば是非ガールズトークに花を咲かせたいと思うのであった。

「獄寺はどうなんだ？」
「そうッスねえ……転入した日に一瞬目が合いましたが、なんつーか地味な女ッスね」
「地味ってなんだよ獄寺、お前はまだ伊波とそんなに話したことがないだけだろ」
「あん？」
急に突っかかってきた山本武を獄寺は睨み返し、間にすぐさま沢田綱吉が入るとなんとか大事には至らなかった。獄寺がさっぱりわけがわからないようにしているが、わからなくていいだろうと沢田綱吉はお茶を濁した。

「何笑ってんだよ、リボーン？」
「ニッ、決めたぞ」

二人の返答を聞いて考えていたリボーンは、その後に満足げに微笑んでいたのを沢田綱吉に突っ込まれたが、食い下がる前にさっさと問7を解けと誤魔化したのであった。

問7を無事に解き終え、とうに深夜九時を回る時刻だった。三浦ハルや獄寺隼人と解散し、闇に落ちた家路を歩く山本武は、ひとつの曲がり角で印象的な人物と出会った。

「……っと、伊波じゃねえか。こんな時間にどうした……」

曲がり角で偶然会った伊波紫乃に声をかけようとしたが、途中で無視され彼女は一人深夜の住宅街の道を進んでいく。

ひとつ溜息をこぼし、山本武は彼女の後ろを付いて歩く。

数歩歩いたところで前にいた伊波紫乃が、ピタリと足を止めた。

「……やめてくれないか?」

暗闇で振り返り際に睨まれたようだが、山本武は臆せず彼女に言った。

「こんな時間に一人じゃ危ないだろ?」

彼が一歩、近づこうとすると住宅街に怒号が響き渡った。

「それ以上近づかないでッ!!」

張り詰めた緊張に、脊髄までピリリッと電気が走ったようであった。

落ち着いた印象の彼女だが、その語尾には動揺が明らかだ。無言で立ち止まる山本武は、フッと彼女に笑って見せた。

「……わりぃな。そいつァ無理なお願いだぜ」

そう話す最中にも彼女との距離を縮める彼は、俯く彼女の頭を自身の胸に抱き寄せた。

思いのほかあっさりと、彼女は身をまかせてくれた。

「どうしたんだよ?　いつもの伊波らしくないだろ、俺でいいんなら

聞くぜ？」

胸に顔を埋めるその隙間からは、か細い泣き声が聞こえる。初夏の晩に、帰り道で泣き止まない紫乃を、落ち着くまではしばらく胸を貸してやることにした。

その心は愛情に飢えていた

夏休みに入りここ二週間は入江正一のマンションの前に張り付いていた紫乃。

この日沢田綱吉の家の方角から牛の子がジグザグ模様に火花を噴いて飛んでくるとマンションの一室に墜落した。入江正一の部屋だ。

爆発の音に気づいた入江正一らがランボを見つけて間もなく、電柱脇に潜んでいた紫乃の視界を、怪しい業者が木箱を持って横切り入江正一のマンションの方角へと消えていった。

【八月八日

１０年前の入江正一がランボと接触した。

特に想定していたズレはないようだ。順調である。

……否、まだだ。どこで記憶とズレていくかは経過観察をやっていくしかない。

先日の橋の上の一件は、確かに私の落度だ。

本来ならまだ面識のない山本武と三浦ハルを会わせてしまった。

当初の予定なら彼らは勉強会で顔合わせをする予定なのだ。私がその場にとどまった故に起きたズレならどうしよう。

怖くて、その場は逃げてしまった。

しかし、逃げてはダメなんだ。彼らを生かすには、ここが今から正念場だ。】

１０年前の入江正一の行方を見届けた紫乃は、沢田綱吉の家から帰る途中、並盛川の河原を通った。

日もすっかり落ち、西の空にまだ僅かに滲んでいた。濃紺の空には一番星が輝いて見える頃に、紫乃はなんとなく河原に足を向けた。

いないだろうとは思っていたが、夜の陰影がゆっくりと落ち始める

河原一帯に、男の姿を見つけた。まだ遠くからでもその顔を認識できる時間帯に河原で自主練をしていたその男を、紫乃はしばらくひっそりと見守った。

練習が落ち着き、バッドを下ろしたところに河川敷を見下ろす紫乃を見つけて、山本武が手を振り上げるのが見えた。

「伊波～！」

どうして彼はこうも自分のことを見つけるのが得意なのだろうと、甚だ可笑しかった。ただのクラスメイトの紫乃をこうも付け回す男は、したたかでお人好しな性格なのだろうと思った。

河川敷にいる山本武とある程度の距離を置いたまま、紫乃は並盛川の水面まで響くよう少し声を張って言った。

「私の不安の種は、君が野球に打ち込めなくなることだ。私が今まで無作為に言い放った発言が、君を傷つけてしまったなら謝りたいと思う。だから……」

どうかもう私のことなんて忘れてしまってくれ、という願いで紫乃は深く頭を下げた。

自分の存在が、この世界を掻き乱すようなことがあってはならない、それを重々に承知していた。

河原の草むらの地を踏みしめる紫乃に、大きな影が被さる。気づくと山本武が目の前まで歩み寄っていた。

そして、紫乃にそれを差し出す。

「んっ」

「……何？」

目の前に飛び込んできた使い古しのグローブを見て、紫乃はジトリと山本武を睨み上げた。

「お詫びっつうんなら、相手してくれよ。そしたらお互いなあなあってことで」

そう言って、山本武はニカッと白い歯を見せた。

こんな腑抜けな相手に真面目になっていた自分が、なんだか馬鹿馬鹿しいと思えた。

グローブと山本武をそれぞれ一瞥して、水面に浮かぶ月が微笑む頃、紫乃は答えを出した。

「……やっぱり、君に許してもらわなくてもいい」

「んだよそれー」

二度目の誘いもあっさりフラれてしまった山本武だが、やはりそんなところが紫乃らしいと微笑むのであった。

「またな、伊波」

後ろから、その声に見送られた。どこまでも水面を伝って響き渡ってきそうなその別れ際の言葉を、紫乃は噛み締めた。

【情けない。

あの夜、山本武の胸に委ねるしかなかった。

私は、弱い。こんな自分が情けなくて仕方ない。

ギリギリまで思い詰めて、最後には彼を救えなかった。愛していた。裏切った今でも、その気持ちだけは本物だ。】

日常編 ― Ⅱ
秋、深まる人間模様

【九月三日
新学期から初日に裸で登校する沢田綱吉を見かけた。おまけに笹川京子の兄がそいつの腕にくっついていた。順調そうだ。
ボクシング部までは見に行けそうにないが、精々頑張ってくれと教室でも憂鬱そうにする彼の背中に語りかけた。
今朝、グラウンドまで登校すると途中ユニフォームを着た山本武がこちらに気づいた。部活の朝練のようだ。
当然のように無視してやった。あいつが落ち込んでいたとか知るか。君の親衛隊に目を付けられたら怖そうだからな。】

新学期初日の朝から山本武をガン無視した伊波紫乃は、そのまま何食わぬ顔で校舎へと向かった。
すっかり紫乃と仲良くなれたと思った山本武は、予想外の彼女の冷たさに戸惑い、グローブをはめた手を宙に彷徨わせている。校舎へ向かう生徒の一部に溶け込んでいく彼女の姿を見送るしかなかった。
彼のチームメイトらは、そんな彼の無自覚である報われない思いに同情し、フラれた彼に皆でどうこうアタックしていけとフォローを入れてやるのであったが、山本武の中でそれらの助言は山本節に改ざんされてしまうのであった……。

晩夏の暑さがまだ残る夏休み明けの並盛中のグラウンドの光景を、校舎の一角から見下ろす人物は、朝練中の野球部員の男の挨拶をかわし校舎の建物に消えたその女子生徒の動向を観察していた。

開け放った校舎の窓際に腰を据え、穏やかな秋風に学ランの裾をたなびかせる。学ランの下にはこの時期にまだ蒸し暑いため半袖の白シャツを着ていた。

春に数回校内の廊下で見かけたが、彼女はいつも誰かと群れることはなく、それが彼の印象にも深く残っていたのだ。

「いいね、彼女」

狂気の眼が見開かれる。それはまるで取っておきの獲物を見つけたかのように、その身体を冷たい牙で引き裂いて内臓を搾り出すのが今から楽しみであるように、微笑んでいた。

グラウンドでは山本武を入れた活発な野球部員やら、時間内に登校する気怠そうな生徒達がちらほらと窺える。

こんな普遍的で飽き飽きしていた日常風景の中で、ありつけた貴重な獲物だ。サバンナの奥で猛獣を見つけるよりも昂った高揚感が今にも牙を振るいたそうにする。

並盛中のグラウンドに轟く予鈴、規則的に動く生徒の群れ、そんなものに興味はない。

一学年の在籍生徒の一覧名簿に載っている彼女の顔とにらめっこをして、その口角には愉悦をこぼす。眼鏡越しに目が合った純血のように赤い瞳と、直に相見える日を待ち望んでいる。

「伊波紫乃……彼女にしよう」

放課後の刺客

放課後も近い授業中のこと。

席に着く沢田綱吉の異変に気づいた紫乃は、注意深く観察していた。

沢田綱吉の首筋に見覚えのあるドクロがある。

――死に恥をさらす病と言われる通称ドクロ病だ。

ついに主役が死す時が来てしまったんだな……沢田綱吉……とおふざけを軽く叩いて、紫乃はドクロが喋る死に恥をさらす内容を盗み見る。

『近所の外で飼われている犬が怖い（チワワ）』とある。そういえば初日に近所で飼うチワワに吠えられて腰を抜かしていた。ダサいな、沢田綱吉。

校舎に終業の鐘が鳴り響く。

主人公に死んでもらうのは当然避けてもらいたい。だがこればかりはあのヤブ医者に診てもらう以外他に方法もなさそうだ。あの家庭教師がイタリアから呼び寄せているだろうから、心配には及ばんだろう。

紫乃は、これまでの彼のダメツナっぷりを舐めていたと思った。しかし、これまで事が忠実に運ばれていたのは、他でもなく彼のダメツナっぷりのお陰である。

今回のことがいい例になるだろう。彼のダメツナっぷりが今回彼自身を救うことになるのだ。いや、そもそも死ぬ気弾がなければ何も克服できない彼のダメさがドクロ病という不幸を招いてしまった。

……やはり彼はダメツナだ。

結局のところそう結論づけた紫乃は、空気感染するやもしれないその恐ろしい奇病を避け早いうちに下校しようとしていた。

【九月五日

放課後を迎える前にもドクロ病の症状が発症する。

タイムリミットは一時間だが、大丈夫だろうか。記憶には校舎を出たところで発症に気づいていたが、無事生還することを祈っている。

それに……】

先に校舎を出てまだ付近を歩いていた頃、紫乃の前を華麗に白衣の裾を翻す人物が道を塞いだ。

「お嬢さん、学校帰りかい？　ちょいと道に迷ってたとこなんだが、よかったらおじさんと放課後は制服デートでもどうだい？　こう見えてもおじさん医者だぜ？」

……この場にいるべきではない男がいた。

学校帰りの女子生徒をナンパしている暇があったらやるべき仕事をしろこのヤブ医者!!　とダンディズムに気取る髭面オヤジに無性に苛立つ。しかしここは感情を抑えてさっさと沢田綱吉の家の道を教えてやることにする。

この中年女タラシに何を言っても無駄だ。こんなのを相手にするより沢田綱吉の生存率を上げてやる方がいいと結論づけた。それに医者なら女子学生のナンパにコネを使うなよと言ってやりたい。

……と、紫乃の僅かな良心で沢田綱吉の家まで誘導しようとするのだが、このヤブ医者本来の仕事よりも紫乃のナンパの方にしつこく絡んでくる。しかも昼間から強烈に酒臭いこのオヤジ。

うぜえぇ!!　それにこいつにあまり顔を覚えてもらいたくもない。挙動不審になりながらも沢田綱吉の家の住所を説明していると、察しのいいこの男がふと紫乃の顔をまじまじと見る。

「うん？　ちょっと待てよ。お嬢さんの顔、そういやあどっかで……」
――――ッ！と条件反射で、紫乃は男から顔を逸らす。
以前から要注意人物としてマークはしていたが、まさか向こうがこちらに面識があるとは……！　さすがに女タラシと自負しているだけはある……。
Ｄｒ．シャマルに顔を見られた。記憶がぶっ飛ぶほど殴ってやろうか。
その時重い鉄槌が振り落とされる。ハガッとその場に崩れ落ちたＤｒ．シャマルの背後で、完全に気配を殺した刺客が、この状況下で身動きがとれない紫乃を前にしてその姿をさらす。
「大丈夫？」
悠然とそこに佇み紫乃に声をかけた人物を認識し、紫乃は思考が止まった。
「っ……!?」
「……この不審者に絡まれて怪我はないのかと訊いているんだけど」
不審者呼ばわりされた医者に思わず同情する。
――あの鬼の風紀と名指される雲雀恭弥がいたのだから。
群れていたとかいう理不尽な理由でもいいから紫乃もいっそのこと意識を飛ばしてやりたかった。これはどういう事態だと錯乱する一方で、彼の握る鈍器に滴る血を見て、冷静さを保つ。
「っ、はい……ありがとうございます」
ひとまずは相手に合わせて様子を見る。
慎重に事を運ぶことを重点に置き、紫乃はおもむろに雲雀恭弥の目を見た。
まるで冷たい瞳……何の躊躇もなく人を殺める目だ。
こんな人物が何故自分なんかを助けたのか甚だ不思議な話だ。
いや、彼なら風紀がどうとか言ってこのナンパ男に制裁するだろ

う。それでも偶然ナンパから助けた娘に慰めのような態度はとらない。

彼の認識では、あくまで風紀を守った行為であるのだから。

……なら、なんだ。この男は何を考えて自分に話しかけたんだ。思考が読めない。

それに一番まずいのは、Ｄｒ．シャマルが倒れたことで沢田綱吉のドクロ病を治す医者がいなくなったことだ。

このままでは沢田綱吉が死に恥をさらすまま死んでしまう。非常に最悪な展開だ。

「伊波紫乃……」

――！　名前までこの男は調べたのか、やはり……雲雀恭弥が☒紫乃《じぶん》に用があるから声をかけたのだと確信した。

非常に厄介な相手に目をつけられてしまった。

細心の注意を払って動いていたつもりだったが、この風紀を語る鬼の目には見透かされていたというのか。

「明後日、昼休み、応接室に来なよ。待ってるから」

来なければ咬み殺すまでだけど、と紫乃の耳元でそれを残して、牙を隠した男は再び校舎の中へと消えていった。

【雲雀恭弥と放課後に接触してしまう。あの場でかわしきれなかった。不覚だ。一体私の行動の何が彼の気に触れてしまったというのか。

このダメージは自分の身体で受け止めよう。活動に支障は出るか

もしれないが、彼らを守るには仕方ない。
雲雀恭弥に後頭部の打撃を受けたＤｒ．シャマルだが、あの後に酔いが醒めたのかすぐに起き上がり沢田綱吉の家に向かってくれたのでギリギリ間に合ったようだ。
少し心配だったので沢田家の前まで尾行したが、外までポイズンクッキングの異臭が漂ってきたのですぐに撤退した。
思えば主役がそうすぐに死ぬこともないだろう。既に何度も蛹から羽化した男だ。私が彼の監視を放棄したわけではない。ここぞという時こそ死ぬ気を見せろ、沢田綱吉。】

応接室で待つ男　1

【九月七日
この日は、私にとっても、彼らにとっても、災厄の日となる――】

授業を終え昼休みとなる。
解放された生徒達が活気に溢れ、そこに人知れず一人教室を離れる紫乃。
沢田綱吉らと屋上へ向かう途中、彼女の異変に気づいた山本武だが、後方から屋上へ向かう沢田綱吉らに急かされるとやむなく彼女の背中を見送るしかなかった。

応接室の扉を叩き、室内に足を踏み入れる。
彼女を迎え入れたのは、昨日助けられたあの男だ。

「やあ、待ってたよ」

応接室で紫乃を待ち構える雲雀恭弥は、その整った顔に似つかわしくない不気味な笑みを浮かべていた。その愛想の良さが彼女の中の凶悪な彼のイメージとは矛盾し、気色悪いとさえ思える。
警戒心を怠らず、室内に少しずつ足を踏み入れる紫乃は、単刀直入に話を切り出す。
「……雲雀さんが、私に何の用ですか？」
何か、彼の前でしくじっただろうか。ふとしたことで彼の気に障るようなヘマをしたというのか。紫乃には、風紀を乱すような心当たりがなかった。
身構えた彼女に、雲雀恭弥が告げたのは意外なものだった。

「君、風紀委員にならない？」

「……」
「……」

……紫乃はしばらく固まった。いや、拍子抜けしたというのか。これは。

どの道衝撃の展開ではあるが、ひとまず彼の気に触れたことで咬み殺されるために呼び出されたのではないらしい。

「……何故、私ですか？　喧嘩ができない私が、風紀委員なんて務まりませんが」

最もな質問を投げかける。

基本的に逆らう者には力で応じるスタンスの風紀委員会の活動に、女で、さらに力も劣る紫乃がそこに加わる価値が見出せない。それに風紀委員会といえば、あの時代遅れのリーゼントなど紫乃は何があろうと絶対に真似したくはない。

「風紀委員になれと言っても、君に頼むのは委員会での事務作業だ。主に書類整理とかだね」

紫乃が呆然と話を聞いている間にも、彼は淡々と話を続ける。

「ここには暴力でねじ伏せるヤツらはたくさんいる。だけどそれはつまり喧嘩だけの学がない連中ばかりだ。そいつらに到底書類整理は務まらない。君は学年でも十番以内の成績だ。君のような人材を探していたところでね」

その説明には一理あると、紫乃は納得した。

だが、納得したと言っても応じるのではない。紫乃は彼の説明に投げかけた。

「何故ですか。成績で見たら私より優秀な生徒は他にもいます」

そんな役職は何も自分でなくてもいい。誰にでもできることだ。特に目立たない紫乃にこだわる話でもないのに、しかしこの男は……。

「そうだね。君を一番に選んだのは……群れないからだ」

その理由に、ピクリと紫乃の眉が動いた。

群れない……もともと単独行動を好むのは彼女の性格でもあるが、クラスメイトと距離を置くのも沢田綱吉の動向を監視しやすいためだ。

しかし、今回の場合、裏目に出た。あの風紀の鬼――雲雀恭弥の目に罹る結果となってしまった。なんてザマだ。

ここでもし紫乃が断ろうものなら、次にこの男が出す手は想像つく。

「断るならそれでもいいよ。グチャグチャにして返すだけだから。残念だけど僕は女でも容赦しないよ」

……面倒な相手だ。紫乃は下唇を噛んだ。

二人きりの応接室では、獲物をその眼下にロックオンした雲雀恭弥と、野獣に睨まれた紫乃の視線が互いに絡み合う。

「……でも、君は他の奴らとは違う。君もこちら側の人間なんだから」

不気味に、そして妖艶に、雲雀恭弥は笑っている。

こんなバケモノと自分が同類だと？　そんな根拠がどこにあるかは紫乃にはわからない。わかりたくもない。

猛獣の眼が、応接室の空間に殺意独特の空気を走らせるのを、紫乃は直に肌で感じた。

「どんな事情でその優等生の仮面を付けているかまでは興味ないけど、僕の前では剥いでおきなよ。じゃないと……」

その言葉が終わらないうちに、紫乃は壁際に背を密着していた。瞳孔まで開き切った紫乃の顔面の横には、突き刺さるトンファーが

……。

「咬み殺す」

雲雀恭弥がその牙を剥いた。

応接室で待つ男　2

長い沈黙が続いた。猛威を振るった彼の牙の前に、紫乃は微動だにせず返事を焦らす。目と鼻の先で雲雀恭弥の艶めかしい微笑が見下ろしている。

ここで応じれば、ここまで耐えてきたものが何の意味もなさなくなる。傍観に徹していたからこそ成り立った標準通りの世界の秩序が崩され、そしていづれは崩壊するやもしれない。彼の誘いを断るなら、紫乃の身体が雲雀恭弥の牙の手入れにされるそれだけだ。

ならば、答えは決まっていた。

「好きに咬み殺せばいい」

応接室の片隅で、紫乃はその答えを出した。

雲雀恭弥の反応は、驚きとも落胆とも汲み取れるものだった。

「ふうん。本気で言ってるのそれ？」

「……私にはこれくらいしかできないからな」

そんなことを言ってみた。この男にわかるはずもない。暴力でねじ伏せるだけは解決しない。たとえ間違えた後でも引き返せない。少しの手違いでも、大きな可能性を秘めた君達の命を落としてしまう。

この身体で清算できることなら、紫乃は、喜んでしよう。

「……そう。思っていたよりずっと扱いにくい。でもしばらくは退屈しのぎになるかな」

雲雀恭弥のその言葉は意外だった。紫乃は逸らしていた目線を上にあげる。

雲雀恭弥という人間を、掴みきれていなかった。一度狙った獲物を易々と手放す男ではないのだ。

嫌だ、とがむしゃらに抵抗をしても無駄だろう。こんな状況では、

逃げられるはずもなかった。
その男の牙は、既に紫乃の喉元を捉えていたのだ。放課後に紫乃と接触してきた時から。いつかの廊下ですれ違ったあの頃から。牙を潜め、タイミングをずっと待っていたのだ。

彼にはわかるはずもない。間違えても、引き返せない。紫乃が受け入れた苦しみなんか。
逃げ場もない、そんなタイミングに、応接室の扉が外から開けられた。

「へ～、こんないい部屋があるとはねー」
視界にまず飛び込んだのは、クラスメイトの山本武だった。
応接室の壁際の一角で、迫られる紫乃と彼女に迫る雲雀恭弥を見つけると、一変して緊迫した顔つきを見せた。

「伊波……ッ!?」
「っ……」
この状況が理解できないような声を上げた。
紫乃でさえ想定外の連続に、頭の容量が追いついていないのだ。思わず下を向くしかなかった。
「君、誰？　今取り込み中なんだけど」
雲雀恭弥が、山本武に話しかける。
壁際に一人の女子生徒を追い込んでいるというのに、その態度はあっけらかんとしている。
こいつは……と山本武は噂で聞いた覚えがあった。
風紀委員長でありながら、不良の頂点に君臨する……ヒバリこと雲雀恭弥……！

今朝から顔色が悪そうにしていたが、まさかこのことだったのか。
山本武はつい先程の、教室を離れる彼女の姿が過ぎる。直感的に紫乃が危険にさらされていると思った。

すると後方に待機していた獄寺隼人が、応接室に入ってきた。

「なんだあいつ？」

その口元には蒸した煙草を咥えている。

その匂いと鋭い視覚で認知した物に、雲雀恭弥がピクリと反応する。

「待て、獄寺……」

「風紀委員長の前では、煙草消してくれる？」

最悪な展開だ。

紫乃は傍らで細々と小さく震えていた。

「消せ」

この後の展開を想像するだけで膝が震えた。

自分がこの場にいてはいけない。逃げなければ。紫乃は直感的に思った。雲雀恭弥の興味が彼らに逸れているうちに――……。

応接室で待つ男　3

他方で、山本武の記憶の裏にも、彼にまつわる幾つかの情報が流れ込んだ。

聞いたことがある……。

ヒバリは、気に入らねー奴がいると相手が誰だろうと、仕込みトンファーで滅多打ちにするって――……。

「なんだこいつ！」

後退した獄寺隼人が、得体の知れない相手に吐き捨てる。

「僕は弱くて群れる草食動物が嫌いだ。視界に入ると……咬み殺したくなる」

その言葉に、雲雀恭弥以外のこの場にいた者達の肌が粟立つ。紫乃は身動きがとれなくなった。

「へえ、初めて入るよ、応接室なんて」

そんな場面に、沢田綱吉がやはり何も知らずに雲雀恭弥の視界に入る。山本武が咄嗟に制止する。

「待て、ツナ！」

「え？」

しかし先に雲雀恭弥の牙が光る。

「一匹」

いきなり顔面に凄まじい攻撃を受け、わけもわからず沢田綱吉が奴に倒された。その身体は応接室の床に投げ出される。

その衝撃の光景に導火線がプツリと弾けて逆上した獄寺隼人が今度は殺る気を見せたが、あえなく雲雀恭弥に瞬殺されてしまった。

二匹目を、雲雀恭弥がカウントする。

殺気を抑えた室内に、二人があっという間に倒され山本武が取り残された。
目の前の雲雀恭弥に屈辱と怒りが込み上げる。
しかし、視界の端に身動きがとれない紫乃を見て、雲雀恭弥と格闘する間際彼女へとこう叫ぶ。

「逃げろ！　伊波ッ！」

山本武の声に、ハッと意識を呼び戻される。
彼の言う通りだ。紫乃は、山本武が雲雀恭弥の意識を逸らしてくれている隙に応接室を飛び出した。
その直後、山本武が雲雀恭弥に倒された。

同じだと、紫乃は校舎の廊下を走り続けた。記憶に焼きつけた光景と重なっていた。
あの日も、身体が竦んで、目を凝らして、見届けていたんだ。破滅の景色を。
言い知れない悲しみを含んだ涙が、彼女の視界を濁した。

――――応接室に三匹の草食動物の抜け殻を転がした後、雲雀恭弥は扉の方へと視線を投げた。
逃げられたか……。
そこにいない少女の姿に、雲雀恭弥は舌打ちした。
しかし、次はもっと容易く彼女を捕まえられるだろうと確信していた。その時が来るのを心待ちにしていた。
さて、そろそろ起きてくる頃だ。

取り逃がした彼女の分まで、血を吐いてグチャグチャになってもらおうと沢田綱吉に近づく。

「――――そこまでだ」

雲雀恭弥が暴走しかけた時、男の声が応接室に響いた。それはとても幼い子供のような声である。

その声がして、雲雀恭弥が機嫌の悪い顔で窓際を見ると、いつの間にか開いていた窓の柵に子供がいた。否、子供よりまだずっと幼い赤ん坊か？

「やっぱつえーな、お前」

「君が何者かは知らないけど、僕は今機嫌が悪いんだ。横になって待っててくれる？」

その台詞を言い終わらないうちに雲雀恭弥のトンファーが猛威を振るう。小さな的にめがけて一直線に繰り出された一撃だが、鉄同士がぶつかる激しい音とともに、雲雀恭弥のトンファーは十手で易々と受け止められた。

「ワオ……素晴らしいね、君」

殺気立った男の眼が見開かれる。

その一瞬にも伊波紫乃のことが頭から抜け落ちるほど、雲雀恭弥はその目の前の赤ん坊の皮を被った”何か”に理性を奪われた。

しかし、胸躍る瞬間はそう長くは続かない。

お開きだぞ、と同時にその手の火花を投げ落とした。全員素早く応接室から退避する。

爆発の直後、応接室は黒煙に包まれ……大破した。

沈黙する男

命からがら雲雀恭弥のもとから生還し、屋上へ再び集まった四人は、打撲とスリ傷だらけの状態で、リボーンの話の内容にさらに衝撃を受けた。

「なぁ!?　あいつにわざと会わせたぁ!?」

「危険な賭けだったけどな。打撲とスリ傷で済んだのはラッキーだったぞ」

要は、普段の学校生活の中で平和ボケしないための実戦トレーニングだったとリボーンは語る。「鍛えるには実戦が一番だぞ」と謎のリボーン節が飛び出した。

ふざけんなよー！　と傍聴席から沢田綱吉の文句が飛んでくるが、リボーンは遠くのグラウンドを眺めていて全く聞く耳持たずだ。

「なあ、小僧、ちょっと聞きてえことがあるんだが……」

「なんだ、山本」

沢田綱吉を宥めている最中、山本武がこちらを見ると、どこか歯切れが悪そうにしながら言った。

「応接室に行った時、伊波がいたんだよ。ヒバリと一緒に……」

そこで何の会話がされたのかはわからない。

あの場でどんな会話を二人がしていたのかと思うと、山本武の顔色は晴れなかった。

壁際に追い込まれて、顔面蒼白で静かに怯えていた紫乃の顔が瞼に焼き付いていた。あの時、自分には彼女をあそこから逃がしてやることしかできなかった。

雲雀恭弥にあっさりとやられた全身の傷がズキズキと痛んだ。

こんな時はいつも明るく笑っている山本武の意外な反応に、そばにいた二人もたじたじだった。

「山本……」

そう声をかけるが、この時の山本武に届いてはいなかったように思う。

沢田綱吉は彼の心情を思うと、とても下手なことは言えないと思った。

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴っても、この場にいる誰一人として動かなかった。

雲雀恭弥に先を越されたか……そう思ったリボーンは、次の打つ手を考える。

雲雀恭弥は将来必ず役に立つ男だ。

それは扱い方さえ間違えなければだが、現時点で彼をファミリーに加えるのは難しいだろう。その時期が来るのを、リボーンは今は静かに待つことにした。

【雲雀恭弥とあの三人が対面した。

嫌な予感がしていた。あの後、昼休みが終わっても、彼らが授業に来ることはなかった。

最悪な展開ばかりが予想されて、まるで生きた心地がしなかった。

しかし、あの男がそばに付いているなら彼らを信じようと思った。

君の腕を信頼しているんだ。必ず沢田綱吉を救済主に育て上げてくれると――……。

心配なのは彼らだけではない。私自身のことだ。

今後どう雲雀恭弥をかわしていくか、相手が相手だ。侮れない。今

回のことで諦める男ではないだろう。あれでかなり執着心のある頑固な男だ。近々また何か仕掛けてきそうだ。

雲雀恭弥には、私がどう映っているというんだ。あの男はどこまで見透かしているのか……その時になれば、答えを聞けるだろうか。】

週末　1

応接室爆破騒動後の週末の朝――伊波紫乃は、自室の畳に敷いた布団の上で目を醒ました。

「おはよう」

四畳半の部屋の南西向きにある大窓からの景色は、清々しい秋晴れの青空を見せていた。とても気持ちいい朝になるはずであった……視界の端にこの男がいなければ。

「……」

「……へえ、驚かないんだ」

紫乃が寝ていた部屋の木目の窓枠に腰を下ろし、くつくつと妖しい微笑をこぼしている雲雀恭弥がいた。

休日の朝だというのに制服の学ランを着ている。ほんとに学校大好き人間なんだなと、本人に知られないところで紫乃はドン引きした。

「どうやって部屋に侵入した」

「侵入だなんて人聞き悪い。こんなセキュリティ一の低いアパートの鍵なんて簡単にこじ開けられるよ。草壁に言って最新のセキュリティ一ロックを付けてあげたから、はいこれ鍵」

ポイッと最新鋭の鍵を投げ渡される。寝てる間に寝顔を覗かれ家の鍵を変えられていたなんて、恐怖以外の何物でもない。寝起きの身体がゾクリと粟立った。

「もう少しいい反応が見れると思っていたんだけどね……」

「もしかして合鍵まで作ってあるんじゃ……」

「鍵の心配をするより、今の自分の格好を少しは気にした方がいいんじゃない？　男が上がり込んでるっていうのに色気もない下着だね」

雲雀恭弥に言われたからではないが、紫乃は自分の格好を見下ろした。寝巻きなどは着ない主義で、黒の下着一枚の格好である。シックな黒の無地にレースをあしらった下には、発育のいい谷間が覗いていた。

自分の家で、別に誰に見せるでもない。ただこの男が部屋に勝手に上がり込んで寛いでいたのが誤算だ。自分に非はないと、紫乃は自負している。

紫乃は布団で隠すような恥じらいも見せず、起き上がり招かれざる客に淡々と言った。

「勝手に家に上がり込んでるのはそっちだろ。目の毒なら今すぐ出ていけばいい」

クローゼットを漁り新しい下着と服を片手に風呂場に向かおうとする。それらの一部始終を頬杖をついて窓枠にもたれつつ、眺めていた雲雀恭弥がまた口を挟む。

「風紀委員長に向かって随分といい態度だね」

「優等生の仮面を剥げといったのもあなただ。シャワーを浴びたら茶くらい出す」

そう言い残し居間の障子張りの戸をピシャリと閉めた。

最悪な目覚めだと朝から紫乃の機嫌はもう底辺であった。寝覚めの気分を良くするためにも、待たせる相手に構わずいつもより長めのシャワーを浴びた。

もぬけの殻になった布団とともに置き去りにされた雲雀恭弥の方は、平和な並盛の町並みを眺めてのんびりとその時を待ち続けた。

「やっぱりいいな、彼女……」

週末　2

シャワーを浴びて出ると、のんびりと並盛の景色を眺めて待っていたので飽きもせずよくやるなと内心呆れつつ、言ってしまったのは仕方ないのでお茶くらいは用意してやる。

コトリと部屋の中央に起き直したテーブルの上に湯呑みを置く。市販のティーパックで煎れたそれを雲雀恭弥が一口啜る。

「……うん。不味い。煎れ方がなっていないな。草壁に一から煎れ方を教わらないとね」

図々しいにも程があるとこの不法侵入の男に言いたいが、朝から騒ぎ立てても仕方ないので忍耐をつけることにした。こうでもしなければ、この世界を見届ける役割なんて到底務まらないと。

「まだそのことなのか。風紀委員会には入らないと言っている。気に入らないなら咬み殺せばいい」

「気に入ったよ」

不味いという茶を啜りながら、平然とそんなことを言う。紫乃はとてもこの男が気に入らないと思う。朝から土足で上がり込んで人の寝顔を覗いているようなこの男が嫌いだ。

「君のこと、気に入った。だから咬み殺すのは後回しでいいな。先に君を手に入れる」

「……お前のような人の話を聞かない男が、私は嫌いだ。風紀委員会には入らないと言ってるだろ。迷惑なんだ」

もう堪忍袋が耐えるにも耐えかねて、紫乃は並盛を牛耳る風紀委員長相手でも構わず直球だった。湿り気が残る前髪の下から、彼女の血よりも濃厚な赤い目が睨みつけている。

欲情にも似た興奮を、静かにその内側に募らせる雲雀恭弥は、まるで小動物が吠えるかのように愛おしく見えて仕方ない。

「ああ……そういえばこんなものが落ちてたけど、これ君の？」
「――っ！」
雲雀恭弥の手に収まる厚みがある物に、紫乃の顔つきが強張る。
「返してッ!!」
「ふうん。これが君の弱点か」
紫乃の腕を容易にかわして仕込みトンファーを彼女の首筋にそっとあてがう雲雀恭弥は実に愉快そうであった。紫乃の目には、狂気の沙汰に映っていた。
赤茶の表紙に、小さな南京錠の鍵をぶら下げたそれをじっと見つめた後、雲雀恭弥がポツリと呟く。
「日記かな？」
「……中を見たのか？」
「いいや、まだ見ていない。まだだけどね」
脇腹を突いて念を押されると、彼女に残された選択は限られる。それも屈辱の選択しか残されていない。紫乃は歯を食いしばる。
「……わかった。誘いは受けよう。ただし、二度とそれに触れるな」
怒りの衝動を抑え、紫乃は渋々と了承する。
その返事でも、今の彼には十分満足だったようで、クスリと紫乃に不快な笑みを見せつけてその窓から立ち去った。
「またあとで来るよ、紫乃」
そんな去り際の言葉を残して、紫乃は窓枠に黄昏るように残された日記を手に取り、その表紙をそっと撫でた。
【咬み殺されようが構わない。

私の存在は罪深い。
死を前にして、その罪深さを知った。

全て私の過ちだ。】

縮まらない距離

【九月二十日
体育祭の季節。
ここ並盛中でも体育祭は超ビックイベントだ。
準備期間中から学校の雰囲気がガラリと変わり、学校全体が熱気に包まれている。
我が校では縦割りでA・B・Cに分かれてチームを作るが、組同士の対抗戦は例年白熱しているそうだ。
……とここまで語ってみたが、やはり絶対的ヒロインの足元にも及ばなかった。出直そう。】

体育祭も明日に控えたその日、A組の生徒は講義室で棒倒しの協議をするとのことで、ほとんどの生徒がその集会に出向き教室はガラ空き状態だった。
紫乃も多用で教室を空けていたが、例によって廊下を歩いているところをアイツに見つかる。

「よーっす、伊波！」
振り返ると、山本武が馴れ馴れしく紫乃に手を振っていた。またこの男か、と条件反射か溜息が漏れる。
無視して歩き出したが、紫乃より一回り大きいこの男にすぐに追いつかれた。

「伊波も講義室行くのか？　一緒に行こうぜ！」
「行かない」
出鼻をくじかれるようにそれは瞬殺だった。
若干心折れる山本武だが、持ち前の楽観思考をフルに活かし堂々と紫乃の隣を歩く。学校ではお互いあまり干渉しないためか、紫乃が控

えめに避けようとしているのをヒシヒシと感じていたが、数少ない機会にここぞとばかりに盛り上がる話題を模索してみる。

「そういや、伊波は明日の体育祭の種目何に出るんだ？　俺は１００ｍ走と借り物競争に出るぜ」

「そうか」

「伊波は何の種目に出るんだ？」

「欠席する」

あまりにも続かない会話のキャッチボールにたじたじになりながら、どうにか彼女の気を引くよう山本武は食い下がる。

「そりゃあねえぜ、せっかくみんなでここまで盛り上げただろ？　お前も楽しもうぜ！」

「盛り上がりたい奴らだけ盛り上がればいい。私には関係ない」

紫乃の返事はどれも結局のところ興味を示してくれないものだった。

この歳でもう体育祭で浮かれる年齢でもないからな、などと紫乃は一人ごちる。隣で能天気そうにしている野球バカのことを、ほんの少しだけ羨ましいなんて思う。

その後も山本武を適当にかわそうとするのだが、想像していたより絡みがしつこいので、彼女の方も次第にたじたじになる。

どこぞの横暴風紀委員長に似てどいつもこいつも……なんて鬱陶しく思っていたところである。

『――伊波紫乃、応接室で委員長がお待ちかねだ。至急応接室に向かうように、繰り返す――』

――これは校内放送だと脳が処理した途端、殺意が湧いた。

ふざけるな、何を校内放送で人を呼び出しているんだ。こちとら向かっている最中にしつこいのに絡まれて振り払うのに必死だったというのに繰り返しているな！

応接室で悠々と待つ雲雀恭弥を想像しこの時猛烈な殺意を煮立た

せ、廊下に響き渡る放送を傍聴していた。

「伊波……」

「……そういうことだ。じゃあ」

「待てよ！」

山本武に雲雀恭弥のことを聞かれてしまったのは仕方ない。問題は、あの赤ん坊がどこでこの放送を聞いているかだが、余計に考えるのも恐ろしくなりやめておいた。

応接室への足を急ごうとしたが、グッと後ろ手に腕を引っ張られた。山本武だ。

「待てよ、伊波……」

その男は、紫乃を見て、不意に思い詰めたような顔をした。

「何……」

「……あん時、ヒバリと何話してたんだよ」

掴まれた腕に入る力が、やけに痛い。ここまで真剣な顔つきで、滅多なことで眉間に皺を寄せない彼が、そんないつかの出来事を問い詰める真意が、彼女には汲み取れなかった。

「君には、関係ないだろ」

「伊波……ッ！」

何度もその名前で呼ばないでくれ、と山本武に振り返り、そいつの顔を正面から睨みつけた。

「情けで私に構うならやめてくれ。君に気を遣われると、惨めな気持ちになる」

「ッ……」

二人がいる廊下は静まり返る。

遠くで、体育祭の準備に明け暮れる教室から熱気の籠った声が廊下にまで漏れていた。廊下は日陰のように長い沈黙が続いた。そして、山本武は彼女の腕を放した。そうするしかなかった。

「……君も早く講義室に行けよ」

そんな慰めにもならない言葉をかけ、山本武を一人その廊下に残す。

――野球で苦戦しても、感じたことがない悔しさを握り潰して、山本武は彼女の姿を呑み込んだ廊下の先をしばらく見つめていた。

日本茶は殺意の香り

「遅いね」

応接室の扉を叩いた紫乃に第一声をこぼした雲雀恭弥は、応接室の定位置に着いてのんびりと紫乃を迎え入れた。秋も深まるこの頃は学ランを肩に羽織っている。

それなりに急いで来たのに悠々とそこで待っていた人物を、レンズの奥で紫乃は睨んでいた。

「まあ、安心しなよ。君に書かせた誓約書には君の保身を保証させてあるから」

言いつけられていた時間より遅れてきた彼女に機嫌を損ねたかと思いきや、雲雀恭弥は寛大な態度を見せる。

紫乃も無闇に咬み殺されるのは勘弁だが、あの後に書かされた風紀委員会の誓約書という書類に記述があった内容を思い出す。

校外に敵が多い雲雀恭弥に就く紫乃の身辺を保証する契約のようだが、正直監視されているようであまり気持ちのいいものではない。

こう思うと、日頃沢田綱吉の身辺を漁る自分には言えないことだなと苦虫を潰す。

応接室まで来た紫乃は、着いていきなり大量の書類整理をさせられるかと思っていたが、雲雀恭弥の指示は手短だった。

「じゃあ、まず煎れて」

室内の隅のテーブルに用意されている日本茶の茶葉と道具一式を指して雲雀恭弥が告げる。

自分で煎れろ怠け者と言ってやるわけにもいかず、渋々と湯呑みに濁った茶湯を煎れる。深い緑色の日本茶をセットして書斎机の上に差し出すが、一口啜った雲雀恭弥の返事はこうだ。

「やり直し」

そしてここからが地獄だった。

雲雀恭弥が頷くまで日本茶を一から煎れさせられ、そして結局雲雀恭弥が頷いてくれる日本茶をこの日は煎れられず、草壁を呼んで口直しの一杯を煎れさせる始末。

日本茶がこの日彼女の深いトラウマとなる出来事だった。

同時に絶対君主雲雀恭弥への謀反を起こさせるほどの根深い殺意をこの日確実に芽生えさせた紫乃であった。

何故こんな嫁入り修行のようなことをさせられるんだと怒りのパラメーターがエクストリームを飛び越えそうな時、雲雀恭弥から明日の体育祭には美味しい日本茶を煎れろと宿題が出て、今晩闇討ちを謀ろうかと紫乃の頭を過ぎるのであった。

その後、雲雀恭弥から宿題を持たされ、帰り道の河原の橋を渡っていると、向こうの河川敷の方で棒倒しの特訓をする姿を偶然見つけた。

自分がいないところでも順調そうだと、紫乃は安堵する一方で、その直後爆発がした。沢田綱吉が頂上に立っていた棒が爆風に耐え切れず煽られ、そのまま秋中旬の氷のような水面へと一直線に突っ込んでいく。

順調そうだ、紫乃は何も見なかったようにその場から立ち去るのであった。

【明日は体育祭だ。彼らの健闘を祈る。】

君想ふ、体育祭　1

【九月二十一日

体育祭当日。私は応接室でお留守番組だ。もともと体育祭に出る気はなかったが、あの男の言いつけだ。校舎からなら存分に標的の観察に徹底できる。不服だが、初めてあの男の暴挙が役に立った。流行りに乗るなら〝暴君は胸糞だが役に立つ〟というところか。くだらん御託はよそう。】

土埃舞うグラウンドでは、体育祭の種目の真っ只中であった。

男子１００m走で、山本武が陸上部のホープを破り一位でゴールする場面だった。ゴールした直後の山本武の周りには溢れんばかりの人だかりができる。チームで山本武を応援する女子達の歓声は勿論、他チームながらも山本武の活躍に鼻息が荒い親衛隊の女子達、中には興奮のあまり倒れる数名も……。

イケメンとは罪深い。

なんて、その活躍を校舎内の応接室で高みの見物をしていた紫乃だった。

いい眺めだ。誰にも干渉されない絶好のポジションで、山本武が囲まれている体育祭の光景を校舎の一角から眺めていると、群衆に囲まれながらも山本武が紫乃のいる校舎の方面を見上げているようだった。

ここからではあのバカに話しかけられることもないので、応接室の窓際に寄りかかり引き続き沢田綱吉の観察に回ることにする。

ぴょんぴょんしている沢田綱吉がビリになり、安定の情けなさを露呈している。ダメツナだな、沢田綱吉。

そんなのでは棒倒しで落とされても、あの天然系ヒロインを落とすのは難しいぞ、と余計なお世話を焼いて、次にある男子の借り物競争

のアナウンスを聞いていた。

今回も彼女の思惑通り事が運んでいる。

気になることといえば、今朝校内で偶然目撃したＤｒ．シャマルが、朝から女子生徒を口説いて回っていたことだ、奴には細心の注意を払っておこうと心に誓い、紫乃はその時グラウンドのノイズから意識を逸らしていた――――――。

完走後、チームメイト達に囲まれながら、山本武はふと並盛中の白い校舎を見上げた。真っ青に澄んだ空の下に聳え立つ白亜の建造物を見上げ、彼女の姿がそこにないか探していた。自分の活躍を、あの校舎のどこかで見ていないだろうかと……。

校舎の窓の一角に、人影を見た。女子生徒のようだ。

ほぼ直感的に、彼女だと確信した。

彼女を見つけると思わず親しんだ名前を呼びたくなるが、すぐに次の種目に移動することとなった。

次の種目は借り物競争とアナウンスする放送を耳に入れて、山本武も競技に出場した。後方に並んで位置につき、着々と出番が来る。合図とともに一番に駆け出し、すぐそばに落ちていたカードを手に取りめくった。

借り物の内容を見て、彼の脳裏に最初に浮かんだのは、伊波紫乃であった――――――。

君想ふ、体育祭　2

「はぁ……」

応接室の窓際に立ち傍観していた紫乃だが、借り物競争が始まった後もそれには目もくれず、要注意人物達のマーク徹底に思考を費やしていた。

眉間に幾本もの皺を寄せて思い悩んでいる頃だ、ガラッと余る勢いで応接室の扉が開けられた。

まだ体育祭の風紀委員活動に出向いている雲雀恭弥が戻るには時間があるが……その人物を紫乃が振り返ると、思いがけない奴がいた。

「おっしゃ、伊波っ！」

汗だくで息を切らす山本武がいた。

息も絶え絶えながら紫乃を見つけてガッツポーズしてみせる。わけがわからない。目の前のこの男は、今もグラウンドでチームのエースとして第一線で活躍しているはずだ。どういうことだ。

現状に困惑していると、ジャージの上にA組の赤のゼッケンを着た山本武が紫乃の腕を引っ張り半ば強引に紫乃を応接室から連れ出した。

「わりぃけどちょっと一緒に来てくれ、時間がねえんだ！」

「はあっ!?」

縺れる足を山本武に引っ張られていき、紫乃の抵抗もままならず廊下の景色を追い越して、そのままグラウンドへと二人は一直線に飛び出した。その瞬間、周囲からの歓声に圧倒された。

『一年A組、山本武！　一時コースを離脱していたが、今度は女子生徒を引き連れゴールへと一直線です！』

実況放送が秋深まる紅葉に色づく並盛山の向こうにまで透き通って響いている。

まるで地獄だ。こんなことは勘弁してくれと紫乃は周囲の目に見られていることに青ざめた。

そんな彼女の心境など露知らず、紫乃を引き連れた山本武がゴールテープを切り見事一着でゴールする。

そのアナウンスが熱狂したグラウンド全体に大々的に流れた途端、周囲の皆々の反応は期待のエースである山本武が一着を獲得したことよりも、一人の特定の女子生徒を連れてゴールしたことでより一層騒ぎ立てていた。

これは明日から学校に来れないんじゃないかと絶望的なほどこの日注目されてしまう紫乃である。

借り物競争完走後、俯いて紫乃は今後の学校生活にじわじわと脅かされていたが、その根源となるこのバカな男はその隣で今も興奮醒めやらずと言った感じだ。

「っしゃ！　やったぜッ！」

勢いあまり紫乃の肩を抱き寄せるくらいだ。周囲の目が見えていないこの体育会系ノリの男に一度屈辱のチェストをお見舞いしてやりたいと、衝動がこみ上げる。

紫乃の肩をそんな風に抱き寄せてこの時一番喜んでいる山本武を、ずっと近くでその笑顔を見つめていた紫乃は思った。

この瞬間にも彼の隣で喜びを分かち合う資格など、こんな自分にはないんだと――……。

まだ何も知らない彼らを、自分は騙し続けている。

後ろめたい紫乃は、また素っ気ない態度で振る舞うことしかできない。そばで見る彼の笑顔は、紫乃には眩しすぎる。いつから紫乃は、笑顔を捨ててしまっただろう……。

その時――静かな影は、気配もなく近づいていた。

「紫乃」

その低い声色は、土埃舞うグラウンドの地を反響し震わせた。観覧席にいた誰もが公然の場に出てくるはずもない人物の登場に目を疑い、戦慄した。

誰よりも彼女自身が、毛嫌いする群衆に囲まれるグラウンドにあの男が立っていることに恐怖を感じていた。

「……ねえ、そこの君、勝手に彼女を連れ出して、風紀委員会業務を妨害したとみなして咬み殺すよ」

「ヒバリッ……」

雲雀恭弥の眼は本気だった。

縄張りを荒らされ、獲物を横取りされた憤慨の色が、その男の眸子に宿っていた。百獣の王でさえ手を出すのを躊躇する怒気で紫乃の隣にいる男を睨んでいる。

山本武は咄嗟に紫乃の前に出て彼女を庇った。

思いがけない山本武の行動に戸惑う紫乃だが、こんな公衆の面前で恥さらしもいいところだ。ましてこんな時期にまだこの二人を睨み合わせる場合ではない。この後に大事な棒倒し競技を控えているのだ。今、山本武が、やられるわけにはいかない……。

「違う、雲雀、彼は借り物競争の出場者なんだ。借り物には”風紀委員”と書かれていた。クラスメイトで面識がある私にそれを頼んできたんだ。非があるなら、君に従えなかった私にある」

彼女を庇う山本武の腕を押し退け、紫乃は講義した。全くのデタラメであったが、真偽などは彼女にはどうでもいい。むしろ彼の怒りの

矛先が自分へと向くなら、死滅へのルートを回避できるのなら、紫乃は痛みも報われると思った。

雲雀恭弥は、苦し紛れであまりに自己犠牲的な彼女のその抵抗に、すっかり報復心も冷めてしまったようだ。

「ふうん……帰るよ」

学ランの裾を翻して校舎方面へと立ち去ろうとする。彼の背中の後ろに何も言わず紫乃は付いていく。

頼りない自分を逆に庇った彼女を、残された山本武はグラウンドで見送ることしかできない。足が竦んでいた。あの男の脅威を目前にしてみて、蛇に睨まれた蛙のように身体が微動だにしない。彼女が離れていくのをこの時引き止める度胸もないこんな自分が情けないと、右手の拳が震えた。

「伊波……」

もうそこに、彼女はいない。

険しい顔の山本武が一人その場を去る時、昼食休憩を挟んだグラウンドに騒然としたガヤの声が響いた。

「B組とC組の総大将が一年の沢田って奴にやられたぞーっ！」

他のクラスの総大将が皆何者かにやられたという知らせだ。山本武は嫌な予感がした。一年の沢田という男……そんな奴を知っていた。

ツナ……!?　その友の顔が瞬時に過ぎり、まだ彼女のことを引き摺る頭を無理やりにでも他の非常事態に逸らすことでやるせなさを紛らわすのだった。

君想ふ、体育祭　3

二人はグラウンドを後にし応接室に戻ると、紫乃がその扉を閉めたタイミングで雲雀恭弥の口元がふと緩んだ。

「彼……咬み殺そうかな」

「ッ……！」

まるで些細なことを口にしたような彼の口調は、紫乃の気を引くには十分なきっかけだ。彼のその一言だけで心臓の鼓動を早め応接室に緊張の糸が張り詰める。

「やめろ！　君の機嫌を損ねたのは、君の待機命令の意に背いた私のせいだろ。私の責任だ。気に入らないと言うなら私を咬み殺せ」

「……不思議だね、君は。自分は理不尽に咬み殺されてもいいというのに、よその他人のためならそうやって頑なに意地を張る。しかもそいつらのために自己犠牲まで厭わない。普通の奴らはね、我が身の可愛さに真っ先に自分の群れを売るんだよ。やはり君は面白い」

深みに嵌るな、この男の足元を掬う狡猾さに惑わされるな、至近距離で対峙する紫乃は、自身にそう言い聞かせ心を宥めた。

彼の前ではボロを出しそうになる自分がいる。

侮れない相手、そう彼女が構えていると、雲雀恭弥のしなやかな形のいい手が不意に彼女に触れた。

「あと……これ、外したら？　伊達なんでしょ」

雲雀恭弥の手に触れられ、咄嗟の反応に遅れていると彼の手に紫乃の眼鏡がある。普通なら、誰が見ても度が入っているように見せかけられる高性能のレンズを嵌めている代物だ。銀縁のそれが、秋晴れの太陽光を反射している。

彼女の鮮明な視界に映る雲雀恭弥の顔を睨み返す。

「……それは今と関係あるのか」
「いや、僕の個人的な興味」
気まぐれな男だ。
雲雀恭弥の無愛想顔を鬱陶しく睨めつけていても、彼にはくすぐり程度にしか思われていない。意味のない抵抗と、紫乃は白状した。

「……人の目を見るのが、トラウマなんだ」
「へえ……君にもそんな弱みがあるなんて意外だね」
笑えばいいと、紫乃は投げやりに答えた。雲雀恭弥は意外な反応を見せていた。
「じゃあ、せめて僕の前では外しといてよ」
紫乃にも雲雀恭弥のその返しは意外だった。彼女の身長よりも少し高い彼を見上げる形で、紫乃はまじまじと雲雀恭弥の顔を観察した。

「僕には弱みを見せたんだ。もうこれは必要ないよ。僕の前ではもっと素の自分であるといい。もっと君の皮を剥いでみたい。本来の君を見てみたいな」
狂乱的な思考回路を垣間見せる。ゾクリと脊髄から粟立つようだ。紫乃の青ざめる顔色に、雲雀恭弥は告げた。

「僕のものである以上、君に近づく蝿は排除する」
「人を所有物扱いするな」
「君は僕のものだよ。君の目も、血も、身体も、心臓も、誰にも譲る気はない」

そしていずれ……彼女の被る皮を全て剥ぎ取り、生身の彼女の身体に己の鉄の牙を骨髄の奥まで深く食い込ませて……。
それはまるで特定の誰かに向けられた宣戦布告のようであり、グラウンドで彼女の肩を抱き寄せるあの男の顔が、一瞬雲雀恭弥の脳裏を

過ぎる。

「綺麗じゃないか。君の毒々しい瞳は……」

雲雀恭弥が、彼女にその口説き文句を口にして、いつしか二人の間の距離は、唇の先が触れ合うほどに縮まっていた。雲雀恭弥の手は、彼女の透き通る白い頬を撫でる。あとほんの少し、1ミリでもどちらかが動けば接触するかの瀬戸際に、応接室の扉が外から叩かれた。

「ここにおったかヒバリーーーッ！」

笹川了平……またの名をライオンパンチニスト了平……。紫乃はとにかく熱くむさくるしい男と記憶している。ライオンパンチニストとはなんだ。そんな真面目なツッコミを入れる紫乃であった。

日常的に文句があると応接室に押しかけてくる光景を思い出す。今回もこの熱血漢が乗り込んできて、それまでのギリギリにまで張り詰めていた緊張感はこの男に断ち切られ、雲雀恭弥は俄に機嫌が悪そうであった。

紫乃は若干あの死ぬ気男に貸しを作るようで複雑であった。

このうるさい男が押しかけたのも、やはりあの騒動の件であった。

「この度の我が組の不祥事、我らが総大将である沢田ツナが起こした試合直前の総大将襲撃だが、奴の独断での行動は、並の総大将ではやり遂げられんことであった！　故に俺は沢田ツナのこの英断を讃える！　奴がやったことを潔く認め、この後の棒倒しについて審議するつもりだ！」

「ああ……それで？　言っておくけどうちではその件は扱ってないよ。群れる行事は全て校長側に一任させているからね」

これほど組の総大将を讃えているというのに、名前を間違えている

のが致命的だ。それじゃマグロだ。

「そうであったか！　それならば校長室に行き直談判に……ええいっ！　まどろっこしいわ!!!　とにかくこちらが圧倒的不利な状況での棒倒しを申し立てる!!!」

結局審議どころかもはや独断で話を持ち込む笹川了平に呆れ返り、後方に控えていた残りの代表達もドン引きである。雲雀恭弥の方も一方的な笹川了平に機嫌を酷く損なわれている……かと思いきや、紫乃が窺うと、男はそのかたい口角を不意にクスリと緩ませた。

「沢田……綱吉……」

雲雀恭弥はその名前を口に出した。そして思案すると、彼の返答を待つ笹川了平にこう言った。

「校長にはこっちから伝えておくよ。君は棒倒しが終わるまで留守番しておいて」

紫乃にもそれを言い残し、恐らくあの赤ん坊に相見えるため棒倒しに向かうのだろう……。

彼らを見送り、沈黙した応接室にて紫乃は再び底知れない不安を抱えるのであった。

君想ふ、体育祭　4

昼食休憩を終えたグラウンドでは遂にメインイベントの棒倒しが行われていた。

紫乃の組の総大将は沢田綱吉、敵チームの総大将にはあの雲雀恭弥がいる。これはこれで面白い光景だが、観覧席が熱いのやら冷めてるのやらつくづく微妙な空気であるが、審判の開始の合図が秋晴れの空に響き渡る。

紫乃は一人、応接室の窓際で、棒倒しの行方を見守っていた。

順調なはずだが、紫乃の顔色は暗い。言い知れない何か不安の種があった。

午前中にあった出来事を振り返る。

山本武に引っ張られ借り物競争に出場し、その後の応接室での雲雀恭弥との密着した会話……。

窓に添えていた手に、僅かな力が込められた。

ここまで、二人の重要人物と関わりすぎていた。ただ傍観すると決めていた紫乃だが、既に取り返しのつかないところまで来ている。

今後はもう彼らの前で今までの〝伊波紫乃〟を演じるのは厳しい状況になるかもしれない。

ならば作戦変更である。

「ちゃおっス」

どこからか、そんな声が聞こえる。

まだ舌足らずな子供の声だ。

「伊波紫乃だな」

グラウンドを眺めていた視界をずらすと、いつの間にか開け放たれていた窓枠に、その黒い影がいた。

――――――最強の殺し屋だ。

気配もなくそこに腰を据えていた赤ん坊に、紫乃は警戒する一方、直に対面するその凄腕の赤ん坊の細部の指の動きにまで注目した。少しの気の緩みも命取りだ。

まさかここで接触を図ってくるとは……予感が的中した。隙は見せないよう上手くやってみせる。

さあ、どう出るんだ。アルコバレーノ。

「……でもまだその時じゃねえぞ」

その殺し屋は、でたらめにそんなことを言う。殺し屋にとって標的を狙うタイミングとは重大な要点だ。呼吸ひとつのズレでミッション成功の確率を大幅に増減させる。

今はまだそのタイミングではないと彼は判断した。まだこうして標的との接触を図れただけで満足だ。

紫乃は肩透かしを食らうように難色を示していた。

ここまで警戒していたのに、相手があっさり引き下がろうとするとは意外だった。そして紫乃は少し落胆していた。

「借りるぞ」

その言葉の意味は、応接室の窓枠からグラウンドにいる標的を狙う絶好のポジションを確保するという合図。

その証拠に紫乃がまだ許可していないにも関わらず、彼はスコープ付きのライフルで見事沢田綱吉を仕留めた。

棒倒しで盛り上がりを見せるグラウンドは、裸に額の炎を灯した沢田綱吉によりさらに戦況は掻き乱されていた。

次に紫乃が、彼のいた窓枠を振り向くと、そこには白いカーテンがふわりと彼の面影の余韻を残しているだけであった。

【散々だった一年の体育祭は、しかし終盤にも意外な結末を見せてくれた。
イタリアの殺し屋との最初のコンタクトは、見事に空振りだった。こちらの思うところを察したのか？
つくづくその甘いマスクに隙を見せない感じの悪さが目立つ男だ。愛人なんて御免だ。
予期していたことだが、ここはやはり戦況を変えなければならないだろう。上手くあの男を利用する。】

暮れし秋、水面揺る、君想ふ。

散々だった今年の体育祭が終結し、山本武は少し遅い帰り道を歩いていた。

A組は大トリの棒倒しで惨敗し、腹の虫が収まらなかった敵から逆襲に遭い、沢田綱吉側にいた山本武もさすがのボロボロであった。

剥き出しの頬の傷を気にしながら、一人帰り道を歩いていた。体育祭後の片付けが終わると沢田綱吉達に一緒に帰ろうと誘われたが、先に彼らを帰らせた。

少し校内をうろうろと探すが、結局あの後に彼女を見つけることはできなかった。

仕方なく諦めて帰宅していた山本武は、夕日を浴びた並盛川の河原を見下ろして気を紛らわせた。長閑なあの河川敷の辺りで、彼女と少ない会話を交わしたのも記憶に新しい。

あの頃から、彼は密かに伊波紫乃というクラスメイトを意識していたように思う。

教室の端で、いつもおとなしくしている女子だとは思っていた。きっかけは、自分が悩んでいた頃に、校庭でボールを拾ってもらったことだ。今と同じくらい素っ気ない態度で校庭を去る伊波紫乃が、印象に残っていた。その日にまた偶然河原で再会して、彼女と一度会話しただけで、彼女が口にしない部分に触れてみたいと思った。彼女自身のことを、知りたいと思った。

野球や友達と遊んでいる時以外は、彼女のことで色々足りない脳が悩んでいたことなんてざらにある。

そんな山本武だが、まだ彼女への気持ちの自覚が薄く友達感覚で彼女と打ち解けようとする彼にも、この頃気がかりなことがある。

自分がなかなか彼女と打ち解け合えない時にも、あの風紀委員長の雲雀恭弥が、いとも容易く彼女を連れ去っていった。あの時も、グラ

ウンドでの一触即発の場面を思い返す。目の前で、為す術もなく、あいつが攫われていく……。

山本武も、内心穏やかではなかった。

しかしまだ自覚症状がほぼないに等しい彼は、カルシウム不足だろうかと牛乳を飲むことで誤魔化すようになり、一日2リットルは牛乳を飲んでここ最近も成長期の身体が伸びた。

この頃の考え事に耽っていると、後ろ手に手を引かれた。突然のことに狼狽えながらも山本武は強引に自分の手を引く制服姿の女子に声を張った。

「い、伊波……？」

「うるさい。ちょっと来い」

目の前に現れた彼女の姿にとぎまぎしつつ、彼女の自分より小さな手に引かれて草むらが生い茂る河川敷の橋の下まで連れて来られた。

「えとー……伊波？」

「そこに座れ」

橋の下まで連れてこられるなりパッと握られていた手をまるで素っ気なく離され、なんだか物寂しいものを感じる山本武だが、橋の下の草むらに救急箱が置いてあるのを見つけた。

彼女が次に振り返り、固まる山本武を見据える。

「君には聞きたいことがある。静かにしてくれ。さもなければ雲雀恭弥に見つかれば面倒になる」

雲雀恭弥、とそいつの名前が出るだけで複雑だ。特に彼女の口からその名前が出るのが気に入らない。

山本武の心情など知らず、備えていた救急箱を膝に置いて傷口に当てる消毒液やコットンを取り出す。山本武の頬に消毒液を染み込ませたそれを当てると、ひんやりとして痛覚をピリリッと刺激された。

「っ――……やっぱ染みるのな……」

「我慢しろ」

一番に酷い頬の傷を手当しながら、そんな会話がなされる。ほどよ

く冷たく触れる彼女の両手に治療されるのがなんとなく心地いいと、平和ボケに思う山本武であった。

こんな傷を放置して帰るとは、あのＤｒ．シャマルに男は診ないと門前払いされたらしい。紫乃のせいではないが少なからず彼らを気の毒に思う。

山本武の頬の傷を看る紫乃だが、跡が残らないかという心配をしながらあまりにも能天気な山本武を叱咤した。

１０年後には消えない傷痕を残していたが、あれよりも深い傷をこれから負ってしまうのではと、紫乃はとても気が気ではない。なのに本人が能天気すぎる。

「もっと自分自身を大切にしろ。君にこれ以上傷を負ってほしくはないんだ……」

我儘だなと思う。彼らを騙しているというのに、そんな無責任なことを願ってしまう。責任逃れだ。

しかし、彼女の繊細な部分など、この能天気を絵に書いた男には気づかれないだろう。その時まで、知る必要はないと、紫乃は口を閉ざす。

「……つか、伊波、ち、ちょっと、近えツスよ……？」

傷を看ているのだから当たり前だが、至近距離で見る紫乃の顔に、山本武はたじたじだった。間近で見る彼女の白い肌、眼鏡越しの凛々しい目元、肩口をさらりと流れる黒髪……彼女が使うシャンプーの香りだろうか？　落ち着く香りが、彼の嗅覚をくすぐる。

そう指摘されて、山本武の顔をまじまじと見ると、思春期頃の男子らしく年相応に頬を赤らめる。バカな奴、と彼の初々しい反応には、少しばかり緊張が緩和する。

彼女の熟した果実のように毒々しく赤く実る瞳が、ジロリと山本武を見つめる。傷を看ていたときよりも、さらに至近距離で紫乃はこう言った。

「……こんなことはついでだ。それより借り物競争で、あの時の君が私を人選したことだ。あれには何と書かれていたんだ？」

「ああ、そいつなら確か……ほらっ」
ジャージのポケットを漁り、あの時の借り物競争の紙を紫乃に渡した。しわくちゃのそれを受け取り借り物の内容に目を通す。

――――――”喧嘩した相手”

その紙に書かれていた内容に思い当たるのは、前日に校内の廊下で彼を振り払ったことだ。
こんなこと、何もあんなに息を切らして紫乃に頼ることでもない。適当に理由をつけてグラウンドにいた生徒に協力してもらえばいい話だ。彼なら人望は厚いのに、態々こんな自分を頼ってくるのか。
そんなことを紫乃が口にすると、山本武は軽い口で普段の調子に納得していた。

「伊波がダメなら獄寺にでも付き合ってもらおうとは思ったけどな、あいつ素直じゃねえから、怒らせるといっつも花火投げてくるしよー」
なんて、能天気に笑っている。
獄寺隼人の代わりに言っておくが、あれは花火(パチモン)ではないぞ、闇の裏ルートを流れている代物だ。単純にあんな煙たいだけの花火だと本来の花火としての性能に問題があるぞと紫乃は山本武の天然に冷静につっこんでいる。
獄寺隼人がいつの間にやら花火職人と勘違いされていることに少し同情する紫乃である。

「……言っておくが、私は別に君と喧嘩したなんて思っていない」
彼との接触を嫌がりはしたが、紫乃の方はそれほど深く考えてはいなかった。たった数回関わったクラスメイト、それだけの関係で、あの時の出来事を喧嘩したなどと口にできるだろうか。

「そう、なのか……んだよ、じゃあ俺の勘違いだったのかよぉ～！　なんだ、それじゃあよかったぜっ！」
　ハハハッ、なんて明るく笑っている。
　この男には少なくともそう思われているのではと紫乃はもう返事を返す気にもなれなかった。

「……あの時」

　そこまで言おうとして、紫乃は口を噤んだ。ん？　と山本武が紫乃の言葉を待っているが、なんでもないと濁した。何故庇ったと聞いたところで、こいつは本物のバカでイイヤツなのだ。
　その証拠に今までの会話が落ち着いた途端、こんなことをまた言い出す。

「なあ、キャッチボールやんね？」

　……本物のバカがここにいた。
　口を開けば紫乃を野球に誘うこのバカに、染みる消毒液を傷口に流し込んでやった。
「怪我人はさっさと寝とけ」
「いぃ～っ！　もうちょい優しくしてくれよ」

　バカは殺菌しても治らないらしく呆れる紫乃であったが、今後に影響するのでそれからはできる限り優しく彼の傷口を看てやることにした。
　二人きりの秋頃の水面が揺れる河原で、彼女と触れる度に鼓動が微かに跳ねた。そんな小さな芽を出す少年の気持ちなど、彼女もまた露知らずにいた……。

【未来で、ボンゴレの二大剣豪と恐れられ、その素質を一番開花させた君なら、この世界でもきっと役に立ってくれる。
どうか彼が彼であり続けるための、生きる糧となってほしい。】

日常編 ― Ⅲ
至近距離の標的

【九月三十日
遂に、沢田綱吉が覚醒した。】

その日は普段と変わらない日常であるはずだった。

「俺……人を殺めちゃったの～!?」

今朝目が醒めたら人が死んでいた、そう話す沢田綱吉だった。パジャマ姿のままで、寝起きの顔色は最悪である。

朝一番に沢田家を訪れた友人達は自首すると嘆く沢田綱吉にどう声をかけてやればいいのか、皆慰める言葉もなく沈黙していた。

しかし、リボーンがもう一人の助っ人を呼んでいたというので、沢田家の前で停まったエンジン音に皆注目する。

「やあ」

屋根を軽快に飛び越え沢田綱吉の部屋の窓から現れた雲雀恭弥に、沢田綱吉を含めた三人は度肝を抜く。唯一この場にいる三浦ハルがはひっ？　というようなとぼけ顔をしているが、殴り込んできた凶悪人物を前に反応どころではない。

さらに死体を値踏みした後、風紀委員会で揉み消してもいいと言い出すのでこの場にいる全員が彼の持つ脅威に震え上がった。

雲雀恭弥はというと、リボーンに貸しを作る目的で来たが、あとで風紀委員会の人間を寄越すよと告げて窓から地上へ降り立っていた。

さすがにそれはまずいだろ！　と沢田綱吉が窓枠に手をかけ何か

言おうとしたが、その時雲雀恭弥ではない別の人物の姿に思わず意識を持っていかれた。
　すると直後に後ろに控えていた獄寺隼人が、この間の報復だと懐から十を超えるダイナマイトを取り出し火を着けた。沢田綱吉を退け地上の雲雀恭弥へ浴びせるが、あえなく返り討ちに遭い沢田綱吉の部屋が大惨事となる。

　沢田綱吉の部屋が黒煙に包まれるのを見届けて、紫乃は雲雀恭弥のバイクの後部座席に乗ってその場を後にした。
　雲雀恭弥に掴まり並盛の住宅街の景色を抜けていく彼女の意識は、全く別の心配事に向かっていた。

「いいの？　あの赤ん坊と会わなくて」
「……興味ない」
　雲雀恭弥の声がぼんやりと聞こえる意識で、紫乃はそう冷たく吐き捨てた。
　彼女の返事に、雲雀恭弥もそれ以上追及するのはやめた。沈黙を騙すように並盛中学校に向かう速度を上げていく。

　この時、雲雀恭弥には嘘をついた。
　頭の中には想起される今朝方の赤ん坊の顔が、紫乃をしばらく悩ませていた。

　それは老朽化が見える木造アパートの二階での出来事だ。
　休日の朝早く六時頃、紫乃は起きていた。
　そうして目覚め一番に視界に入る不快な人物に顔を顰めた。

「消えろ」
「いい天気だね、紫乃」

朝から会話が噛み合っていない。この男のスルースキルは並のものではないと呆れるものであった。

今朝も恥じらいもなく下着一枚の寝起き姿で堂々と雲雀恭弥の視界に映る紫乃は、腕を大胆に伸ばして大きな欠伸を吐く。起きたが枕の横にある眼鏡には手をつけていない。

まだ中学一年生の発育段階ながら発育のいい紫乃の身体は、彼の視界にもいい眺めだが、さすがに少し恥じらいがないとあまり面白くない。窓際の定位置となった場所に腰を据える雲雀恭弥はボソリと言った。

「……もう少し意識したら、それ」

「問題ない。男と意識したことはないからな」

「それはそれで心外だね」

ムッと少し機嫌を損ねた男のことなど無視して支度をしようと立ち上がる紫乃だが、妙な違和感を覚えた。紫乃を睨めつける男の存在など無視して部屋を見渡すと、同時に声がした。

「ちゃおっス」

家に何故かこの赤ん坊までもがノコノコと上がり込んでいる。

あの男が、彼女が寝ている間に勝手にセキュリティーロックを差し替えたというのになんだこの家のガバガバは、朝から紫乃には悪夢である。

とうの雲雀恭弥はというと、念願の会いたかった人物との再会に普通に喜んでいる……。もうよそでやってくれ、紫乃はもう何も見なかったように目と耳と塞いだ。

「やあ、赤ん坊、よくここがわかったね」

「俺の情報網を舐めんなよヒバリ」

紫乃のアパートの部屋で、不法侵入者同士の会話が成立している。立場がない紫乃は彼らをよそに眼鏡をかけ、着替えを持って浴室に急ぐ。

「ちと頼まれてほしいことなんだが、頼めるか？」

「へえ、面白そうだね。君に貸しを作れるなら喜んでするよ」
リボーンから雲雀恭弥に頼みごととは非常に興味がある話だが、ここにいては地雷を踏むと確信する紫乃は、紳士だと言うなら入って来れないであろう風呂場で時間を稼ぐことにした。
「そうか、あんがとな」
さっさと支度を済ませ、紫乃がこっそり部屋を出ようとすると話がちょうどにまとまったようで、そんなリボーンのご機嫌な声がした。
こんな時に喜ばせて地雷を増やすなよ！　と殺意に等しいものが彼女の腹の底で煮えくり返っている。
一秒でも早く避難しようと浴室に向かうが、後ろで魔の囁きが聞こえた。
「おもしれーものが見れるからお前も来いよ」

その言葉を最後にようやく行ったようだ。着替えを握る手にわなわなと力が入る。
あくまで傍観者でいなければならない、その信条が、今も彼女を突き動かす。これ以外に自分の存在価値はない。彼女はすぐに風呂場を出る。

雲雀恭弥の後ろで掴まる紫乃は、雲雀恭弥の身体に回す腕に力を込めた。

「雲雀」
か細い声で呼んだ。
走行するバイクのエンジン音に掻き消されそうな声を、彼は聞いた。
「……何」
「あなたがいてくれて、よかった……あなたのような人が守ってくれると言うのなら、とても心強い……」
まるで耳元で囁いたような落ち着いた声色は、彼にも少し逡巡させ

た。

「変に素直だね」

「気づいたんだ。あなたの強さ、あなたの誇り高き精神、並のものでは到底やり遂げられない。私は弱い。こんな私でも誇り高きあなたのためにできることなら尽くそう」

そう言って、彼の背中に不安げな顔をそっとうずめた。

彼女の体温を今までよりそばで感じた。

厭きたなら咬み殺せばいいだけの話、まだまだ紫乃に厭きたらない雲雀恭弥は彼女の好きなようにさせておいた。もうすぐ並盛の白い校舎が見える頃だ。

他方で、殺され屋のモレッティが来日の挨拶がてらに披露した自らの心臓を止め仮死状態にするアッディーオのお陰で各々はすっかり気力を削がれていた。

「ちきしょーッ、それにしてもヒバリの野郎、マジでムカつくツスね」

一段落した後、黒焦げになった沢田綱吉の部屋を見回して、またあの男にいっぱい食わされたことに酷く腹を立てていた。雲雀恭弥を相手に正面衝突する彼の成長がないせいなのだが、考え事をしていた沢田綱吉は煮えきらない返事だった。

「え……う、うん……」

「どうした、ツナ？」

逸早く彼の異変に気づいた山本武が心配してくれるが、沢田綱吉の顔色は浮かばれないようだった。

何せ、話す相手が山本武であるのが分が悪いと沢田綱吉は口吃った。

「山本……言っていいのかわからないけど、ヒバリさんと一緒に、伊波さんがいたんだ」

正直に言うか悩んだが、その時の光景を思い浮かべながら、沢田綱

吉は告白した。バイクの後部座席にて、あの時見た伊波紫乃の姿を……。

案の定、山本武の顔つきは苦しいものだった。

普段の朗らかな彼の笑顔からは想像もつかないような神妙な顔つきだ。言うべきじゃなかったかもしれない。いつも後悔ばかりの沢田綱吉は、まだ先を話すか言葉を詰まらせる。

「それと、気になってたことがあるんだけど……」

沢田綱吉は彼の顔色を窺って、話を続けた。

「山本の入ファミリー試験の時にも、伊波さんが三階の校舎から見ていた気がするんだ。大人ランボを見て驚いていたようなんだよ」

それは夏も近づいた校庭で、山本武に助けられながらこの家庭教師からの無茶苦茶な総攻撃をかわした苦い思い出だが、あの時校舎からこちらの様子を窺っているような伊波紫乃の姿を見た。勉強をしない分視力のいい沢田綱吉は、伊波紫乃の姿を見間違うことはなかった。

「伊波紫乃……不思議な女だな」

沈黙する中で、リボーンは一人それを呟いた。

リボーンに頼まれボンゴレ候補に一度挨拶しようと来たのだが、話題をあっさりと掻っ攫られ、消化不良なモレッティが一番この時の被害者であったのかもしれない。

【奴の気配が、そこまで近づいている。

きっと近く何かしらアクションを起こすだろう。

騙し合いは終わりだ。

沈黙に耐えた方の勝ちだ。君の家庭教師としての覚悟を示してもらおう。アルコバレーノ、リボーン……】

１０月１０日

【十月に入った。奴はまだ仕掛けてこない。
ここ数日間での近況報告をするなら、至って平穏な日常生活を過ごしたが（雲雀恭弥の委員会活動においての破天荒には目を瞑るとして）、一昨日は食い逃げの件があったのか、教室で見かけた沢田綱吉と山本武の二人は、やけに具合が悪そうにしていた。ポイズンクッキングの新技の餌食となったと見て間違いない。
私にはあのシチュエーションは色々とリスクが高いからな。本当に為す術がなく辞退した。後悔はない。三時間置きの地獄など見たくもない。
その日は、山本武に絡まれることもなく平穏に一日を過ごした。こんなこともたまにはいいかもしれないと、ひとりごちてみる。】

午後の最後の授業が終わり、各々が帰り支度を済ませていた頃だ。

「ヅナァ〝ァアアア〝ッ……」

中学校で耳にするはずのない子供の声に、教室にいた全員が扉口を振り返ると、ガマンと呟くアニマル柄の服の男児がいた。
クラスであれはシマウマかパンダか牛か、その子供の特徴的な柄の服に興味を示していた頃、ようやく騒ぎに気づいた沢田綱吉がその子供のもとに駆けつけた。
学校に勝手に遊びに来といてチャックが壊れてトイレにいけないという手のつけられないランボに、沢田綱吉もたじたじだ。教室で騒がれるのと板挟みになりながら、恥を堪えてランボをトイレに連れていこうとすると、まだ五歳児のバカすぎる奴が教室前で漏らしてしまった。

クラス中がどっと笑いに溢れる。
それを窓際の席で傍観していた紫乃は、言葉にし難い同情の思いを沢田綱吉に向けるのであった。

「おもしれーのな、ツナんとこの小僧って」
紫乃に話しかけるのは、すっかり部活に行く準備も済んだ様子の山本武だった。
「そうか……」
「伊波んとこも兄弟はいるのか？」
「君には関係ない」
こいつの良いところで残念なところは面白いで片付ける語彙力だなと紫乃はつくづく思い、話を流した。
彼は父親と二人暮らしなのか、紫乃には彼に母親がいた記憶はないが、避けるべき話題だと思い先に教室を出た。

放課後には雲雀恭弥に応接室へ来るよう言いつけられていたので、書類整理とお茶出しに向かう。
書類整理の傍ら、お茶を煎れ雲雀恭弥に差し出す。
ここ最近は少し腕が上達したと、雲雀恭弥にも褒められるようになっていた。
「うん。少し良くなったね。草壁に言ってまだまだ修練してもらわないと」
濁る茶葉の香りを堪能する雲雀恭弥の話にも、紫乃は興味を示さない。彼女を見れば、どこかぼんやりと考え事に耽っていた。
「紫乃？」
「……煎れ直す」

彼女の心ここに在らずの態度に、雲雀恭弥も肩肘をついて悩ましげにするのであった。

【暦ももう秋だ。まだ一年あまりの猶予が残されている。
七年前の記憶は、今も健在だ。
忘れるはずもない。あの運命の日を。
じっと堪えてきたんだ。あの人の分も、その時が来れば、あなたのために償おう。

春には満開に咲く赤い花を、目が醒めたら一緒に見たいな。】

切り札

翌日の昼休みに沢田綱吉がそそくさと教室を離れていくので、紫乃は周囲に気づかれずその後ろをついて行った。

裏庭に出るようなので、人気のない校舎の絶好のポジションを見つけてそこから見守ることにする。換気で開けられていた窓からは、真下の会話もよく聞き取れる。

あとから獄寺隼人と山本武がやって来たが、ランボの教育係を決めるとリボーンが言い放ち、沢田綱吉の右腕を賭けたタイマンに白熱している二人。苦労するな、沢田綱吉。

そして案の定、獄寺隼人がランボを泣かせ、山本武の豪速球が追い討ちをかける。ランボの顔面が跡形もなくなってきているのに多少同情する紫乃である。

泣きじゃくるランボのもとに、新体操部の交流会があり学校に来ていたという三浦ハルが割り込みランボの面倒を見ている。向いてないなダメンズ、と紫乃が哀れみの目を向ける。これでは三浦ハルが沢田綱吉の右腕か、とよくわからない展開になってきたところに、10年バズーカの登場だ。

白煙に囲まれる中、視界が晴れると三浦ハルが10年後のランボを抱えていた。当人らもわけがわからず、三浦ハルの腕力で支えきれなかった10年後のランボが彼女の膝で尻もちをついた。やれやれと小言を言っている。

どういうわけか知らない男の人を抱っこしていた三浦ハルは、狼狽えつつも牛柄のシャツがはだけた男に全体的にエロい！　と言い放っている。「これはファッションで……」と弁解している大人ランボだが、散々だな。

恥じらう三浦ハルに同調して、獄寺隼人が大人ランボにトドメの一言を浴びせている。惨めだな、大人ランボ。心身ともにズタズタにされた大人ランボの背中が悲しそうである。

フィナーレに、ランボの落としたツノを拾った山本武だが、ついと

言いながら大人ランボの額にクリーンヒットさせてしまった。
そこで遂に心が折れた大人ランボであった。十年後も報われない男である。
結局こうなるのか……と落ち込む沢田綱吉を見届けて、教室に戻ろうとした時だ。
予定なら、泣きじゃくる大人ランボを見て、結局沢田綱吉が教育係にさせられるオチなのだが、校庭にいるリボーンは、おもむろに彼女が潜んでいる校舎の方向を見上げた。

「んじゃあ、お前はどうなんだ。伊波紫乃」
踵を返そうとした足がピタリと止まった。
校舎の真下では、リボーンのその問いかけに沢田綱吉らが目を丸めている。
「えっ!?　伊波さん!?」
「伊波！　どうしてお前がこんなとこに！」
校舎を見上げた彼らは、三階の廊下に佇む顔見知りの女子生徒の姿を見て各々に声を上げた。
「……」
「始めっからそこで見てたんだろ。俺がセッティングしてやったんだ。会話もバッチリ聞こえてたはずだぞ」
……誘導されていたのか。しくじったな、などと言っていても仕方ない。
それにやはり狙われていることは確かだろう。

「……私はたまたま通っただけだ。それより、君は誰だ」
「俺はそこにいるダメツナの家庭教師のリボーンだ。マフィア・ボンゴレ九代目の命を受けて遥々イタリアからやって来た殺し屋だぞ」
彼と彼女にはこれが初対面ではないが、このやり取りには重要な役割がある。彼女の切り返しにはリボーンも淡々と名乗り出た。お馴染みの常套句である。
「それより、伊波紫乃、ランボの教育係やらねえか？　今ならツナの右

腕になる特権が付いてるぞ。こいつはボンゴレ十代目後継者最有力候補だからな」

「伊波も一緒にマフィアごっこやろうぜ！」

今度はうるさいのが割り込んできた。ごっこであろうとこの何枚も着込んだ仮面男と関わりたくない。

流れに持っていかれそうな会話をさっさと打ち切り、紫乃は開け放たれた窓から彼らを見下ろしている。そしてレンズ奥の真っ赤な瞳に彼らの一人一人の姿を捉える。

「話は聞いた。子供のお遊びに付き合うほど私は暇じゃない。ここにいるのも風紀委員会の業務の一環だ。雲雀恭弥に告発されたくなければ全員速やかに解散しろ」

校内巡回だと名義を打って、彼らに警告する。

青ざめる者もいれば、思いのほか動揺することもなく落ち着いている者もいる。風紀委員長のあの男を想起させる彼女の言葉にピクリと反応している者もいた。

「伊波さんって、風紀委員なの……？」

「その通りだ。あの男に見つかり咬み殺されるか、ここで私に見逃してもらうか、さっさと選べ」

体育祭以降、親密にしている二人だったが、本人からの決定的な言葉に皆が固まっている。

無理もないが、紫乃には一刻も早く彼らに立ち去ってほしかった。さもなければ、ここは奴の縄張りだ。

「紫乃」

並盛一帯を束ねるこの男に、すぐに嗅ぎつかれた。やはりこの男の縄張りで身を隠すことは無駄な足掻きか。紫乃はここはもう彼に委ねることにした。

廊下に佇む紫乃と、校舎を見下ろすと校庭に集う群れを見て、俄に機嫌が悪そうだ。しかし、その中に見つけた赤ん坊と、一人の男の顔が、雲雀恭弥の考えを改めた。

「行くよ」
それだけだった。校舎の奥に彼女を連れて消えていった。
思いがけず雲雀恭弥に見逃された一同は、安堵を漏らしたり腰を抜かしたり舌打ちしたりなど、様々な反応を見せた。
校庭の地面に座り込んだ沢田綱吉は、ふと隣の山本武の顔を覗き込んだ。奥歯を噛み締める険しい友人の顔を、彼は少し悩んだ末に見なかったことにした。

「伊波紫乃の切り札はヒバリか」
やりにくくなるな、とリボーンはこぼした。今の時点では無理に伊波紫乃と関わると、雲雀恭弥の報復に遭うかもしれない。リボーンなら問題ないが、彼は沢田綱吉のファミリー候補だ。慎重に扱わなければならない。
その時を、今はまだ先送りにするしかないと、リボーンは小さく落胆した。

【運命には、抗えない。
否、運命に抗う者に待つのは破滅だ。
彼もまた、絶望の淵で抗おうとした。
たったひとつの行き違いで、運命に翻弄され最愛の人の手で破滅に追い込まれたあなたが、あまりにそれは惨めで、あなたの身体が動かなくなるまで、何も出来ずただただ嗚咽を堪えていた。
汚い大人達の、運命に弄ばれた。
それでもあなたは、最期まで抗おうとした。

その身を焦がして、訴え続けた。
あなたを見捨てた者達に報復しよう。
大丈夫。私のこの知識で、あなたの運命に報いる。

沈黙に耐えた者が勝ちだ。私は墓場まで持っていく覚悟だ。君はどうだ。おしゃぶりの運命に選ばれし者よ……】

バースデー

放課後のことだ。

紫乃は、気分転換と言って応接室を抜け出し校庭を歩いていた。澄んだ空を見上げていると、ほんの少しだけ落ち着いた。校庭の芝生を踏みしめて、懐かしい景色を思い出していた。

「伊波」

彼女のその名前を呼ぶ人間はここでは数限られる。

ここ最近はやけに絡んでくる男の顔を思い浮かべた。紫乃が振り返ると案の定、クラスメイトの山本武がいた。

「あまり校内で関わると風紀の鬼がすっ飛んでくるぞ」

多少大袈裟に脅してみたが、ヘラヘラと笑って紫乃に近づいてくる。この脳が野球玉の男には紫乃の脅し文句はスリ傷程度のようだ。

仕方なく手短に話を聞いた。

「実はな、ツナんとこの小僧の誕生会をやるんだよ。伊波も来ねえか？」

「……私が？」

「ああ。小僧も喜ぶと思うぜ！」

「君は何もわかっていない」

その棘の刺す台詞を吐き捨て、暗い影がかかる自身の顔を紫乃は逸らす。

「んだよ、伊波、何がわかってねえんだよ」

「君はバカのひとつ覚えみたいに野球だけやっていればいいだろ。何故私に構う。体育祭でも言ったはずだ。いい加減にしてほしい、君と関わるとまた私は惨めな気持ちに……」

雲雀恭弥をダシにして、彼にこちらの警告を示したが、当分は大丈夫だと踏んでもこの男が関わると事がどうなるかはわかったものではない。できる限り今の彼とは距離を置いておきたいのだ。

「伊波、怒るぞ」
「っ……」
咄嗟に腕を掴まれ何かと顔を上げれば、割と真剣な顔つきの山本武と視線が絡み合う。続けようとした言葉は喉奥の辺りで詰まる。
「俺は、伊波みてーに頭がいいわけでもねえ、お前の気持ちだってロクにわかってねえかもしれねえよ。でもな、自分のことを惨めだなんて言う奴は俺よりバカだ。伊波と仲良くしたいって奴をバカにしてるみてえだろ」
なんだそれ、とバカの理屈に説教された気分はそこそこいいものではない。紫乃は、真剣な眼差しの彼の目をしばらく見つめた。殺し屋として秀でた才能を潜める男のそれとはあまりにも思えない、純粋でまっすぐな眼差しは紫乃を見据えていた。
「……その、話したくないこともあるんなら、それは別にいいんだ。ただよ、もう少し向き合ってくんねえか？　惨めとか言われちゃ、俺だって……」
そこまで言うと、山本武は視線を彼女より下にずらして口籠る。
彼の言葉の続きを待たずして、紫乃はかれこれ１０分も話し込んでいたことを、山本武に引っ張られる腕の時計の文字盤が指す針を確認して知った。このまま戻るのが遅れれば雲雀恭弥が探しに来るかもしれない。見つかれば最悪山本武にまで危害が及ぶ。
「……悪い。もう行かないと。どの道君が言う誕生会には行けそうにない。雲雀に目をつけられるからな」
それとなく、山本武に警告しておく。紫乃なりの気遣いのつもりだった。
けれど、その余計な一言は、彼には地雷でしかない。
「またヒバリなのかよ……」
「山本……？」
気づけば、小さく抵抗されるくらいに彼女の腕を掴んでいた。あま

りの痛みに彼女の表情が歪んでいた。
彼女にはすぐに謝ったが、不信感を抱いてしまっただろうか……。
初めて彼女に自分の名前を呼ばれたのが、こんなに複雑なものになるなんて、思いもしなかった。近くにあった校舎の壁に、このやるせない気持ちをとにかくぶつけてやりたかった。

「あー、くそっ。なんでこうなっちまうかなあ……」

その後の誕生会でも、山本武がどこか上の空でいるのを、沢田綱吉は気にかけつつも、そっとしておくことにした。

【十月十三日
あのイタリアの殺し屋のバースデーパーティーに誘われた。
いい気なものだ。君達は。今はまだ何も知らない。
あのニヒルな笑みを浮かべて、君が今思うことは何だ?】

ほんの些細なトラウマ

【十月十七日
　本日、香港から弱冠五歳の殺し屋がやって来た。
　やはりビジュアルのパンチは強烈だな。校内清掃時間に笹川京子にお礼を言われているのを目撃した。あの人間爆弾の威力に巻き込まれるのは勘弁なので、応接室に避難して屋上での経過を観察していた。ちなみに花火を鑑賞するならこれを言っておかなければならない。たーまやー。
　そして風紀委員がすっ飛んでこなかったのは、私の影のフォローのお陰だぞ。感謝しろよ。
　また沢田綱吉の周りが賑わしいことになる、そんなことを傍観者ながらにぼんやりと感じていた。】

　休日の朝にコンビニ飯で済まそうと、１０時を過ぎた頃に適当な格好で最寄りのコンビニを目指していたところ、面倒な奴に出くわしてしまった。

「はひっ！　あなた、いつぞやのスーパークールビューティーガールじゃありませんか！」
　三浦ハルだ。休日の朝に偶然出会ってしまった相手としては、あの男と並んで非常に面倒なテンションだ。
　時代劇か欧米かよく掴めない三浦ハルのテンションに若干引き気味で、この場を切り抜ける隙を模索する。それにしても一人でよく喋る女だな。
「はひっ、ご挨拶が遅れてました！　未来のツナさんの妻候補の三浦ハルと申します。いつも主人がお世話になっております」
　知ってる知ってる。あの絶対的ヒロインを出し抜き沢田綱吉の嫁

の座を掴めるかまでは紫乃の知ったことではないが、君に習うならファイトだ、なんて適当な相槌でかわそうとするものの、三浦ハルの朝イチのガッツも半端なものではない。

「いつもお世話になっているツナさんの同級生の方と、一度女同士でガールズトークしてみたいと思ってたんです！　今からツナさんの家に行くんですがご一緒にどうですか？」

「いや……」

コンビニに行って家に引きこもりたい紫乃に、三浦ハルの怒涛のお誘いが気だるい時の頭に障り目を回す。

言ってもそこまで世話をする間柄でもなく、紫乃は一方的に標的にさせてもらっている。

それに心配しなくても、もうすぐスイーツやらハル感謝デーを語り合える良き女友達と出会えるのだからもう少し我慢してほしいところである。

「はひっ！　もうこんな時間です！　グズグズしないで行きましょう紫乃さん!!!」

なんだかんだ三浦ハルのハイテンションにドン引きする紫乃は、彼女に腕を引っ張られそのまま少し先にある沢田家の敷居を無理やりに潜らされるのであった。

「子供をいじめちゃダメだってなんでわからないんですか!!」

沢田家の二階に上がると、早速三浦ハルが割り込んでいき話がややこしくなっている。帰りたい。どうやら沢田家の母はこの日は留守にしているようだ。帰りたい。紫乃は部屋の前でかかしのように固まっていた。

「伊波さん！」

このドタバタの中でも三浦ハルの後ろに隠れていた紫乃に気づき、沢田綱吉が声を上げた。紫乃の帰りたい衝動がマックスになる頃のことである。紫乃は反応に困り、思わず身体が先に踵を返そうとした。

「……やっぱり帰る。邪魔したな」
そそくさと逃げようとする紫乃を、咄嗟に腕を掴んで引き止めたのは山本武であった。
「まーまー、あがってけよ」
片手にはランボをあやし、朗らかに笑う山本武を見て、変わりないと紫乃は思った。この間のことは、獄寺隼人の強引な誘いの後で少し気性が荒かったようだと彼女はそう結論づけた。
「てめえ、十代目の家だぞここは！」
「そうだよ、伊波さんもせっかくだし、ゆっくりしていってよ」
「ぐっ……十代目がそう仰るのでしたら異論はありません……」
沢田綱吉が歓迎しているので、獄寺隼人もそれ以上は追及せず押し黙る。彼女の退路は絶たれた。
こうして沢田家に歓迎された紫乃は、ついでに彼らの美術の補習に付き合わされ、粘土で蛇か鰻のようなものを作っている作業工程を見守ることにした。後に富士山だと獄寺隼人に突っ込まれた。マジか。
紫乃は三浦ハルと山本武の間に座るが、両端ともに居心地が悪い。片方はやけにハイテンションだし片方はやけに紫乃に構ってくる。上手く介入できると腹を括ることにしていたが、やっぱり引きこもりたい。
「そういや、今日は伊波眼鏡掛けてないのな、コンタクトか？」
「！」
山本武に言われて、やけに今日の視界がいいことに気づく。コンビニに行くだけだったので寝起きは眼鏡を掛けずに出かけていた。凡ミスだ。三浦ハルのハイテンションぶりにドン引きしている場合ではなかった。
ここで適当に頷いておけばよかったが、この男がしゃしゃり出てくる。
「いつもは伊達眼鏡掛けてんだろ」
「えっ!?　なんで!?」
こいつの余計な一言のお陰で回避ルートが閉ざされた。恨むぞ、アルコバレーノとその目つきの悪い目で赤ん坊を睨みつける。図々し

くも山本武の肩に収まり紫乃と距離を縮めようとしている。下心が見え見えだ。沢田綱吉が妙に食いつくので、それにも返しが困る。ほぼほぼ初対面の女子だというのに、彼の性格ならまして女子の紫乃にまだ心を開かないはずだ。否、彼女達と違い、クラスの陰キャラ担当である紫乃には話しやすいのかと紫乃は悲しくも納得した。どいつもこいつも陰キャラには優しいものだ。

「……この目つきの悪さで、色々誤解されるんだ。いつもは伊達眼鏡を掛けて、人と目を合わせるのを避けてる」

極力は視線を下げ、誰とも目を合わせずに淡々と質問に答えた。なるべく気負わせない声のイントネーションを探り、彼らの今までの空気を崩さないようにそれとなく言った。

「そんな……もったいないなあ……」

「……は？」

「あ、いや、その……伊波さんって教室でいつもおとなしくしているから、こうやって話したのも新鮮っていうか……教室で、横顔が綺麗な娘だって思ってたから、その、自分でそんなこと言っちゃうなんて、もったいないなあって……」

沢田綱吉……君は、ボンゴレ十代目になる男なんだな。

紫乃は、改めてその男の目を見た。

「……ありがとう」

「えっ！　俺そんな大したこと……」

「ちぇっ、ツナにいいとこ持っていかれたぜ」

「ツナさん！　ハルにも甘い言葉で囁いてください！」

「やだよそれは！」

部屋の中央のテーブルを囲んでワイワイとお祭り騒ぎのようになる。

沢田綱吉にさえ以前から密かに印象を持たれていたとは、やはり思うように上手くいかないなと紫乃は未熟さに呆れるのだった。

沢田綱吉らが盛り上がる端で、こんな時には一番に沢田綱吉に絡ん

でくる獄寺隼人は、珍しく黙り込んでいた。口に煙草を蒸し、伊波紫乃をしばらく観察していた。そんな彼の心中には、どこか引っかかるものがあった――。

紫乃がなるべく目立たずおとなしくしていたことで事はシナリオ通りに向かい、ランボとイーピンが喧嘩して筒子時限超爆が発動した。リボーンの機転で爆発は未来まで持ち越され、大人イーピンが現れた。未来で彼女のそばにいた者が不憫だな。恐らく幼馴染みの縁で大人ランボだろう。可哀想な男である。

まさかの女の子だったとは思っていなかった数名がショックを受けている。なんかそれもズレてるぞ、とあえて言わないのが傍観者である。

この流れだとまもなく筒子時限超爆の封印が解かれると踏んで、こっそりと彼らには見つからず部屋を離れようとする。10年後の威力を想定するだけで彼女の危険信号が警告している。特に10年後イーピンにこの時関わらなければ問題ないと踏んでいたので、ここまで経過観察していた。もう長居する意味もないので退避しようとするが、紫乃は誰かに腕を引っ張られた。

――その直後、筒子時限超爆が爆発した。

「――っと、危機一髪だな、ったく獄寺いきなり花火で脅かすなよなー」

「俺じゃねえよ！」

部屋に充満する黒煙が少し晴れた頃に、むくりと上半身を起こした山本武が、獄寺隼人にそんな小言を言った。獄寺隼人はすかさず否定するが、今の彼はそれより自分が咄嗟に庇った女子を見下ろす。

「わり……咄嗟で上手くかわしきれなかった……」

咳き込んでいる紫乃に声をかけ、無事かと確認してみる。
しかし、紫乃を庇った山本武の方が明らかにその影響を受けていた。服がボロボロに破け、紫乃を庇った分煙で汚れていた。

ふと、紫乃を庇った彼の右腕の皮膚を引き裂く大きな傷を見て、息が詰まった。痛々しい火傷の傷だ。

「――……んで、なんで、庇った……」
「伊波……？」
俯いて、微かな声を震わせる紫乃に、山本武が声をかける。しかし、傷を見て動揺しているのか、彼女の前髪の下から見える顔は酷く青ざめて怯えているようだった。
「私を、庇って、野球ができなくなればどうするんだ……こんなバカなこと、二度とやらないでくれ……」
同じようなことをそれから何度も繰り返す彼女に、ここまで心配させてしまったのかとたじたじになる山本武だが、これくらい大丈夫だと持ち前の明るさで紫乃を宥めることで時間をかけて彼女を落ち着かせた。後にまた今度も泣くほど染みる消毒液を彼女にたっぷり塗りこまれたのは少し切ない思い出だ。

【十月十八日
思いがけず三浦ハルと遭遇、沢田綱吉の家で経過観察するに至る。
自分の未熟さを痛感する。山本武を負傷させてしまう。私を庇った時に追わせてしまった傷だ。
剣豪として未来のボンゴレを支えていく彼に、その傷がハンデとなることがあれば、限られた時間でどう償えばいいのだろう。あの時は酷く動揺を見せてしまった。山本武に慰められるこんな自分が、惨めだった。そんな本音を彼に言えば、またあの時のような真剣な眼差し

で、こんな自分を真剣に怒ってくれるのだろうか。】

筒子時限超爆後の二人の会話を見守っていた沢田綱吉は、「十代目十代目」と脇で自分を呼んでいる獄寺隼人に何かとそっと耳を寄せた。

「山本って、まさかあの女こと好きなんスか?」

「獄寺君今更ーーー!?」

獄寺隼人の鈍いにも程があるその質問に、沢田綱吉の本領が炸裂した。

経過観察報告

【経過報告。

しばらく沢田綱吉と、その周辺には関与していない。

唯一、あの後の山本武の火傷の具合が心配になり、御法度であることは重々承知だが、雲雀恭弥の目を盗みあの河原の橋の下に呼び出して傷の具合を看ていた。山本武は部活が終われば約束通り来てくれた。

火傷は痕が残るかもしれないと息が詰まる思いでいたが、私の心配をよそに思いのほか回復は良好だった。一週間で調子も戻り、グラウンドの練習で女子達が歓喜に喚くほど活躍目覚しくなる。もう少しで痕も目立たなくなるだろう。

それから学校でも話しかけられることが数回あったが、山本武に関わることはなくなった。

私が山本武の怪我の具合に一喜一憂している間にも、沢田綱吉の方は上手くやっていた。休日に笹川京子と三浦ハルが対面し、イーピンを含めた三人が仲良くなった。

その日風紀委員会に連絡が入り、商店街にある巷で人気の製菓店『ラ・ナミモリーヌ』が襲撃されたようだ。並盛で騒がれたが結局あの赤ん坊が手を回して揉み消しにした。世の中には知らない方が幸せなこともある。何も知らずその晩に体重が増えて落ち込んでいる彼女達は幸せな方だ。

余談だが、雲雀恭弥がラ・ナミモリーヌから店のケーキを持って帰ってきた。この男に洋菓子とかミスマッチだろとは言わない。黙っているのがプロの傍観者だ。

奴はモンブランで、私はザッハトルテをいただいた。私の煎れた和茶でいただいたが、意外と相性のいい組み合わせだ。色々あったが疲れた身体に嬉しい誤算である。

浮かれているのではない。棚から牡丹餅があったことも一字一句詳細に書いておく、こんなことも記録に残しておくのがプロの傍観者である。

またある日は、並盛で急激に増えた窃盗詐欺の犯罪グループの三人が捕まる急展開があった。ラ・ナミモリーヌ襲撃から一ヶ月あまりのことだ。

しかし、彼らを交番に突き出したヒーローの男が裸だったため、公然猥褻罪に当たるとして逮捕された。元も子もない。あの赤ん坊も大目に見てすぐに釈放されただろうが……。

沢田綱吉の周りは日に日に騒がしくなっているようだな。

他方で私は応接室で雲雀恭弥のお茶出し担当だ。熱いのもぬるいのも濃いのも薄いのも気に食わないと愚痴愚痴と文句ばかり言う。そろそろ毒を盛ろうかと本気で考えている。

十二月に入り、登校する道中に沢田綱吉の家の辺りが黒服の屈強な男達で賑わう光景を朝から発見。

恐らくこの時期だ。跳ね馬が来る。

私と奴では、相性が悪い。

遠回りをして学校に登校した。

その翌日にも、悪徳金融で有名な桃巨会が何者かの鎮圧により壊滅にまで追い込まれた。

察するに跳ね馬と彼の元家庭教師の仕業だろう。また派手に暴れたらしい。

もともと雲雀恭弥にも目をつけられていた組織だが、獲物を横取り

されて憤慨しているかと思えば雑魚を相手にする手間が省けたと喜んでいた。なんだかな。

跳ね馬の登場で、イベントは多くなる。
しばらくは、膠着状態が続きそうだ。
どれほど日本に滞在するつもりなのか知らないが、君は私が一番会いたくない人物なんだ。私の計画を崩さないでくれ。君ならわかってくれるはずだ。】

彼女と花とリグレット

休日の朝に携帯が鳴ったので、着信相手の名前を確認して電話に出る。

滅多に鳴らないその電話の相手は、風紀委員の草壁哲矢であった。委員長が風邪を患って入院されたので委員長たっての希望で見舞いに来いとの伝言だった。

電話の相手の声は至って普通だったが、風邪で入院するような繊細な坊ちゃん気質でもないだろお前は、なんて無粋な発言は飲み込んだ。草壁哲矢は特に何も思うところはないのだろうか？　その胸中が気になるところだが、紫乃は一言了承してから電話を切る。

行く気にはならないが、行かなければ行かなければで後々面倒になる気がした。

紫乃には記憶にある沢田綱吉の入院時期と重なることを思い出し、不安材料はあるが時間をずらして行けば問題ないと支度をして家を出た。

花屋で時間調整をしたので最寄停留所でバスに乗って並盛中央病院の正面入口を潜る。大きな受付で雲雀恭弥の名前を出した途端、受付のナース達が明らかに挙動不審だ。そういえば病院ぐるみで質が悪いんだったな。

そんなことを思い出しながら、受付で案内された病室にやって来た。雲雀恭弥の見舞人ということで受付でもこれでもかと丁重に対応されたが、紫乃はそこまで求めてもいないので、こうして一人で病室のドアを叩いた。

沢田綱吉の見舞いで並盛中央病院まで来たが、人相の悪い連れのお陰であえなく病院から追放されてしまったキャバッローネの跳ね馬

ことディーノは、部下達を先に行かせ自分だけ残った。まだ沢田綱吉が心配だったのでなんとか受付で交渉してみたが、コロコロと変わる沢田綱吉の病室に結局二度目の見舞いに行けることはなく受付を後にした。

落ち込んで病院内を行き交う通行人の人々に丁寧にぶつかりながら正面入口までなんとか行き着くが、この時間帯は出入りも多くふたつの自動開閉扉が忙しなく働いていた。

ディーノは前の男性に続いて出口を潜ろうとするが、もうひとつの病院内へと流れる人の波の中に花束を抱いた少女と一瞬すれ違うと、ふわりと何か懐かしい感じを、胸の奥に抱く。

並盛中の制服に反応したのだろうか？　そのすれ違う少女が大事に抱えていた花束に、ディーノは引き出しの奥の思い出が過った。

あの娘が大好きだと言っていた花だ。

ディーノがすぐに振り返ると、そこには変わらず出入りの人々でごった返す正面玄関があった――――。

【誰にも一生の中で思い出のひとつやふたつはあるはずだ。
その人にとって、どんな思い出であれ。
私にもある。この花だ。
彼との思い出だ。宝物で、今ではもう悲しい思い出。
春には一面に咲く花の中を一緒に駆け回った。

あの頃には、もう戻れないのだな。】

夕闇が室内に落ち始めると、彼女が飾っていった見舞いの花達は、まるで彼女の瞳の色にも似た毒々しい色に染まりかかる。空の夕闇がそうさせているのだが、熟す果実のような花の艶と毒々しさは、皮を剥いて果肉を潰してみたい彼女そのものだ。

香りはなく、小さな蕾を咲かせる花は、あの瞳のように、独特な印象を残す。

雲雀恭弥は、彼女の部屋にも同じ花が飾ってあるのを知っている。まるで君そのものだ、なんて彼は花に語りかけてみる。

当然のように花は雲雀恭弥を無視して沈黙する。それさえ彼女に似て冷めていて、儚く色づいて、オリエンタルなその花達を見つめるほどに惹き込まれた。

はらりと、花は彼女が流す涙を表現するように散っていった。

大晦日の報告

【十二月十七日

沢田綱吉退院後、並盛山の秘境で遭難があった。

彼が退院して間もないというのに、あの元家庭教師の男にまんまとのせられて無茶をやる男だ。第一、彼の監督不足で沢田綱吉が怪我をしたというのにマフィア根性というものは容赦ない。

あの赤ん坊に鍛えられたら嫌でもああなるものなのか。

沢田綱吉の将来が不安視される一端だった。】

大晦日の夜は、今年最後の並盛の町を散歩していた。

あと数時間で、一年が終わろうとしている。

ここまで来て、彼も私も、色々あったな、彼の周りは仲間達で明るくなった。学校でも笑顔が増えた、嫌いな授業をサボらなかった、ダメツナでも友達が応援してくれるから総大将の大役から逃げなかった。

以前の彼とは圧倒的に違った。ダメツナのままでも死ぬ気で一度やり遂げる根性を知ったんだ。これからはもっと伸びしろがある。

そんなダメツナの成長を、彼女もこの一年見守ってきた。最初こそ、こんなにもはなから期待はしていなかった。しかし、死ぬ間際の後悔が彼の原動力となり、彼を突き動かす様を誰よりも見てきて、彼女も心揺らいだ。彼を見て、あの日をまだ後悔しているだろうか。

河原へとやって来る。大晦日の晩は皆家に籠って家族団欒しているのか、やはり人の気配はない。ほとんど日も暮れ、東の濃紺色の空に一番星の明かりが明滅している。

紫乃は適当なところまで河原沿いを歩き、並盛の静寂に落ちた町並

みを眺めた。綺麗な町だ。雲雀恭弥が誇りをかけてこの景色を守ろうとするのもわかる気がした。
静かな町に、家庭の明かりが幾つも灯されている。紫乃は行く宛もない孤児のようにそのぼやけた灯火を眺めた。

河川敷の上に立ち竦む紫乃の足元に、ボールが転がってくる。
「すんません、ボール投げてください」
紫乃にそう言ってグローブの平手を見せる人物の人影を、紫乃は遠くから睨めつける。
「……態となのか？」
「ハハッ、バレちまったか」
あっけらかんとした山本武の反応には困るものだ。グローブを高く上げ河川敷から紫乃に大きく手を振っていた。この男のお節介精神にこの日も悩まされるのは勘弁だったのだが……。
「まさか大晦日の晩に伊波と会えるとはなー」
「今日くらいは君も自主練してないだろうと思って来たんだが、外したようだな。残念だよ。全く君は真面目なのかバカなのか……」
「へへッ、言ってくれんじゃねーの」
ボロクソに言ってやったが、紫乃の皮肉は些細な抵抗にもならないようだ。少しは獄寺隼人を見習わなければと紫乃は思った。未来で、こんな調子の彼をあそこまでブチギレさせた自称右腕はなかなかの腕なのだと少し感心するのだった。
「なあ、一年の最後なんだ。付き合ってくんねえか？」
何度目の誘いだろう。
山本武にグローブを見せられた紫乃は、これまで何度彼の誘いを断ってきたんだと思い返してみた。また同じことを自分は繰り返す。
同じことを……。
「……わかった」

「え、マジで？　ハハッ、やっと伊波にＯＫしてもらえたのな」
「勘違いするな。これ切りだし、君には詫びを返さねばならない」
何度自分は断り続けて、山本武を危険に晒しただろう。
そう考えると、これ切りで終わらせようという気にもなる。これ切りだ。それでこの男との関係を清算する。
そう気合いを入れて山本武からグローブを受け取った。近くで見るとよく使い古したグローブだ。どれほど山本武が野球に向き合ってきたかわかる代物だった。
彼らの脇では並盛川の水面がゆるりと流れている。薄暗くなった辺りは寒さがじんわりと漂う。
防寒に動きづらいジャンパーを着込んだ紫乃は、なれない構えで山本武のボールを待つ。

「――っしゃ！」
紫乃が反応する頃には、彼女の頬すれすれを、山本武の投げた球が掠った。からりと木枯らしが鳴いた。
彼の悪い癖だ。
それは紫乃も重々理解していた。野球に一生懸命な彼だからつい出てしまう癖だ。投げた直後に山本武もはたと気づいたのか呆然と立ち尽す紫乃に近づいて声をかけようとした。

「――ふ、ふざけるなこの野球バカッ!!」
「痛ッ！」
しかし、既に遅い。そのグローブを紫乃は山本武の顔面に投げつけた。直で山本武はそれを受け止めた。あの豪速球が紫乃の顔を直撃していたらと考えると生きた心地がしない。
「ててっ……容赦ねえのな伊波……」
「お前だろ」
「それもそうだな」
ハハハッとこんな時も軽く笑い飛ばしている。紫乃のふつと湧いた殺意には気がついていない。

まあ……この図太い神経が、彼のいいところなのだ。今は、彼女だけが知っている。未来のボンゴレに、彼の笑顔がどれほど重要な意味を持つかを。

もう一回だけと頼み込む山本武を蹴って、紫乃は一人河原を後にしようとする。

すると、ピタリと彼女は足を止め、沈黙の中で呟いた。

「……あと二つ」

「ん？」

紫乃が何かを言ったのを、すっかりと日も落ちた暗い視界を目を凝らしてそのシルエットを見つめていた。夜目に慣らしていると、不意打ちに何かを言われたのに山本武はそこから素っ頓狂な顔で紫乃に聞き返した。

その男から表情を隠すように、紫乃は振り返らずに言った。

「あと二つ、君に何かある時はできるだけ君の力になろう」

山本武には、彼女のその言葉の深い意味までは汲み取れていなかった。

「頼もしいのなっ」

「じゃあな」

「ああ」

これで、お別れだ。

罪悪感を胸に引きずる紫乃は、山本武の視界に隠れるところで不意に暗い面持ちだった。彼女の思うところは、周辺の闇に溶け込んで誰の目にも映らなければいい。そんな風に投げやりな寂しさも、俯いて自分の中で誤魔化した。

「――――伊波！」

ハッと顔を上げると、まだあの河川敷から山本武が手を振っていた。紫乃が咄嗟に振り返ると、暗がりに浮かぶほのかな月明かりは、

二人を見守るように照らしている。

「……来年も、頼むぜ、こんな感じで」

「……ああ、来年も、よろしく」

お互いに、何かを言いたそうにしているのを感じていた。

表面上は、お互いに何も気づかないフリをして、大晦日のこの日だけは特別な挨拶を交わした。

無理だった、と紫乃は帰路を歩く途中にこぼした。

清算すると言ったが、彼の人柄の良い笑顔を前にして、そんなことは言えなくなった。すっかり毒されてしまったなと、その後はゆっくり家路に着いた。

一年後の同じ日にも、彼女とこうしていられるだろうか。

彼らしくもなく、その胸中は不安を予期していた。

黄昏と安らかな旋律を

【十二月三十一日　大晦日

大晦日は、山本武と来年の挨拶を交わして別れた。

来年は、君達と今以上に関わることは避けられないかもしれない。

覚悟はしている。後悔は捨てる。

一月一日　元旦

あけましておめでとう。

元旦の挨拶といえば、やはりこの一言に尽きる。

昨晩、山本武と会った河原で、この日はボンゴレ達が正月合戦をやっていることだ。無論私は行かない。あんなところ、地雷が多すぎる。今日くらい私が家に引きこもることに誰が文句を言えるのだろうか。

……なんて小言を言いながら新年の朝からコンビニ飯ですまそうとしていたら、雲雀恭弥が新年の挨拶と言いながらこの新年明けから家の窓から侵入してきた。くそったれ。そして部屋でゴロゴロしていた私は渋々茶出しに出向くことになった。新年一発目の茶はこれでもかと渋くしてやった。彼の好みのようだった。くそったれ。】

新年を迎えた暦はあっという間に暮れ、新学期が始まっていた。

数回目の登校の朝、紫乃は沢田家の母に元気に挨拶をする獄寺隼人を見た。沢田綱吉は珍しく先に出たのか。恐らく彼の後を追いかけに向かう。紫乃は歩くペースは変わらず、沢田家の前を通り過ぎる。

「あら、おはようございます」

「……おはようございます」

玄関前で獄寺隼人を見送っていた沢田綱吉の母親に、思いがけず挨拶をされてしまった。彼女の女子制服を見て思わず声をかけてきた

のだろう。世話焼き体質なのも仕方ないものだ。無難に紫乃はオウム返しのように挨拶だけを返す。
「あなたも並盛中学校の学生さん？　息子と同じねえ」
「そうですか」
「息子とも学校で会っているのかしらね～、頼りない子だけど、もし見かけたらよろしくね」
話を合わせて沢田奈々とその後別れると、通学路を歩き始める。ほんの少し早足になる。動揺しているのか。まさか。しかし沢田綱吉の母親に声をかけられるとは。
途中、通学路で動物達の餌にされる沢田綱吉と獄寺隼人を見かけたが無視して紫乃は目の前の道をひたすら突っ切る。

【彼女の息子は、頼りなくなんかない。
この一年、君の小さな成長を見てきた私だから言えることがある。
君は決してヒーローになれるような男ではない。
君があまりに優しすぎるからだ。
君の周りにいる人達に振り回されても、一緒に笑っている君は、お人好しで単純な男だ。
そんなダメツナの頃から変わらない君だから、信じて託せるのかもしれない。
君の優しさで、未来を、導いてほしい。
私がともに歩むことのない未来を。】

放課後の並盛には夕暮れが差し掛かっていた。
グラウンドの部活も解散して、沢田家に向かう山本武を応接室で見送った紫乃も一人の帰り道を歩いていた。今朝に比べてすっかり落ち着いた足取りで並盛公園に差し掛かると、子供達も烏の声を聞いて解散した頃、公園のブランコでボーッとしている獄寺隼人を見つけ

た。

獄寺隼人は、公園脇のブランコに跨って一人煙草を寂しそうに蒸していた。

ああ、アイツの強化プログラムかと当たりをつけると、紫乃はしばらくその様子を電柱の影で見守ることにした。

酷く落ち込んでいるようだが、紫乃から声はかけない。傍観者らしく彼をそっと見守ることで自分の立場を自覚する。できることなら、最後まで紫乃は傍からこうして見守っていたいと願う。

彼女がそっと見守る他方で、偶然通りかかった沢田奈々が獄寺隼人を元気づける場面だ。やはり自分にはこのポジションがお似合いだ。もう彼なら大丈夫だとそう確信して紫乃は帰路に着いた。

……結局、彼女にはこの道しか残されていないのだ。

沢田奈々に元気づけられ、先に沢田家へと駆け出していこうとしていた獄寺隼人は、視界の端にかすった人物に二度振り返った。

――伊波紫乃。クラスメイトくらいに獄寺隼人は認知していたが、美術の補習課題を沢田家で集まってやった時以来やけに印象に残っている女子だ。

というのも、あの時彼女の目を間近で見て、どこか既視感のようなものを感じていたからだ。さらにはあの山本武が密かに好意を持っているときた。なんであんな地味な女なんだ？　と不思議にも思うが、将来有望な右腕である自分に下っ端の男の趣味などわかるはずもないかと浅く納得する。

まるで以前に出会ったような印象を深く植えつけていった、あの女のことを獄寺隼人はしばらく考えていたが、今は先に自身が慕う人のもとへ向かおうと、すぐに踵を返していった。

【彼は憶えているだろうか、昔のことを。
私は、よく憶えているよ。
父親のメンツのためにピアノの発表会を頑張っていた君を、建前ばかりの社会の中で子供ながら肩身の狭い思いをしていた君を、君の母親をまだどこかで求めているのを、あの頃の似ている君の背中を――。
今も母親の面影を探しているのだろうか？
昔聴いたことがある君のピアノの音色は、とても繊細で心地良く感じた。君が母親に教わった音色を、いつの日かまた聴いてみたいなんて思うんだ。】

デタラメに降る雨が景色を濡らした

【一月二十五日
授業参観日。学校行事は堂々と同じ土俵で標的を狙える傍観者には数少ない機会だ。
滞りなく授業参観がメチャクチャになって一時間が終わった。ここで一番の被害者は担当してしまった教師だろう。お見苦しいものを見せてしまった。
私はあくまで傍観者だ。傍観者らしく窓際定位置で一部始終を見届けた。山勘で当て上機嫌だった山本武に途中話しかけられることも数回、だが私のようにプロの傍観者なら問題ない。蚊に刺される程度の鬱陶しさだ。当然のように全て無視してやった。

一月三十日
体育は男子はサッカーをしていた。山本武はサッカーでも大活躍だ。クラスの女子が沸いていた。
私は当然のこと沢田綱吉の観察にこの日も忙しなく活動している。サッカーボールを顔面キャッチした沢田綱吉は一時グラウンドを離れ校庭に消えた。
そろそろ彼が現れる頃だろうか。ランキングフゥ太。
彼の力は脅威だ。跳ね馬と同様に私の計画を崩す恐れがある。今はしばらく様子を見る。タイミングが合えばその時は彼の能力を利用させてもらう。】

「伊波～！」
帰りに山本武に見つかった。隣には獄寺隼人もいた。なんだかん

だ仲睦まじい二人である。紫乃は山本武の方を睨み返した。
「ツナの家に面白い奴が来てるって言うから今から見に行くんだ。一緒に来ねえか？」
「そうか。行かない」
「そもそもてめえらと一緒に行く義理はねーんだよ！」
獄寺隼人が吠えている。だから私は行かないと言っているだろう話を聞けと言いたい紫乃だった。しかし余計な一言を言わないのがプロ根性というものである。

「よお、山本に獄寺」
住宅街の道のど真ん中で話が拗れていると、誰かから声をかけられた。彼らが振り向くところに、大勢の部下を引き連れた跳ね馬ディーノがいた。
各々に反応は違い、山本武は爽やかに笑顔を返し、獄寺隼人はそのキザなイタリア男を睨みつけている。
「こんちわ、ディーノさん」
「げっ、跳ね馬……んでてめえがッ」
「落ち着けよスモーキングボム、俺は敵アジトの情報を得るためにツナの家にいるランキングフゥ太に用があったんだ」
「俺らも今からツナんとこの面白い小僧を見に行くとこなんスよ」
ランキングフゥ太に会った帰りだったのか、紫乃はすかさず山本武の背に隠れていたが、しくじったと奥歯を噛み締めていた。

「ん？　そいつはどうしたんだ？」
「伊波？」
ディーノは、山本武の後ろに隠れる少女の姿に気づく。彼の声にピクリと紫乃の身体が反応した。
一切彼らと目を合わせることなく、重い前髪の下の顔色は窺えないが、山本武だけは自分の背中に隠れる彼女の身体が、小刻みに震えていたことを知っていた。
「あー、たぶんディーノさん達にビビってるんですよ。そんな大勢で

来られたらびっくりしますし」
「マジかよ、そいつは参ったぜ。まあ、こんなナリだしな。怖がらせちまったならすまない。んじゃ、邪魔者はそろそろ消えるぜ」
「そんじゃまた」
「二度と来んじゃねえ！」
男達の集団がノコノコと去っていく。今回だけはこの二人に救われたかもしれない。紫乃の心臓はまだ五月蝿く暴れていた。
すっかり気配も消えた頃、山本武がゆっくりと紫乃の方を振り返る。
「……行ったぜ。にしても、伊波にも結構可愛いとこあるんだな……伊波？」
自分の背に隠れていたはずの女子が、そこに忽然といなくなっていた。常に人が良い笑顔を浮かべていた山本武も思わず真顔になり、周囲を見渡して彼女の姿を探す。
「さっきそこの角曲がって行ったぜ」
「マジかよ……」
獄寺隼人は、ディーノ達が去った直後フラフラと覚束無い足取りで角を曲がっていくその女を見ていた。別に止めはしなかった。隣にいる男が肩を落としているが、気を抜いているからだと山本武に言ってやった。
獄寺隼人は確信犯だったが、そいつがまたいつものように笑い飛ばすと思いきや、珍しく山本武が機嫌を損ねていたので獄寺隼人にも少し意外だった。その後、二人は沢田綱吉の家路を急いだ。

雨……。

フラフラと帰り道を歩いていた紫乃は、夕立頃に降る雨粒に天を仰いだ。ぐずついた空だった。まるで空が彼女の代わりに涙を流して

いるようだ。
雨が降るとランキングはデタラメになってしまう――。
今頃、沢田綱吉の方はどうしているだろう。
彼女がいなくても、この世界は廻るのだ。
彼女の頬を伝う雨が、小さな水溜まりの上を跳ねた。

バレンタインデー　1

【二月十四日
　この日は学校全体が妙に浮き足立っていた。校内のあちこちで甘ったるい匂いが鼻につく。
　そう、本日はバレンタインだ。】

　放課後の教室は、まるで異様な騒々しさを見せていた。
　紫乃のクラスには、あの獄寺隼人と山本武のツートップが在籍しているのだ。学年問わず彼らに密かに憧れる女子達が、これはチャンスだとばかりに手作りのチョコを持って教室に駆け込んでいる。二人の周りにはあっという間に人だかりができた。
　紫乃のクラスは軽く交通渋滞が起こる騒ぎとなっていた。モテない男子と二人にチョコをあげたい女子との間で壮絶な派閥が起きる。
　冷戦状態の中で誰かが、風紀委員がすっ飛んでくるぞ、の一言で先程までの教室は静まり返った。
　一体誰がそう言ったのか、教室内でしばらく憶測が飛んだ。
　今朝からバレンタインで浮かれだった校内の空気には辟易していた。チョコなんかであんなに幸福感を満たせるとは幸せだな、と皮肉を言う紫乃である。
　特にバレンタインに難癖をつけるわけではない。愛が結ばれるなら素晴らしいことではないか。しかし、よそでやってくれそんなこと、誰も彼もがこの日に浮かれているわけではないのだ。

「伊波はチョコ渡す相手はいねえのか？」
　昼休みに廊下で山本武とすれ違う。紫乃が無視しようとすると、そんなことを聞いた。
　こんな日に開口一番にそんな話題なのか、うんざりだというように

このちゃらんぽらんな男に紫乃は言い返した。
「当たり前だろ」
「そうかよ。ちょっと期待してたんだけどな」
こんな日には仕方ない話題かもしれないが、紫乃にこの日特別チョコを渡す相手などいない。
彼女にも一応風紀委員のメンツがあるのだ。自ら風紀を乱す行為はしない。あの並盛風紀命とか言ってる男にみすみす咬み殺される浮かれポンチではないのだ。
それにこの男、こうは言っているが、今朝の部活の朝練から大勢の女子にグラウンドで囲まれていたのを紫乃は知っている。あれは嫌でも目立っていた。
「……なんでだ？」
「えっ？」
「君は十分な量のチョコを受け取っているだろう。どうしてまだ欲しがるんだ？」
「んー、いや……チョコっつーか、伊波から貰えたら嬉しいっつーかよ……」
女子からもう十分なチョコを貰っているだろうこの男が、まだ自分にチョコを頼んでくる思考が、紫乃にはイマイチわからなかった。こいつはこんなに甘党だったのか？　単に自分のリサーチ不足だろうかと、目前にいる山本武の存在など無視して色々と逡巡していた。
山本武は、照れくさいながら紫乃に小さな期待を込めて赤裸々に告白したのだが、彼女には微塵もこの時は伝わっていなかった。
「君にあげるチョコはない」
バッサリと気になる娘から切り捨てられた。山本武の心のショックは計り知れない。放課後はとても他の女子から好意を受け取る気にはなれなかった。この日は山本武のおこぼれを密かに期待していた悲壮な野球部員達も、手持ち無沙汰で部室にやって来た山本武に相当なダメージを受けた。放課後の野球部の活動は言わずもがなボロボロであった。

紫乃が応接室の敷居を潜ると、一番に目に飛び込んできたチョコの山に唖然とした。テーブルの上に収まりきらず床に転がっているのもある。

「またすごい数だな……」

「今年は委員長の下駄箱にこれだけのチョコが詰められていました」

「えっ」

紫乃はてっきり雲雀恭弥が今日一日で生徒達から無情にも没収した菓子を見せしめのようにそこに積んであるのかと思っていた。草壁哲矢のその言葉に目を丸くする。

こいつモテたのか!?　こんなキャラで!?　雲雀恭弥にこれだけの数の女子が秘め事に慕っているとは……なんて罪な男だ。雲雀恭弥……。

紫乃にはまるで理解し難いこの男の魅力だが、この日一番の衝撃であることに間違いない。ちなみにこの日沢田綱吉は義理チョコ0個だぞ。思考が岩の如く固まっていると、草壁哲矢に出させた茶を啜る雲雀恭弥が紫乃に言った。

「君からのチョコはないの？」

「は？」

ぼけーっとしていたのをようやく自覚して、しっかりしろと気を持ち直す。雲雀恭弥が何か戯れ言を言っていた。つーか、チョコ食べんのかい。

「へえ、そう、ないんだ」

なんか懐からチラチラと見えている。

雲雀恭弥が微笑んでいる時は大抵いいことではない。

紫乃はすかさずこう切り返した。

「……わ、忘れてきただけだ。取ってくる」

そう早口に、さっさと応接室を出ていく。
……ついさっきまで風紀のメンツがとか言っていた自分を殴ろう。
紫乃は思った。

バレンタインデー　2

紫乃は並盛中から最寄りにある商店街に来ていた。
雲雀恭弥の脅威から逃れ、安心するのも束の間だ。これから彼の満足するチョコを選出し持ち帰り献上しなければ無意味な報復に遭う。ふざけるなという話だ。商店街の入口にあったバレンタインブースで丁寧に包装された商品を吟味する。
ああ、すごく、めんどくさい。
バレンタインに異性にチョコを送ったことがない紫乃には至極無駄な時間であるように感じられた。

「紫乃さんじゃないですか！　アンビリバボーです！」
そんな運命的な出会い方はしていないだろ。三浦ハル。
またか……と紫乃はどこか諦めに似たものを感じていた。
しかし三浦ハルが何故商店街にいるのか。放課後は沢田家で彼らに振舞う手作りチョコを作っているはずだ。紫乃は疑問だったが、三浦ハルがあっけらかんと答える。
「ツナさんの家で手作りチョコを作っていたんですが、チョコが少し足りないようだったのでハルが買い足しに来たんです」
そんな地雷があっていいのか、紫乃は酷く落ち込んだ。そんなリアルな地雷は求めていないんだ。誰に文句を言えばいいと紫乃は静かな苛立ちを募らせた。
「紫乃さんも殿方にあげるチョコを買いに来たんですか？」
「ま、まあ……」
今度は三浦ハルに突っ込まれる。
そんな純粋なものではなくチョコよりも濃厚で植え付けてくるような強迫観念だったがな。
「ならこれから一緒に作りませんか!?」
三浦ハルの突拍子もない提案に紫乃の危険信号が警告している。このままでは危うく逃げ道を塞がれると紫乃は直感した。

「あ、いや、買えばいいし」
「そんなわけにはいきません！　青春の気持ちは自分で作ってこそ大切な相手に伝わるというのがハルの持論です！」
君の持論ほど確証のないものは他にないと紫乃は思うが、今日という日ほど恋する乙女に敵わない日はない。「というわけで板チョコを買い足してさっさと行きましょう！」と人の話を聞かない三浦ハルの暴走に再び振り回される紫乃であった。

その後、散々恋する乙女暴走機関車三浦ハルに振り回されて買い出しに付き合わされ、沢田綱吉の自宅までやって来てしまった。
今ならまだ引き返せると紫乃が隙を狙っていたが、「行きましょう紫乃さん」と三浦ハルにがっつり腕を捕まえられてしまった。ここまで来たらさっさと観念することにした。
「ただいまです～！」
「あっ、ハルちゃんおかえり！」
一足先に沢田家のリビングに戻った三浦ハルが、中にいた人物に買い出しの袋を両手にぶら下げて帰りを報告する。
中にいた人物は快く彼女を迎えていた。
しかし、彼女の隣にいた紫乃を見て、笹川京子は少し言葉を詰まらせているようだった。
「あ……」
「ツナさんのご学友の伊波紫乃さんです。買い出しの時に偶然お会いしたのでお誘いしてみました！」
三浦ハルと笹川京子がこの日は一緒にバレンタインチョコを作るのを紫乃も当然知っていた。
紫乃も笹川京子とは、あれ以来顔を合わせるのは避けていた。ここまで三浦ハルに引っ張られてきて、家庭科実習以来彼女と言葉を交わすことになる。
ここでヒロインに嫌われていたなら紫乃も帰りやすいと思った。
三浦ハルには申し訳ないが、やはり彼女達と自分の立場は違いすぎ

る。嫌われ役は慣れている。
「伊波さん……」
「はひっ！　もしかしてお二人は面識がありましたか？」
「……」
笹川京子がしばらく固まっているので、辺りは沈黙していた。仕方ない。紫乃から身を引こうと笹川京子から視線を外すが、彼女から咄嗟に腕を引かれた。

「伊波さんも、よかったら一緒にツナ君達へのバレンタインチョコ作ろうよ」
紫乃が振り向くと、笑顔で紫乃を歓迎する笹川京子。紫乃の腕を引き止める手は、また同じように拒絶されるかもしれないという恐怖で微かに震えている。そんな勇気を振り絞るヒロインの健気さを見ていると、紫乃は断りたくても断れない。
「……あの時は、君の親切を無下にしてしまって、すまないと思っている」
「ううん、そんな、私の方こそいつもお兄ちゃんにするみたいにお節介焼いちゃって、ごめんね。もっと伊波さんとお話ししてみたいなって思ってたんだ」
爽やかにヒロインはそう切り返す。さすがヒロインの器は並のものではない。あの兄を持ちながらここまでの器を備えるとは天性の器だろう。彼女こそ聖杯だ。
少し自分の捻くれた性格に厭き厭きする紫乃である。
「はひっ、はひっ？　お二人には何かディープな溝があったようですが、これにてハッピーエンドです！」
三浦ハルが最後に雑にまとめた。雑すぎるだろ。というかチョコを完成させる前に完結してしまっている。どうなんだこれは……。

「私は愛があればいいわよ。歓迎するわ」
紫乃達の間にぬるりと現れた長い髪の女……毒サソリビアンキだ。手にはこの世のものとは思えない物騒な品を混ぜている。チョコの

香りで異臭が誤魔化されているのか、彼女達に顔色の変化はない。
「さすがですビアンキさん！」
「あなたにも愛を伝えたい人がいるのね。いいわ、愛をぶち込んでやりなさい」
ビアンキの反応をしばらく窺っていた紫乃だが、向こうは紫乃より愛人へ渡す予定のチョコ作りに集中しているらしく、紫乃を特に気にはとめずリボーンにチョコの好みを聞くために二階へと上がっていった。しばらくは帰ってこないだろうと踏んで、そのまま三人で続きに取り掛かることにした。
そこに沢田家の母沢田奈々が様子を見に来た。
「あら、あなたこの間の、ツナのお友達だったのね」
紫乃の姿を見ると、まだ記憶に憶えていたのか、彼女にも分け隔てなく親切に接してくれた。
「ゆっくりしていってね」
「す、すみません……」
いきなりの訪問にも寛大な沢田綱吉の母に、紫乃もなんだか申し訳なくなり渋々と彼女達のバレンタインチョコ作りを手伝うことにした。

「紫乃さんはお持ち帰りなのでフォンデュにはできませんね。どうしましょうか……」
「生チョコにするのはどうかな？　生クリームで作れるよ」
「京子ちゃんグッドアイディアです！　紫乃さんはどうですか？」
「まあ……いいんじゃないか……」
チョコの話題で盛り上がる彼女達に正直出遅れている。紫乃は特にどれでもいい。もとより愛情など込める予定もないのだ。
しかしそんな紫乃の本音はよそに結局紫乃が作る分は生チョコに決定した。やれやれ、紫乃は先が思いやられると感じた。
各々がチョコ作りの作業に取り掛かる間にも、ガールズトークは止まらないようだ。紫乃はなるべく傍観していようとしたが、またもや三浦ハルに話題を振られた。

「紫乃さんはやっぱり山本さんにあげるチョコを作っているんですか？」
「えっ、そうなんだ？　私はてっきりヒバリさんにあげるんだと思ってたよ」
「はひっ！　あのデンジャラスヒューマンの方ですか!?　そういえば紫乃さんも風紀委員でしたよね!?」
　もとはどちらにもあげる予定ではない。どうして彼女達とチョコを作ることになってしまったのだろうか……。
　紫乃はもう考えることを諦めた。勝手にやってくれ。
「はひっ、紫乃さんモテモテじゃないですか！　羨ましいです～。もうこの際二人にあげるとびきりのチョコを作りましょう！」
「そうだね、ハルちゃんに賛成！」
「ちょ……勝手に決めるな！」
　傍観していたらしていたで話が違うじゃないか。どうして二人分も作る義理があるんだ。
「そもそも、バレンタインというのは欧米で男性から女性に贈る愛情表現だ。本来なら男の方から女性に花束を贈るべきだというのに、女から男にチョコを贈るなんて馬鹿げた話だ」
「ほへーっ、紫乃さん物知りです」
「外国ではそうなんだね」
　……少し喋りすぎただろうか。まあ彼女達は気にとめていないようだしいいか。紫乃はそれから黙々と生チョコ作りに勤しんでおいた。
　なんだかんだ初めて作るバレンタインチョコは、まずまずの出来になった。やることはきっちりとやる紫乃の性格は、結局二人分の生チョコのラッピングをすることとなった。彼女達からの視線が居た堪れない。

沢田綱吉の家を出て、紫乃はひとまず先に学校に戻った。
夕暮れが近づくが、紫乃が応接室の扉を叩くと、雲雀恭弥が応接室でおとなしく待っていた。半分眠たそうにしている。
「ん」
「随分と待たせたね。待ちくたびれたよ」
「言っておくけど味の保証はないからな」
その言葉を言い捨てて応接室を立ち去る。
彼女が終始不機嫌のまま帰った後、生チョコのラッピングに気づいて、雲雀恭弥はしばらく手をつけずにそれを愛おしく眺めていた。

その日は部活を早めに解散して帰路に着いたが、放課後は他にこれといってやることもなくなんだかんだ河原で野球の自主練をしていた。山本武は少し多めの素振りを終えて、日も暮れたし帰ろうかと草むらに放り投げたバッグを手に取ろうとした。
「ん……？」
スポーツバッグのポケットに、見慣れない袋があった。こんなの最初から入っていただろうか？　それを見ると、チョコレートだった。少し形が崩れていたが、その人物の性格がよくわかるような気がした。
ふと河原を見上げると、河原を去っていくシルエットを見つける。日頃無意識に目で追いかけているその背中を、彼は一発で当てていた。ここからでは彼が声をかけてもきっと無視されるだろう。彼女が置いていったチョコの袋を見下ろして、山本武は夕暮れが差す表情にふと満面の笑顔を浮かべた。
「へへっ、やったぜっ」
そんな彼の顔が容易に浮かぶと紫乃は日没も近い帰り道を急いだ。

【彼女達と作った初めてのバレンタインチョコは、少しだけ心躍るものを感じた。引き出しの奥に仕舞っていた感情だ。彼らは、どう感じただろうか。喜んでくれるだろうか。

わかっているんだ。気を許すほどに辛くなるだけだと。わかっているのに、性懲りもなくまだどこかで求めているんだ。誰かの助けを。昔の私とは違うというのに。罪悪感に心臓が押し潰されそうだ。】

雪合戦

休日の朝からリボーンに呼び出され並盛中学校の校庭まで子供達と来た沢田綱吉。二月に入ったこの頃は雪も積もる寒さだ。こんな日に外に呼び出されさらに子供達の相手をさせられまるで日曜日のパパ状態だと嘆く沢田綱吉だが、グラウンドで見た仲間達の面々に安堵していた。

しかしそれも束の間、雪合戦から雪上の合戦となるドタバタ劇を繰り返していた。

いつも通りの光景だ。

休日の学校にノコノコやって来たボンゴレファミリーのメンツを、校舎三階の応接室で見守る紫乃は、毎回よくやるなと常々沢田綱吉の苦労を労わるのだった。

第三勢力まで増えて、カオスとしか言いようのない雪上のレオン争奪戦が続いている。

紫乃は高みの見物をしながら、純白のグラウンドで巻き起こる三大勢力のよくわからなくなりつつある戦いをぼんやりと見守っていた。

雲雀恭弥は校内巡回と言いつつ、憂さ晴らしに行っているので、今ここには紫乃しかいない。あの男もグラウンドに降り積もる雪を見て高揚感が昂っていたところ、まだまだ餓鬼臭さが残る。

それを言えばあの大人達もそうだろう。たかが雪遊びに本気を出し過ぎな気もする。まあ獄寺隼人のように雪をどこにも使わないのも問題だが……。

紫乃はグラウンドで中坊相手に実弾入り雪玉をぶっ放している金髪のイタリア人男性の容姿を銀縁の眼鏡のレンズに映す。

以前よりイキイキしているように見える男の顔を、紫乃は自身も無意識に追いかけた。紫乃がいた頃よりも凛々しく頼もしい顔立ちになっていた。

……あれなら、もう自分のことは忘れてしまっているだろう。

レオンＴＵＲＢＯを追いかけ非常階段を駆け上がるディーノは、後方から来る沢田綱吉側勢力の山本武を振り払うためさらに加速していた。向こうは現役野球部のホープだと聞くが、ディーノもマフィアの次世代を担う端くれなら瞬発力にはまだまだ自信がある。

こんな遊びでも中坊に譲ってたまるかと気合を入れてレオンまで目指した。

三階まで一気に駆け上がろうとした頃か、彼が非常階段を登ると並盛中の校舎の外観も近づいた。

自身もマフィアの育成学校に通わされていたが、その頃の思い出を噛み潰しながら、ディーノはふと白い校舎の一角に見た黒髪の陶器の肌の少女の容貌に、心臓の鼓動が高鳴った。

ディーノの視界が少女に釘付けになる。すると彼女もこちらの視線に気づく。

ほんの数秒間見つめ合う。

あまりに突然のことで、ディーノはしばらく彼女のその容姿に気を取られた。

「っ……しまっ！」

非常階段にもまだ溶けきらない雪が積もっていた。それに足を掬われ、ディーノの視界は一瞬で地上にまで転げ落ちた。

ディーノの巻き添えとなる形で脱落した山本武は、平常運転でおおらかに笑い飛ばしていたが、雪に埋もれるディーノはどこか神妙な顔つきだった。

そして彼は白い並盛中の校舎を見上げ、どこか悩ましげにするのであった。

【二月に入り、沢田綱吉は相変わらずだ。
雪が積もるグラウンドでも仲間達と楽しそうであった。思い出は大切にしてほしい。彼がこれから先背負うボンゴレの宿命を憂うと、そう強く願うのだ。
私のようにはなるな。君の思い出だけはどうか枯らさないでくれ。】

雪解け

ボンゴレ達が帰った後、紫乃は夕暮れに染まる帰り道をトボトボと歩いていた。

彼女を待ち伏せていたその人物は、そんな彼女の寂れた帰り道をおもむろに塞いだ。紫乃はゆっくりと視線を上げそいつの顔を睨みつけた。

「よお」

紫乃に親しげに声をかけるのは、跳ね馬だった。部下は見当たらないが、近くで待機しているのか、特にドジを踏むようには見えなかった。

紫乃と対面して、彼の方もようやく確信したようだ。キャバッローネ十代目としての普段の愛想のいい顔つきから、少しだけ身内に見せるような砕けた素の笑顔を紫乃に向けた。

「久しぶりだな。まさか日本まで逃げていたとは」

紫乃は黙っていた。

彼らを裏切った自分を、向こうがどう思っているのか、少し探りを入れてみたいと思った。長い年月はどれほどお互いを変えてしまったのか。深い溝の中を覗いてみる感覚だ。

「一言でも言ってくれたら嬉しかったぜ」

「……すまない」

「いいって、お前の気持ちもよくわかるよ。あんなことがあったんだ。今は伊波紫乃で、こっちで上手くやってんだろ」

彼は昔の彼と何も変わらず、優しい言葉をかけてくれた。その言葉は紫乃を少しだけ安心させた。昔に比べれば背も伸び、紳士らしく落ち着いた物腰だった。きっとここ数年で女性の扱いにも慣れたはずだ。昔の彼なら、こんな風に気の利いた台詞を紫乃にかけられただろうか。

「ありがとう、ディーノ……」
「昔のよしみだ。つっても、今じゃもう昔の名残もねえが……」
二人の間に長い沈黙が続く。
久しぶりに会ったのに、ぎこちない空気は、溝が深まるばかりか、昔の面影も見当たらない。
ディーノから少しずつ彼女の方に近づいていく。
「つーかよ、びっくりしたんだぜ。髪もバッサリ切っちまって、なんだよその伊達眼鏡！　一瞬誰だかわかんなかったぜ」
昔は丁寧に手入れをして伸ばした艶やかな黒髪が肩を流れ、どんな男も魅了していた。でたらめに掛けたその眼鏡の下にも、今もその面影がある。ディーノは昔の彼女の長い髪が好きだった。
彼は彼女の髪に不意に触れた。後頭部をさらりと撫でると指に絡まる彼女の短い髪……。もうそこに昔の面影はないのか。
腰の辺りまで伸ばしていた髪を、屋敷の奥にある部屋の一室で、一人窓際の椅子に腰掛け、黙々と丹念に自身の絹糸のような髪を梳かしていた。
彼と同じ髪飾りが、黒髪の束の隙間から垣間見えて、さらりと小柄な少女の肩を流れる。
指先のひとつひとつにまで、彼女に魅了されていた。そんな光景がまるで昨日のことのようにディーノには思えたのに――……。
目の前にいる彼女は、今の自分を見て何を思っているだろうか。昔に比べて二人の間にはどれほど距離ができただろう。ディーノは、言い知れない不安に駆られた。
「なあ……あの時はお互いファミリーのためだったかもしれないが、俺はずっとお前のことを……」
つい口が滑った。
それだけは、言ってはならないとわかっていたのに。
「ディーノ」
それでも、抑えきれない衝動だった。

「私はもう、〝伊波紫乃〟でしか生きられないんだ。昔のことは、君とはもう一緒にはなれない」

彼女の言葉は、やはり昔から変わらず自分よりもずっと大人びている。こんな会話は懐かしくて、悲しかった。

わかっていた。わかっている。彼女の気持ちもその言葉の真意も、彼には痛いほどわかっていたんだ。けれど、気持ちはあの頃から変わらず彼女を求めている。

「わかってる。俺ももうガキじゃねえんだ。俺にもこれから食わせていくファミリーの奴らがいるし、昔のことにいつまでも縛られてなんかいたらキャバッローネのボスがなんてツラしてんだってな」

彼も昔とは違う。今やイタリア本土で知らぬ者はいない、キャバッローネの島を持つ十代目なのだ。

自分の立場を自覚するなら、潔く彼女を忘れるしかない。

そしてディーノは、自身の思いを告げた。

「でもよ、お前一人の面倒くらい見られるぜ」

気づけば自分の胸に彼女を抱きしめていた。抵抗もままならないほど、彼女の感触や香りを忘れないよう、あの頃のように、それはそれは強く固く。

長い年月を痛感するようにあの頃の感触も身長差も違っていた。あまりにも悲しい現実を知った。

「まだ一人で泣いてるんなら、いつでも頼ってくれよ……俺が、守ってやるよ」

守る。必ず守ってやる。今度こそ。そんな覚悟がなければこうして彼女と二度と会うことはなかっただろう。

やはり、どうしようもなく心は彼女を求めていた。大切にしたい。

今は昔とは違う。多くの部下に信頼されるボスにまで成り上がったんだ。二度と彼女を悲しませないために誓える。必ず守ってやる。

後悔したくないんだ。

「ディーノ……」

すぐ耳元で、懐かしくて愛おしい声がする。待ち焦がれていたあの頃の声が。

「ディーノ……あなたのことを、一日でも思い出さない日はなかった。ずっと、忘れられなかった。あなたのその言葉を聞けただけで、嬉しかったよ。今でもあなたを愛しているんだ」

あんな別れ方をしても、まだ自分の胸に委ねてくれるのか。彼女の温もりを確かめられただけでも嬉しかった。

潤んだ彼女の瞳に自分が映り込んだ。情けないツラをしていた。もう一度彼女を抱きしめてやりたくて待ったこの数年間の想いが張り裂ける寸前まで詰まっていた。

彼女の視界を阻む眼鏡を取り除き、ディーノは彼女から目が離せなくなった。それから、夢中で彼女の唇を奪った。逸る気持ちを抑えられずにいた。それは昔と変わらず彼女を愛していたからだ。

ギリギリまで彼女を繋ぎ止めようとしたが、結果を言ってしまえばそれは叶わなかった。理由はわかりきっていた。彼女が自分のために離れていくことを。

「ったく、もったいねえぜほんと……」

昔と随分違う彼女の髪をさらりと撫でる。たとえどんな容姿だろうと、見つけられたんだ。これからも忘れられないだろう。

名残惜しく彼の指からほどけていく。

「……今度会う時は、伊波紫乃としてよろしく頼む」

「ああ……」

彼女は最後にふわりとあの頃と何も変わらないように微笑んでいた。彼女の感触も温もりも、ずっとこの手に残ったままだ。

【雪が降る日は寂しい外を眺めていた。あの花は見る影もなく萎んでいった。雪解けの春にはまた色とりどりの花を満開に咲かせるが、もう二度と一緒に見ることはない。後悔は捨てるんだ。】

雪解けも近い景色の先に、もうそこにはいない彼女の面影をしばらく探していた。

「セラン……」

春はもうすぐ

【跳ね馬と数年ぶりに再会する。
あの時待ち伏せされていたのは計算外だったが、計画に支障はない。
ああ言っておけば問題はないだろう。あの男が、私への想いをまだ吹っ切れていなかったのは好都合だった。
あれなら彼の元家庭教師の男に脅されてもそう簡単には口を割らないだろう。彼はそういう男だ。
あの頃より少しは頼もしい一人の男になってくれただろうか。へなちょこディーノ、そんな響きが懐かしく感じる。
さて、猶予はまだ半年あまり残されている。
気づけばあっという間だった。あとどれほどの限られた時間の中でやり遂げられるかはわからない。
彼の分も、後悔はさせない。君は10年後も、彼らとともに――。】

彼らの再会の一部始終を、こっそり影から覗き込んでいた一人の人物は、元教え子の男が彼女を見送った去り際に残した名前に、思わず耳を疑った。

「……セランだと？」

その声色は、不穏を孕んでいた。
黄金色を反射するおしゃぶりをぶら下げたその胸中には、あの裏切りの日のことが点々と過った。
決して忘れてはならない血を流したあの日だ。その当時のことは

今もまだ彼らの記憶に新しい。当事者ではない者達も、多くの悲しみに包んだマフィア史上に残る事件だ。

すぐに確認しなければならないことがあると、リボーンはその小さな身体を翻していく。不吉な予感がしていた。しかし、それはまだ具体的な形を帯びてはいなかった。

最後の春は、彼女の9年間を焼き尽くす炎の絶海だった。

あの頃の思い出の景色も、ようやく蕾をつけたあの花達も炎の悪魔の手に燃え尽きていった。火の粉とともに黒い灰となったそれがハラハラと虚しく散っていった。

かろうじて憶えていたのは、底知れない恐怖と悲しみと、あの人の血と身体が炎に炙られる独特な匂いと、思い出に裏切られてしまったあの日の涙の味だ。

「あぁぁ……」

炎が燃やし尽くす木造家屋の部屋の隅で、全ての感情が混ざりきらない微かな声を漏らした。

涙と気管が詰まるほど溢れ出る嗚咽にグチャグチャになる顔を手で覆った。それも彼女なりの些細な抵抗であった。心臓まるごと鷲掴みにされたような息苦しさと、嘔吐感にその小さな身体が苛まれる。

倒れたあの人の前に佇むその人影は、彼女の記憶に残る確かにその人だった。まだ彼女が幼い頃、どこかに連れていかれたのだ。

その人の、血に飢えたような真っ赤な眼睛を、彼女は今でも悪夢に見る。

「……やがって」

何度繰り返した台詞、もううんざりだ。

運命はあの日から、こうなることを知っていた。絶対に許さない。その人も同じだろう。ぶつけてやりたいんだ。自分を陥れた狡猾な大人に。

あの日がなければ、彼女もまたこんな世界の運命に自ら乗り出すことはなかっただろう。

そして彼女のもとにもうすぐあの春が来る。

気づかないままでいてくれたらよかった

【二月十九日

グラウンドで特訓する山本武達を発見。応接室での雑用の間に標的を観察するに至る。

めっさコンクリートの電柱を打ち砕いた山本武に沢田綱吉も言葉が出ない様子だった。無理もない。私もあれを間近で見たらそこそこドン引きしていたと思う。

ともあれ山本武のトレーニングは成功だったようだ。このところ投球の筋も良くなり調子がいい山本武を放課後のグラウンドで見かける。まあ、私の知ったことではない。

二月二十二日

通常通り授業を聞いていると、まだ授業中だというのに一年の教室を訪ねる輩がいた。笹川了平だ。

一番に彼の妹の笹川京子が反応したが、彼の用は沢田綱吉だった。二人ともいい迷惑だろうな。傍観者の私にはわからない苦労だと線引きする。道場破りの件はこの日のことのようだ。

二月二十八日

放課後に沢田綱吉と黒川花が一緒に下校するのを見た。珍しい組み合わせだな、とも思うが大人ランボか。

まともな方だと思っていたが、黒川花の好みもわからないな。甲斐性があると納得すればいいのか。

三月十日

この日は休日の朝から沢田綱吉は憧れの笹川京子と動物園に行ってきたようだ。
私は休日の朝も関係なく応接室で雑用係だ。そして朝から夕方まで雲雀恭弥のお茶出しだ。
そんな雲雀恭弥の足扱いの私が、何故この日沢田綱吉の動向を把握していたかと言うと……」

「そんでツナがよ～」
公園で山本武に捕まった。
帰り道に偶然公園を通った時、山本武が近所の子供達に野球を教えていた。紫乃が気にせず家路を急ぐと、ちょうど子供達と解散した山本武がこちらに気づいた。
思えばすぐにあの場から逃走しておけばよかったと思い、公園のベンチに腰掛けながら山本武の動物園での一日の話を複雑な思いで聞いていた。
しかし、何も悪いことばかりではない。こうして彼女の知らないところでの沢田綱吉の動向が知れることはプラスである。
公園の木々はポツポツと桜が春を知らせていた。
割と真剣に山本武の話を聞いていると、何を思ったのか、山本武がおもむろにこんなことを言う。
「伊波は動物好きなのか？」
「まあ……」
可もなく不可もない程度だ。
紫乃が特に否定もしないでいると、山本武が今度もまた何を思ったのか紫乃に言った。

「じゃあ、今度二人で遊びに行こうぜ」
さらりと言ってのける山本武に、紫乃の反応は微妙なものだ。二秒ほど瞬きをして、その眼鏡の下から不審げな眼差しをそいつに寄越した。

「は？」
「ほら、この間のチョコのお返しまだしてねえし、面白そうじゃん」
「その言葉でまとめないでくれ」
お得意の地雷ワードで危うくペースを持っていかれかけた。しかも会話の中でさらりと「二人で」と言いのけているところこいつもなかなかの天然タラシである。その手には乗らないぞ、と紫乃はバッサリと切り捨てた。
「ありえない」
「ありえねえって……」
思いのほか山本武は落ち込んでいるようだ。紫乃にしてみればこんなのと二人で出かけるなんて想像もつかないことだ。二人きりということは、傍から見てデートとも捉えられる。紫乃ははなからそんな誤解は御免被る。
「動物園は悪くないだろ」
「臭いし嫌だ」
「さっきはいいって言ってただろ」
「言ってないし。そもそも君と行くなんて論外だ」
しかし山本武もこの時は負けじと強情だ。往生際が悪い。彼はこんなにしつこい人間だったのか。獄寺隼人がいちいちキレているのも少しわかるような気がする。
平行線の攻防が続き紫乃が思わず地団駄を踏みたくなる頃に、向こうも多少気を悪くしたようなつっけんどんな表情を紫乃から逸らして、ボソッと言った。
「んだよ、ヒバリとならいいくせに……」
「はあ？」
耳に入れてしまったその呟きに、紫乃は自分の耳を疑うようにそれに噛みついた。
「どうして雲雀が出てくるんだ。あんな奴が態々群れるところに自分から行くわけもないだろ」
「そうだけどよ……なんつーか、伊波はさ、俺のこと好きじゃねえのかよ？」

今までとは比べものにならない静けさが落ちた。二人きりの公園のベンチで、時が止まったように見つめ合う。遠くでは烏がまた鳴いていた。

正気なのか？　いつも突拍子のないこの男の発言に紫乃はたじたじである。

「あぁ？」

「俺はさ、好きだぜ、伊波のこと。学校で全然喋んねえけど、話せば面白いし、面倒見もいいし、なんだかんだ俺がうっかりした怪我も心配したり根は優しいしよ。クラスの奴らもったいねえよな。こんなに伊波のいいとこ見落としちまってて」

怪訝そうに紫乃はしていたが、山本武は思いのほか真面目な顔つきである。またそんなことを突拍子に語る彼の神経が紫乃には理解し難いものだ。

ほんの少し、山本武の無神経さに気力を削がれる。馬鹿馬鹿しいなんて思いながら、紫乃は目を伏せた。

普通なら、地味で目立たない自分にいちいち絡んでくるこの男がおかしいんだ、彼女の傍観者でいるスタンスを崩す厄介な奴なのに、気づけばこうして隣にいることを許してしまう甘い自分がいた……。

「……そんなことを言うのは君くらいだよ」

「そんなことねえぜ！　伊波と話してみたい奴らなんてたくさんいるぜ。でもよ、最近の伊波なんか素っ気ねえしよ」

山本武の顔色が曇る。紫乃のことでそんな風に思い悩むなんて、精々このお人好しの男くらいだな。

本当にバカな男だ、なんて、紫乃は一人ごちるのだった。

「大人数が苦手なら、まずは俺と二人でどっか遊びに行かね？　動物園でも、どこでもいいんだ。伊波のこともっとよく知りたいんだ。そんでツナ達やクラスの奴らとも仲良くしてくれよ」

「はあ……だから君はバカなんだよ」

「えっ？」

大仰な溜息とともに紫乃は言った。山本武の目が点になっていたとか知るか。勝手にアホ面でもしてろ、と言いたげに今度は紫乃からこう切り返す。

「もとより、君と仲良しこよしをする気はないんだ。私のことを優しいというなら、君はバカなくらい優しすぎる。バカ正直で人が良すぎる。それが君のいいところなのも、私は十分に知っている。でも、人は選べ。君の無償の優しさに見合う人物かは見極めろ。優しさにつけ込まれたら終わりだ」

これは忠告だ。未来の戦いでも、彼の人が良い性格は、時に自らを追い込んでしまう。敵に何度も詰めが甘いと指摘されていた。彼の良さは沢田綱吉が率いるボンゴレに重要な役割を持つが、その使い分けは大事だ。その親切は良薬にも毒にもなる。

紙一重の誤差が、山本武を殺めてしまうかもしれない。

紫乃は怖かった。彼を救えなくなることが……。

「ダメか？」

ハッと山本武に振り返った。

穏やかな顔で、紫乃を見つめている。そんな彼に、紫乃は心を見透かされるような焦燥感を抱いた。

「お前がくれた優しさに見合う優しさで返すのは……そいつを最初にくれたのはお前だぜ」

思いがけない山本武の告白。

紫乃には思い当たるところがないが、聞き返しておいた。

「……なんのことだ？」

「伊波はよ、憶えてねえかもしれねえけど、俺が野球で挫けそうだった時、ただのクラスメイトだった俺に言ってくれたんだぜ。野球しかない俺のことを、必死に止めてくれる奴らがいたんだ……。

俺……あん時の言葉がなけりゃ、きっと飛び降りてたぜ。お前が気づかせてくれたことなんだ」

彼との出会い……忘れるはずもない。紫乃は、何があっても忘れないようにしていた。

山本武にボールと思いを託したあの日を……。

彼はあの日のことを、この日が来るまで胸の引き出しに仕舞っていた。そんな些細なことを、彼女の昔の思い出のように。

何より思い出を大事にする紫乃だから、山本武のその言葉を無下にはできない。

紫乃よりも、君は沢田綱吉の傍にいてほしい。紫乃の願いはただそれだけだ。

「お前が俺にくれたもんを……そいつに見合う恩を返すのはおかしいことか？　俺が今度は気づいてやりたいんだ。伊波がどうしようもなくて悩んでる時は、俺が一番に気づいてやりたい。こんな感じでな」

またお節介だ。馴れ馴れしくも紫乃の頭を撫でる。君達に恩を感じているのは紫乃の方だ。

「今までずっと言いたかったんだぜ、伊波、ありがとな」

そんな言葉をかけられる日が来るなんて、思いもしなかった。紫乃の存在は、彼らに恨まれて当然だというのに。

どうして、この男は、彼女にそうやって笑ってみせるんだ。

「ば……かなの、か……どうして……」

「ハハッ、バカは嫌か？」

「っ……」

白い歯で屈託なく笑っている。

そんな彼の無邪気な表情が、西に沈んでいく夕陽なんかよりずっと

眩くキラキラと輝いて見えた。
どんなに突き放しても、彼は紫乃のそばにいてくれた。そんな余計なお節介精神に彼女も心折れたのか毒されたのか、固く閉ざしていた気持ちの片鱗がはらりと彼女の目元を落ちた。

春は桜と君と

並盛にも春が来た。満開の桜が咲く頃は、彼らも春には定番の見頃の花を愛でるため花見へとやって来ていた。

花見の場所取りをするために朝早くからやって来た公園で、チンピラだと思っていた相手が風紀委員だったことが運の尽きで、さらにその相手を獄寺隼人が一発でＫＯさせてしまったのが災厄の始まりであった。

そして三人の前に、並盛中風紀委員長の雲雀恭弥が姿を現す。

桜の木の幹に凭れて姿を見せたかと思えば、部下とも言えるその風紀委員を自ら叩きのめす鬼畜っぷりを見せている。呆然と見ていた三人も鳥肌モノだ。

その直後には面倒な奴が朝から酔い潰れて話に入ってきたが、雲雀恭弥に自ら話しかけまもなく返り討ちに遭ったので皆がスルーした。もともと女しか診ない医者ならはなから役には立たないのだ。

念願の赤ん坊にも会え、草食動物達を前に興奮高まる雲雀恭弥の鉄槌が最初に獄寺隼人に襲いかかる。

正面から体当たりしていこうとする獄寺隼人に、雲雀恭弥も呆れたようだ。以前の屈辱的な敗北から何も進歩していないようだった。

しかし、雲雀恭弥の振り下ろしたトンファーは空を切る。獄寺隼人の頭上スレスレを切り、雲雀恭弥は次に視界に飛び込んだダイナマイトに自身の身動きを塞がれた。

周囲を数多のダイナマイトが彼を囲い、すれ違いにそれを投げた獄寺隼人が手持ち無沙汰に呟いた。

新技、”ボムスプレッズ”である。

「果てな」

同時に、後方で盛大な爆発が起きた。

その衝撃的なまでの光景に、花見の場所取りに来ていたことも忘れ

て沢田綱吉達は壮絶な彼らの戦いに大口を開けて呆然と見守っていた。

「……で？」

しかし、彼らの後方で聞こえるはずのない声がする。

すると、煙幕に巻かれてトンファーを盾に構えた雲雀恭弥がそこにいた。平然とした顔つきで、身体には外傷もない。無傷である。その手のトンファーで爆風を起こし至近距離の爆発からも身をかわしたのだ。

ダメージのひとつもその男に与えられていないことに動揺し、油断していた。

「二度と花見をできなくしてあげよう」

咄嗟に男の反撃をかわしたが、獄寺隼人は膝をついてしまった。獄寺隼人の負けである。既に戦闘資格はないが、雲雀恭弥の腹の虫は収まりきらず獄寺隼人に襲いかかろうとする。

その時、横から刀で雲雀恭弥のトンファーを受け止められた。山本武だ。

「次、俺な」

「山本！」

獄寺隼人の危機一髪の場面に半ば強引に山本武が割り込んだ。沢田綱吉が驚くが、横からトンファーを受け止められたのと、この頃彼女の周りを彷徨く男を視界に入れ、雲雀恭弥の機嫌はみるみる損なわれていった。

「これならやり合えそうだな」

「ふうん……どうかな？」

不敵な笑みを浮かべ、雲雀恭弥のトンファーから仕込み鉤が飛び出す。山本武や、見守っていた沢田綱吉らも隙のない男の追撃に目を見張る。

山本武は、咄嗟に身を屈め直撃を避けたが、地面に倒れ込んでしまった。

「彼女に集る蝿なら、目障りだ。君はこの場で殺してしまおうか」

雲雀恭弥はつくづく、彼女に馴れ馴れしく接するこの男のことを気に食わないと思っていた。丁度いい機会だ。この場で粗末な蝿は潰してしまおう。血に塗れた花見会場というのもまた一興だ。

「復活！」

「!?」

すると彼らの確執の間に、裸の男が突然割り込んできた。右手には何故かハタキを持っていた。

「ツナ！」

裸男もとい沢田綱吉に窮地を救われた山本武は、情けない思いでその後の彼らの攻防戦を傍から見守っていた。

また自分は決着をつけられなかった。やるせない思いで、膝を着いた地面からなんとか起き上がった。

その後の勝敗の行方は、予想を上回る結果で雲雀恭弥が膝を着いてしまったことで沢田綱吉側の勝利を収めた。

とは言いつつ、沢田綱吉が特に何かを仕掛けたのではなく、あのヤブ医者がこっそりとトライデント・モスキートを仕込んでいたのだ。

雲雀恭弥は桜クラ病という奇病を患い、覚束無い足取りで花見会場を後にしようとする。

「ヒバリ」

そこに後ろから、リボーンが声をかけた。

雲雀恭弥は素通りすることはなく、赤ん坊の声に耳を傾けた。

「あの女は来てねえのか」

思い当たる人物に、雲雀恭弥の片眉がピクリと反応する。向こうはいつも通りの声色だが、その語尾には不穏さが漂っている。

「……紫乃のことかい？」

「また二人で話してーことがあるんだ。伝えといてくれ」

「ま、いいけど。君が思っているより嫌われているよ」

「知ってるぞ」

赤ん坊は表情ひとつ変えず平常心で返す。少しはいい反応でもしてくれるのかと期待していたが、すぐに雲雀恭弥の興味も失せたようだ。

「……伝えておくよ」

桜が舞い降りる景色の向こうに、雲雀恭弥の姿は消えていった。

その後には女性陣と子供達と合流し、彼らは花見を楽しんだ。その途中、何度もポイズンクッキングの脅威に襲われた沢田綱吉らであった……。

並盛中の屋上では、校庭で見頃を迎えた桜が見られる。その校舎の一角で紫乃はクタクタになって帰ってきた雲雀恭弥を迎えた。桜クラ病に罹ったようだ。

紫乃の膝の上に雲雀恭弥が寝転んでいる。はしゃいできたのか紫乃の膝の上でおとなしく眠たそうにしている。

重い瞼を開けた彼の視界には紫乃がこちらを見下ろしていた。いつも彼女との視界を阻んでいる銀縁の眼鏡は掛けていない。

彼女の死骸を見つめるような冷徹な双眸が見下ろす。

「やっぱり……綺麗だね。君の毒々しい瞳は……」

性懲りもなくまだ紫乃を口説き落とす余裕がある。紫乃は呆れた。

「あなたくらいだよ……そんなことを言うのは……」

「そう……僕だけが知っていればいいんだ。そうは思わないかい？」

彼の髪を手櫛で梳かす紫乃の手が止まる。

彼の手が重なると同時に、視界を塞がれる。まるで時が止まるよう

な瞬間だった。

彼女の意識がこの時まで自身に向けられているのをまどろみの中で満足気に見つめ、雲雀恭弥の意識は闇へと落ちた。

「眠れ……彼の再生のために……」

静かに眠る雲雀恭弥の輪郭をそっと撫でる。穏やかな表情だ。紫乃の口元にも笑みがこぼれた。

不安げな横顔

【三月三十一日
春に咲く桜も綺麗だ。
薄桃色に色づいて染まる町の景色も、人々の笑顔も、彼らもこの日は花見を楽しんだだろうか。

四月八日
二年の新学期がスタートした。】

グラウンドでトマゾの八代目に絡まれている沢田綱吉を発見する。
内藤ロンシャンか。ここからでもそいつのウザさが滲み出ているな。
教室の窓際にて紫乃は、のちに獄寺隼人と山本武が加わり話が拗れているグラウンドでの光景を見守る。
彼女の二年のクラスもA組だった。彼らより先に登校していた紫乃だが、彼女の脳裏にあの赤ん坊の影がチラつく。
リボーンが裏で手を回していたかは彼女にもわからないが、一年のメンバーがクラスに揃いすぎているのはやはり少なからずその可能性がある。
まだ紫乃への接触を諦めてはいない。そんな挑発のように紫乃には思えた。
沈黙は破らない。
どこかで見張っているかもしれない赤ん坊に、紫乃は固く決意した。
そして彼女には、もうひとつ不安視することがあった。

「あらら～、お隣さん？　トマゾ八代目ロンシャンどえ～す！　こんちこんち～！」
　ウザいのが隣の席になってしまった。
　紫乃は自身の運の尽きを悟った。
　桜の木の下に生き埋めにしてやろうかと殺意が芽生えたが、山本武や雲雀恭弥に比べればまだまだ許容の範囲である。
　ここ一年の出来事で紫乃の忍耐もそれなりに図太くはなった。

「よお、伊波！　内藤と何話してんだ？」
　こいつがしつこいせいで他のバカが寄ってきてしまったではないか。やはり今日中に肥料にしてやろうか、なんて前言を撤回する紫乃であった。
　山本武がノコノコとやって来たことで、また面倒なことになりそうだと薄々予感していた。

「伊波ちゃんってゆーのねー！　いなみんって呼んじゃってもＯＫ!?　いなみん結構俺のタイプかも!?　カノジョになる？」
「は？」
「え？」
　内藤ロンシャンの取っ掛かりの掴めない会話に、二人はぽかんと呆気に取られている。
　どうしてそんな話が急にされたのかは定かではないが、アプローチされた紫乃よりも山本武の方がやけに敏感に反応していた。
「なんてねー！　ジョークジョーク！　残念ながらロンシャン彼女持ちだから！　フリーの時はいつでも歓迎ウェルカムだから～！」
　そんなわけのわからんことを言って他のクラスメイトのところに行ってしまった。

「ハハッ、内藤の奴面白れーこと言うのな」
「アホくさ」

その後も動揺を隠せない山本武が、そんな言葉で空気を濁しているのをよそに機嫌を悪くした紫乃はそのまま教室を出ていこうとした。

「な、なあ伊波、内藤とその、付き合ったりとか……」

「あるわけないだろ。バカは嫌いだ」

「だ、だよなー」

吐き捨てて言った紫乃に安堵するのも束の間、紫乃のその言葉の真意を彼は読み取る。彼女は〝バカは嫌い〟だと言っていたのだ。

え、俺も……？　と新学期初日からやけに落ち込んでいる山本武をクラスメイトの数人が目撃していた。相変わらず山本武に同情する輩もいれば、伊波紫乃に嫉妬する輩とまちまちの反応であった。

その後は新担任の不幸ということで再びリボ山が降臨し、沢田綱吉と内藤ロンシャンの学級委員長対決が始まった。内藤ロンシャンのアホさにどうでもよくなる紫乃であったが、シナリオ通り嘆き弾の効能でトマゾが学級委員長の座を勝ち取った。

紫乃はそれを見届け、その日の学校は早退した。

伊波、デートするってよ

ＧＷに突入した。
沢田綱吉らはこの期間、マフィアのリゾート地に旅行に行って不在である。この期間は紫乃の標的観察も実質は休戦中である。

他方で紫乃は、ＧＷ初日から休暇の人々で賑わう水族館に来ていた。朝１０時から現地で待ち合わせをしていたが、案の定既にカップルやら親子連れでいっぱいである。
紫乃をここへ誘った人物はまだ来ていないようだ、仕方なくその辺で待つことにした。
紫乃の他にも待ち合わせをする人達はちらほらといる。時計の文字盤を気にしながらごった返す人波の中に待ち人の姿を探す。

「伊波！」
水族館方面へと流れていく人の群れを見ていると、ようやくそいつが来たようだ。
紫乃は「遅い」と白々しい目で、待ち合わせに遅れてきた山本武を睨んだ。

今日は山本武と二人きりで水族館デートだ。
あれからも何度しつこい誘いを受け、その度に完全無視してきた紫乃だが、ある日「中間テストで満点を取ったら考えてやる」なんて余計なことを言ってしまったのだ。
それから部活以外では教科書をノートに取る山本武の姿を教室で度々見かけた。
あの山本武が勉強に勤しむ姿にクラスでもそれは騒がれたものだが、紫乃は何も関わっていないという風にとりあえず素知らぬフリをした。どうせ最初だけだろうと。廊下で獄寺隼人に質問しているところも見た。最初は山本武を鬱陶しそうに退けていたが、なんだかん

だ親身になって教えてやっていた。

そして中間テストで、赤点組の常連だった山本武は全教科平均点越えを達成し、中でも数学で満点を獲得した。

安易だった。この男はやればできる男だったのを今頃になって思い出していた。

山本武と赤点常連組の沢田綱吉はこの時とても悲惨な様子であった。無理もない。自身には家庭教師がついておりながら友人の山本武に先を越されたのだ。裏切られたような悲しみと同時にこれから彼のもとに待つ家庭教師の地獄のスパルタ教育にその身を凍らせているだろう。既に瀕死の状態だった。頑張れ主人公。

「へへっ、実を言うと楽しみすぎて昨日はあんま眠れなかったんだぜ」

「小学生の言い訳か」

話は戻り、低い腰で遅刻を詫びている山本武に紫乃も呆れたように言い返した。山本武の方は相変わらず紫乃のつっけんどんな態度にも臆せず豪快に笑い飛ばしてみせる。

「まあ……遅刻のミスは今日一日挽回してみせっから、とりあえず行こうぜ！」

切り替えの早い山本武に流され、二人は水族館の玄関を潜った。

中学生二人分のチケットを購入し、無事に館内に入るが、そこにも数多の来館客の人々でごった返している。

入館口付近を見回しながら、山本武が隣でポツリと言った。

「にしてもやっぱ混んでるのなー」

「三連休だからな。どこもそうだろう」

「俺はまあ平気だけど、伊波は人が多いとこ大丈夫か？」

好きか嫌いかと聞かれたら得意ではない。そもそもこんなところに誘ってきておいてその質問もどうかと思うが。

紫乃を振り返り、だんまりな紫乃に向かって朗らかに彼が言ってのける。

「しんどかったらいつでも言ってくれよな」

彼の笑顔を見て、紫乃は不意にまたこの胸を痛める。
館内にある時計を見て、山本武が声を上げた。
「やべっ、もうすぐイルカショー始まる時間だな。行こうぜ、伊波」
山本武に咄嗟に手を握られ、紫乃は返事をする間もなく彼に連れられて会場まで駆け出していく。
繋がれている手を見つめる紫乃は、振りほどくべきか迷った。

紫乃は、彼の隣にいていいのか。紫乃より山本武の隣を歩きたい女子はたくさんいる。こんな自分が、彼の隣にいることを赦されるのだろうか――。

イルカショーが開演する数分前に、二人は観覧席に着いた。
「なんとか間に合ったな」
「……詳しいんだな」
「子供の頃から遊びに来てるところだしな」
ここまで迷わず紫乃を連れてきた山本武に言うと、そんな返事が返ってきた。
彼は、昔誰と来たのだろうか。そんなことを彼に聞くのは野暮な質問だと知っている。
「伊波もこういうとこよく来るか？」
「まあ」
紫乃が言い淀んでいると、向こうからもそんな質問が返ってくる。紫乃は適当に相槌をした。
その場は山本武と適当な会話で間を持たせ、イルカショーが始まった。二匹のイルカのパフォーマンスで会場を盛り上げる。会場の盛り上がりも過熱し、紫乃がふと隣を盗み見ると山本武も食いついてショーに魅入っている。何度も同じものを見ているはずなのに、純粋に楽しんでいる様子は紫乃にも微笑ましい。
すると、イルカが飛んだ時に盛大に跳ねた水飛沫が、紫乃達がいる観覧席にまでかかる。

不意打ちのそれを浴びた紫乃は、点々と降りかかる水滴の感触におもむろに顔を伏せる。
「冷た……」
「眼鏡、平気か？」
隣で同じく水飛沫を浴びて少し髪が濡れている山本武が、そう紫乃に尋ねる。眼鏡のレンズに水滴が滴り視界が悪そうだった。咄嗟に服の袖で水滴を拭う彼女にそう声をかけるが、山本武はふと思い出した。
「そーいやそれ、伊達っつってたよな」
「何」
ひょいと紫乃の顔から眼鏡を外し、視界が開けた彼女にこんな提案をしてみる。
「今日くらいナシでいいんじゃねえか？　俺と二人なら怖くねえだろ？」
「っ……」
障害物のない彼女の表情の変化を、こうして間近で見られて、山本武はご機嫌であった。

「つーか、ない方が可愛いのな」
そんな歯の浮くような台詞を会話の中でさらりと口にしてしまうほどには浮かれていた。普通の女子ならイチコロである。
紫乃の表情がコロコロと変化するので、こんな彼女を今まで見たことがない山本武は面白れえなんて彼女に知られないところで思いながら、結局その提案を彼女に押し通した。

「面白かったのな」
イルカショーの会場から出てきた山本武が、そんな簡潔な感想を紫乃に言う。しかし、そう思っているのは山本武だけである。この天然タラシが。
紫乃が山本武のあまりにまっすぐで単純すぎる言葉に振り回されていることも知らず、この男は次に見つけた鯉の餌やりに興味を示し

ている。
「向こうで鯉にやる餌売ってあるぜ。俺買ってくっから伊波はここで待っててくれ」
そう言って紫乃を残して山本武は餌を買いに行った。
彼が戻るまでしばらくは手持ち無沙汰になった紫乃は、仕方なく他の人々が撒く餌を食べている鯉のいる池を眺めていた。

少し経って戻ってきた山本武は、彼女が彼を待つ池の前で、不意に思い詰めたような横顔をしていたことに気づく。
目を逸らしたところで、彼女の心が何かに思い詰められているのを、今の自分には何もしてやれることがない。彼女を不意にそんな顔にさせるのが、やるせない。
しばらくどう声をかけるか立ち止まった。

「……冷たい」
「ん、差し入れ。喉渇いてね？」
後ろからそっと彼女に近づき、自販機で買ったジュースの缶を渡した。彼女は何もないようにそれを受け取った。
「ありがとう……」
「ハハッ、今日の伊波はやけに素直なのな」
こうして誤魔化してしまうしかない。言葉に詰まる彼女を見る度に、山本武は自身のやるせなさに苛立ちと寂しさを募らせた。
「コーラ……」
「苦手だったか？」
「いや、あまり飲み慣れていなくて……」
一口飲んで渋い顔をする彼女に、もしかして苦手なのかと尋ねた。彼女はやんわり否定したが、うっかりしていた。彼女の好みを聞いておけばよかったが、逆に彼女に気を遣わせる結果になってしまった。
やってしまった、なんて思ってる頃には、彼女は二口目を口にした。

「美味しいよ」

自分にそう気を遣ってらしくもない愛想笑いを浮かべる彼女に、自身も精一杯の満面の笑顔で返した。どうしたら彼女の不安を取り除いてあげられるのかわからない。ただこうしてそばで彼女を見守ることしか。

鯉にボチボチ餌をやり、二人は人で混雑している水族館の館内をとりあえず歩いた。

無計画でお互い適当に歩いてみるも、紫乃は常に山本武から数歩下がり視線は俯いている。心ここに在らずという感じで、終始ぼんやりとしている。

せっかく彼女と水族館まで来たのに、これじゃつまらない。山本武は動く。

「伊波」

混雑する人の中で、戸惑う彼女の手を握る。

繋がれている手を見つめて彼女の方はぎこちなく、どこか遠慮がちにしている。彼女の手が離れていかないように、彼は力を込める。

「いいんだぜ、ゆっくりで、伊波と一緒なら俺はどこだって楽しいんだぜ」

繋がれている手と、山本武の顔を交互に見つめる不器用な彼女が、その時はとてもか弱い小動物を見守るかのようで、彼女が珍しく戸惑う様が、微笑ましくて愛おしい。ずっとこんな風に見ていたいな、なんて彼女には言えないだろう。

しかし、山本武の思うところも実際紫乃には見えていた。わかりやすい男なのだ。いつもまっすぐで、そのまっすぐな気持ちで紫乃を見てくれる。

「……勘違いするな、バカ。君に態々付き合ってやっているんだ。君が楽しんでくれればそれでいいんだ」
「それは無理だぜ。伊波も一緒に楽しんでくれねえと、伊波も今日は一緒にバカやろうぜ！」
彼はあくまで、紫乃と一緒がいいと言う。
そうやってまっすぐに言ってもらえるものだから、紫乃もほんの少しだけ素直になれたのかもしれない。

それから少しずつ距離を縮めようとしながら、山本武と二人で色んな魚を見た。見たことのある魚、名前を知らない魚、カラフルな模様をした魚、まるで海藻のような海生物、大きな水槽に飼われた魚……。
水槽の中で優雅に泳いでいる鮫はとても迫力があった。シロイルカがあんなに大きいものとは知らなかった。
彼女の表情にいつしか笑顔が灯り始めたのを、山本武は温かい気持ちで見守り続けた。

「おっ！　このシャチのぬいぐるみ、伊波に似てね？　愛想わりー感じがよ」
「……こっちのマンボウは君に似てとてもマヌケヅラだな」
「言ってくれんじゃん」
水族館を一周し、お土産ブースでの何気ない会話。
この頃には少し砕けた会話もするようになった。お互いの距離を縮められたようで、隣で自然体に振る舞う彼女がそばにいるこの瞬間を噛みしめた。
広いブースでは、海にちなんだ様々な品が物販されていた。その一角で、紫乃達は戯れていた。棚に並べられていたぬいぐるみでしょうもない意地の張り合いをして笑い合う。

「バスターズ！」

するといきなり子供が撃った水鉄砲が、紫乃の顔面を直撃した。
もろにその水を被った紫乃は案の定頭から水滴を垂らしていた。すぐに子供の保護者が駆けつけ謝るが、紫乃は特に咎めることもしなかった。
親子連れが去り、それでも山本武は心配で隣で俯く紫乃に声をかけた。
「大丈夫かよ……」
「ああ、平気だよ。今日は濡れてばかりだな」
呆れたように、ずぶ濡れの顔のまま、こみ上げてくる笑いを噛みしめている。
解放されたような彼女の素の笑顔を見て、山本武も意外に思いながら、一緒に笑い飛ばした。ずっとこんな彼女を見たかったんだと思った。
風邪を引いてしまうので、すぐにタオルを買ってきて彼女の頭を拭いてやった。体育会系のノリでグシャグシャに掻き回される頭にキレていたこの時の彼女の反応がむしろ面白可笑しくて、彼女に弁慶の泣き所を蹴られるまで続けた。
それは確かに目尻に涙が滲むほど痛かったが、そんな痛みも彼女の抵抗も可愛げがあり紫乃から目が離せなかった。

楽しい時間はあっという間に過ぎていった。館内放送で閉館のアナウンスが流れ続ける。
そのアナウンスに誘導され出口が混雑し始める頃に、二人も水族館を後にしようとした。

「山本」

薄暗くなる館内の、大きな水槽の前で紫乃が立ち止まる。

そう呼ばれた彼は彼女を振り返る。少し後ろで立ち止まっている紫乃を、どうしたのかと見守った。

「今日は、ありがとう……。本当のところ、こんな場所に来るのは初めてだったんだ。イルカショーを観るのも、コーラの味も、バカみたいにずぶ濡れになってはしゃぐのも、君と初めての経験だった。楽しかったよ」

彼女の告白に、今まで試行錯誤してきた努力がようやく実を結び始めているような気がした。心の底から彼女の言葉を噛みしめて喜んだ。

「そりゃあよかったぜ。俺が伊波の初めてを一番乗りできたんだ。もっと二人で色んなところに行こうぜ。今度は動物園や、もうすぐ夏だしプールもいいよな」

白い歯を見せて浮かれている山本武は、早速次のプランを紫乃に提案する。

しかし、紫乃の方はあまり乗り気ではないようだ。

閉館が近づいており辺りを疎らに人が通り過ぎていくが、そんな周囲の目は見えていない。

「……俺もさ、伊波がどっか行っちまうんじゃねえかって気がして、焦ってたんだ。なんでかわかんねえけど、そんな気がして、必死に繋ぎとめようとしてたんだ。また二人で来ようぜ、伊波」

言ってしまえば、本当に彼女が今すぐここから離れてしまうんじゃないかと、不安だった。その胸の不安の先がどう向かっていくかわからなくて、なかなか口にはできなかった。

また、二人で、そんな口約束でも今彼女を繋ぎとめられるなら、約束をしよう。

「ああ、また……」

彼女は目を見てそう頷いてくれた。
その約束を果たせる日は、どれくらい先になるだろうか。

これが、甘酸っぱい青春の味だったのを、大人になった彼はいつか思い返す。甘酸っぱく、あと数センチ彼女に届かなかった、想い出の味を――……。

6月の招待状

今朝、紫乃が郵便受けを覗くと、見覚えのあるような封筒があった。ピンク色のそれに、『リボーン&ａｍｐ;ビアンキ』と差出人がある。

数分間その差出人の名前を凝視し、ガクンと膝から崩れ落ちた。狭い玄関に蹲り、無意識に震えている手に封筒を握りしめ、襲いかかる恐怖に心臓を落ち着かせようとする。この状況を先に整理しなければならなかった。

どうしてこんなものが……まさか、あの男が入れていったのか？しかし、あれはビアンキの勘違いだった。招待状もビアンキの単独行動である確率が高い。彼女と接触したのは沢田綱吉の家でバレンタインチョコを作ったほんの少しの間だった。

あれだけで……あのヒロイン達と関わっただけでこんなものを送り付けられるとは……。

あの男の愛人というだけある。そんなことを寂れた部屋の中で一人ごちり、彼女は動揺から収まらない動悸に胸を抑え、再び畳部屋の布団の上に倒れ込んだ。遠くなる意識には、いつもあの男の銃口が、こちらを見つめていた。

ん……と小さな呻き声とともに、意識を醒ました。ぼんやりとする視界には、いつも自室で見る薄気味悪いシミの天井が映る。額には何か、冷たいものが当てられている。

「ちゃおっス」

紫乃の知っている声だ。しかし、彼女の部屋では聞くはずのない声だ。

重い頭を寝込んだまま横に傾けると、この部屋にいるはずのない人物が紫乃を看病していた。
「大丈夫か。顔が真っ青だぞ」
そいつの姿を見て、紫乃の顔色は一層悪くなる。お前のせいだと紫乃は八つ当たりしたい気分だった。今はそんな気力も殆どないのだが。
それより……紫乃の部屋に彼がいることが一番の問題だ。
どう調べたのか、過去にも紫乃の家にこの赤ん坊は堂々と上がり込んでいた。今日の普段通りの格好を見ると、あの毒サソリの毒に塗れた披露宴会場から逃げてきたようだ。
こんなところにまで逃げてくるとは紫乃も想定外だった。こんなタイミングで敢えて紫乃のもとに来るのは、何か魂胆があるのか。ともあれ主役が逃亡し向こうでは今頃大変なことになっているだろう。沢田綱吉達が今頃血相を変えて彼を探している姿が目に浮かぶ。
「……なんだ。式には出ないのか」
「結婚なんて知らねえぞ。どーせ俺が寝てる間にビアンキが言い出したんだろ。面倒くせーからしばらくここでやり過ごすぞ」
それはもう君の中で決定事項なのか。ここは一応紫乃の借家なのだが。まあこの頭ではロクに一人で動けなかったし助かった。この地雷男でなければ一番助かるのだが。
紫乃が特に文句も言わないので、リボーンはお構いなしに布団を敷いた狭い四畳半の部屋に居座ることにする。

「……セラン」

長い沈黙の結末は、彼のその一言で破られた。
まだ具合の悪い身体に、彼の言葉は中毒性の高い毒だ。
紫乃は息を飲んだ。顔面蒼白で、重い岩のような頭で彼の言葉を反復した。
どこで情報が漏れたというんだ。その口調がまだ確信を突いてい

ないのは……ディーノとの会話を盗み聞きされていたのか。それしかない。

「……」

「セラン、なんだな」

念を押す。項垂れる様子の彼女からは、特に反論はない。本人が押し黙るなら、そういうことだ。

雪合戦最中にディーノの様子がおかしいことに気づいていたリボーンは、その後の会話を盗み聞きその中で知り得ることとなる少女の事実を、すぐには受け入れられなかった。リボーンの目にも彼女は一介の少女にしか見えていなかったのだ。

すぐに裏を取るため本部に問い合わせたが、イタリア本土にある本部からその詳細を待つのと、この日のタイミングを窺うまでには、かなりの時間を要した。

それに目の前の少女から直接聞き出すべきこともある。

「あなたとこうして二人で話をすることも以前はなかったかもな」

「……ああ。あの頃は、そうだな……まだまだガキだと思ってたんだが……ディーノは相変わらずベタ惚れだったぞ」

お互いに以前から面識はあった。そんな当たり障りのない会話をするのもどこかぎこちないほど、二人は希薄な間柄である。

今までにも彼女を見て引っかかる節はあった。殺し屋として人の本質を見抜く目は常に備えていた。あの眼つきには惹かれるものがあった。それでも彼女だと見抜けなかったのは……。

「……どういうことなんだ。こっちでは暗殺の話も出ていた。どうしてお前が並中に通ってんだ」

彼女の行方は現在消息不明である。一年前からだ。半年前には彼女の安否に関する様々な憶測が飛んだ。

あの事件の闇と切っても切り離せない重要参考人物である。中には組織の陰謀だと噂を立てる者もいた。

リボーンには他に確かめておきたいことがある。

「沢田綱吉に近づいたのはなんでだ?」

この少女の返答次第では、この場で始末することも彼は念頭に置いていた。

彼は九代目の勅命で沢田綱吉の家庭教師なのだ。大事な生徒に危害が及ぶことは決してあってはならない。

彼女が、あの〝セラン〟だと断定された今でも、リボーンはまだ迷っていた。

「彼の額に灯る炎を初めて見た時、確信したよ。彼が、ボンゴレの未来に相応しい男なんだと……。不思議な少年だよ、彼は……。頼りない炎だが、彼のようなひたむきな芯の強さを持った灯火だ。私はただ……見守っていただけだ。いつもそうだった。ただ見ていることしかできない」

少女の独白に、リボーンは耳を傾ける。

やはり少女は、あの事に触れてきた。しかし、どう言い訳をしても、彼女にあの場でできることはなかった、誰が見ても、彼女は無力だっただろう。

血の生臭さも知らなかった鳥籠の少女に、あの場で何かが為せただろうか。まるで彼女自身の立場を悔いるような声、リボーンはそれに小さな違和感を憶えた。

「ああ、あいつは引退後日本に渡った初代の血を引き継いだ正統な後継者だからな」

彼にも彼女が言いたいことはわかる。二度と繰り返しはならないとボンゴレの歴史に刻まれた血を。

そして彼は引き金を引いた。リボーンは、敢えてその言葉を選んだのだ。彼の前で何かを隠そうとする彼女の本心を聞き出すために態と火の粉を落とした。

蚊の鳴くような微かな声を漏らし、彼女は生返事を返した。もとも

と寝込んでいたからか、それは死に際にこぼしたような生気のない声である。

ゆっくりと宙を彷徨う視線を傍にいる赤ん坊へと移し、黒目がちのつぶらな彼の瞳に自身の真紅の瞳を映す。

「それで……？　彼らを裏切り、君達の目を欺いた私を、ここで殺すか？」

彼女が言う通り、あの人が望んでいることだろう。

マフィアボンゴレの長い歴史にあってはならない裏切り。そのマフィアの闇に手を伸ばしすぎた彼女、本来ならのうのうと生かすわけにはいかない。彼女は、知りすぎた。犠牲の上に立つ大義を――。

「……そうだな。俺は殺そうと思えば、いつでも殺してやるぞ」

殺し屋の本質は冷徹だ。

他人を殺すことで自身の存在意義を肯定してきた彼に、その問いかけは愚問だ。鉄の仮面の男に呪われた後も、それは変わらなかった。

彼女の命をここで奪ったとして、リボーンが今まで殺してきた標的達と何ら変わらないことだった。

「でも、それは最終手段だ。今はやめておくぞ。お前もツナのファミリーに欲しい人材だからな。お前みてーに幼少からマフィアの闇を見ている奴も、ファミリーの仲間に入れておくべきだ」

まだ彼女に小さな存在価値を見出していた彼は、その銃口を今は仕舞った。

いつでも殺せる。あの人からは、少女の行方捜索も暗殺命令の声明も預かっていない。それにまだ始末するにはもったいない。

教え子達の傍で、どんな化学反応を起こしてくれるのか実験するのも面白いかもしれない。

彼の今の目的は、あくまで沢田綱吉の家庭教師。

「あいつらは、お前の目から見てどうだ？　まだまだ青臭さは抜けね

え子供（ガキ）だが、お前の目に見て信頼に足らない奴らか？」
彼女と彼らの組み合わせと可能性は無限大だ。
今後ボンゴレ十代目として成長していく沢田綱吉に様々な影響をもたらしてくれるに違いない。

「信頼……か……まだそんな虚像に縛られていなければいけないのか」
「心を赦してんじゃねえのか、山本武に」
「……」
そう言われて、最後に見た彼の顔が過ぎる。遠くにいても自分の名前を馴れ馴れしく呼んでいる野球バカの男の顔が……。
「……違う。彼は子供すぎる。君の教育がなっていないせいで、こっちが困っているんだ」
「そいつは悪かったな。俺は基本放任主義でな」
……急にこの男のおふざけが始まった。彼女の白々しい目がリボーンを睨みつけるが、くるりと身体を反転させ彼は再び窓枠へと降り立っていた。
視線だけを寄越して彼を見つめると、紫乃に向けてこんな口説き文句を落とした。

「覚えとけ、俺はかなり諦めの悪い男だぞ。紫乃」
そのニヒルな笑みを残し行ってしまった。
その通りだな、と紫乃は押し潰されそうな胸に手を当てた。緊張の糸がほどけてまだ暴れている。
すっかり具合の方も悪化していた。当分起き上がれないだろう。
瞼にこびりついている裏切りの景色が、古傷を撫でた。

”沈黙に耐えた者が勝ちだ”

この口は、弾丸を押し込められても君には裂けない。

携帯の不在着信の履歴を見ると、あの男から何件もの着信が掛かっていた。

紫乃はもう折り返す気にもなれず、そのまま暗い闇の底に意識を放り投げた。

暗殺計画　1

【六月十四日
　放課後はボンゴレ十代目暗殺計画が実行される。本人はそうとも知らずヒロインと同じ班になれたことで浮かれているがな。
　例の武器チューナーもまだまだ未熟な十代目候補と対面している頃だろうか。未熟者同士仲良くしてほしいものだ。
　彼が獄寺隼人を幼児化させることが暗殺計画妨害のミソであるが、どうなることやら。もうひとつは、私が上手く山本武を誘導させることに懸かっている。】

　沢田綱吉暗殺計画の当日の放課後、紫乃の方は同班となった山本武に連れられ竹寿司の暖簾を潜った。
「帰ったぜ、親父」
「おう、武！　んで隣の嬢さんは？」
　暖簾を潜るとここ竹寿司の大将であり山本武の父親の山本剛が仕込みの最中であったらしく、慌ただしい様子で二人を迎える。
　紫乃に気づいた彼の父親は店の仕込みに追われていたが、快く紫乃を歓迎してくれた。親子揃ってよく似た朗らかな笑顔に申し訳なくなり頭を下げる。
「同じクラスの伊波っていうんだ。授業の課題一緒に家でやるから連れてきたぜ」
「お邪魔します」
　山本武の紹介もあり軽い挨拶を済ませると、山本剛は仕込みの手を止め紫乃の方まで歩み寄る。父親とは初対面であるが、息子と同じくらいの背格好でやはり人の良い笑顔はつくづく親子だと納得させるものがある。

「へえ！　そーかい！　お嬢ちゃんが紫乃ちゃんかい、武からよーく話は聞かせてもらってるぜぃ。ゆっくりしていきな」

温かい歓迎に紫乃は改めて礼を言うが、彼からよく話を聞いているとはどういうことなのか。隣でボケーッと立っている男を睨む。

紫乃の視線を感じたのか、咄嗟に山本武もお茶を濁そうとしている。

「何言ってんだよ親父っ！　まっ、そーいうことだからゆっくりしてけよ」

ざっくばらんに結局この男はまとめた。通常運転だな、と紫乃は溜息を吐くしかない。

この男にはぐらかされた感じはあるけれど、細かく考えることはやめ竹寿司の二階へと上がった。

二階の山本武の部屋に入ると、畳十畳程の部屋に紫乃の予想した通り物が床に散乱している光景が飛び込んだ。漫画雑誌やゲーム機が床のそこかしこに転がっている。部屋の奥には敷きっぱなしの布団と、脱ぎ捨てたような寝巻きのシャツとジャージが落ちていた。

まあ、この年頃の中学生らしい空間に紫乃は特に何も思わないが、その部屋の光景を見て思い出したように彼女の後ろで山本武がごちた。

「昨日野球の奴らが散らかしていったままにしてたぜ、まいったな……」

笑っているが気まずそうな空気を駄々漏れにしている山本武に、特に気にしていないという素っ気ない返事で返してやった。紫乃が気にしていないようなので山本武もすぐにいつものペースに戻る。

この後の彼には大事な仕事が控えているからな、コンディションは最善に整えておいてもらわないと。

「まあ、その辺に座っといてくれよ。同じ班の連中も後で来るっつってたから」

紫乃を部屋に残してお茶を取りに行った山本武はそんなことを言っていたが、やはりドがつく天然である。

山本武と紫乃の仲を勘繰っている班の連中が余計なお節介を焼い

て二人きりになるように仕向けたのを紫乃は聞かずとも知っている。
この男と二人きりになったからと言ってなんだというのが本音の紫乃にはどうでもよかった。先月には二人で水族館にまで赴いたのだ。紫乃は平然としていた。
適当に座っていてくれと言われても、散らかった部屋を前におとなしく待っているのもなんである。南向きの窓際の棚に置いてある野球の用具やら５００円貯金箱のほぼスッカラカンな中身を眺めていた。
やりにくいな……なんて結局愚痴りながら、彼が戻るまである程度整理しておくことにした。
ちょうど落ち着いたところで、湯呑に煎れた焙じ茶と茶菓子を持って山本武が部屋に戻ってくる。
少し片付いた自身の部屋を見て紫乃に申し訳なさそうにしている山本武も卓袱台の前に腰を下ろし、下に降りるついでまだ来ていない班の奴らと連絡した旨を紫乃に伝える。
「なんかもうちょい時間かかるみてーだから先にやっといてくれってさ」
どこで道草に時間をかけているのやら知らないが、クラスでロクに話したこともないクラスメイト三人に密かな苛立ちを覚えた紫乃である。
仕方ないので山本武と二人で授業の課題に取り組むことにしたが、その矢先に部屋の襖を外から叩く音がする。
「捗ってるかいお二人さん」
「親父！」
彼の父親の山本剛が部屋の様子を見に来た。彼の手に分厚い本の冊子が抱えられている。
「紫乃ちゃんにいいもん持ってきてやったぜ。武のアルバムだ」
気前のいい感じで紫乃にそう言って見せたのは、山本武の幼少期からのアルバムである。お寿司じゃないのが非常に残念だと紫乃が思ったのは内緒だ。
「ありがとうございます……」

「よせって親父！　見てもつまんねえだろ！」
「そんなこたぁねーぜ！　昔の武もそりゃあ可愛いもんでよ」
珍しくムキになって父親に抵抗している山本武を横目に、紫乃はそのアルバムを受け取る。
息子に頑なにあしらわれたので後は二人でゆっくり見てくれと息子に細やかなエールを送り山本剛は襖を閉めていった。
やけにご機嫌な父親に最初は振り回されたが、再び彼女と二人きりとなりすぐ隣で自分の昔のアルバムをめくる紫乃を緊張気味に見つめる。

「……ほんとだ。可愛いな」
「そ、そうか？」
紫乃が見ていたのは、まだ生まれたての初々しい頃の山本武だ。この頃からマヌケヅラをしていたようだ。時々写真に写っている女性は、彼の母親だろうか。母親の顔が見切れているものばかりだが、彼への愛情が伝わる写真ばかりだ。
アルバムを見た彼女の第一声が好印象なものだったので、山本武も内心浮かれていた。彼の反応に彼女はこう返した。
「ああ、こんな巨木になるとは将来想像もつかないだろうな」
「褒めてねーだろそれ！」
さらりと紫乃から毒を吐かれ、撃沈する山本武だった。それでも彼女とこうして苦笑していられるほど、彼女と時間を長く過ごすほど、手に届くような気がした。
もう少し、もう少しで、彼女に届く気がした。

そのままアルバムをめくり、幼少期の頃から野球一筋の少年の姿を、紫乃はその目に焼きつけた。
「昔から野球が好きなんだな」
「まあなー。ツナ達と会う前は野球しかしてこなかったしな」
山本武は何気なくそう言ったのだろうが、紫乃の胸に突き刺さって

いた。
新学期に入る前の公園での告白を思い出す。彼はああ言ってくれた。本当のところは、どうだろうか。
紫乃は今でも自分自身にそんな力はないと思っている。沢田綱吉のように、心を動かす言葉を紫乃にはかけられなかった。だからあの日運命には抗えなかった。
紫乃ではなく、沢田綱吉の心こそが、あの時の山本武を踏みとどまらせた。決して彼女ではない。自惚れてはいけない。

「……野球は、君の夢か？」
「ああ。やるからにはプロになりてえよな」
「……前に言っていた、マフィアごっこは楽しいか？」
「ハハッ、そりゃ楽しいぜ！　ツナやみんなもいるしな！」
この笑顔も、沢田綱吉に救われたものだ。紫乃の力ではない。
だから君に、どうしても聞いておかなければならないことがある。
「君は、野球と沢田綱吉を天秤にかけるなら、どちらを選ぶんだ？」
アルバムから目を逸らし、その質問を投げかける。少し身体を仰け反る山本武の黒目の奥まで食い入るように見据える。
山本武の方は、わけもわからずキョトンと紫乃を見ている。戸惑っている部分もあるだろう。

「……？　まあ、大人になってもマフィアごっこするんなら付き合うけどな」
そう言って、笑うのだった。
彼らしい答えだな、紫乃はそれを聞いてゆっくりと目を伏せる。
「そう……」
「伊波？」
なんでもない、山本武のその後の追及に紫乃は一貫してそう答えた。

「俺のアルバム見せたんだからよ、今度は伊波のも見せてくれよな」
彼女の方が頑なにだんまりなので、仕方なく話題を変えた。山本武から提案してみるが、紫乃はきっぱりと断った。
「ない」
山本武が固まる間に、紫乃は続けた。
「もうないんだ。燃えてしまったんだ。小さい頃、家が燃やされてな。だから昔の夢ももうない。忘れてしまったよ」
淡々とそう言って、すっかり冷めた湯呑に手を伸ばす。喉を通る焙じ茶の味があまり感じられなかった。
押し黙る山本武だが、じゃあさ……と彼女に切り出す。
「また、作ろうぜ。伊波の夢。俺も一緒に手伝うからよ」
前向きな彼らしい妙案に、紫乃も苦笑いだった。
ありがとうと、この時は彼に言っておいた。
彼が紫乃に笑顔を見せる度に、彼女の胸は締めつけられた。

【彼の夢は叶わない。私を恨んでもらっても構わない。彼に恨まれても、もう引き返せないところまで来たんだ。】

暗殺計画　2

しばらく山本武との雑談で場を繋いだが、その後も班の奴らが来る様子がないので、山本武自らの提案で沢田綱吉達の班の偵察に赴くことにした。

もともとタイミングを見て紫乃から切り出す予定だったが、この際どちらでもいい。

沢田家のリビングに上がると、既にやらかした後のようで、色々収拾が大変そうであった。獄寺隼人は故障した10年バズーカの影響で幼児化しさらにタチが悪くなっていた。

「よお、宿題進んでっか？」

「山本！　それに伊波さんまで～!?」

「同じの班の連中がなかなか来ねーからツナの班偵察しに来たんだよ。よろしくな」

この上なくタイミングの悪い二人の訪問に沢田綱吉も顔が唖然としている。当たり前だ。最悪のタイミングを見計らって来たんだからな。

「今日は二階じゃねーの？」

「いや……ちょっと俺の部屋は立て込んでて……」

こんな非常時にも物事を上手く収束するのはボスの大事な役目だぞ、と紫乃には所詮は他人事である。そんな風に山本武の背後に隠れて成り行きを見ていたのだった。

「そんな暇あんなら外の敵倒してこい！」

どこから声がするんだ？　と新喜劇ばりに部屋を見回す。そうして足元に10歳程見た目が若返った獄寺少年の姿があった。

「なんだ獄寺、来てたのか」

山本武、違和感なし。

紫乃はピクリとも表情の変化なしに一部始終を見ていたが、沢田綱吉の方は本来の性なのか、大きな衝撃を受けたようだ。この男の順応

性もといざっくばらんな第六感を舐めたらいけないぞ。紫乃も散々振り回されてきたものだ。

しかしそれでもこの態度のでかいちびっこが獄寺隼人だとピンと来ないヒロインに、慌てて沢田綱吉が調整を測っている。山本武に耳打ちで従兄弟だとかなんだとか上手く言っているんだろう。

納得したようにチビ獄寺を軽々と持ち上げる。中身はあの獄寺隼人なので彼の手の中でバタバタと暴れているが、全く自分のリーチをわかっていない。

「ハハハッ、涼しーぞ」

余裕で送風機扱いにされるチビ獄寺に同情を送る紫乃である。

山本武もいつもチビ達にするようにチビ獄寺とのんきに戯れていると、沢田家のリビングに一番めんどくさいモジャモジャ頭のランボが現れた。既にやられる気満々である。

「付き合ってる暇はねー」

秒殺である。光の速さで獄寺隼人に絞められ逃げ出すランボを見ているとさすがに不憫である。リアル五歳児にこんな仕打ちも酷い。

「大丈夫か」

ギャラリーの視線が暴れているチビ獄寺に向けられている隙を見て、リビングの隅で親指を咥えているランボへと近づく。

「よしよし、大丈夫だ。ランボは立派なボヴィーノのボスになる男だろ。これくらい痛くないな」

しゃがんでランボを宥める。初対面の紫乃に思っていたより警戒心もないようだ。ハンカチで涙諸々を拭いてやると、おもむろに紫乃の腕にしがみついた。

「ら、んぼ、さん……泣か、ない、もん、ね……」

「すごいな、君は。ところでランボ、あそこに何が見える?」

この時紫乃は妙案を思いついた。年齢制限のある光学迷彩スーツを着た暗殺者の姿は、紫乃にも視認はできない。

放置されていたランボに声をかけ、暗殺者の姿を確認させれば、紫乃には見えなくとも奴らが潜むポジションを把握できる。

あの半人前の武器チューナーがバズーカを壊してくれたお陰で10年後を危惧する心配もない。

「大っきい蛙がいるもんね。ツナのとこ」

「蛙……やはりそうか」

沢田綱吉にすぐそこまで接近しているようだ。獄寺隼人も既に気づいている。

彼の唯一無二の右腕と言うなら知恵を絞って返り討ちにしてみせろ。お手並み拝見だ。

「果てろ！」

獄寺隼人が沢田綱吉に向かって投げたダイナマイトが爆発する。

すると中から鳩やらパーティーグッズの道具が飛び出した。

そういえばそうだった、とこぼした紫乃だった。獄寺隼人も大体同じことを言っている。

しかしそんなことを言ってても時間はない。注射針が沢田綱吉に近づいているのは確実だ。一刻の猶予もないぞ。右腕ならどう動くべきだ。

「……山本、その子も君達と遊びたいんだろう。キャッチボールでも教えてやれ」

見ていられず紫乃が一言助け舟を出してやる。頷く山本武だが、獄寺隼人は今まで目立たずおとなしくしていたその眼鏡の女に目を見張る。

まさか自分の意図を汲み取った……？　しかし確かめている時間もない。

「ここだっ！」

獄寺隼人のその合図とともに山本武の豪速球が放たれる。沢田綱吉に直撃するはずだったそれは、光学迷彩の男にヒットした。

皆が見慣れぬスーツの男に驚いているが、刺客はもう一人いる。

彼女の鋭く見開いた目が、もう一人の暗殺者の男を牽制する。宙を彷徨う暗殺者の姿は依然確認できない。しかし、まるでその視線に射竦められたように男は微動だにできない。

そんなところに獄寺隼人は続けて山本武を誘導しそいつにボールを当てるよう仕向ける。

いきなり自宅のリビングに現れた光学迷彩男達に「どちらさまーーー!?」とのんきに突っ込んでいる沢田綱吉だが、君はさっき生命の危機にさらされていたんだぞ。彼らの通常運転ぶりに、ランボを抱き抱えて苦笑していた紫乃だった。

【沢田綱吉暗殺は阻止、ヴェルデという緑のおしゃぶりのアルコバレーノの指示だと証言。オートマチックへと進化を遂げた死ぬ気弾で暗殺者を撃退。今回の暗殺阻止は、小さな少年の奮闘ぶりのお陰だろう。】

「お前も来てたんだな」

一悶着が解決した後、あの赤ん坊が紫乃に話しかけた。

「君ものんきなものだな。仮に私が裏で手を引いてたとしたらどうしたんだ?」

「獄寺に助言してやったのを俺も見てたぞ。ツナを殺すならそんな芝居は打たねえだろ」

「……付き合ってられない」

ランボをリビングに下ろし、そのまま沢田家のリビングをすぐに離れた。途中で思い出して付いてきた山本武を無視して、帰りの道中で紫乃は歯に衣着せぬ男に対する嫌悪感に眉を顰めた。

君と、初夏の頃のプールサイドで

【六月二十八日
　まもなく学校でもプール開きということで、クラスの男子一同が文句を言いながらプール掃除に駆り出された。
　沢田綱吉は５０ｍ泳げなければ女子と補習か、本人には嫌で仕方ないだろう。年頃の男子が女子達に囲まれて水泳指導というのは確かに拷問だ。放課後は山本武に連れられ市民プールで特訓だろうな。
　放課後の廊下で偶然見かけた彼らを見送り、私は応接室へと踵を返す。】

　初夏の兆しが見え始めた頃、夕暮れになるとようやく風紀委員の労働から解放された。
　夏服制服の裾を翻し紫乃はジリジリと蒸し暑い夕暮れ時の帰り道を急ぐことにしたが、黄昏色に染まる校内の屋外プールに人影を見つけた。
　何故そこにいるかわからず、紫乃はこっそりと気づかれないようプールの内部へと侵入した。

「よお！　伊波！」
　無地のＴシャツにジャージというラフな格好で、デッキブラシを支えにして一息吐く山本武。一段落ついたようで彼がふと顔を上げたところに、入口前でこちらを見つめる紫乃に気づいた。
「……そんなところで何をやっているんだ？」
「これか？　グラウンド借りて自主練やってたついでだよ。水泳部の奴が一人で最後の仕上げまでやってたんだけどよ、電話でばーちゃんが急に入院したって言うから代わってやったんだ。早く行かせてや

りたいだろ」
　そんな彼は、白の無地のシャツを濡らして、ずぶ濡れの格好でお気楽に言う。この男はまた……と紫乃はもう言い返す気にもなれない。彼の前で何度目の大仰な溜息を吐く。
　初夏の香りを運んでくる風を背に受け、乱れる髪や制服にも構わず紫乃はプールサイドへと近づいた。
「相変わらずお人好しだなんだな」
「ハハッ、伊波に言われると満更でもないぜ」
　向こうも気を悪くすることもなく、お決まりの軽いノリで返している。
　彼とのこんなやり取りも、一年前の今頃には想像もしなかったことだ。

「これで後は水を汲むだけだぜ」
「そうか……山本」
　清掃作業も大詰めのところで、蛇口に手を掛ける山本武にここに来る前に自販機で買ってきたペットボトルに入った飲料水を投げる。
　野球で鍛えた反射神経で難なくそれを受け取る。彼は笑った。
「ハハッ、ありがとな。しっかし緑茶ってのはちょっと渋くねーか？」
「甘い飲み物は骨を溶かしてボロボロになるぞ」
「なんだそれ、ガキかよ」
　子供の迷信じみた話を意外と真に受ける彼女に思わず笑いがこみ上げる。学年で十番以内の秀才である彼女が真面目に言うので尚更面白い。

　放課後もとっくに過ぎていた誰もいない屋外プールの一角に、彼とこうして二人だけでふざけ合う。
　クラスでも明るいムードメーカーである彼は、彼女から一番遠い存在のはずだった。
　話しかけられた頃は、何かの気まぐれだろうと軽くあしらっていた。落ち着けばまた元通り。白紙のような毎日。けれど、彼は違っ

た。

彼女のレンズ越しの視界に、夕暮れ時の山本武の姿は眩しく見える。錆びれたフェンスに漏れる夕暮れの光は、どこか寂寥感を助長させた。

彼女がどれだけ泣いても、怒っても、一方的に拒んでも、あの笑顔で彼女を受け入れてくれた。素直になれない自分に、ゆっくりでいいからと、歩み寄ってくれようとした。

そして、彼との時間が過ぎていくに連れて気づいた。彼が情けだけで接してくれているのではないんだと。この心は彼に蝕まれていたんだと。

「山本」

彼はきっと、自分の声に振り返ってくれる。自分の声を遠くにいても聞いてくれる。

「あの日……公園で君が私に好きだと言ったことは、本気なのか？」

薄桃色に染まる公園で、あのベンチで君が告白してくれたことを、君はまだ憶えているだろうか。

「ん？　そりゃあ、冗談で言わねえぜ。伊波のことはもちろん好きだぜ！」

紫乃は、きっと自分でも知らないところで、密かに期待を込めていた部分があったかもしれないと、ようやく気づいた。気づいてしまった。

ずっと返事を待たせてしまった。その気持ちと向き合うには、随分と遅くなってしまった。

「……君が、どんな意図でそう言ったであれ、私は君の気持ちには応えられない。それは詫びの品だ。もう約束は守れない」

屋外プールに敷き詰めたタイルの上を踏みしめて、彼女は長く待た

せてしまったあの日の返事をした。
彼の夢も、自分は壊した。だから、気持ちも殺した。
二度と振り返らないよう、伊波紫乃を貫いて、彼のもとを去ろうとした。

「待ってるぜ」
プールの向こうから、山本武の声がした。
気持ちを込めた力強い声だ。思わず振り返りそうになる。

「約束したぜ。今は無理でも、伊波が来るまで、俺は準備万端にして待ってるぜ」

ああ、なんて、君らしい発想だな。

黄昏色の景色に染まる君の姿を、せめて忘れないように――……初夏の風に背中を押されて、彼女はその場を後にした。

さよならと告げる彼女に、あの時どんな言葉をかけてやればよかったんだ。
あんなことを言いながら、寂しさと取り繕った虚勢に押し潰されそうな目をしていた、あの時の彼女に、まだ具体的な名前を知らないこの想いを打ち明けてみたら、もしかすればもう一度立ち止まってくれたかもしれない。

【放課後、夕暮れ時の、二人だけの屋外プールで、山本武との縁に終止符を打つ。

それでも、彼は〝待ってる〟なんて、最後まであのバカは人が良いにも程がある。

もしも、違う形で出会っていたなら、きっと好きになっていたんだろう、彼のことを。

それとも、伊波紫乃でなければ、彼と巡り会えたことを運命には赦されなかった。皮肉なものだ。

こんなにも涙が溢れ出るものとは知らなかった。知りたくなかったよ。こんな涙の味なんて。】

ワトソンの直感

【七月九日
七月に入った。二ヶ月を切った。
日直の仕事を黒川花に押し付けられたらしく、沢田綱吉が誰もいない教室でおとなしく作業しているのを通りかかった廊下で見つけ、彼に気配を気づかれないようにそっとエールを送った。以前の君とは、もう違うんだな。】

その翌日には、ランボ失踪事件が起きる。
翌朝の沢田家のリビングではいなくなったランボを心配して沢田奈々が顔を青ざめている。それを助長するようにリボーンが物騒なことを口にするものだから、これは誘拐事件ではと話は大事になっていた。
深刻になる母親を落ち着かせるため適当にあることないこと言うと何故かランボ捜索を任される事態に陥った。
意味わかんない！　と内心否定しつつも、リボーンや心配する母親にまでおだてられると見事その気になってしまう。単純である。
結局その話を受けてしまい、自分の部屋に戻ると早速作戦会議に入る。しかしワトソン役に助手の方かよ！　と、自分の方はちゃっかりホームズのコスプレに身を包んだ赤ん坊に文句も言ってみたはいいが、そもそもランボ捜索にあまり関係ない。
昨日五時頃にランボが誰かに会っていた旨を話し、犯人は沢田綱吉の共通の知人であり五時頃のアリバイがない人物。
そこまで確定して、彼の友人達に当たることにした。

朝早くから登校して彼の友人達に聞き込みをする沢田綱吉を見た。
ランボ失踪事件に関して紫乃の方はスルーする気でいたが、教室で沢田綱吉から話しかけられた。

「あ、あの、伊波さん……ちょっといい、かな？」

まさか彼の方から話しかけられたことに目を見張るが、あのホームズ気取りの男の入れ知恵だろうと見抜く。前回には子供ランボと接触したからな。

溜息も吐きたくなるが、あの彼が積極的にあまり関わりのない女子に話しかけているんだ。内心はランボを心配しているんだろう。

仕方ない、付き合ってやるか。

「何」

紫乃が付き合ってやる気になったというのに、紫乃の目が合うと途端に引き下がる沢田綱吉。……ガンを飛ばされたと思ったのだろうか。紫乃はなんだか悲しくなる。

「え、えっと、ごめんね、き、昨日の夕方頃の予定を聞きたかったんだけど……」

「昨日の夕方頃か？　委員会活動中だったな。応接室にいたよ。裏を取るなら雲雀に聞け」

疑われるのも御免なので淡々とアリバイを言ったが、雲雀恭弥に酷く敏感に反応している。青ざめている様子を見て、言わない方がよかったかと思い改めた。

「そ、そっか……その、ごめんね、時間取らせちゃって……」

「謝るな。君に謝られると虫の居所が悪い。さっさと行け」

彼にそんな風に申し訳なくされると紫乃の立場がなくなる。気にするなと手で追い払おうとするが、沢田綱吉はまだ紫乃の席の前でオドオドとしていた。

「え!?　ご、ごめ……いや、その、ありがとう、伊波さん……」

ペコリとその変な頭を下げて、沢田綱吉は行ってしまった。

それでいいんだ。彼に礼を言われる筋合いもないが、紫乃はそれで

満足だった。

【七月十日

沢田綱吉にはすっかり怖がられてしまった。別に構わない。君が仲間達と未来をともに歩めるなら、こんな自己犠牲心も悪くないものだ。

礼を言うのも、君に謝るべきなのは、私の方なんだ。最後まで嫌われてしまっても構わない。だから君に、大空のボンゴレ十代目になってほしい。】

ランボを連れて帰り、部屋でひとまず落ち着いたところで、沢田綱吉は不意に思い出した。

「あっ」

それは教室で話をした伊波紫乃のことだった。

昨日の放課後、日直であった沢田綱吉は仕事を終えて帰ろうとした時、日誌を忘れるという痛恨のミスをしていた。慌てて教室に戻り日誌を取りに行くと、教壇の机に置かれていた日誌を見つめる彼女の姿を見た。

彼女がこちらを見ると、緊張してドアの前で固まっていた沢田綱吉は、近づいてくる彼女に手渡された日誌を受け取り、彼女の背中を呆然と見守ったのだ。

あの時、自分に直接あの放課後のことを話していればよかったのに……。

彼女はどうしてあんな嘘をついたんだろう?

謎は深まるばかりだが、元気でうざい奴が帰ってきたためまた子供達の世話にこの時も振り回されてしまう沢田綱吉だった。

夜空に咲く夏の花よ

並盛神社では毎年この時期に夏祭りが行われていた。
夜には盛大な花火が夏の夜空を彩り、この日一番の盛り上がりを見せるのだ。
そんな日に居候の子供達の世話を頼まれ神社の祭りへとやって来た沢田綱吉。神社に着いたところで屋台へまっしぐらな子供達に呆れながら、憧れのヒロインと海のように夏祭りに来たかったなと届かない妄想をするのであった。
しかし夏祭りの屋台でも何かと悪目立ちをするリボーンを避けチョコバナナの屋台に近づいたところで、級友の獄寺隼人と山本武に出くわす。
どうして二人がここに!? と沢田綱吉が反応している間に彼の家庭教師の男がどこからか現れ、七夕で壊した公民館の壁の修理費を稼いでいるとのことだった。
話を聞いたところで獄寺隼人に「一緒に頑張りましょう、十代目」と勧誘され、バナナ５００本完売に巻き込まれることになってしまった。こうなった原因の赤ん坊に文句を言いながら仕方なく手伝うことにした。

「五万」
「ヒバリさんーーー!?」
いきなり並中の風紀委員の登場に思わず腰を抜かしそうになる。しかもその頂点に君臨する猛者、雲雀恭弥本人である。失神しなかったのが不思議なくらいだった。
屋台のショバ代を風紀委員に払うという伝統があるらしいと知り、また拒めば物理的に潰されると聞いてショックを受けた。うちの風紀委員地元最凶!?
五万の札を数えている雲雀恭弥に更なる恐怖を刻まれていたとこ

ろ、沢田綱吉の隣にいた山本武がおもむろに口を開く。
「あっ、待ってくれヒバリ！」
「や、山本!?」
風紀委員とあまり関わりたくない沢田綱吉は、山本武が彼を態々引き止めたことに焦りを感じていた。山本武が下手に何をやらかすかわかったものではない。地元最凶を怒らせたらと思うと彼は生きた心地がしなかった。
沢田綱吉のそんな不安もよそに、最凶の男を呼び止めた本人はしれっと話しかけている。
「伊波は今日来てねーのか？　ちょっと話してえことあんだけどよ」
こんな場面で、伊波紫乃の話題は最悪の地雷である。
それを耳にした雲雀恭弥がピクリと反応する。沢田綱吉の生気は抜けかけた。
「……山本武。君とは二度と会わないと言っていたよ。君はここで咬み殺してもいいけど、まだ仕事が残っているからね」
風紀の男は山本武にその言葉を言い残す。彼が立ち去ると、周辺は少しずつ祭りの活気を取り戻していた。
沢田綱吉は夏休みに入る前に彼らの間にあったことを知らなかった。雲雀恭弥の言い残した台詞に落ち込み、それでも友人の前で無理に笑っている健気な山本武を彼はもう見ていられなかった。

祭りの賑わいは中盤に差し掛かり、仄かに夕暮れの空が鮮やかな紅の色に染まりかかる頃、少し先の境内付近で他の風紀委員とショバ代を取り締まる彼女の姿を探した。

「紫乃」
他の風紀委員に彼女の居場所を尋ね、表の露店の賑わいから少し離れた場所で数名の風紀委員と合流する彼女の姿を見つけた。
背後の雲雀恭弥に気づき、帳簿をつける紫乃の手が一旦止まる。風紀委員会が回収したショバ代の会計を彼女は担当していた。

雲雀恭弥の姿を見ると、その他の風紀委員はそそくさとその場を離れ彼らを二人にする。
「回収の記録は取ってある」
「そう、助かるよ」
彼女の仕事量は雲雀恭弥の期待以上である。記録を取らせれば一度でもミスを犯したことはない。彼女の処理は常に完璧である。風紀委員会の活動においての彼女の優秀な腕を彼も信頼していた。
しかし、完璧に振る舞うそんな彼女のこの頃の些細な異変を、雲雀恭弥はその鋭い野生の勘で察していた。
「そちらが回収した記録もまとめておくよ」
「紫乃」
「……何」
眼鏡を掛ける彼女の視線が、彼を下から睨み上げている。多くの人目に付く今日の委員会活動では、彼女に眼鏡を掛けさせてあげていた。
二人きりの空間で、彼女の視界を阻むそれの存在が彼には煩わしい。たとえ彼女に隠したいことがあろうと、自分には全てを晒け出してほしいのだ。
「彼を切り離した理由って？」
「……なんのこと」
あくまでとぼける彼女、その声に被せて彼は続ける。彼女の目が、俄に苛立ちを憶えていたことも見透かしていた。
「まだとぼけるんだ。気づいてたよ。君を見つけてからずっと見ていたんだから。君の気持ちが、あの草食動物を見ていたこと。君が彼を庇うから、草食動物から君の全部を無理やりにでも奪い攫うのを心待ちにしていたんだけど、わからないな。君の思うところ」
応接室で見守っていた。彼と二人きりの時も、彼の目を盗んでグラウンドの様子を窺う彼女の健気な横顔を……。
ムカついた。咬み殺すのは簡単だ。けれどそれで彼女の心を束縛

できるのとは違う。いつかあの目を、自分だけに向けてくれる日を待ち望んで、静かに機会を待った。

けれど、彼女は自ら身を引いたようだ。彼女の中身が皮から抜け落ちたようだと思った。まるで夏の終わりを迎える蝉の抜け殻のような彼女の横顔を、見て見ぬふりをしてやり過ごすことでしか、プライドを保てなかった。

「……なんだ、私を咬み殺す気にでもなったのか」

「いいや、むしろ逆だよ。今の君は咬み殺してもつまらない。もっと、燃えさせてよ」

廊下ですれ違う彼女を見つけた時、普通の奴らとは違うあの瞬間に惹かれたものを、彼女の特別な魅力のように……その唯一無二のもので、もっと自分を魅了して、狂わせてやりたい。陶器の肌を撫でる。本当のところは、彼の方が彼女に酔っていたかもしれない。

心も身体も、狼狽する君の唇を強引に奪って、溶かして、彼女の真紅の瞳は、自分の手に堕ちていけばいい――……。

風紀の仕事がまだあると残して去る男を見送り、表通りから外れた林の中の幹にもたれて俯く紫乃は、大きく吐息を吐いた。口腔にはまだ彼の吐息が籠っていた。

あんな強引な男に不覚にも頬を染め上げ、内側から滲み出る罪悪感に嘔吐感を握り潰す。負けてはダメだ。気持ちを強く持つ。

桜クラ病に罹り……今はもう彼に利用価値を見出していない。紫乃があそこにとどまる理由はなかった。しかしあれほどあの男が自分に依存しているとは思わなかった。さっさと咬み殺されていればよかった。

ひとつの胸にとどめられず溢れ出る片鱗を、人知れず青草の上に落として、罪深いとこぼした。こみ上げる感情に飲まれないよう気持ちをゆっくり整理しようとした。

背後から忍び寄る影にはまだこの時気づかなかった。

神社の境内で何十人という男達が沢田綱吉を待ち受けていた。最悪のリンチである。生命の灯火が消えかかっているのを彼は我が身で感じた。

「美味そうな群れを見つけたと思ったら、追跡中のひったくり集団を大量捕獲……」

嬉しくて身震いするよ、と不気味に微笑みながら再び風紀委員長の雲雀恭弥が乱入する。やられそうな瀬戸際に駆けつけてくれてまさか自分を助けに来てくれたのかとぬか喜びしていたが、ひったくりの金まで略奪する気の風紀委員長にやっぱり自分のことしか考えてねー！　と落胆する。そして自身は死ぬ気弾を撃たれ、乱闘開始間際に今度は友人の二人まで駆けつけてくれた。

露天も出ていない境内は男達による血祭り状態である。

「うわあぁぁ！」

「こいつらほんとに中坊か!?」

沢田綱吉勢力の圧力に押され始める戦況に、草むらの影から男の怒号が響き渡る。

「調子に乗りやがって餓鬼どもが！　こっちには人質がいるんだぜ!?」

リーダー格の男が盾にしたのは偶然彼らの縄張り近くを彷徨いていた紫乃だった。ひったくりの現場を見られたかもしれないと拘束していたが、生温い精神の彼らに人質を見せて動揺させる手もあっ

た。
　野蛮な男の手に囚われ憔悴した彼女の姿を見て、反応する者達が数名いた。
「紫乃ッ」
「伊波！」
　好都合にも知り合いであるらしい人質の少女に刃物を向け暴れる彼らに脅迫する。
「この人質傷つけられたくなけりゃ全員おとなしくし……」
　そこまで言おうとして、男の意識は吹っ飛んだ。その手にあった刃物は粉砕され、男の顔は原型をとどめない程に歪んでいた。

「その汚い手」
「離せよ」

　怖気付くどころか迫りくる男二人の怒気に拘束を離し男はなんとかそこから後退しようとしたが、既に二人の怒りは沸点を超えていた。

「伊波！」
　彼女の手の縄の拘束を解き、ぐったりとしている彼女に懸命に声をかける。憔悴しているが、他に乱暴はされていないようなので安堵した。しかしまだ乱闘は続いている。彼女をこのままこの場にいさせるのも危険である。

「僕はまだ仕事があるから、彼女のことは任せるよ」
　彼女のそばにより容態を窺う彼に、雲雀恭弥が言い捨てる。
　風紀委員長としてひったくり犯を制圧するのと、暴れたい衝動はあった。ここでは彼に譲ってやるが、最終的には自分の手に堕とす。
　今は彼女の保身が重要事項だと言い聞かせ、男は投げやりに牙を振るう。
　彼に任された分も彼女を守ると決心して、彼女を安全な場所へと避

難した。山本武は沢田綱吉の炎が揺らぐギリギリまで付きっきりで彼女の容態を心配し、紫乃のそばを離れなかった。

「その金は君達にあげるよ。じゃあね」

乱闘後、男達の屍の山が積み上げられた他方で憔悴し切った沢田綱吉達に雲雀恭弥はそう告げると彼女の身体を抱き上げて消えていった。

呆然とその姿を見送るしかなかった彼らは、その後笹川京子達と合流し一緒にひと夏の夜の花火を鑑賞した。

色々あったが楽しい夏祭りだったと沢田綱吉は思う一方、視線を逸らし後方にいる友人の顔を見た。やはり彼の意識は上の空を見上げていた。

【八月四日

この日のことは、あまり記憶にない。思い出したくもない。あの男の顔が朧げな意識に残っていたり、あの男はまた暴れていたり、気づけば病院のベッドの上だった。消灯した一人の室内で、部屋の窓から見える花火の明かりをぼんやり見ていた。】

もう後悔しない

【茹だるような夏の暑さにやられる頃、夏休みの委員会活動に出向こうとした途中、なまはげが連行されていくところに遭遇した。夏の暑さも吹っ飛ぶ衝撃である。

ついでに沢田綱吉の姿もあった。ついで呼ばわりしてなんだが、彼もご苦労様だ。しかし、三浦ハルは本当に何をしているんだ……。

数日後のお盆には、あの殺し屋から再びコンタクトがあった。どうやら肝試しの人数が奇数になり足りないようなので数合わせとのことらしい。ついでか。人のことは言えないが、少し悩んで話を受けることにした。無論妨害するのではなく、確かめることがある。夜は肝試しへと赴いた。

ロメオの悪霊が沢田綱吉を引き摺りこんでいる間に、私は帰路へと着いた。準備は万端だ。今宵の空は、新月であった。】

夏休み最終日。

紫乃はブラブラとコンビニ袋を提げ、帰る途中に道端のボンバーヘアを見つけた。住宅街の道端でぐずり泣かれると放置するか少し悩む。

結局可哀想に思い彼のそばに近づくが、リボーンにやられたのか顔がパンパンに腫れていた。悲惨だ。あの男も随分と容赦ない。

紫乃のことを憶えていたのか、ぐずりながらも人肌恋しく紫乃に抱きついてきたランボに、これはもう離せないなと早くに諦めた。

片手にランボをあやし、何かないかと漁ったが、自分でも呆れるほどチョイスが渋いものばかりだ。無難に豆乳を選ぶ。ちなみに新作のチョコレート味だ。

ジュースだよと半分騙してランボに渡す。好みに合えばいいがどうだろうか。そのまま紙パックに入ったそれを渡したが、今度はストローをさせないとぐずり出した。マジか……これは沢田綱吉も大変である。

「ランボ～！　どこまで飛ばされたんだよ～！」

紫乃が代わりにストローをさしてあげ、チョコレート味を地道に飲んでいるランボをあやしていると、そこにようやくお世話役の沢田綱吉が駆けつけた。

遅い。紫乃は言ってやりたかったが、沢田綱吉に怖がられるのも地味に落ち込むのでグッと飲み込んだ。

「ってえええ!?　いい伊波さん!?」

紫乃が黙っていても結局これだ。愛嬌など備えていないので自業自得なのだがなかなかに辛かった。

「あまり目を離すなよ。この辺りも物騒だからな」

それに将来ボスの君に付き従う大事な幹部となる男だ。今はウザいだろうが長い目で見てやれ、と沢田綱吉にランボを託した。

彼女の反応に固まっていた沢田綱吉がありがとう……と控えめに応え、続けて彼女に切り返した。

「い、伊波さんの家って、この辺なんだ?」

この近所にあるコンビニの袋をぶら下げる彼女にそんなことを尋ねた。ただ何気ない会話だった。緊張気味だった沢田綱吉に、紫乃は顔を逸らしていた。

閑静な住宅街に、そして紫乃の声が響いた。

「……沢田綱吉」

発声のいい彼女の声に、ピクリと彼の身体が反応する。なんというか、逃げられない声だ。彼は改めてクラスメイトの女子に緊張して声が上ずった。

「もし明日、世界が終わると告げられたら、君は何をする?」

「え？　えと、なんで？」
「……10年後、20年後、君は、今の君ではなくなってしまっているかもしれない。綺麗事だけでは救えない世界を見ているかもしれない。でも君は、間違っていない。胸を張れ、そして、後悔するのも程々にしろよ」
彼女と眼鏡越しに合った目が、まだ彼女が何かを言いたそうにしてそうして煮え切らないようにしていた。それは、小さな違和感だった。

この夏が終われば、彼らの日常は崩れ落ちる。

沢田綱吉らと別れ、紫乃は一人の帰り道を歩いた。ああ言ったくせに、いつも後悔するのは自分の方だ。苦笑した。
だからこの夏を最後にする。後悔は、捨てる。彼女は星が輝き出す夜空を仰ぐ。
そして彼女は最後の夏の空を見上げた――――。

黒曜編
そして悲劇の幕は上がる

二学期が始まった並盛中学校では、週末明けから不穏な空気が生徒達の間に漂っていた。全校生徒が週末明けのとある報せを受け胸中の不安を煽られていた。

その原因というのは、この二日間の間に並中の風紀委員が無差別に襲われるというものだ。

不良同士のイザコザならまだよかったが、今朝になり立て続けに一般生徒が襲われている。並中生が無差別に襲撃されているこの理不尽な現状に、生徒達の不満は風紀委員会に向けられ、彼らの支配権はさらに生徒達を束縛し、更なる混乱の事態に陥っていた。そこに一部の生徒の反感を買い風紀委員会の支配権が機能しなくなるも事態は深刻化する一方で、明日は我が身だと誰もが自分の身に起こるやもしれない不幸を案じていた。

紫乃はこの日を待ち望んでいた。

【九月九日

土日で風紀委員八名が何者かに襲われた。襲撃者達は己らのことを隣町ボーイズと名乗った。襲った風紀委員達の歯を工具で抜いていく奇行を犯し、その者達に深い恐怖の根を植え付けた。】

この騒ぎに並中の猛者、雲雀恭弥も酷くご立腹の様子であった。

今朝の登校時間に相次いで並中生がやられたとの報せが入り、雲雀恭弥の機嫌はここ数時間で急激に悪くなる。地下マグマが噴火寸前のところである。紫乃でさえ迂闊に近づけないかもしれない。あの

持田剣介やバレー部主将の押切までもがやられ、名のある生徒が無差別に襲われる現状に静かな苛立ちを募らせているようだった。

全く身に覚えのない悪戯だ。ムカつく。縄張りを荒らされることはこの男が一番嫌うことだ。

しかし彼はこれまで収集した証言から、ほぼ見当がついているようだった。あの歯のカウントにも既に気づいていた。

週末明けにその報せを聞いた紫乃は、今朝早くから応接室を訪れていた。

そして敵地に乗り込むという雲雀恭弥の身を案じ、このまま並中の風紀を穢されるわけにはいかないという彼の言い分に押し黙る。潔く引き下がり、眼鏡の奥の目を伏せた彼女。彼は紫乃にクスリと微笑んでみせた。彼女も滅多に見ない穏やかな彼の表情である。

「行ってくるよ」

「ああ、気をつけて……」

閉まる扉をしばらく見つめ、紫乃は深く息を吐いた。ついに、始まる。

今まで仕方なく隠してきたが、煩わしいと思えたその伊達眼鏡を取り除き、血に飢えた赤眼の目を見開く。

幕は上がった。途中で下ろすことは許されないこの世で最も悲しい悲劇の舞台が――。

もう引き返せないところまで来てしまった。

彼らの未来を犠牲にしても守ると誓う。己の罪深さと、あの人の死を無駄にはしない。あの頃に誓って。

これが、彼女にできるせめてもの償いであると信じている。

そうして彼女は脳裏に思い浮かべた沢田綱吉の身を案じるのであった。

霧の男

草壁哲矢がやられたのを紫乃は病院で見届けた後、人知れずところで動き出す――。

その頃、沢田綱吉の方は片道で偶然すれ違った雲雀恭弥の報せを受けすぐに並盛中央病院内の笹川了平の病室へと駆け込んだ。

幸い彼と会話をするのに支障はないが、襲いかかってきたその人物に一方的に負かされ挙句には差し歯まで抜かれていた。

例の並中生の間で大事となっている無差別襲撃事件と重なっている。彼もその標的にされたのだ。

一体どうして……と沢田綱吉の方が深刻そうに頭を悩ませるが、襲われた本人の方はあまり気にしていないので、心配してお見舞いに来たことを彼は少しばかり悔やんだ。

しかし、こんな頭の螺がズレている先輩でも、憧れの笹川京子の兄上である。

妹を心配させないよう無茶な作り話で誤魔化す彼の姿には思わず胸を痛め、同時に目の前で涙ぐむ想い人に、自分は気の利いた台詞を言ってあげられることができず彼は手持ち無沙汰のまま病室を静かに出てきた。

身近な人が標的にされ、彼も少なからず混乱していた。そこで同じように見舞いに来ていた同級生から詳細を聞かされるや、ようやく無差別に先輩達が襲われ始めている内情を知った。

なんでそんな恐ろしいことにー!?　とショックを隠せないでいたところだ。病院の廊下を通る風紀委員会副委員長の草壁哲矢達の会話を偶然盗み聞きする。あの時の雲雀恭弥が、どうやら敵地に乗り込んだという朗報に、これで万時解決だとダメツナ達は抱き合って喜んでいたが、彼の家庭教師だけは徐々に迫る得体の知れない暗雲を予期していた。

標的にした男の変わり果てた屍を、楽な仕事だったと余韻に浸かりながら眺めていたところだった。

六道骸のもとに息を殺して静かに迫る黒い影、予期せぬ刺客の気配に彼はすっかり自身の中に思い描いていた幻想に取り憑かれていたことを自覚する。

「おや……」

並中の制服を纏うその女子生徒の姿に、六道骸は嘆息した。

「これはこれは、珍しい客人が訪ねてきたようだ。麗しいお嬢さん、歓迎しますよ」

会場の玄関前で直立不動のままこちらを睨む彼女の姿を視界に収め、快く迎えた。

眼鏡の越しの顔は正直パッとしない印象だったが、よく通った鼻筋に秘事を固く閉ざす魅惑的な唇……そして、彼女の目つき……見つめるだけで言い知れない闇を覗くような不安を掻き立てられる眼差しだ。

吸い寄せられるように彼はその女と視線を絡めた。どこか自分と似たものを感じる。目を惹く真紅の赤に染まり、その美しさとは裏腹に闇の部分を見てきた瞳だ。

廃屋内のガラクタの陰に身を潜んでいたのを六道骸に見破られ彼の眼前に自ら姿を曝した女の容姿を見て、六道骸は事前にインプットしていた情報を掘り起こす。

「君は確か……地べたに這いつくばるこの男と、親密な関係のようでしたね……伊波紫乃……もしやあなたが……」

在籍名簿の顔と名前を一致させると、彼の果実頭に面白いことが浮かんだ。今まで見落としていたひとつの可能性に気づいて、思わず愉悦をこぼす。

「クッ……ハハッ……それならそれで傑作だ。女性であるからと、ボンゴレ十代目である可能性を否定することはしませんよ。歴代ボンゴレのボスには血統があれば女性でもなれたようですし」

はなから冗談でこの男が言ってるのか真意は定かではないが、否定しておく。

やはり脱獄直後で、まだ十分な情報収集をしていないようだ。

「残念だが、私はボンゴレの血統ではない」

「おや、ハズレでしたか。いいえ、当たりだ。ボンゴレを知っているのか」

やはりボンゴレの情報は伝わっていないようだ。やけに反応が機敏だった。

紫乃は今更包み隠すことはないと、廃屋のアジトにのさばる不気味な笑みの男を正面に睨む。

「確認しにきただけだ。とは言っても、確認するまでもなかったがな」

紫乃は自身の足元を見下ろす。その足元に倒れ伏せる桜クラ病患者を、道端に転がる石同然に見下ろすのであった。

一方的にやられたであろう男の変わり果てた姿を前にしても、思いのほか動揺していない。六道骸はじっくりと腰を据え観察していた。対面する女の冷静で素っ気ない反応にはつくづく疑問だ。彼のリサーチによると彼らは男女の仲に近しい関係であったのは間違いない。

しかし、目の前の彼女は、まるで六道骸の仕打ちに堪えていないように見える。むしろ、何を安堵しているというのだ?

「目の前で倒れている男は君が慕った男ではないのですか?」

「この男の身勝手には辟易していたところだ。死なない程度に好きにしてくれて構わない」

死ななければどんなにいたぶられようと骨を砕かれようと、この男なら立ち上がるだろう。彼の孤高のプライドがそうさせる。

まるで自分がこの女の思惑通りに駒を動かされているようだ。そんな違和感を会話と言動の節々に感じていた。

六道骸は、自身の眸子に刻まれた六の文字に女の姿を焼きつけた。

どれほどの男が、彼女の特殊な色彩に魅入られ、騙されたのだろう。罪深い眼差しだ。

己の忌々しい二色の色彩と対比させながら、六道骸はそう思ったのだった。

「……安心しろ。私は、お前の敵ではない」

その女の言葉は続く。

「――――が、味方でもない」

その語りかけによる真意は、彼女の純血よりも濃く海底より闇に魅入られた色彩からは読み取れなかった。

「クフフフ、君が僕の味方かどうかなど関係ない。ここで殺すのですからね」

口調を早め、心臓の奥から高鳴る鼓動を聞く。静寂の中でその声明は大きく反響する。

己が何の焦燥感に駆られているのかはわからない。ただ、目の前の蔑むような目線を寄越すこの女が気に入らないのだ。

死に際に後悔するがいい。

六道の目に不敵な笑みを浮かべ、紫乃のもとに実体のない脅威が、すぐそこにまで迫っていた。

ちぎれた相棒の尻尾を見つめ、思考に集中していたところに病院前で襲撃された草壁哲矢が担架で運ばれてきた。その時の大勢の者達の衝撃も計り知れないが、集中治療室に搬送される途中の草壁哲矢を捕まえ、そしてリボーンはあの事を確信する。

敵の思惑に勘づいたなら、標的である自分の生徒を動かさざるを得ない最悪の事態になり得るかもしれないと、リボーンはとうとう腹を括ることにした。

その裏には、もしやあの女が事件の一端に関与しているのではと、言い知れない大きな不安の種があった。

故障

神妙な顔つきの赤ん坊にたじたじになる沢田綱吉だった。深刻な顔で何を言い出すかと思えば、喧嘩を売られていると突拍子もなく宣言するこの家庭教師の赤ん坊に彼は一体どういうことやら、混乱する現状の中でどうにか不安を取り除こうと彼の言葉に耳を寄せた。

すると小さな赤ん坊は彼にあるものを寄越す。ランキングだ。マフィアの情報屋と名高いランキングフゥ太が密かに作成していた『並盛中ケンカの強さランキング』に沢田綱吉は目を通す。作成日はつい最近のものだ。

赤ん坊に促されランキングにある並中生の名簿の下位に並んだ名前を見て、これまでに襲われた並中生のものと完全に一致している。得体の知れない黒の孤影が身体を這い上がるような嫌悪感がした。これはカウントダウンだと言う。ボンゴレである自分をおびき出すための……。

そんなことに巻き込まれる覚えはないが、現実に今直面している問題だ。

自分にはどうすればいいものかわからない。しかし、ゆっくりと名簿を読み上げる中でそのランキングの最上位にある人物の名前を認識して、沢田綱吉は衝撃を受けた。

彼らがランキングの存在に勘づいた他方で、黒曜では彼と彼女の平行線の睨み合いに終止符が打たれようとした。

彼女の頭上にまで迫ろうとした実態のない攻撃は、確かに彼の六道の能力で創造した完全無欠のものであった。

しかし、それはまるで最初からその存在を肯定されることもなく、目が覚めると忘却の彼方に忘れ去られる不安定な存在のように、彼女

の目前ではらりと霧散した。
彼が仕掛けたはずの地獄道の幻覚は、彼女のあの目に見透かされた。
並の者がまぐれで避けられるような代物ではない。彼女は確かに彼の実態のない攻撃を見破った。幻覚の攻撃を無効化できる者はそれに耐性を持つものだけ。大抵なら専門に幻術を操る者か、しかし術者ならこんな局面には自身の幻術で対抗するのが定石である。
彼女は術者ではないのだろう。しかし、六道骸ほどの男の幻術にも耐性を持つ人物……。

「ほう……幻術に耐性があるのか……面白い。こちら側に付きませんか？　あなたならきっと僕と分かり合えるはずだ」
このままでは一筋縄ではいかないと彼は察した。彼らの一番の目的はボンゴレである。まだ敵の戦闘能力も未確定の現状で、得体の知れないこの女とやり合うのはリスクが高い。
ボンゴレ狩りに向かわせた彼らが戻るまで、ここで上手く会話に縺れ込ませこの女の情報を引き出すことができれば幸いだが、六道骸の誘いに対する彼女の返しは冷めたものだ。
「二度も言わせるな。私は敵でも味方でもない。あくまで君達を見守る立場に在る。そして、確信があるからだ。ボンゴレ十代目はファミリーとともに逆賊を討つと」
やはりこの薄情な女は見透かしているのか。応じないなら仕方ない。無駄な労力は浪費したくないが、こうなれば自ら重い腰をあげるしかないようだ。
どうやらボンゴレの情報を持ってはいるが、口は固いようだ。自分達と同じく何か魂胆があるように見えるが、交渉決裂ならば殺すしかない敵。
彼女から聞き出さずとも己達でボンゴレ十代目の情報は手に入る。

「気に入りませんね。やはり殺します」
「君に雑魚を相手にしている暇はあるのか？」

土埃が舞うのを長い年月に廃れたカーテンからの木漏れ日が反射する。

外の光から背を向けた彼は、対照的に僅かな木漏れ日を受ける女の、背後の闇に潜む猛獣の姿をその視界に入れ、愉悦を漏らす。

どうやら早いところ自分の仕事を終えて退屈しているようだ。ちょうどいい。いい土産がここに落ちている。

彼女の目を盗み、その闇に潜む猛獣に合図を送る。

「いッたらきいいぃ!!」

紫乃の背後の隙を突いてそこから出てきたのは、ウルフチャンネルを装着済みの城島犬だ。

その女のガラ空きの首筋へ噛み付こうと素早く飛びかかる。上手く隙は突いていた。身体能力が桁違いのウルフチャンネル、普通なら避けきれるはずもない。

猛獣の牙が涎を垂らしながら彼女の首筋に食らいつこうとする。彼女の顔より大きな獣の手鉤がすぐそこまで迫ろうとした。

その刹那、紫乃は僅差で体勢を変えた。その手には仕込んでいた拳鍔が握られている。のうのうと懐に入り込んでくる刺客に、素早くその一撃を振るう。こめかみにヒットしたそれは紫乃のふた周り大きな図体の獣を広い場内の壁にまで吹っ飛ばした。

その束の間に起きた一部始終を悠々と鑑賞した六道骸は、あの不気味な笑みを浮かべて紫乃に驚嘆した。

「ほお……見かけによらず野蛮な小娘だ」

「加減はした。少し経てば起きるだろう。満足か?」

「ええ、あなたの手の内を見られたのはいいことだ。その格闘スキルなら、さすがの僕も無傷では済まないのでしょうか」

城島犬を囮に上手く彼女の謎に包まれていた手の内を確認することができた。しかし攻略となると現時点ではまだ条件が合わない。ボンゴレを手に入れる前に無駄な疲労は避けたいところだ。

城島犬を殴った血が拳鍔とともに彼女の手を汚すが、頬にまで飛び

散った血を顧みず彼女はこんな提案を彼に持ち込んだ。

「君が思うよりボンゴレ側はここに迫ってきている。私は君に手を出さないし、邪魔もしない。優先順位は明白だが、どうする?」

その言葉を信用するほど、これまでの彼も能天気ではない。幼少に受けた傷が彼の心までも侵略した。もう誰も信じない。自分を利用する奴は、逆にその身が擦り切れるまで利用してやる。

現時点で彼女の提案に六道骸は頷いておく。泳がして隙を見せたところを、次は仕留める。

もうすぐボンゴレを手にする彼に、恐れるものなどない。

「いいでしょう。僕の計画に支障はない。ないものは食いこませるまで……」

絶対的自信と自負をその六道の瞳に宿す。六道骸という男は、狂気的で情熱的な野心を抱いた曲者のようだ。

「その前にお聞かせ願えますか? あなたは、何者だ」

男にそう問われ立ち竦む紫乃は、言い淀んだ声音で細々と呟いた。

「きっと何者にもなれないなり損ないだ。なり損ねたんだきっと。あの人の娘に……」

まるで答えにならないその女の応答に、六道骸は眉を顰める。

彼女にどこか自分と重なる片鱗を感じていたが、気のせいだったのか。序盤に彼女に語りかけた言葉は、あながち冗談ではないような気がしたが、むしろ一生相見えない部類かもしれない。

「君も、知っているだろう。この世は残酷なんだ。たとえ何度輪廻を廻ろうと、君がずっと見てきた世界の闇は消えない」

どこまで行っても、光が当たるところに闇は存在する。それはこの世界が均衡を維持するための真理というものかもしれない。

まあ、この男ははなから世界平和など望んでいないようだが。己の野望が叶えばそれでいいのだろう。

君にはどこまでも突き進んでほしい。

あの軟弱なボンゴレの十代目が、復讐に人の道を外した君を、正しい方向に必ず導いてくれる。だから、安心して、突き進むところまで、今は間違えればいい。

「え、エラー（error）……？」

ランキング最上位に書かれていたのは、〝ｅｒｒｏｒ〟というたった五文字の英語表記のみ。

中学生英単語を理解するのも授業ではままならない沢田綱吉だが、マイブームのゲームに出る英単語はこの時偶然読むことができた。

そしてフゥ太のランキングに、そんなゲームのような表記があるのか？

彼の単細胞はさらに複雑に混乱を招くことになり、自分の頭では手に負えないと言い淀んだ声色で自身の家庭教師に助けを求める。

「な、なにこれリボーン？　故障？」

生徒の不安の声に耳を傾けることはなく、彼の脳裏には終始あの女の影がチラついていた。

血に刻んだ野望

そんな単純明快なことを語る女に失笑した。

六道の目を手に入れる前から彼は既に悟った。こんな世に見出す価値などないと。権力に縋る男達の憐れな末路を見届け、こんな大人達しかいない世の中糞だと。価値もないのなら壊してしまえ。

彼は、やり直したいのではない。ただぶっ壊したいだけだ。そしてこの手に堕とすまで。

この六道の瞳に映る世界諸共、血の海に染め上げて、俗界の中に木霊する人々の嘆きにそっと耳をすます。

今の彼にはそれだけでこの上なく喜ばしいことだ。

説教じみたことを淡々と彼に語り、踵を返すその女を牽制する。どこへ行くのかと、地べたに這いつくばる男をまさか放置して一体どこへ向かおうとするのかと。

これほどの挑発を受けて、この女に好き勝手に動き回られるのも彼には具合が悪い。ボンゴレのことで誤魔化しているようだが、この女の言動にはこちらの情報も恐らくどこかで手に入れている。

早いところこの女を殺しておかなければ、そんな男の思考も見透かすように霧の中で女は振り向く。

「安心しろ。逃げる真似はしない。またここには戻ってくる。彼のこともあるしな……」

六道骸のことなどはなから眼中にないかのように、暗闇に浮かんだ女の横顔はからりと余裕だ。

暗がりにぼんやりと窺える表情は、何も恐れていないようである。幻覚も、死も、全てをこの身に受け止めるという覚悟に燃えた女の眼つき。

彼――そう言って彼女は、会場の隅にじっと蹲る少年に目を寄越す。

彼女の視線の先には、マインドコントロールされた彼が、苦しい顔つきでその手にランキングブックを大事に抱える。

「すまない。まだ幼い君を利用して……」

人としての道を間違えたことは重々承知している。しかし、彼女ではダメなのだ。彼でなければ。きっと彼女の声は、少年には届かない。

こんな自身も、汚い大人の手と同様に染まってしまうのだろうか。おぞましく、血塗れの手を細かに震わせ、自己を崩壊させる幻想が頭を過った。

病院前で襲撃された草壁哲矢は五本の前歯を抜かれていた。すると次に狙われるのはランキング４位の人物が妥当だ。

沢田綱吉はランキングの紙面に視線をスライドさせ、その順位に該当する者の氏名に身体が戦慄した。

彼の負け犬根性がゾクゾクと震え上がる他方で、そんな自身を日頃暴力的に宥める役目の家庭教師でさえ、この現状はかなりヤベーとこぼしている。あの雲雀恭弥が、未だ敵地に乗り込んだ以降連絡が途絶えている。これはかなり深刻な事態であるとさすがの沢田綱吉も察する。

新学期早々の不穏な事態に困惑する沢田綱吉であったが、その後家庭教師の赤ん坊に念を押され、病院から抜け出して次の標的となる人物に報せなければとすぐさま学校方面へと引き返す。

彼の直感は、嫌な予感がしていた。

途中障害もあったが、なんとか学校まで着くとそこで早退したと教科担当の教師からの連絡を受け、沢田綱吉は次に飛び出した道端で偶然拾った他校生達の会話から、商店街方面に向かったという有力な情

報を手に入れる。
すぐさま友人の身を案じ、商店街へと駆け出した。彼が向かうと同時に商店街方面で謎の爆発がした。そこでは既に戦闘の強烈な跡が残っていたが、道端で呑気に煙草を蒸かしている獄寺隼人を見つけて酷く脱力感が襲う。
まさかとは思ったが、見事に刺客を返り討ちにしてしまった彼にさすが普段から爆発騒動で面倒を増やしているのは伊達ではないと、つくづく納得するのであった。
しかし、彼らは油断した。

「逃げて……ください……」
「獄寺君！」
自分を庇い負傷した獄寺隼人に駆け寄る沢田綱吉。しかしすぐに敵の脅威が迫る。
あんなボロボロの身体でも、ボンゴレを連れていこうとする彼らの死に物狂いの執念に、すっかり身体が竦んで、動けなくなる。

絶体絶命のボンゴレのピンチに、滑り込みセーフと駆けつけたのは山本武だ。
偶然通りかかったようだが、友人が倒れている現状を冷静に見て、腸が煮えくり返っているようだ。詳細も把握せず、眼前に立ち憚る黒曜の制服の男子を睨む。
相手は彼の人相を見ただけでランキング3位の生徒であると見抜いていた。やはり学校側の情報は向こうに奪われている。
山本武の力量を見て下手に深追いすると向こう側の都合で揉めるだろうと判断した相手は潔く引き下がり、ひとまずは窮地を脱した。
地面に倒れ込む獄寺隼人をすぐに治療するべく、都合がつく並中の保健室へと早急に運んでいくようだ。

それらの一部始終を、物陰にひっそりと潜んでいた紫乃は確認し、

再び黒曜方面へと踵を返していった。

煩い

授業が午前中に終わり、この日は教室にいる生徒の数も極端に少なく疑問を抱いた山本武は、正午も近い時刻に一人暇を持て余していた。

通学路をブラブラと帰宅していたが、途中近所のバッティングセンターで暇を潰そうと行き先を変更する。寄り道の最中に教室でクラスメイトから聞いた週末明けからの一件をぼんやりと想起する。

ここ二日で、風紀委員会の輩が立て続けに何者かに襲われている。彼の脳裏には、あの日の伊波紫乃の姿が過ぎる。初夏の香りと、この胸にほんのりとしょっぱい後味、蜃気楼を眺めるように揺らぐ彼女の背中を、引き止められなかった。あの日を境に、彼女は再び遠い存在となった。出会う以前よりもずっと、遠い。

あれから、なんとなく山本武の方から話しかけることはなくなった。そして、必然的に彼女との束の間の親密な関係はぱたりと途絶えた。なんとなく、話しかける勇気が持てなかった。

今までならこんなことなかったはずなのに、自分が関わるせいで彼女を思い詰めさせるくらいなら、断ち切るべきなのか。

またあんな彼女の表情は見たくない。

彼女もまたあの男がいる風紀委員会の一委員である。

例の事件とは、関わりがあるのだろうか。彼女が巻き込まれない保証はどこにもない。

そうなると彼はいてもたってもいられなくなるが、結局のところ彼にできることは何もない。彼女を想うだけでは、彼女のために何もしてやれないのだ。

彼女の隣にいるのが自分ではないことを日々痛感し、胸を痛めた。いつも彼女のそばで見守る役目なのは、自分ではない。あいつなんだ。

大会前のコンディションが優れないではない。特に最近はカルシウム不足でもない。

それならば、あいつに対するこの感情は、何だろうか？

最寄りのバッティングセンターへと向かう道中だった山本武は、すれ違い様に他校生達のとある会話を耳に入れた。すぐそこにある商店街で、銀髪の並中生と黒曜の輩が喧嘩しているそうだ。

咄嗟に普段から喧嘩っぱやい友人の獄寺隼人の姿が目に浮かんだ。彼のことは日常茶飯事のことであるから、また他校生に絡まれて買った喧嘩だろうかと山本武は呑気に考えていた。顔くらいは出そうと商店街方面に踵を返した。

商店街に着くと、真っ先に沢田綱吉の姿が目に入った。

すると彼の足元には、ぐったりと獄寺隼人が倒れているではないか。あの負けん気だけが取り柄である奴が、白いシャツの胸元から血を垂れ流している。

沢田綱吉の方に目をやると、白のニットを被った緑色の制服の男が、片手に何かを操り迫っている。あれに獄寺隼人はやられたのか。

彼にもかなりヤベー事態であることはわかる。その場の状況もわからないまま、咄嗟に身体が動いた。内心足が竦んでいた。雲雀恭弥には、二度も軽くあしらわれる力量しかない力不足の自分だ。

だが、今はそれより、目の前で友人をいたぶられた直面に、彼は静かな怒りに震えていた。

輪郭

敵襲後、すぐさま重傷の獄寺隼人を並中の保健室へと運んだ。あそこには例のタラシ保健医が在駐している。案の定男は見ないと一蹴されたが、保健室のベッドくらいは貸してやると許可が下りた。昔のよしみであることはこいつらには内緒だ。

ボロボロの身体でベッドに横になる友人の姿を、自分にはどうしようもないやるせなさと罪悪感に押し潰されそうで、不安定な精神状態の中で沢田綱吉は見守っていた。隣では山本武が獄寺隼人の姉につこく絡まれているが、今の彼にはそれを気にかける余裕もない。

このような深刻な事態に遭遇し、内心取り乱したい気持ちでいっぱいだった。けれど、自分がどうしたって現実は友達を傷つけてしまったことに変わりはない。彼の姉に申し訳なくて、合わせる顔なんて見つからない。

「山本、伊波紫乃は来ていなかったんだな?」

「おう」

こんな時に事件と関係のない伊波紫乃の話を赤ん坊が持ち出してきて、二人の会話に注目する沢田綱吉であった。

何故こんな非常事態に、クラスメイトの伊波紫乃のことであるのか。彼らの会話を聞くと、今日は登校していなかったそうだ。

その時、いつかの自室でのリボーンとの会話を、沢田綱吉は思い出す。あれは、一年の秋の終わり頃だろうか。

沢田綱吉はその日いつものように学校から帰宅し、早々に部屋に籠る予定だった。しかし、先客がいた。いつものように沢田綱吉の部屋を私物のように占領するあの家庭教師の赤ん坊だ。

その姿を視界に入れて、この間の中間テストの成績のことが瞬時に頭を過る彼だが、赤ん坊が振り返ることはなかった。何かに意識を集

中しているようだ。飛び蹴りが飛んでこなくて安堵した彼は、赤ん坊が握る書類の束の中に紛れている知り合いの人物の写真に、思わず反応していた。

「え？　伊波さん……？」

「なんだ、ツナ。帰ってたのか」

沢田綱吉に背中を向けていた小さなシルエットが振り返る。つぶらな瞳と目が合うが、それより沢田綱吉は混乱していた。

「いや、ていうかリボーン……なんで伊波さんの写真なんて持ってるんだよ……それアングルからしてまさか盗撮……」

「帰ってきてグズグズうるせーぞ。物理的に黙らせてやろうか？」

沢田綱吉は、特に何もしていないはずなのに、このままでは飛び蹴りよりもおっかないものが飛んできそうで口を噤んだ。今は下手に刺激しない方がいいと、人並みの直感で悟る。これも彼の経験の賜物である。

「伊波紫乃は、ファミリーの筆頭候補だぞ」

おもむろに赤ん坊がそんなことを言った。

沢田綱吉もこの腫物のような空気には耐えかねていたが、それを言葉にされると彼はどう反応していいかわからず再び沈黙した。

彼女のことは、将来的にボンゴレと関わることだ。この場で誤魔化しても仕方ないと、リボーンは口を割ってみたが、しかしまだまだ未熟な彼にはどうして唐突にクラスメイトの女の子の話題なのか察しが悪いようだ。

「あのヒバリが目かけてたくらいだからな」

「ええー!?　あの人誰よりも群れるの嫌いなんでしょー!?」

先日の応接室強襲や体育祭での地獄のような思い出を振り返り、あの時並盛川に落ちた寒気が彼の全身を襲う。

あんな恐ろしい人に目を付けられるなんて、彼女もなかなかの苦労人であるのかもしれないとその苦労を労る沢田綱吉である。

「山本やヒバリだけじゃねーぞ。獄寺もそうだ」

次から次へとクラスメイトや先輩の名前がリボーンの口から飛び出し、何かが引っかかる沢田綱吉は戸惑いながらもやや前のめりに反応していた。

「はあ？　獄寺君と伊波さんが何!?」

「山本やヒバリと決定的に違ってんのは、あの二人には全く接点がないことだ」

ぽかん、とまるで内容に追いついていない生徒の反応を無視して話を続ける。

「以前にクラスメイトの伊波紫乃について獄寺に尋ねてみたことがある。あいつの性格はお前もよく知ってるだろ。お前ら以外の他のクラスメイトの顔と名前を獄寺が認知しているなんてそもそも珍しい話だぞ。あいつは〝転校初日にそいつと目が合った〟と話していたが、獄寺も無意識に伊波紫乃のあの眼つきに、何かを感じ取ったんだろうな」

そう言われて、あの時の不可解なリボーンの言動を彼は思い出す。

彼自身もまた、教室で見かける彼女の凛々しい横顔がとても印象的で、目の前にいる彼につい話したこともあった。

あの頃はまだ彼女と小さな会話を交わしたこともなかったのに、黒髪の隙間から覗く白い輪郭には、この胸が惹かれるものがあったような気がする。

伊波紫乃については、謎が深まるばかりだ。

「ボンゴレ次期後継者であるお前は勿論、獄寺に山本……そしてヒバ

リ、全員俺が目をかけていた奴らだ。こんな偶然があるのか？　お前ら全員が、伊波紫乃と繋がる節がある。日常生活の普遍的な意識の中であの女の印象を植え付けられてるとでも言っていいくれーだ」

それは彼女の意図的であるのか、そうではないのか、この期に及んで真相は確かめられなくなった。

けれど、沢田綱吉の脳裏にふと過ぎるのは、あの夏の終わりに少ない会話を交わして別れた彼女があの時最後まで言葉にしようとはしなかった、どこか寂しそうにしながら自分に何かを言いかけた、いつも教室で見ていた伊波紫乃の横顔だった。

”もし明日、世界が終わると告げられたら、君は何をする？”

「どうして……」

”君は、間違っていない。胸を張れ、そして、後悔するのも程々にしろよ”

「君は、どうして俺にあんなことを……」

今もまだ眠り続けているだろうか。

その紫乃の声に、耳を傾ける者はいない。けれど、もうすぐだ。時は近い。どれだけ待ち続けようと、引き返すことはもうできないんだ。仄暗い意識の底に、彼の幻想を見た。

君しか

雲雀恭弥を相手にするのも飽きたのか、起き上がった城島犬に階下の空き部屋に運ばせると、不気味なオッドアイの双眸が舞台袖にいる紫乃を睨む。

「その少年に随分と入り浸っているじゃありませんか」

マインドコントロールに罹ったフゥ太を見て、そいつが言った。そいつの表情に、これまでの罪の意識は一切ない。彼のような切り捨てる器でなければ、マフィア殲滅など謳わなかっただろう。

「ボンゴレの情報を手に入れられていない現状では、君が彼に手を出すこともない。彼は、私にとっても大切な人質だ。君が既に彼と契約し、マインドコントロールで私の隙を狙っているようだが、私の計画に支障を来すようなことがあれば、ボンゴレが君の手に堕ちる前に……わかっているだろうな」

マインドコントロールに関しても、こちらの情報が筒抜けなのか。どこまでも六道骸にとってやりにくい女だった。

この女の正体が気になるところだが……ここで口を割ることもなさそうだ。挑発したところで彼女の純血の眼に牽制されるのは容易に想像できた。

六道骸の方で、彼女に関する情報が何かないかと模索してみたが、十数年の長期に渡る監獄生活の中で、これといった有力な情報を得られるはずもなく、これだと思しきものも考え至らなかった。

ボンゴレを迎え撃つ前に、自身が冷静を欠いているのを自覚していた。眉間には珍しく皺が寄っている。あの女ごときに自身の計画を狂わされていると思うと、衝動的な怒りが襲った。

視界に入るのも不快だった。しかしマインドコントロールで探っても隙を見せないその女は、六道骸を前にして哀れみの表情を浮かべ

た。

「……君には、できることならこんな真似はしてほしくなかった」

そう上から物を言う女に、六道骸の機嫌は損なわれるばかりだ。しかし、自身が操られてはいけない。平穏を装い、六道骸らしく、薄笑いを刻む。

「クフフ、何故です？　神という男は、地上の者に平等に死を与えた。人に生きる権利があるなら、彼には僕の駒となりその若い生命を以て散らす権利がある。〝契約〟ですから」

どこまでも残酷になれるこの男だからこそ、沢田綱吉の霧の守護者は彼にしか務まらない。

誰よりもマフィアの闇を見てきた彼だからこそ、大人達の晒し者にされる中で死に物狂いに戦ったからこそ、その死を恐れない拳を彼とぶつけ合う価値がある。

ここまでのし上がった彼の過去の背景は紫乃も知るには至らないが、幼少の頃に傷を負った屈辱を知る者なら、過ちを繰り返すべきではなかった。紫乃も同じだ。それ以上は追及しなかった。

外から物音とともに、錆びた扉の隙間から何かが飛び出した。ボンゴレ狩りの途中に重傷を負った柿本千種が屋内の床に転がり込んできた。

ピクリとも動かない柿本千種を迎え入れ、クフフと彼が冷笑を浮かべる。徴発的な目を紫乃に向けた男が茶化すように告げる。

「僕が先にボンゴレを手に入れるか、あなたが僕を出し抜くか、すっかりわからなくなりましたね……」

彼女にも結果はわからない。彼女にもわからないことだらけだ。
けれど、やらなければならない。彼らを見捨てる選択なんて、彼女にはできなかった。あの人の死を、無駄にはできなかった。

君の気持ちが、痛いほどわかるんだ。

望まない権力、この身体に背負いきれない圧力、逃げ出したくなる。逃げても解放されるはずもない。
不幸にするくらいなら、この身体がボロボロになろうと戦ってやろうと決めたんだ。結局は、何の力にもなれずとも……。

君が、背負わなければダメなんだ、ボンゴレの性を、君を巻き込んでしまって、今でもすまないと思っている。

頼む。沢田綱吉。後悔させないでくれ。

右腕を庇う理由

沢田綱吉率いるボンゴレが正面突破を図った。悪臭が漂うので、ジャングルのように茂る木陰のひとつに潜んでいたが、酷く気分が悪くなった。

仮に姿を見られても差し支えないよう、黒のフードを全身に羽織りボンゴレ達の動向を窺っていた。

正門前を右往左往しているボンゴレ達のもとに、忍び寄る影が背後から迫る。既にドーピングを済ませた城島犬だろう。紫乃の方から視認はできなかったが、狙われている彼らの方はまだ敵の気配に気づいていない。

そして沢田綱吉に付いてきた山本武が穴に落ち、城島犬と邂逅した。

沢田綱吉の記憶にあった動植物園は長い年月で地中に埋まっていた。

そこで獣の男と対面した山本武は、最初こそ本来の天然と能天気基質で城島犬を呆れさせていたが、刀を折られるやこれがただの遊びではないとようやく理解したようだ。

「マフィアごっこってのは、加減せずに相手をぶっ倒していいんだな。……そういうルールな」

山本武のやる気が入ると、相手も自身の手の内を見せる。そして山本武に本格的に強襲を仕掛ける。

山本武は咄嗟に右腕を庇っている。野球のためだ。自殺しようとしてまで向き合ってきた野球を、失うわけにはいかないだろう。

そんな窮地に、割り込んだのが頭から落ちてきた沢田綱吉だ。全く

情けない。城島犬に真っ先に目を付けられている。ここまで来て情けないぞ、ボンゴレ十代目。

すると、山本武が獣の後頭部に石を投げつけた。

振り返った城島犬に、こいつぶちあててゲームセットだ、と挑発している。

まんまと挑発に乗った城島犬が、山本武の腕に噛み付く。そのまま身動きをとれない体勢で、男の側頭部に刀の柄を打ち込んでやった。

その一部始終を紫乃は木陰から静かに見守る。城島犬は支障なく倒された。

その後は、沢田綱吉が山本武に駆け寄り謝っていた。自分のせいで大事な腕を怪我させた……と酷く落ち込んでいる。

山本武は、明るく笑って自虐的になる沢田綱吉を慰めていた。これだから情けない。ともあれ、第一ノルマはクリアだ。

「それに、野球を諦めるわけにはいかねーよ。あいつのこと、待っててやんねーとな」

そんな言葉に紫乃の気持ちは揺らぐ。

あんなくだらない一方的な約束を、まだ憶えていたのか。

彼女の方はすっかり忘れてしまっていたというのに、否、忘れようとしていた。忘れなければと、振り返らなかった。

あの日、泣いても、泣いても、君の面影は消えなかった。

「誰だ」

地上にいるリボーンの鋭い指摘に、紫乃は意識を振り戻す。ここで彼らに気づかれるわけにはいかなかった。

「小僧、敵か」

あいつの声だ。こちらの気配を警戒していた。紫乃に気づくはずがない。

そしてその場から彼女は既に退避していた。あの場にいた誰にも正体を知られず、彼女は鬱蒼とした木々の間を軽快に走り抜ける。

あの不意打ちの言葉が今も頭を離れなかった。

この気持ちは本物でも、約束は守れないだろう。彼の気持ちに、こんな不甲斐ない自分には応えられない。彼女には、最後までこの選択しかなかった。

「あの……バカっ……」

決戦の舞台袖

ランチアが倒され、ついに六道骸との決戦へと向かう。
重厚な建物へと消えていく彼らの背中を、ただ見送ることしかできなかった。

【沢田綱吉率いるボンゴレは、最終決戦へと向かう。昨日まで人を殴ることを知らなかった彼が、これから戦おうとしている。私には、彼の覚悟は偉大で。彼の覚悟は、いつも誰かを守るために灯される。
この後悔と血みどろの手に、誰かを守る力はあるだろうか。】

ランチアの解毒を終え、立ち上がる。床に倒れる柿本千種からくすねたものだ。紫乃が態々手を出すことでもないかもしれない。しかし、これくらいのことしかできない彼らへの詫びのつもりだ。

ランチアのもとから立ち去ろうとした彼女の視界の端に、彼が過ぎる。ランチアの攻撃を受け、まだ意識が戻らない。木の幹に寄りかかり安静にする彼のもとに、なんとなく足が向いた。そいつの顔が窺える位置まで近寄り、しゃがみこんでいた。
戦闘の跡が窺える傷だらけの顔を見つめ、その頬に、左の手を静かに添える。
彼の温もり。吐息。鼓動。触れると、懐かしいと感じる。最後に触れたのは、水族館で彼と手を繋いだ時。

ごめん。それを言うだけで、精一杯だった。意識のない彼にここで謝るくらいしか。

自分は弱い人間だから、だけどもっと残酷な人間であるべきだった。この気持ちを肯定するべきではなかった。素直になるなんてやめておけばよかった。せめて、あなたの心までは傷つけずに済んだはずだ……。

彼女の背後の物陰に潜む気配に、紫乃はその場から立ち上がる。そこに潜む猛獣を、これ以上刺激しないようにゆっくりと彼女は振り返る。

「お前、何者びょん……！　骸さんの攻撃が効かないなんてありえないびょん……！」

物陰から吠える城島犬に、紫乃は視線を外さず相手の言い分を受け取る。あの男への深く植え付けられた忠誠心が窺えるな。

攻撃してこないのは、彼の野性的本能だろう。己より圧倒的力量のある相手には、手を出すことはない。

そして紫乃は、こんなことを言った。

「……教えてやろうか？　君が慕う男の幻術を、どう見破ったのか」

ゴクリと、唾を飲み込む音が響く。大人しく話を聞くようだ。それを確認して、彼女は言葉を続ける。

「生物には、生まれながら、生きる環境に適応するための〝耐性〟がある。昔、知人の術師に頼んで鍛えてもらった。幻術への耐性だ。奴の幻術に対抗する術は、どうしても必要だった。その知人には、邪道だと揶揄されたがな」

ひと通り語ったが、内容の半分もこの獣は理解できているかは定か

ではないが、あまりここに長居されても困る。彼にはまだ六道骸の駒としての重要な役割が任されてある。

「山本武が君を倒した後、ボンゴレは六道骸のもとへ向かった。中で獄寺隼人と柿本千種がタイマンをしている最中だ。そういえば、柿本千種にあそこまでの重傷を負わせたのは、あの爆弾男だったな」

現状の話題に話を振れば、ピクリと紫乃に隠そうともしない反応が返ってくる。彼は今、逃げ出すタイミングを図っているだろう。

「消えろ」

そう言ってやれば、一目散に建物へと逃げていく。それでいい。これで駒が揃っただろう。

六道骸。欲望のままに暴れるがいい。君が幾度輪廻を巡ろうと、お前を倒すのは彼しかいない。

青く澄んだ大空に黄昏ていた紫乃のもとに、炎の気配が近づく。禍々しい炎の空間が、そこに大穴を開くようにして現れた。

血と復讐する者

気配に反応した紫乃は咄嗟に身構えた。今まで肌で感じたことのない禍々しいものだった。

何が起きている……!?　状況が理解できないまま、現れたその者達の姿に息を飲んだ。

「コノ男ハ、連レテイク……」

復讐者……!

彼らの黄泉から降臨したかのような格好と、圧倒する存在感に、紫乃も咄嗟に動けなかった。何よりその死骸を包帯で包んだような容貌から紫乃を捉える目は、この世のものとは思えない恐怖を彼女に植え付けた。

思いがけず邂逅したことで、多少の動揺もあった。しかし、予想より随分と早い登壇だ。これも、最悪の事態の予兆なのだろうか。

「……アノ男ノ、ニオイ、ガスル……」

復讐者が、そんな小言を言った。

少なくとも紫乃の存在が、影響を及ぼしている。復讐者の足を止めてしまったのは、彼女の失態だ。紫乃の脳裏に、透明のおしゃぶりをぶら下げたあの赤ん坊が過る。

その刹那、突風が切るように視認できない何かが横切る。鉄臭い刃物のようなその攻撃が彼女の身体を掠ると、同時に熱を持った生々しい液体が傷口を裂いて噴き出す。

「……人間、カ……」

復讐者の一人が撃った鎖の攻撃が、紫乃の頬と腕を骨まで深く抉る。傷口から見慣れた真っ赤な鮮血が辺りに飛び散る。それは紛うことなき自身の血だ。

猛烈な痛みに身体の自由を持っていかれるが、ここで倒れるわけにはいかない。身体を奮い起こし、意識を覚醒する。

視界に入る三体の復讐者を睨む。視界が既に霞み始めている。逃げなければ……それだけが紫乃の頭に過ぎる。

奴らは脱獄した六道骸一味を監獄に連れ戻す仕事が残っている。夜の炎のチャージを踏まえると、紫乃をここで深追いする危険は侵さない。

それを念頭に置き、復讐者から逃げ切るタイミングを図った。二度目の攻撃を負えば助かる余地はない。それに、この場にとどまるほどに彼を巻き込む可能性がある。

膠着状態の最中、紫乃は死に物狂いで復讐者のもとから逃げ出した。殆ど感覚のない腕を振り上げて、林の中をどこへ向かうかもわからないまま走った。

気配を探るが、復讐者は追ってこなかった。夜の炎で紫乃の居場所までワープする危惧もあったが、彼らは当初の目的を優先したようだ。

どこへたどり着いたかもわからない樹海の中、とうに体力が底を尽き、足が縺れるまま崩れ落ちる。

傷口を見れば、彼女の片腕を赤に染める血が溢れていた。長く血を垂れ流し続けて、意識が朦朧としていた。

これくらい、今後の彼らに待ち受ける過酷な運命と天秤にかければ、なんでもない痛みだ。

「っ……クソッ……！」

樹海一体に響き渡る声で吐き捨てた。

彼女にも、彼女の知らないところで何が起きているかはわからない。ただ、自分の存在は、呪われている。全ては、あの瞬間から――……。

どうして、どうして殺したんだ。あなたにとって、彼女はッ……。

彼に触れた左の手を、禍々しい赤い血の色に染めて、紫乃はただ祈るだけだ。夕日のように真っ赤に燃えたあの日の景色を悼みながら、紫乃は大空の覚醒を望み続けた。

小言

爆発と煙幕が彼の小柄な身体を黒曜の床に打ち付けると、目を閉じた彼は己の死を悟った。

最後はダメツナらしく、自分には何もできないまま、薄っぺらい生涯を終えるんだと、飲み込めない悔しさをその胸元に秘めたまま、力尽きようとしていた。

全身の痛みに気が遠くなる中で彼が最後に吐き出した不甲斐ない言葉は、不意にこの耳に届いた懐かしい人々の声に呆気なく押し潰されていった。

自分の部屋で愚痴をこぼす母親の声、クラスメイトが自分の採点された答案用紙を見つけた時の指摘する声、友達が自分のことを心配してくれる声、全てリアルタイムで彼のもとに届く小言だという。

最初こそ、どうして小言なんて聞かされなきゃいけないんだよと気持ちが沈んでいたが、その声が少しずつ声援となり、何もかも諦めかけていた自分への原動力となる。

ここで全てを諦められたら楽だろう。だが、それじゃいつまでもダメツナのままだ。ダメツナのままでもいいと思ってた。

こんなダメツナを信じて任せてくれた人達の気持ちを、簡単に捨てるくらいダメな奴で終わっていいのか？

どんな時も、自分は周りの人の声に助けられてばかりだ。今もそうだ、彼らの言葉で、こんな自分はまだ粘ろうとしている。

沢田綱吉は、引き剥がされそうな意識を離さぬよう必死に繋ぎとめようとした。

沢田……綱吉……。

また、誰かの声がした。

記憶を掘り起こすと、あの夏の最後に、言葉を交わしたか細い少女の声だ。

……君は、間違っていない。迷うな。突き進め。見失うな。掴むんだ。下を向くな。戦いを恐れるな。前だけを見ろ。

それは、悲痛な叫びだった。教室で見かけた少女の、思いがけない悲痛な魂の叫びだった。その震えた声が、彼女自身に言い聞かせているようにも、沢田綱吉には聞こえていた。

いつも窓際で、何を考えているかわからない彼女の横顔が、腫れていた。悲しみや怒りや悔しさを、小さな器に詰め込んで、張り裂けそうな苦しさを必死に押し殺しているような目元に、沢田綱吉の心は突き動かされた。

君は、私にないものをちゃんと持っているじゃないか。羨ましいよ……。

彼女の俄に震える口元から漏れたそんな小言、彼にはどう受け止めていいかはわからない。

どこにいるかも彼には見当がつかない生い茂る林の中、彼女の左半身から指先まで垂れ続けている絶望の一滴を含んだ赤黒い液体に、覚醒をこの時に迎える彼の覚悟はドクリと疼いた。

グローブを嵌めた右手が無意識に動き、敵の一撃を受け止めた。
彼の全てを背負う覚悟がグローブに炎を灯すまで、彼女の小言は沢田綱吉の意識に永く木霊した。

終わりとそれから

黒曜の襲撃事件から数週間後、並盛には再び平穏な日常が舞い降りていた。

本日は、並中野球部秋の全国大会ということで、あれから事件の傷も癒えた沢田綱吉達は野球部の活躍を期待して観戦に来ていた。

山本武が打った球が会場のフェンスを飛び越えて、見事ホームランを当てると観覧席の熱気も盛り上がる。友達の活躍に興奮する沢田綱吉一行も、観覧席の中で特に目を引く騒々しさであった。そんな彼の周りは苦労が絶えないようだ。

観覧席の和気藹々とした光景を、グラウンドからベンチまで戻ろうとする山本武は微笑ましげに眺めていたが、彼は不意にその視線を外して、周囲の観覧席を見渡した。見つけられるなら、彼女の姿がそこにいないか。

この日彼の視界に少女の姿は見受けられず、あの日一方的に押し付けた約束を彼はいつまで待ち続けられるかと、その胸中に募る不安を隠しきれなかった。

沢田綱吉連中の暴動に観覧席がざわつく傍で、幼児の身体を借りた六道骸は、並盛中の制服に身を包んだ少女と邂逅を果たしていた。

「君でも幼児の未熟な身体では、沢田綱吉の身体を乗っ取るには不便だろう」

「クフフフ、態々声を掛けるとは、僕に何のご用でしょうか？　その身体を提供すると申し入れにきましたか？」

彼の器と相性のいい身体をようやく手に入れたとしても、不安定期

の未熟児の身体を操るには容易ではないはずだ。今回は諦めてくれたらしい。これで少しは懲りてくれたらいいのだが、この男に限ってそれもない。

「安心しろ。私より、君の器に相応しい身体は近くにいる。ただ、忠告だ。どれほどマフィアを憎もうと構わないが、人の心を捨てた者に待つのはそれ相応の罰だ」

子供の器を借りた六道骸に、紫乃は言いつけた。

忠告するまでもないことだった。口が開いたのは、この胸に刻むためだ。ここからは、歯車が狂った運命を、導く為に。

「貴女は、どうなのですか」

六道の片目が、こちらを睨んだ。

見透かしているんじゃないか、と紫乃はそれ以上僅かな心の隙間を狙って潜り込む霧に干渉されるのを避けるように、秋晴れの日が差すアスファルトの地に視線を伏せた。

腕の傷は、まだ痛む。

「クフフ、見逃すには惜しかったですかねぇ。彼」

一際盛り上がる歓声とともに、アナウンスが響き渡る。山本武が、場外ホームランを当てた報せだ。

その報せを耳に入れても、紫乃は真下を見下ろすまま、歓声に湧き上がる会場には振り返らなかった。

「なんて、少しカマをかけました。しかし、否定はしないのですか」

「……これ以上、誤魔化して何になる」

これ以上、嘘を重ねて、虚しくなるだけなんて、馬鹿馬鹿しいだろ。

「ちゃおっス」

並中襲撃から数日後の、以前と変わりない日常を取り戻した頃のこと。

深手を負った沢田綱吉らは、現在も療養中だ。彼らがいないことで少しだけ物寂しい教室から一人抜け出した。

廊下の先を軽快に進む彼女のもとに待ち構える小さなシルエットと邂逅し、無表情を貼り付けた仮面が剥がれ落ちそうだった。

「今日は伊達じゃねーんだな」

彼女の視界を遮る銀縁のそれを、この日紫乃は外していた。その左半身には、黒曜襲撃事件からまだ癒えない傷の跡が残る。

小さな彼の存在をまるで見ないようにして立ち去ろうとした紫乃だが、数歩離れた廊下の先で、彼女は不意に足を止めた。

「そんな話をしに来たのか」

確認の意味を込めて、問いかける。まさか、そんな無駄話をするために態々紫乃の前に現れたわけではない。この男の目的は明確だ。

「……フゥ太のランキングブックに載っていた〝ｅｒｒｏｒ〟って文字……。お前なら、心当たりがあるんじゃないかと思ってな。沢田家光にも既に話は通してあるぞ」

沢田綱吉の父親であり、門外顧問の男――。

その名前を赤ん坊の口から直接聞くことになるとは、ようやく実感が湧いた。避けられない運命のレールの上を彼女は今、歩き出したのだと。

「どうなんだ」

この声色に、紫乃への殺意が押さえつけられていたのは、言うまでもない。制服の下、彼女の左半身を覆う白い包帯を貫通して、痙攣を起こしたような刺激をその肌で感じた。殺し屋の本領だ、紫乃はクスリとこぼした。

「殺すか？」

今ここで殺すこともできるんだろ？　とその相手を挑発するような視線を投げる。

殺し屋は、しかし彼女に銃口を突きつけることはない。天邪鬼だな、彼のそんな中途半端な慈悲が、彼女の内側に堪えた。憔悴した心は、抵抗ままならず碇を巻きつけられ、深い海の底に沈んでいくようだった。

「君達に有力な情報を持つ私を殺して、君達はまた清算するのか。血で血を洗い流すことに何の意味がある。犠牲の上にしか成り立たない大義なんてものを掲げて、ふざけるのも大概にしろ。彼は、君達の道具（おもちゃ）じゃない」

その声明は、押し殺しきれない怒気を節々に滲ませ、彼女の心を枯らした。過去を、どれほど悔やんでいるのか。その胸に詰め込んで望まない日陰を歩んだか。

今こそ、往年の雪辱を晴らすべきだ。

「ひとつ、確かな情報をやろう。近く、あのリングが動き出す。あの人の警護は万全にしておくんだな」

彼女の舞台は、ここからだ。

「お前……まさか……」

思いがけない少女の告白に、男も殺気立つ目で彼女を睨んだ。既に手遅れだとも知らずに、最悪の事態を想定する男に向かって紫乃は心にもない助言をしてやった。

ひとつだけ、その情報だけで、彼なら理解するだろう。大事な生徒を、傷つけられるわけにはいかない。

女の成熟を待ち続けたその瞳の奥は、今後暗雲を伴うように、艶やかに不気味に微笑んでいた。

それから、伊波紫乃の姿を見た者はいない。

雨と小話
雨日和

例の赤ん坊から厄介な招待状を送りつけられてから、少し経った頃のことだ。

風紀委員会の雑務をようやく終えて、校舎の正門玄関を潜ろうとしたところ、曇天の空からパラパラと降り始めた雨粒の大群に、彼女は日頃からの無愛想な顔を顰めた。

日本とは豊かな四季がある土地だ。この頃は連日雨ばかり。あの男のように鬱陶しい雨が連日降り頻る。しかし、今朝は傘を持つのを忘れて出てしまった。そのことを彼女は今更ながら思い出す。

この脳の細部までここ数日の間に降り続く雨の湿気にやられてしまったか、と深く息を吐く。

応接室までのやけに長い廊下を往復して傘を借りるのも億劫で、ましてやあの男に自分が甘ったれてると思われるのがどうにも癪であり、結局この雨の降る中を帰るしかないと、紫乃はまた深い溜息を吐いたとともにその腹を括ろうとした。

この先の見えない土砂降りの中をびしょ濡れになって帰る覚悟をした紫乃だが、霧のように降り頻る雨のせいで不安定な視界には、彼女が雨を凌ぐ正面玄関へと近づく人物の黒いシルエットが浮かび上がる。

まさか、とその直感を勘繰らせることもなく、部活のユニフォームから何から濡らしている山本武とばったり遭遇する。

「伊波じゃんか。どうしたこんなとこで、って傘忘れたのか？」

野球帽の下の髪までびしょ濡れにした自分のことは棚に上げ、棒立ちでいる紫乃にそんな声をかける。

練習の汗か雨のせいか、中に着るインナーがうっすらと透けている。見なかったようにそいつにろくに視線も合わせず、不貞腐れたように紫乃は頷く。ここで彼と遭遇しなければ一秒でも早くシャワーを浴びれたというのに。

「伊波でもうっかりしたところあるんだな」

「うるさい」

「んなこと言うなら早めに帰りゃよかったのに。こんな時間まで何してたんだ？」

「風紀の雑用だよ」

淡々と無愛想な声で答える。紫乃の頭にはこの男に構うより帰ってシャワーを浴びることだけが念頭にあった。

その返事を聞いた山本武は、これまでの会話の調子を崩さず紫乃に食い下がると思いきや、少しの間を置いて「へえ……」と曖昧に返すのみだった。

山本武が作った空気にふと違和感を覚えた紫乃は、反射的にそいつの顔を睨んだ。

「そういう自分こそそんな格好じゃないか」

「ん？　まあな。気づいたらグローブから何までびしょ濡れになっちまって焦ったぜ」

どんなバカでもそんな格好になるまで気づかないバカなど早々いないだろう。彼は天性のバカを秘めた男なのかもしれない。

この雨の中を帰ってシャワーまでたどり着くシミュレーションの傍ら紫乃は思う。

「伊波と違って傘はちゃんと持ってるけどな」

「日頃から君をバカと卑しめる私への皮肉か？」

「冗談。入ってくか？」

このバカにからかわれるのは屈辱だが、今の彼女には言い返す言葉がない。こんなバカでもこの時期に傘は忘れないものだ。自分の愚かさに、早くこの男から距離を置きたい。

「いらん。雲雀に貸してもらう」

適当な理由をつけて、この男から離れようとした。雲雀恭弥のもとへ傘を借りに行くわけではないが、適当な理由でもつけないとこのお人好しなバカが、ヘタクソな気を回すかもしれないからだ。この男もクラスメイトの帰りを気遣うより、早く着替えたいだろう。個人的に、この男には迂闊に頼りたくない気持ちも多少ある。

しかし、彼のもとを離れかける紫乃を、どうしてか雨に凍えた手で男は引き止める。

「伊波」

そいつの異常な手の冷たさに驚いている紫乃を無視して、そいつはそれよりも彼女に言いたいことがあると言わんばかりの目の奥の鋭さを向けた。

「ソッコーで着替えてくるから待ってろ」

「え」

「ここで待ってろ。いいな」

「山本？」

それだけを紫乃に一方的に押し付けた男は、彼女に待ってろと言いつけて校舎の奥に消えていった。

わけがわからないと置いてけぼりにされた紫乃は、あの男の誘いを断ってこのままずぶ濡れで帰るべきかを逡巡したが、カップラーメンが茹で上がらない間に紫乃を迎えに来た山本武と、結局は同じ道を帰ることとなってしまった。

「しっかし、伊波と二人で帰るのも初めてだよなー」

期待もしていなかったこの男と二人で帰る帰宅の道中に、例によってこの男からズカズカと話しかけてくる。着替えて戻るまでにすっかりいつもの調子に戻り、二人きりでひとつの傘を差して帰るこの状況の中、ヘラヘラと会話できるこの男のメンタル構造はどうなってい

るんだ。
「……そうだな」
「緊張してんのか？」
「するか」
断じてそんなことはない、と相手をよく考えて紫乃は間髪入れず否定する。このちゃらんぽらんな相手を見てもそんなわけはない、と無意識に言い聞かせるかのように、紫乃は自分が吐いた言葉を何度も反復する。
「そっか。俺は結構してるんだけどな」
雨の音がどんどん遠くなる。隣を歩く男の声だけが、紫乃耳を釘付けにした。
「どうした急に」
「伊波と二人で帰ってるなんて実感ねえっていうかさ、まさかこんだけ話せるようになるなんて正直最初の頃は思ってなかったぜ」
普段教室で見かけるような軽い口調で、彼は淡々と告げた。
それは紫乃も同じだった。彼らの中でこの男と一番関わることになろうとは、標的の沢田綱吉をぼんやりと観察していた頃には予想にしていなかった。彼の存在は、彼女には大きな誤算だった。
「あの河原で、初めて伊波と話す前より、教室でお前のこと見てたけど、伊波は教室の奴らなんか見てなくて、もっと別のとこ見てるようでさ」
彼のその話を、彼が差す傘の中で、視線の行き場を彷徨うように俯き加減に聞いていた。それまでは彼の視線を気にしていなかったが、それも彼から距離を詰める度に難しくなってしまった。
紫乃はあの教室で誰の視線も気にしなかった。ただ澄み渡る空を見上げていれば、退屈な空白を過ごすのも苦ではなかった。大空だけは、彼女の希望であった。

そんな大空を今や覆い隠してしまう灰色の天気の下で、彼女の隣を歩くのが、大空とかけ離れたこの男だなんて、昔の自分に想像できただろうか。

「初めて話してから、伊波のことどんどん知りてえと思ったら、やりすぎたり、タイミング間違えてばっかで、何度も伊波に突っぱねられたけど、限界まで自分の気持ち我慢して俺の胸で泣いてくれた時に、俺やっぱりお前のそばにいたいと思ったんだ」

見慣れたはずの通学路も、雨が降るだけで特別な景色のように変わる。透明なレンズ越しに見える景色は、逃れられない運命に枯れ果てるまで流した涙を彷彿とさせた。

この世界に価値もない涙を、あの月の夜男に甘えてボロボロとこぼした。彼女一人には、背負うなんて大義は荷が重すぎた。

せめて、彼のような資格があれば、戦えたかもしれない。沢田綱吉を犠牲にせず、人知れずこの手を汚して彼を傷つけずに済んだと思う。

君のことも、振り回さずに、お互い無関係なクラスメイトでいられただろうか。

「正直、嬉しかったぜ。あの時俺を頼ってくれて。クラスのどいつよりもお前の心に踏み込めた気がしたんだ。だから、もうちょい頼って来てくれてもいいんだぜ。雲雀なんかより、俺を頼ってほしい。あいつより頼りなく見えるかもしれねえけど、どんな奴よりお前の一番そばにいて、お前のこと見ていてやりてーんだ」

お気楽だったり、機嫌を悪くしたり、拗ねたり照れたり、忙しい奴だな。いつも紫乃の想像もつかないことをやらかして、それは容赦ない雨が打ち付けるように、紫乃の荒んだ心に染み渡る。

君に頼る資格など、ないと思っていた。そう遠慮する度に、君を不安にさせていたのかもしれない。

「君らしくもないな」
本当に君に言いたいことは、別にある。けど、これでいい。
「相手の気持ちなんか顧みず、そいつのためになんとかしてやろうと、とことん真っ直ぐに向き合うのが君だろう」
違うのか？　そう卑屈な笑みを向けた。
この男の純粋さは唯一無二だ。仲間の悲しみを洗い流してやれるのは、この男にしかできないことだろう。考えるより、君なら仲間のために最善の行動を起こせるはずだろう。あの赤ん坊の言う通りだ。
皮肉だが、沢田綱吉をボンゴレの未来に導いてやることができるのは、紫乃ではなく彼の家庭教師の男だ。紫乃にはその力量に遠く及ばないことを、彼の成長を見守る中で悟っていた。
限られた時間の中で彼らの力になれることを、いつか彼らが危機を乗り越えられるよう、その信条を信じて疑わず彼女は胸に刻んだ。
「ハハッ、そうだな。自分でもよくわかんねーこと言って、どうかしてるぜ」
穏健な表情に戻り、照れくさそうにはにかむ山本武から、眩しそうに視線を外し、雨の景色に気を逸らす。
仲間のために行動する君は常に正しい。紫乃の言動に左右されず、剣士であるなら自分自身を信じることだ。いつかそれをわかってほしい。
「そこの角を曲がったところでいい」
雨は降り続くまま、とある曲がり角に差し掛かると紫乃は彼に言った。曲がり角を曲がると、ほのかな灯りを照らすコンビニの外観が見えた。
「いいのかこんなところで？」
「ああ。ちょっと待ってろ」
山本武の疑問に、紫乃は返事をする間もなく一人コンビニへと姿を

消した。雨の勢いは止まないままだ。そのまま少しして、コンビニのタグをつけたままのビニール傘を一本手にした紫乃が出てきた。

彼女が傘を購入してそのまま別れてしまうのは想像できた。が、押し付けられたコンビニ袋を前にして、山本武は困惑していた。

「ん？」

「お節介もいいが、体調管理も杜撰な奴に心配されたくはない。これを飲んで少しは反省しろ」

手際良く傘を開いた彼女に押し付けられた袋と彼女の不貞腐れた顔を交互に見つめて、どう反応していいのやらわからなくなった。袋の中のカイロや温かい飲み物を一通り見て、伊波らしいと苦笑していると、挨拶もなくその彼女は帰路に向かって行くのだ。

「さんきゅ、伊波」

彼女には当然のように無視されてしまった。けど聞こえてるはずだよな、と山本武は楽観的に彼女とのやり取りを楽しんでいた。彼女が自分のために差し入れた豆乳味のドリンクは、ほのかに甘い味がした。

「ばーか」

山本武と別れ、彼とのやり取りの一連を思い出しながら、紫乃は何度目のそれを吐き捨てた。

雨が降る度に、思い出すだろう。君との帰り道を。

彼女がシャワーを終えるまで、外は雨が降り続いていた。

頭から降り注ぐほのかに温かい雨粒を、彼女は両手に掬う。外の音と室内の雨音は乱雑に交わっていた。彼女が人知れず流す涙は、雨にかき消された。

夢語り

沢田綱吉の暗殺計画を妨害した後、二人は偵察を終え竹寿司の山本武の自室に籠っていた。

「よし、じゃあ俺達もちゃっちゃと終わらせようぜ」

卓袱台を囲んで山本武がここ一番のやる気を見せる。そんな奴と比べて本来の目的をやり遂げた紫乃の方は課題などもうすでにどうでもよさげである。

ここはやる気のある奴にひとまず任せてみるかと原稿用紙に食らいつくそいつと壁の時計を交互に見守る。

すると山本武が不意にこちらに顔を寄越す。

「んで、何すりゃいいんだこれ？」

「絶望的だな」

原稿用紙と向き合う姿もまるで全然様になっていない。あと十年はかかるな、と落胆する紫乃である。

この男に任せていても課題は終わらないことは早期にわかったので、そいつの代わりに仕方なく紫乃が筆をとることにした。

「つか、伊波のガキの頃の夢がわかんねえんじゃ、やりようがねえんじゃねーか？」

「そんなものは勢いで乗り切るものだ。お前は野球で一体何を教わってきたんだ」

「これと野球ってどう関係あんだよ……」

まさか優等生の伊波紫乃の口から根性論が飛び出し、彼女との会話が思わず後退る山本武であったが、原稿用紙に向かうなり割と真剣に頭を捻る彼女を見て横から口を挟んでみた。

「でもよ、ひとつくらい何か思い出すんじゃねえのか？　子供の頃の夢なんてころころ変わるもんだろ」

「そうだな。花屋とでも書いておくか」

「おいおい待てよ、そんな簡単に決めるもんでもないだろ。もっと真剣に考えてみようぜ」
「普段授業で居眠りしているくせにそのこだわりはなんなんだ」
横からしゃしゃり出るこの男が鬱陶しくて書き出しもろくに思いつかないではないか。
紫乃が文句のひとつも言おうとそいつの顔を睨みつけるが、目が合った山本武は神妙な顔つきで、彼女から視線を逸らさなかった。

「当たり前だろ？　伊波と一緒に課題やれるんだからよ」
「……は？」
相手を黙らせるどころか、こちらが豆鉄砲を喰らうように黙り込んでしまった。それを見て山本武ははにかんでいる。
さらに機嫌を悪くする紫乃に、こんな提案を押し通す。

「んじゃ、今からでも探しに行こうぜ。伊波の夢」

山本武に流されるまま竹寿司を出て向かう先は、白い校舎の外観が夏の日差しに照り輝いている。

「それで小学校というのは安直じゃないか……」
「そうか？　まあ、いいんじゃねえか。久しぶりに来たら色々思い出すもんがあるかもだろ？」
小学校の敷居を潜りながらそいつがまた脳天気なことを言う。これは不法侵入ではなかろうか。
「言っておくが、私の母校は並盛ではないぞ」
「え、まじで？」
驚きに立ち止まる山本武の横を軽快に歩いて校舎方面へ向かう途中、校庭から人影がひょっこり現れて彼らに声をかけた。

「あ、武のにーちゃん！」
　校内のグラウンドで野球の練習をしていたらしいちびっこの男児が、グローブをはめた手でこちらに手を振る。ランボ達よりひとまわり大きな身体の上に、少年野球のユニフォームを揃えていた。
　彼らの声に気づいた山本武が、紫乃の隣から大きく手を振っている。

「よお！　練習サボってねーかお前ら」
「サボってねーよ！　もうすぐ武にーちゃんからホームラン取ってやるんだぞ！」
「おう、こっちも簡単に取らせてやんねーけどな」
　少年の一人が練習を止めて山本武と話していると、他の少年達も徐々に山本武に気づいて彼のもとに駆け寄ってくる。十数人の男児に囲まれるなり、彼らの視線がその男の隣にいた紫乃に突き刺さる。
「つか武にーちゃん、そいつ誰なの？」
「もしかして武にーちゃんの彼女？」
「にしても彼女地味じゃね？」
「武にーちゃん、野球は上手いけど女のセンスはゼロだよな」
　ただ山本武の横に立っていただけで、子供達にこれだけの仕打ちを受ける有様だ。これだから野球をする奴はチャラいんだ。
　根拠のない理屈をでっち上げて動揺を隠す。紫乃をここまで連れ出した本人に不満は募るばかりだ。

「お前らそこまでな。もういいから練習戻れって」
　紫乃の暗い表情を察して、少年達を紫乃から離すように山本武の声が急かす。しかしそれももう後の祭りだ。このバカの隣を歩くだけでこんな仕打ちを受けるんだ。
「いやー、やんちゃな小僧達でほんと参ったよなー」
「君の彼女面をしたつもりはないが、地味な女で悪かったな」
「いや……あいつらもそこまで言ってないと思うぜ……」
　山本武なりに彼女の気持ちを察するが、それが気の利いたことを

言っているかといえば別問題だ。彼が変な方向に気を利かせるとむしろ火の粉に油を注ぐことになる。彼が女心を学ぶには、恐らく十年では足りない。

その後も少年達が並中野球部のエースである彼に監督をしてもらおうと度々山本武の進路を阻み、本来の目的からすっかり脱線して彼らの仲睦まじい光景を外野から眺める紫乃は、グラウンド脇のベンチで退屈から目を背けるように晴天を仰いだ。

熱を帯びた空の下で、渇いた風が紫乃の頬を撫でる。心地良く吹く風の感触が、昔の記憶を呼び起こす。夢を見るように、紫乃は目を瞑る。あの頃の声を思い出そうとする。土を踏む音、跳ね上がる呼吸、彼の大袈裟に笑う声……。

「いーなみ」

視線を上げると、日向から日陰のベンチにいる紫乃を覗き込む山本武の顔があった。思わずあの頃の彼の面影と重ねた。

「お前もやろうぜ、数足りてねえんだ」

それは野球のことを言っているのだろうか。紫乃はぼんやりする意識を彼がはめたグローブに向ける。彼の手元で鈍く光るグローブは、穢らわしい己の過去を清算するための火の粉を散らす炎のようにも見えた。

「……ああ、でも、野球はやったことがない」

「ハハッ、そんな構えなくたってゲームみたいなもんだし気楽に楽しもうぜ」

そう気さくな笑顔で誘ってくるものだから、紫乃は仕方なく頷いた。

しかしそう言った本人が一番の本気で投げてくる球に、大人げないだろと冷めた視線を隠そうともしない紫乃の番が近づく。

「がんばれ！　地味なおねーちゃん！」

「地味なおねーちゃん！」

ベンチから同チームの少年達の地味女コールを受ける屈辱的状況下で、紫乃はバットの柄を握る。

彼女の視線の先には、遊びと言いながらその奥に野性的な眼光を飛ばした山本武。先程までのバカを絵に描いたような山本武はどこへ行ったんだ。彼女の目前でフォームを構える殺し屋のそれと同じ男を、紫乃は睨みつける。

こうなれば、仕方ない。三振さよなら。この男に、はなから素人の紫乃が打てるわけがなかった。すまない、少年達。

負け試合を心中で挑んだ紫乃の真横を、山本武が投げる豪速球が突風に勝る勢いで横切った。一年でエースに選ばれるのは伊達じゃない。

やはりこの試合無理ゲーだ。

”立て”

記憶の片鱗が、紫乃の脳裏を過ぎる。

その男の声は、血だらけの脚を庇い地べたに蹲る紫乃に告げた。

”お前が選ぶのは、ここで立つか死ぬだけだ”

ああ、どうして。

三球目が、紫乃の身体の真横を通り過ぎていく。

そこで、何かの魔が差した。

晴天に響き渡る音と、彼らの頭上を大きく飛び越えていく白いボール。
痛みの中で立ち上がる紫乃が見たあの頃の世界の色に似た、眩しい世界を見た。

「打った……」
「ハッ……まじかよ」
「ねーちゃん早く回って！」
「えっ、あっ」

紫乃が一塁に慌てて向かうが、飛距離が伸び悩んだ球は呆気なく失点となった。
紫乃のチームは、山本武のチームに結局負ける結果となったが、彼の球を打ち破った紫乃の功績は彼らにそこそこ尊敬されるものだった。地味女の格は、少しだけ上がったのかもしれない。

ちびっこ達と別れ、並盛の道を並んで歩き始めた二人は互いにくたびれた様子であった。子供の体力は舐めたものではない。
当初の夢探しという大儀なものも、すっかり汗とともに溶けて流れ落ちていた。

「しっかし、伊波に打たれちまったのはさすがに落ち込むな」
まさか本当に打たれるとは思わなかったのだろう。野球においては真剣な彼だからこそ、そのショックは彼の中で大きい。
「相手が悪かったな。屋上ダイブなら付き合わないぞ」
「へへっ、もうやんねーよ。あの頃とは違って野球以外に大事なもんができたからな」
そう言ってはにかむ山本武の顔つきは、たしかに初めて河原で話したあの時とは大分違っていた。彼の中でどんな変化があったのだろうか、しかし彼が紫乃に語ることはない。

この夏が終わる頃には、きっと彼の声も忘れるはずだ。

偶然通りかかった木造家屋の駄菓子屋で、二人は道草を食うことにした。

彼が小学生時代、野球の帰りによく立ち寄った店らしい。その話を彼から聞いて、紫乃も少しだけ付き合うことにした。

店に入るなり、昔から顔見知りの店主の年老いた女性と会話を咲かせているようだ。

「久しぶりだねえ、武君」

「ちわっす、おばちゃん」

「おやおや、見ない間にすっかり大きくなって、どこの男前かと思ったよ」

「大袈裟っすよ、中学でも相変わらず野球しかしてねえし」

まるで祖母と孫の親しい会話を見ているようで、妙に息の詰まる空間に紫乃は彼らの邪魔にならないよう視線を彷徨わせる。

「おやおや、隣にいるのは武君のお友達かい」

「同じクラスの伊波って言うんだぜ」

「どうも」

駄菓子屋の店主に挨拶をして、店内の棚に陳列される駄菓子を見ることにした。店内の駄菓子に懐かしいなとこぼす山本武を見守る横で、紫乃もチラチラと棚の菓子に目を通す。

なんとなく手に取った可愛らしいパッケージのグミを見ていると、山本武が気づいて声をかけた。

「それってたしか女子がよく買ってたやつだな」

「そうなのか」

「買ってやるよ、負けた奢りな」

バツの悪そうな笑みを紫乃に向けて、そんな囁かな気遣いを見せるこの野球バカには、散々振り回されてもどこか憎めない自分がいる。

こんな気持ちを、言い表す言葉があるとするなら。

「じゃあ、オレこれ！」
「ボクこれね、武にーちゃん！」
「お前らいつの間に!?」
先程グラウンドで別れたちびっこ野球団が様々な駄菓子を持ち寄せて山本武にご馳走になる気満々だ。若さとは図々しい。
山本武の財布事情が深刻になることを予見して同情する紫乃は彼らのやり取りを見守る他方で、駄菓子屋の店主に不意に声をかけられる。
「あなた達を見てると、昔の恋愛を思い出すよ、あたしの昔にそっくりだね」
「え？」
「小さい頃から武君はうちに来てくれたけど、今まで女の子を連れてくることはなかったんだよ。あなたが初めてだよ。彼はお気楽に見えるけど、そういうところはしっかりしてる子だよ」
紫乃の知らない彼の時間を見守ってきた彼女の言葉には、説得力があった。鵜呑みにしてしまえば、紫乃は混乱しただろう。
「どうして、わかるんですか？」
「この歳だとお節介焼きたくなるんだよ。あなたを見てると昔のあたしを見ているようでね」
彼女の視線が追いかける彼の姿は、誰よりも今の彼女のそばにいる存在だった。
だから彼にどれだけ振り回されても、夢探しも、野球も、君と一緒なら楽しかった。嬉しかった。ただ一緒にいる時間が、心地良く感じた。
「惚れた弱み、みたいなもんだよ」
それが彼女のお節介を焼く根拠なのか、彼女の気持ちに向けた言葉なのか、今の彼女にはまだ答えが出せなかった。それは、きっと単純に生まれたものではないから。

駄菓子屋で騒いだ後、結局は全員に奢ることになった彼の懐は寂しそうだったが、公園のベンチで有り余る元気を消費する子供達を見守りながら、不意に紫乃はこんなことをこぼした。

「……あったんだ。昔の夢だが、ひとつだけ。もう一度叶えたい夢が」

紫乃の告白に、どんな?と山本武が聞き返す。その目を見つめれば、彼女の記憶の根底にあった些細な恐怖は吹っ飛んだ。

「故郷の花を、また見たい。春が来ると、日本の桜のように一面に咲く、赤く美しい花なんだ」

公園の敷地を走り回る彼らの姿が、昔の自分と重なる。
春に満開に咲いた花の中を、あの人の背中を追いかけてひたすら走った。
どんな花より、その人の笑顔が見たかった。

「いいじゃん、伊波の夢。絶対に叶えようぜ!」

どんな時も背中を押す彼の言葉は、彼女の大好きな赤い花に込められたおまじないのようだ。
またいつか、会えるだろうか。あの頃の景色と。

「ああ、ありがとう」

それから発表会当日になり、伊波紫乃は学校を休んだ。

彼女の空席を、彼だけはその胸に不甲斐なさをとどめて見つめていた。いつか、彼女自身の夢と向き合うことを願って。

これだから、自分は弱い奴なんだ、紫乃はそんなことを思う。

彼との時間も、夢を語ったことも、嘘偽りない。彼とバカを言い合う時は、ありのままの自分でいられた。

けれど、現実は、彼らを騙し続けていることは変わらない。

膨らむ罪悪感と嫌悪感を後に味わうと、深入りできなくて、また距離を置こうとする。事実から逃げるために、こんなことをしているのではない。

そうして紫乃は向き合う。

この世界と、

過去と、

過ちと、

業火と、

彼らと、

犠牲と、

自身と。

【夢物語はここまでだ。

彼の夢を潰した私には、過去の夢を見る資格などないのだから。君とも、最後にしたい。今まで、ありがとう。】

ＶＳ．ヴァリアー編
動き出した復讐黙示録

【どうしてこの日記を書いたか、わかるか？】

赤い花も、思い出も、とうに枯れ果てた。この世界も、貴方達も、引き返せないところまで来てしまった。

八年の沈黙は守った。口を開いて、この日のために誓った言葉は、変わらない。八年も待った代償は償う。

いつからか、あの頃の花はもう見られないとわかっていた。

【これは、報復だ。】

あの日の絶望の味は、今もまだ喉の奥に引っかかって、咽せ返るような濃い血の味を思い返す。後悔と涙でドス黒く濁っていた。炎で焼き尽くすには、深すぎる闇だ。

何度も間違えた。血を吐いた。縋った。哭いた。

その度に、砕けそうな胸に焦がした想いを噛み締めた。

もう後悔はしたくないんだ。

秋も暮れる週末の昼下がり。
補習をバックれ並盛の繁華街に乗り出した沢田綱吉達は、呑気にも友人同士で束の間の平穏のひとときにうつつをぬかしていた。
紫乃は彼らの行動を監視するため、その広場から遠くない見通しのいい雑居ビルのひとつを選んで、間もなく例のリングを持って現れる奴らを待ち構えていた。
黒曜の襲撃事件以来、彼らの姿を見ていなかったが、教室に彼女がいなくなっても元通りに元気にやっているようだ。
ちびっこ達を連れてゲームセンターへと向かっていく制服姿の見慣れた男の背中を、彼女の赤い目が不意に追いかける。

そこへ爆煙を纏い、お待ちかねの刺客の男が姿を晒す。
長髪の銀髪、暗殺に長けた鋭い眼光、漆黒を身に纏う、その男は……。

並盛の繁華街では大きな混乱を招きながら、二人の男が激しい火花を散らし互いに決死の攻防を繰り広げている。黒服を纏う長身の男と対峙する青い炎を纏う少年は、沢田綱吉を引き連れ一時撤退する。
門外顧問所属のその男を捉え、沢田綱吉に例のリングが渡るその瞬間を待って紫乃は監視を続ける。
少年を退け沢田綱吉に迫る男の後ろから、まともにこの状況も理解していないはずの彼の友人達が相手になると申し出る。無論あの二人に敵うような相手ではない。
山本武が先陣を切るが、瞬殺だった。その後は獄寺隼人の首に、男の一太刀が振り下ろされる。
息を呑む瞬間、男の動きが不意に止まる。

その刹那に、起き上がったバジルがすかさず男の剣を止める。
しかし、満身創痍の彼の身体は限界を前に、その男の剣に軽くあしらわれ、危険な状況であった。
そして、ここで死ぬ気になった沢田綱吉が、男の前に立ちなんとか

戦況を変えるはずだったが……。

「……っと、そんなもん振り回してたら危ねーだろ」

彼女の目に映るのは、バジルが倒れた直後にすかさず起き上がり、彼を庇った山本武だ。

緊張の糸が暗闇の中で張り詰めるのを感じながら、眼下で巻き起こる戦いは、彼女の予期しない方向へと転がろうとする直前で、遅れて仲裁に入る沢田綱吉によってとどまった。

沢田綱吉の死ぬ気の炎と、拳のエンブレムに過剰に反応する男、沢田綱吉にリングを渡すべくイタリアからやって来た例の少年が、男の隙を見て額の炎が消えかかる沢田綱吉を連れ出し、黒箱に納めているリングを取り出した。

彼らが裏で話している間に標的を取り逃がした男と山本武が対峙する。

ボロボロの身体でも、彼はどうしても引く気がないらしい。このままではやられてしまうと、気が気ではなかった。

咄嗟に身体が傾くが、紫乃は動けなかった。

もし彼が目の前で切り刻まれることがあろうと、彼女はその場から立ち上がることはできない。

なんて薄情な人間だ。だから好きになる資格なんてなかった。

男は再び山本武をその剣でなぎ倒し、彼にとどめを刺すのも惜しいようにすぐさま沢田綱吉達のいる建物の裏へと回り込んだ。そして彼らにリングのことを問い詰めるところを、キャバッローネのボスのディーノが駆けつけた。ガキ相手にムキになっているんだと窘められ、機嫌を悪くしながらこの場は引き下がる。しかしキャバッローネの隙を突いて、沢田綱吉の手からリングを奪っていった。

男が去った後の地上では、重症のバジルを匿うため早急に動いていた。ディーノまでが駆けつけるこの事態に混乱する沢田綱吉は紫乃の記憶にあるよりも元気に見えるが、一方で獄寺隼人に助け出された

山本武は、彼の分も傷を負った。

否、山本武の怪我は自分のせいだ。

あの場で動かなかった自分が、山本武を殺しかけた。

必要な犠牲だとわかっている、けど目の前で彼がボロボロになる姿をただ見ているだけなんて耐え難い。何度もその手を犠牲の血で汚した彼女だから、予想できる事態の恐怖は計り知れない。

今後必要になる修行で支障が出る可能性は大きい。

もう彼に合わせる顔もないと、紫乃はその場に立ち止まったままだ。

しかし、彼女の背後から声が掛かる。

「てめえがどうして日本(ここ)にいるんだァ!?」

紫乃の鼓膜を震わせるその男の声に、身体が戦慄を憶える。

安易に振り向けば、沢田綱吉達を襲った男が、自分を凄んだ形相で睨みつけていることを容易に想像できた。

だから紫乃は竦んだ。

「セラン!?」

その名が、彼女の鼓膜を突いた。

視界が真っ白に濁って、紫乃はその声を聞いたと同時に依然混乱の渦中である地上へと飛び降りた。逃げ惑う群衆が入り乱れる中を、遠くへ遠くへと、男の剣が届かないところまで向かって逃げ続けた。

地上にはまだキャバッローネの手の者が彷徨いていることを踏まえ、彼女を取り逃がしたS・スクアーロは、蟻が地面を這うように地上で入り乱れる群衆に向けて大袈裟な舌打ちを浴びせた。

「ちぃ！　どこぞの誰かに似て人の話を聞かねえな〟あぁッ！」

彼女がいなくなった雑居ビルの屋上で一人苛立ちを吐き出しながら、しかしその手にぶら下げた土産ににやりと不敵な笑みを浮かべていた。

「……まあいい、ＸＡＮＸＵＳにいい土産話ができそうだ」

【抗う者に待つのは、破滅だ。

この世界を敵に回しても、成し遂げてやる。二度とあの美しかった景色を見られなくても――――】

暗躍

スクアーロのもとから逃げ切り、騒動が起きた現場から離れた人気のない路地裏へと潜んだ紫乃は、荒く乱れた呼吸を繰り返して、そのまま狭い路地の間に蹲った。

あの男に見つかった時は止まるかと思った心臓が、耳元で激しく唸るように左胸を突いている。まだ、生きている。

やがて呼吸は落ち着いたが、気持ちの整理はできていない。

これから自分がどうするか、どう動くべきか、深い傷を負って今頃悔しさに悶えている彼の顔が過って、落ち着いたはずの心臓が今度は痛いと叫ぶ。

わかっている、逃げていても仕方ないことくらい。

あの男に見つかった以上、逃げ回ることに意味はない。次は連れ戻しに来るだろう。こうなることくらい覚悟はできていた。

無闇に逃げ回ることで、まだまだ未熟な彼らを危険に晒すことはできない。

自分は時間稼ぎだ。できる限り正確に、戦いまでの時間を調整して、確率を上げる。

微かに震えている自身の左手を見つめて、ささやかな自身の想いを込める。

まだ彼のぬくもりに縋る、この左の手に――。

イタリア某所では、緑の深い森林の最奥に聳える古城で、人知れず暗殺者達の密談が執り行われていた。

長年人の手を離れていたように陰鬱として錆びついた古城の、ぼんやりと曇る窓の一面に、とある人影が映る。まるで闇をまるごと吸い

込んで浮かび上がった黒い影は、豪華な彫刻の装飾が施された円卓の玉座に腰掛け、その凄んだ強面で席に着く者達を支配するのだった。

「ＸＡＮＸＵＳ」

そう声を掛けるのは、沢田綱吉達から奪ったリングを携えてアジトに帰還したあの銀髪の男だ。

スクアーロは、アジトに戻るなりこれまでの門外顧問の動きや例のリングについての様々な報告をするに追われていたが、この件に関しては玉座に座る奴に耳の穴をかっぽじって耳に入れてほしいことだった。

短髪の黒髪から垂れる髪飾りが、こちらを振り向いて揺れる。

「こいつが最後の報告だ。日本であの女を見た」

スクアーロが静かに口にする内容に、ボスだけではなく、この場にいる者の顔つきが俄に変わる。薄暗い室内の空気は、感電するようにスクアーロが発した言葉の不穏さをこの場の全員に伝染した。

話の続きをするか、スクアーロはまだ渋っていた。

彼はあの場で起きたことを詳細に、この議会で嘘偽りなく話さなければならない。自ら腕を切り落として彼に見せた忠誠に従わなければならない。

しかし、今ここで事実を大っぴらに話せば、この男はどう動くだろう。今の彼に無闇に吹き込めば、あの日のように怒りがぶり返すやもしれない。彼女の立場は危うくなる。

男の顔色を窺いながら、スクアーロが次の言葉を口にすると、重厚に閉ざされていた室内の扉が開いた。中にいた男達は一斉に振り返った。

そこに一人の少女が姿を見せた。

肩まで切り落とされた黒髪、血管を切り裂いたように染まる真紅の瞳、男達の纏う黒服に似た漆黒の正装を纏って、彼女はそこに現れた。

「セラン……!?」

暗闇に慣れた視界にその少女の姿を捉えると、ガタガタと揺らぎ出す空間の音と、先程とは比べものにならない緊迫感が張り詰める。

誰もが、久しく見る少女の顔と、玉座にふんぞり返り異様に落ち着きを見せる男の顔を交互に見やった。

「ただいま」

開口一番に彼女はその意外な言葉を口にする。しかし、歓迎の声はない。静まり返る部屋で、中央に座る男の顔を凝視する。

長い眠りから醒めたその男は、突き放すような眼差しを彼女に寄越した。

「どの面下げて俺の前に出てきやがった」

男の静かな怒りを纏う低い声、聞いたのはいつぶりだろう。灼熱の痛みに悶える中、あなたの最後の絶叫を聞いた。

今も、その余韻が響いている。

「……二年ぶりに自分の家に帰ってきただけだ。どうやら目が醒めたと聞いてな」

部屋にいる男達の中で、二名だけはその言い回しに反応した。他の者には気づかれない加減で、男達の顔つきが怒気を滲み出している。

「まさか、てめえ……どこまで知ってやがる」

特に中央にいる男は彼女の挑発に過剰に反応してくれた。

ボスの突然の発言に戸惑う者達が多くいる中、紫乃はその表情の乏しい顔に貼り付けた笑みを浮かべる。

「さあ、何のことだ。それに何かを知っていたとして、手塩にかけて育てたあなたの妹を殺すか？」

周囲の戸惑いの声は彼女の淀みない発言にたじろぎ、静まり返った後には核心を突く話が闇一点を見つめる彼女の口から飛び出した。

「八年ぶりの再会だというのに、あなたは相変わらずだ。昔と変わらず、傲慢で短絡的で、八年前の計画の失敗は、仕方がないことだった」

八年前の計画――。

全てはあの日から、こうなることを予期していた。彼の八年という時間を奪ったあの事件から、多くの犠牲を出しながら、嘘も真実も闇に葬り去られた裏切りの瞬間から、彼女の言葉も彼の怒りも、決まりきったことだった。

「でも……二度の敗北はない。あなたがそのリングにこだわるのは、そういうことなんだろう？」

男のその手の中指には、スクアーロが持ち帰ったボンゴレの至宝が嵌められている。

鈍く光るボンゴレの紋章には、これまでのボンゴレの栄光と、底知れないボンゴレの闇が刻まれている。かつて、どれほどの人間が、このリングに躍らされ、無駄な血を流したのだろうか。

やっとあなたが帰ってきてくれたんだ。

ようやく八年前の計画が再起する。長く眠り続けていたあの計画が動き出すことになる。

不意に目配せをして男の背後の闇に佇む鉄塊の巨漢を睨む。

紫乃が気になることとしたら、彼がそのことに気がつくのにどの程度のタイムラグが生じるかだが……。

「……フン、しらけた」
「しばらくこっちに残る。それじゃあ」

八年前より、淡白な別れだったかもしれない。離れていた距離は、以前よりさらに遠ざかっていった。八年の月日は、彼女が思うよりずっと残酷だった。

会議室を後にして、さほど年月の変化がない古城の回廊を突き進む彼女の背後から、彼女に親しげに話しかける声がする。

「ししっ、おじょー見るの久々じゃん」
「ベルフェゴール」
彼女が部屋を出た後、例の暗闇での会議は早々に終結したようだ。すぐに紫乃を追いかけるように幹部のベルフェゴールがやって来た。
昔は紫乃の方が大きかった背も、二年ぶりの再会では余裕でそいつに追い抜かされていた。身なりやチャラついた態度は昔と何ひとつ変わらないのに。

「ボスにいきなり啖呵切ってどうしたんだよ?」
「別に。ただの挨拶だよ」
紫乃は久々の再会にも関わらず素っ気なく返す。勘繰られては面倒だ。特に彼は、昔から余計な勘はピカイチだ。その奇才を、あの男に認められただけはある。
「フーン。じゃ、王子とも久々にやっとく?」
「やめとく」
「えー、つまんね。王子は別にベッドの上でもいいけど」
「お前……いつの間にそういうことを覚えたんだ……」
「ししっ」
思わず後退りをしながら、紫乃はそいつの背後から近づくもう一人

の幹部の男の姿を見た。
彼女は逃げるつもりはなかったが、あんな場面の直後では、少しの心身の安息もないのかと文句も言いたくなる。

「セラン」
態々人の名前を大声でやけに深刻そうに呼んでは、やはり自分のもとに真っ直ぐに向かって来る銀髪の男に無意識に口角が攣る。態々その名前を使わずとも、彼女は逃げはしない。

「どしたよロン毛」
「う〝るせえぞベル！　俺が用があるのはセランだあ〝！」
やんちゃ盛りの期待の幹部に一喝を入れた後、その腰よりも長く伸びた銀髪を翻してスクアーロは彼女を睨んだ。
「ちょっと来い」
「……スクアーロ」

そいつの声には、お前に聞かなければならないことが山ほどある、とその言葉の裏に含んでいた。だから紫乃に断る術はなく、頷いた。
彼に連れられ複雑なアジト内部を歩き出すと、とある回廊の途中に小さな人影がまるでどこからともなく暗闇から浮かび上がるように現れた。

「やあ、セラン。しばらく見ていなかったね」

小さな人影は、紫乃を見据えてそんな言葉を掛ける。
そしてその影は、それだけを告げたかと思えば再び暗闇に溶け込んで霧散した。

「なんだぁ？　マーモンの奴」
「……」

マーモンとも別れた後はアジトの一室に籠り紫乃はスクアーロから、やはりあの事についての尋問を受けた。
深緑に囲まれた古城の窓から見えるのは、今にも嵐になりそうな風と灰色の空だ。

「ボスには、お前が逃げたことをまだ告げ口していねえ。だが、それはお前の返答次第だ」
そう言って、鮫のように深海でギラつくような鋭利な眼差しを向ける。

「正直に話せ、セラン。お前が俺達を裏切る気がないのならな〝ぁ……」
スクアーロが彼女に突き刺す視線は真っ直ぐだ。偶然か、同じ雨の彼に通じるものを感じる。
八年拗らせたあの人への忠誠、彼女の身にも重くのしかかった。

「お前は何故、二年前に忽然と姿を消したんだ？　どうしてあの場にいた？　何を知っている」
スクアーロの足音が窓際の紫乃へと近づく。胸倉を掴まれる勢いの剣幕を貼り付ける男と、紫乃は正面から対峙する。

「……八年前、お前は何を見た？」

それは彼らと、紫乃の運命を大きく揺るがすきっかけであった〝運命の日〟――――。

ボンゴレ暗殺部隊のボス・ＸＡＮＸＵＳを失う失態を犯したボンゴレ史上最大のクーデター。そして暗殺部隊の生命線をも危うくさせた災厄の日だ。

「……先に、裏切ったのは、どっちなんだ」

彼女は取りこぼしそうな声で、正面にいる男に告げた。部隊の中で誰よりもボスにその身を捧げた男は、その言葉に反応した。顔つきは俄にこわばっている。

「スクアーロ……八年前の誓いを、どうしてあの人をあんな形で……」

八年前――彼もこのクーデターは、ボンゴレ史上最大の革命となるだろうと予期していた。

まだ幼さが残る彼女に、彼は言った。新しいボンゴレを彼と築き上げると。

「ッ……」

「あなたは、八年前、ＸＡＮＸＵＳに誓ったんだろ。可哀想なあの人を、ボンゴレ十代目として側で支えていく覚悟……なのに……」

しかし、彼の誓いは、あの日の灼熱の炎に破られた。彼の怒りも、嘘も、真実も、スクアーロが見た全てを焼き尽くしたあの日の炎の揺らめきは、鮮明に八年前の記憶にこびりついていた。

「貴方達に、失望したんだよ。ずっと、堪えてきたけど、限界だった。貴方達は、部隊のボスを失ったんだろうが、私はたった一人の家族を奪われたんだ。スクアーロ、信じていたのに」

八年前の誓いに、安堵の表情を見せていた少女が、正面から軽蔑の視線を自分に向けているのに、スクアーロは自身の後ろめたさを隠しきれていなかった。

押し黙る彼に、彼女は淡々と二年間の経過を語った。

「あの人が長い眠りについて、次期ボス候補の少年が日本にいると噂で聞いた。彼よりも次期ボンゴレのボスに相応しい男なのか、確かめたくて、二年間”伊波紫乃”の名を使って観察した」

彼らとの時間を切り捨てて、偽りの名前で、ここより遥か遠い地で奴のことを想い続けていた目の前の少女に、自分は合わせる顔がない。

「彼が帰ってきてくれたのは、結果論だ。今度は彼を一人にはしない。私一人でも、ＸＡＮＸＵＳを守る」

糾弾された。ＸＡＮＸＵＳに誓いを立てたあの頃の自分に似た眼差しを向ける彼女に、スクアーロは掛けられる言葉もなく、隣を横切る少女の姿を見送るだけだ。

「その切り落とした腕も、ハリボテだったんだな」

部屋を後にする彼女が最後に吐き捨てた台詞にも、言い訳できない自分が不甲斐ない。何度も彼女に突き放された言葉が逡巡する。

自ら切り落とした左腕が、この期に及んで悲鳴を上げていた。

過ぎる暗雲

スクアーロを部屋に残し古城内を一人彷徨う紫乃は、少しばかり言いすぎたかと置き去りにした彼のことを気に病んでいた。

彼女は、死のうが構わなかった。

ここに戻ってくるからには彼女も覚悟していた。二年間音沙汰なく日本に滞在していた彼女を、敵側に寝返ったと彼らが憶測してもおかしくはない。彼らが一流の暗殺部隊であるなら尚更だ。

それでも彼女がこうしたのは、一番に沢田綱吉達の修業のためだった。

あの時、スクアーロに見つかり、自分の居場所が日本の並盛だとバレてしまったのは非常にまずかった。彼女は二年間失踪している身だ。スクアーロはこの話を持ち帰りＸＡＮＸＵＳに報告する。

ボンゴレの地位を狙うだけでなく、自分の生い立ち全てを清算しようと企むあの男なら、忌々しい血縁のある者を一番に消しておきたいはずだ。

彼女を抹消するため、彼らが予定より早く並盛にやって来る事態は避けたかった。

リングが偽物だとバレるまで、彼女もいつ殺されるかわからない。

彼女が殺される可能性はＸＡＮＸＵＳだけではなかった。スクアーロにもバレかけている。相手がスクアーロであったからあの切り口で躱すことができた。少しナイーブな性格が難だが、容赦はしない男だ。

ここまで来たら殺されることも厭わないが、しかし彼女にはまだ不安材料がある。

ゴーラ・モスカの中に閉じ込められた九代目だ。

ＸＡＮＸＵＳの隣に常にぴったりとくっついている。助け出せる隙がなく、彼女にはその資格もない。

ＸＡＮＸＵＳの策略で重症を負う彼が助かる筋道を開くためには、彼らの修業が完成するのを待つ時間はない。

彼女が遠い地で暗躍する他方で、並盛の廃墟病院の一角では例のリングの話が、リボーンとディーノを筆頭に進んでいた。

見事に山本武達をその気にさせてしまった沢田綱吉は酷く落ち込んでいるようだったが、今の彼には落ち込んでいる暇もない。１０日後に修業を完成させなければ、彼も仲間も全滅するのだ。

すぐさま沢田綱吉の修業も進行することになったが、リボーンには他にも心配事がある。数日前に失踪した伊波紫乃だ。

まさかあの男が八年の眠りから醒めることは彼も想定していなかった。

この緊急事態と伊波紫乃の失踪が重なったのは偶然なのか。

リボーンは彼女が残した言葉に殺し屋の勘が引っ掛かり、彼女と別れた直後に九代目の安否を確認し非常事態に備えていたが、彼のもとに情報は降りてこなかった。ここ数日間は、安息の日常を過ごしていた。まるで嵐の前の静けさだ。沢田家光達がボンゴレリングの話を持ち込んでくるまでは。

もしかしたらあの女は、ある程度こうなることを見越していたのかもしれないと、リボーンは思った。まだ根拠はないが、彼女の言動にはその要素が十分にあった。

ボンゴレの時代を象徴するリングが動き出した以上、生徒達もいつかは通らねばならない試練だ。

大丈夫、彼らにはまだまだ伸びしろがある。リボーンは前向きにこの戦いに挑んだ。

それぞれの家庭教師を見つけた守護者達の修業が始まった。

それぞれの修業開始

ハーフボンゴレリングの登場により、それぞれの運命が大きく動き出す頃――。

並盛にある中学校の応接室のプレートを掲げた部屋で、雲雀恭弥はここ数日苛立ちを募らせていた。

風紀委員会の仕事も手につかず、応接室に訪ねてくる輩は誰であろうと構わず咬み殺した。それでもこの胸の苛立ちは消えない。

彼の手元にあるのは、退学届。

彼女の自筆で書かれた、丁寧な文書だ。

ある日それがぽんと彼の机に置かれていて、それ以来彼女の姿を見ることはなかった。

すぐに彼女のアパートを訪ねた。そこにも彼女はいなくなっていた。

彼女の面影も、そこにはなくなっていた。

彼に何の言葉も告げず、彼女は消えた。

許さない。赦さない。認めない。

次に彼女に会えば、咬み殺す。

逃げられると思っているのだろうか。彼女は。

彼女を見つけたら教えてあげなければ、誰が君の支配者か。誰を怒らせたのか。無断で僕のそばを離れることなんて許さない。消えない傷跡を植え付けてあげる。

しかし、問題が山積みな時に限って、面倒事は舞い込むのだ。

「お前が雲雀恭弥だな」
中にいる雲雀恭弥の許可なしに、応接室の扉が開けられる。現れたのは金髪の見慣れぬ男と付き添いのような男。
雲雀恭弥のもとに、金髪の男が前に出る。

「誰」
「俺はツナの兄貴分でリボーンの知人だ。雲の刻印のついた指輪の話がしたい」
彼の縄張りに現れた男が、いきなりわけのわからない話をする。リボーンとはあの草食動物に付きっきりの赤ん坊のことだ。
男が後に言った雲の刻印のついた指輪とは？　彼女のことで苛立ちが収まらない頭には、先日届けられた指輪のことなど微塵も記憶にはなかった。

「ねえ、君が誰かは知らないけど、僕は今ムカついてるんだ。出ていかないなら咬み殺す」
指輪なんかどうでもいい。咬み殺す。
そもそも部外者が校内にいる時点でおかしな話だ。あとで校内にいる風紀委員諸共咬み殺しておこう。雲雀恭弥に変なスイッチが入った。

「おいおい、なかなかの問題児だな。いいだろ、その方が話が早い」
そいつは何がおかしいのか、くつくつと笑みをこぼして自身の武器を取り出した。
なんか、ムカつく。そう思うと雲雀恭弥は懐から取り出した牙を男に振るった。

秋晴れの空、竹刀を振りかざす音があさり組道場に響き渡る。
重い一太刀に、身体を床に叩き落とされた振動が広い道場に伝わる。重い道着に重心も上手く動くことができず、彼の体力を奪っていく。

「武イィッ！」

息子の名を怒鳴り散らす親父の声、今まで見たこともない父親の姿に山本武は困惑していた。
自ら剣道を習うべく弟子入りしたのだが、普段見る親父とはまるで別人のような気迫に、気ままに野球しかやってこなかった山本武はどうしていいものかと戸惑うばかりだった。一方的にやられてばかりで、鍛錬にもならない。再び投げ出された山本武は、鈍い痛みと暑い道着の中で体力を奪われながらもなんとか倒れずにいる状態だった。
必死に立とうとする彼を見て、涼しい顔で見下ろす彼の親父は、普段の温厚な父親の面をとっぱらって彼に言い放った。

「お前が剣道をやりてえ理由が遊びなら、家に帰んなァ」
一方的に倒されるばかりで、山本武も不甲斐なさを痛感した。まるで追い討ちをかけられたようで、苛立ちと混じりあって彼の中のやる気に火をつけた。

遊びじゃねえ、遊びなんかじゃ……。

あのロン毛の銀髪男に屈辱的な敗北を味わった悔しさもあったが、数日前にぱったりと見なくなったクラスメイトの女の子のことが、山本武の中でずっと引っ掛かりを憶えていた。

最後にした約束をまだ憶えているだろうか？

ずっと待ってる。
たとえヨボヨボのおじいさんになっても、お前のことを待っている。
彼はそんな覚悟で言ったつもりだったが、彼女の顔を見られなくなった日から、不安は消えなかった。本当に、彼女は戻ってこないつもりだろうか。

お前が、初めてだったんだ。
綺麗事なんかじゃない。あの頃のなんの繋がりもない頃に、お前が俺に言ってくれたことは、嘘じゃなかっただろ。

春に教室で初めて彼女を見た時、窓際の席に着いて退屈そうに窓の外を見ていた。
教室にいる誰とも目を合わせない憂いを帯びた横顔の輪郭が、不思議と彼の目を奪って、クラスメイトに不意に声を掛けられるまで見つめていたこともあった。
けど、彼女に話しかけてみようと思えるようなきっかけも掴めなかった。

彼女のように、人付き合いの苦手な人間がいることくらいは理解している。そういう人達と無理に関わることを彼はしない。
人との繋がりより、彼には野球が一番だった。野球さえあれば、人が集まるしその縁が途切れることもない。野球が彼にくれたものは大きかった。だから彼も、この先もずっと野球を続けることが当たり前だと思っていた。
しかし、中学に上がると、新しい環境で野球が上手くいかなくなった。
自分よりいい球を投げる奴はいるし、自分より多く得点する奴もいる、彼が初めて感じる野球のプレッシャーだった。
自分でも驚くほど当たり前に投げていた球が投げられなくなって、

投げることに抵抗感ができて、ただプレーすることが苦痛で。
そんな話をしたって共感してくれる奴はいないし、彼の言うことを本気で聞いてくれる奴もいなかったし、いつの間にか笑顔も減った。
教室では無理に明るく振舞った。野球の話をされる度に困ったし、軽く苛立ちもあった。お前らに俺の何がわかるんだよ、そんな思いが彼の腹の底にあった。

もう野球をやめようかと、一人で悩む日々が続いた。けど、野球をやめてしまえば自分は空っぽな人間だと、誰よりも理解している。
自分は全然強い人間なんかじゃない。教室の彼女のように。

そういえば、教室で誰かと会話しているところを見たことがない。あの娘は、どんな娘だろう。教室で何度も見ていたが、今まで気にしたこともなかったと気づいた。
そんなことを考えていると、ある日の昼休みの部活の練習で、ついに彼女と話すきっかけがあった。

「悪い！　ボールそっちに飛ばなかったか?」
自分が誤って投げたボールを取りに向かう途中、校庭に人が通りかかった。自分が投げたボールが当たらなかったか心配で声を掛けたのだが、その人物を見ると彼は思わず唾を飲み込んだ。
伊波紫乃だった。教室の外で見るだけで、緊張していた。こんなに間近で彼女を見ることもなかっただろう。
「あ、えっとー」
思わず最初の言葉に躓いていると、足元に転がる球と、自分の顔を一瞥して彼女は無言のまま歩き出した。
彼は結局何も言えないまま、その背中を見送っていた。
間近で見た彼女の横顔は、刺がある薔薇のように、冷たく凛々しく、美しかった。

その日の放課後、彼女と二度目の鉢合わせではそれとない会話をし

てみた。まさか、彼女からあんな言葉を言ってもらえるとは思いもしなかったが、なんとなく話せたことは嬉しかった。

こんな自分は案外根っこからお気楽かもしれないなと思った。彼女のおかげか、野球への熱意はまだ残っていた。

野球で右腕を折って、絶望して、もう死のうとしていた時、あいつの言葉が頭にあった。

引き止めるクラスメイト達の声に耳も貸さず、彼女の言葉に一体何を期待していたのかと我に返った。野球しかしてこなかったことを、こんなに後悔するなんて思わなかった。

それでも、あの時一緒に屋上ダイブするような友人と出会えたことは、彼の中で大きな変化があった。

あいつの言った通りだ。ちゃんと見てくれる奴がいた。肩の力が抜けて、また無性に野球がしたくなった。

逃げ出したくなっても野球を続けてきたから、彼女と出逢えた。野球が彼にくれたものは、やはり大きかった。

だからこれからも野球を続けていこう。

「遊びじゃねー……」

負けた悔しさも、彼女に言った言葉も、本気だ。勢いで言ったところもあるが、生半可な気持ちじゃない。

腹の底から意地を吐き出して、山本武は立ち上がった。動くだけで鉛の痛みと道着の重さが彼の身体にのしかかる。けど立つしかなかった。自分が立ち止まってはいられないから。

本気で相手を倒しにかかる鋭い目つきを向けた彼の成長に、山本剛は次のステップを踏むことにした。

ずっと野球一本でやってきた息子に、戦乱の世を渡った殺しの剣を継がせるか、簡単に決められることではなかったが、そいつの目にかけてみることにした。

その時は、滅びることも仕方なしとした流派だ。

それぞれの生徒達の修業をこっそりと見守る沢田家光は、それぞれの思いを胸に抱き強くなろうとする彼らの志しに大きな期待を寄せた。

ボンゴレリングを、あの男に渡すわけにはいかなかった。

沢田家光もまた、八年前の惨劇を目の当たりにした一人だった。

しかし、門外顧問である彼でさえも、あの事件の最奥で起こった真相にたどり着くことはできず、八年が経っていた。

こうなってしまったことには彼も責任を感じていた。あの日のことをあの方とはっきりと話し合えていたら、まだ若い彼らに背負わせることもなかっただろう。

こちらに長くいた家庭教師の男から聞いていた少女のこと……。

できることなら一度会っておきたかったが、彼女の行方は再びわからなくなってしまった。

八年前の惨事、彼女は何を思い続けてこの日を迎えたのだろう。何を目撃したんだ。何も語らないあの人の代わりに、もしかしたら何か情報を掴めるかもしれないと思った。

彼はその希望に懸け、人知れず道場を去る。ふとあの息子は、今頃どうしているだろうと気になった。

あの赤ん坊のスパルタ修業で、きっと弱音を漏らしていることだろう。

ハーフボンゴレリングを手にした彼らのもとに、暗殺部隊の足音が忍び寄るまで、あと八日――……。

偽物への報復を

例のリングが動き出してから四日目だ。
今日の夕暮れ頃がタイムリミットかもしれない。彼らの修業は、形となっているだろうか。

「んふふ、さっすがお嬢ねぇ～。その細い腕でルッス姉さんの肋骨が折れちゃいそう～～～」
アジト敷地内の中庭から見上げるイタリアの秋晴れの空には、少し冷たい風が吹いている。
彼らの修業のことが頭を離れない日々が続く中、部屋に籠っていた紫乃は、ルッスーリアの誘いで中庭に出て泰式ストレッチという名のムエタイの稽古をつけてもらっていた。一通り型を習い、ルッスーリアの肋骨に拳を打ち込んだところだ。
打ち込まれた本人はくねくねと痛みを表現しているのか緩和しているのか、単にふざけているかもしれないが、久しぶりに彼女も思いっきり身体を動かすことができた稽古だった。

「そのゲロブスな顔でゲロ吐いて何言ってんだよオカマ」
「んも～～う、ベルちゃんったら～、お口が正直すぎるわよ～～ごふぉオォオッ！」
彼女達の稽古の最中にベルフェゴールが様子を見に来たらしい。機嫌がいいルッスーリアに淡々と毒づいている。
タンクトップから伸びる二の腕や首筋に垂れた汗を拭き取り、彼女が火照った身体を冷風に当てていると、時間差でルッスーリアの口から吐血した。
まるで時が止まったような衝撃的場面に遭遇したが、崩れ落ちた本人は血を吐くほどの痛みに満更でもないような昇天顔を浮かべてて綻んでいた。
ここにいるのは暗殺のプロ達だ。彼らは動じることもなく、それぞ

れが何も見ていないことにした。運動の後で消耗した水分をとりあえずは潤しておく。
「次は俺とやろーぜ、おじょー」
「やめとく」
「ししっ、ノリわるー」
そいつに背中を向けて彼女が断ると、後ろではまだブツブツと文句を言っている。
うるさい。紫乃は無駄な争いは嫌いだ。だから彼らの前でも必死に隠そうとした。痛みは残るものだから。

「そーいや、なんで髪切っちゃったの？　王子はロングの方が好みなんだけど」
「知るか」
二年前にした小さな決断。ここに自身の全て置いていくと覚悟した。そしてこれは、自分だと気づかれないためのカモフラージュだった。
しかし、あの獰猛な鮫には、こんな小細工もすぐにバレてしまったがな。

中庭でのその一部始終を、スクアーロは古城内部からひっそりと見下ろしていた。獲物を睨む深海生物の獰猛なそれは、少女の隙を密かに狙うように……。

「セラン」

彼女達の押し問答の会話に水を差す声は、どこからともなく霧のように彼女の前に現れた。
喉の渇きも、熱の暑さも、霧の冷感に触れてあっさりと引いていく。
「ボスが呼んでるよ」

彼女の前に姿を見せたマーモンは、手短に用事を告げる。紫乃は、顔色ひとつ変えず、小さな身体に覆われた怪物を睨んだ。

「ちっ。ボスに取られちまったじゃん。じゃあマーモンでいいや」

「ボクも暇じゃないんだけど。いくよ、セラン」

空中をフワフワと徘徊する小さな赤ん坊の先導に、紫乃は古城内部へと戻ることを余儀なくされる。

古城の渡り廊下は、中庭より隙間風が冷たく感じた。前で先導する赤ん坊は何も語らない。

今日が、タイムリミットだ。

彼らの修業は、上手くいっているだろうか。

「来たか」

暗い部屋に入ると、呼び出した相手が玉座の椅子に着いて待っていた。窓の外はもう日が暮れ始めている。

ＸＡＮＸＵＳ――紫乃が小さく呟くと、彼もこちらに視線を寄越す。怯みはしない。彼女も同じだ。その男に鋭い視線を返す。

日が沈み始めた室内は暗く、その男は自らの手に炎を灯した。轟々と爆ぜる炎が彼らのいる室内を照らした。

そこで、彼の背後に陣取る鉄屑に気づき、彼女を威嚇するかのように仰々しい吐息を吐いた。

「俺がカス共にハメられ、抹消されたこの八年、てめえは忘れちゃいねえだろうな」

単刀直入に男が切り出す。

片時も忘れることなどなかった。炎に揺らぐあなたの怒りと悲しみを閉じ込めた眼差し。

「誰が、お前を生かしてやったのかを」

ああ、彼女は頷いた。
身体中に憶えている痛みは、この八年間彼女に束の間の安息などもたらさなかった。逃げられないとわかっていた。
彼がいないこの八年を、彼女は空白の八年を、その人の記憶で埋めてきた。底無しの絶望に激昂する目が、片時も離れず、心を蝕んで、思い出の花は朽ちり果て、執念の想いだけは募り続け、少女はただただ哭いた。自身の弱さを嘆くばかりだ。
この日が来るまで、自分の弱さを隠し続けた。あの日記に吐き出して、秘事にした。自分を殺して、生きてこられた。

「ハッ、ならいい」
大袈裟に鼻を鳴らす。満足げに頬杖をつき、それ以上は彼女に言及しなかった。

けれど、彼女には、まだわからないことがある。この男だけが抱える真実を。
しかし、それを知る資格が自分にあるだろうか。
彼女が、殺したも同然なのに。

「お呼びかぁ〜、ボス」

部屋に入ってきた鮫の唸るような声に、彼女の思考は引き戻された。
彼の手の炎は消火され、日が暮れた彼の部屋は視界不良の中、夜見をきかせた部下の男は呼び出した人物のもとに駆け寄るようにやって来た。
「ハーフボンゴレリングの褒美をくれるってんならありがたく頂戴するぜぇ」
ハーフボンゴレリングを持ち帰った自身の功績を讃えられるかと

調子づいてやって来た奴だが、不明瞭な視界に彼女の姿を見つけるなり、その顔つきは曇る。

「セラン……」

苦しそうな顔で何かを言いかけるようにそいつに見られると、思わず目を背けたくなった。彼を責めたのは、自分の弱さからだ。そんな顔をしてもらいたくて、あんな酷いことを言ったのではなかった。

おもむろに座っていた男が立ち上がる。その足先がスクアーロに向くと、テーブルの一角に彼の顔を掴んで殴りつけた。それは痛ましい光景だった。

狼狽えたままの彼の鼻筋からは、赤黒い血が垂れている。

おもむろに男は、中指に嵌めた指輪を取り出した。

「偽物(フェイク)だ」

偽物だとバレたそれは、彼の手の中で砕け、灰になる。その目に静かな怒りが滲み出していた。

「日本へ発つ」

断罪の時間だ。

それを告げるように、奴の横顔には、八年前の怒りがあった。

スクアーロに召集をかけるよう告げ、再びその視線を、立ち竦む紫乃に向ける。

八年前の血塗れの残像が、フラッシュバックした。

「お前も来い、セラン」

きっと、君達を失望させることだろう。

それでも、大きな悲しみを乗り越えて、君達は強くなれると信じて

いる。

沢田綱吉は夢を見ていた。
嫌な夢を見た。どんな夢だっただろう。
とにかく胸糞悪くて、動悸が激しくなって、身体がこわごわと震えていた。とにかく怖くて怖くて、逃げ出したくなった。

あれはどんな夢だったんだろう。どうしてこの胸に抱いたのは、悲しみだったのだろう。

ダンジョンの最下層に潜るような暗闇に、いつかの彼女の姿を思い出した。立ち竦んだまま、暗闇で猛獣の目が鋭利に光るように彼女の赤い光彩が睨んでいた。
やがてその瞳のように激しく揺らめく炎の荒波が一面に広がり、その娘の輪郭を焦がし、乱れる黒髪も、透き通る白い肌も、熱を持った眼差しをも容赦無く焼け払っていく。
その疑わしい光景を目の当たりにして、彼はどうしようもない不安を駆り立てられる。

でも、あの娘が誰なのかは、今はまだ思い出せない。今は、まだ……。

彼女は、君は――……。

「うわあぁぁあああああぁぁッ!!」

喉が引き裂かれるほどの絶叫とともにベッドから飛び起きた沢田

綱吉は、先程まで見ていた夢の内容も朧げながら、どこからともなくやって来る恐怖に動揺していた。酷く悪寒がしている。

なんだ、夢かと、いつも通りの自分の部屋の光景を目の当たりにして、生きた心地がしないその感覚から気を逸らそうとした。

先程まで見ていた夢の内容は、この時すっかり頭から吹き飛んでいた。

しかし、彼に取り憑く黒い悪魔は、冷徹に彼が目を背けたいと願う現実を突き刺すのだ。

「んなわけない」

「九代目の勅命、額に入ってるー!?」

朝から家庭教師の悪ノリに付き合わされる沢田綱吉は、飛び起きて自身の指に嵌められたボンゴレリングを見て、これまでの壮絶な出来事にようやく実感を抱いていく。

昨晩の出来事を、自分の身に意図せず引き起こされるマフィアの相続争いに、彼は布団に潜ってその小柄な身体をガクガクと小刻みに震わせた。

大柄な男が自分を憎んだように睨んできた目つきが、かたく目を閉じても意識がはっきりした瞼に焼き付いていた。

あの場の緊張感は、今も身体に染み込んでいた。あの目に殺されると本気で感じた。指先まで、恐怖の感触が侵食していた。

布団に覆われた身体を縮こませ、お先真っ暗なこの状況でダメツナの彼は修業なんかしたくないとまたごねたが、家庭教師に背中を押されて学校には行くことにした。

渋々身支度を整えて学校への通学路を歩いてみたが、気は進まず更に手の震えは止まらない。

どうして自分が巻き込まれなければならないんだ。逃げ出したい。

そもそもあのよくわからない父親が、最初からあの男に指輪を渡していれば、マフィアの跡継ぎ問題なんかに巻き込まれなかったんだ。

帰ってきたと思ったらいつもこうだ。思春期の反抗期も相乗し、彼の父親への好感度は、ここ一番で暴落した。

目が醒めた後も気がまだ動転していて、彼にはまだ思い出せていないことが幾つかあった。

沢田綱吉――――。

その声が、彼の耳を掠めた気がした。

「ツナ！」

彼が振り返ってみると、そこにいたのは霞んだ記憶の声の人物ではなく、友人の山本武だった。いつも通りの笑顔で、野球で鍛えられた逞しい腕に身体を引き寄せられる。今まで動揺していた沢田綱吉も、友人を見てほんの少し気が緩んだ。

「さすがに昨日は眠れなくてな、落ち着かねーから学校行こうと思ってさ」

こう見えて彼も不安に思う節があったんだと、昨晩彼らとともに身に起きた出来事を思い出し、こんな面倒事に巻き込んでしまったことを彼は改めて申し訳なく思うのだった。

「いやー、ワクワクすんなーっ！」

まさかこの状況で山本武の口からそんな言葉が出るとは思わなかった。精神構造が違う。

また遊びだと思っているのか緊張感のない彼を羨ましく思う一方で、彼なりにこの現状を受け止めているようだ。

真っ直ぐな眼差しで、山本武ははにかんだ。彼の笑顔には、誰かを元気づける力があるなと沢田綱吉は感じた。

「俺じゃなくて、俺達の戦いだって……一人じゃねーんだぜ、ツナ。み

んなで勝とうぜ」
「山本……」
山本武の励ましに勇気づけられているところに、今度はダンボールを小脇に抱えたチャラ臭い男が、どこからともなく現れてくる。
「ったりめーだ！あんな奴らにボンゴレを任せられるか！」
「獄寺君！」
沢田綱吉がその登場に驚いている間に、結局いつもの彼らのペースに持っていかれてしまった。だが、そんな彼らとの日常通りの会話が、彼の緊張をほぐしてくれた。手の震えは、いつの間にか止まっていた。

通学途中の路上での会話はトントン拍子に弾み、獄寺隼人はこれからシャマルと紙飛行機で特訓するらしく、そんな獄寺隼人はいつまでも現れない霧の守護者のことが気にかかり、山本武の口から雲雀恭弥の修業はどうなっているかと、話は二転三転した。
すると、友人の山本武を前にして、沢田綱吉は何かを忘れていないかと記憶の引っ掛かりを感じる。すぐに思い出そうとするところで、隣にいた獄寺隼人が言及した。
「つーかよ、山本。あの女は一体どういうつもりなんだよ？」
獄寺隼人が口にしたそれに、山本武の顔色も浮かばない。会話の一部始終を聞いて、すると沢田綱吉の脳裏に、今朝の夢の内容が想起された。

ボンゴレリングを賭けた争奪戦の説明をチェルベッロ機関と名乗る女から一通り受けた後、痺れを切らした様に口数が少なかった男が口にした。

「モスカの背後にコソコソ隠れてんじゃねえ……とっとと出てきやがれ」

モスカと言った巨漢の後ろに隠れるようにいた人物を指して、ＸＡＮＸＵＳはその獰猛な視線を寄越して催促する。その猛獣に睨まれたならば仕方ないと、高台の暗がりから、もう一人の人物が、彼らのもとに姿を現す。

肩までの黒髪を夜風にさらりとなびかせ、隊の先頭まで突き進む。彼らの前に晒した姿には、隊服にヴァリアーを象る紋章がしっかりと刻まれていた。

「久しく会うな」

ボンゴレ達に、どよめきが広がる。

思わず言葉が出ないようなのか、彼らの前に立ち憚る彼女の声明は高らかに響き渡る。

「沢田綱吉」

これまでの沢田綱吉の瞳から色が失われた。絶望したように表情のない顔で、その人物を見上げる。思わずこぼした声は震えていた。

「い……なみ、さん……？」

目の前の光景を疑う彼らに、そんな彼らの姿を見下ろす伊波紫乃は、高らかに声を張り上げた。

「我が敬愛する実兄にして次期ボンゴレの正統なる後継者であるＸＡ

ＮＸＵＳの名の下に誓う。この決闘において君達を、抹殺する」

甘い期待を一切断ち切るかのように宣言した。

その中で、唯一、この経過を見守る髪飾りの男だけが嗤っていた。

「まじかよ、伊波……」

今まで沈黙したまま傍観していた山本武も、ついそんな声を漏らす。無理もない。誰よりも彼女の姿にショックを受けていることだろう。

「気安くその名を口にするな」

彼女から突き放すように告げられる。胸が抉られるように、生きた心地がしない。

彼の目はまだ、目の前の現実を受け止められない。

「私はもう君達が知る伊波紫乃ではない。セラン……これが本当の私だ」

男とお揃いの髪飾りを、黒髪の間から揺らしていた。

夢ではない、確かに昨晩に起きた出来事を思い出した沢田綱吉は、その後にちらりと山本武の様子を窺った。まさか落ち込んでいないかと彼は心配であった。

「そんな顔すんなよ、ツナ」

しかし、山本武からそう言われたのは沢田綱吉の方だった。図星を突かれたかのように顔が固まる。自分はそんなに顔にわかりやすく

出してしまっていたのか。

「まあ、最初は驚いたけど、俺は別に気にしてねーぜ。伊波のこと」

思いのほかカラッと山本武は答える。これが彼の強がりでなければいいが……。

「なんか腑に落ちたっつーかよ、伊波もほんと真面目だよな。あのロン毛のいるチームに入んなきゃなんねえから、一緒にマフィアごっこはできねえって言えばいいのによ」

あ、この人はあくまでそういうスタンスなのね……と山本武の通常運転に呆気に取られる沢田綱吉であった。

契り

ボンゴレをあの場に残し撤退したヴァリアーの精鋭達は、夜も耽る並盛の郊外にて、人手が寄りつかない高台の茂みの一角でひとまず足を休めた。ハーフボンゴレリングの探索に、ここまで休みなくミッションに出向いた者も多い。

ボンゴレの最高権力を賭けた殺し合いに胸を弾ませる奴らもいる中、一人輪から外れたところで、彼らに背中を向ける紫乃がいた。

高台から一望できる並盛の夜景をじっと見つめている。ボンゴレ達と対面した例の場所からは、あんなにも遠く離れている。

夜が深まるに連れ、暖色の灯りがまたひとつ消えていく様を、彼女は飽きもせずその目に焼き付けた。

「これでお前の潔白が証明された」

背後から近づく気配も感じさせず、紫乃にそう告げたのは、あの直後も気分の高揚が冷めやらずといった様子のＸＡＮＸＵＳだった。普段はその強面に鉄仮面のような無表情の男が、口端が大きく歪んだ不気味な笑みを浮かべたままだった。

ボンゴレリングがもうすぐ手に入ると疑わない男の顔と並盛の景色を切り替え、紫乃も思わず愛想笑いをこぼした。

「……なんだ。まだ疑っていたのか。てっきり信用したから、私をここに連れてきたんじゃなかったのか？」

すっかり浮かれている男の頭に冷水をかけてやるように、紫乃は淡々と言った。そう言えば彼が次に切り返す言葉は大体予想できた。

紫乃のその問いかけに、暗がりで見る男の顔つきは徐々にこわばった。その声色も冷静な怒りとともに萎んだ。

「ハッ。んなわけあるか。俺は誰も信じちゃいねえ、誰もな」

当たり前のように彼は言うのだ。断言した。目の前で感情を押し

殺す紫乃に、何のためらいもなく、八年の怒りに囚われた男は吐き捨てる。

血の繋がった妹を前にしても、このＸＡＮＸＵＳという男には道具でしかない。その他大勢と同様に、ボンゴレの玉座へ駆け上がるための駒。

ＸＡＮＸＵＳの名で、数多の幹部を従えていき、いつしか彼は変わってしまった。

「忘れんじゃねえ。俺を裏切ればどうなるか。誰がお前を生かしてやったのか。お前は俺を裏切るんじゃねえ、セラン」

なのに、二度も裏切られる悲しみに怯える目で紫乃の顔を見る。あの人に、八年前に植え付けられた深い傷なのか。妹にまで騙されることを恐れているのか。彼女には彼の怒りの奥にある真意はわからない。

でも、八年前に彼を救えなかった十字架は、この日の復活のために背負った。

ＸＡＮＸＵＳの語りかけに、一度だけ、しっかりと頷く。彼女は、迷わなかった。

「ああ、誓える。そのために、あなたが戻ってきてくれた」

ボンゴレリングの運命が、この争奪戦にかかっていることは言うまでもない。

敷かれたレールの上を彼らが渡るために、ここから紫乃がやるべきことは山ほどある。

怒りの炎に焼き尽くさせはしない。

厳かな二人の会話を、そこから少し離れた距離にフワフワと浮遊するフードを被った小さな孤影が見つめていた。八年前を思い耽りながら――……。

【誓うよ。戒めのために。どんな汚い手段も選ばない。この手を汚すのは、私一人で十分だ。
それそこが、私があの日から背負うべき十字架なんだ。】

晴男のリベンジ

学校の屋上で聞かされた笹川了平の話に、不安の色を隠せない沢田綱吉の胸の内など構うはずもなく一日を照らした日はやがて暮れ、空もすっかり暗くなる。約束の時間がやって来る。

夜の並盛中学校の敷居に赴いた並盛の面々は、誰も寄りつかないような夜更けの校舎の雰囲気に圧倒された。本当に誰もいないのかと辺りを見渡してみると、彼らの頭上の校舎からチェルベッロ機関と名乗る女の声が響いた。彼女達の後方には、敵の姿もある。

女達が前置きを終えた後に、屋上から今晩の対戦カードが切られた。初戦の対決の組み合わせは、笹川了平とヴァリアー幹部の一人のルッスーリアという男。刈り込んだ頭に、赤く染めたヘアスタイルとサングラスが敵陣の中でも異彩を放っている。

次に対決するステージが公開され、審判役のチェルベッロ機関から淡々と説明を受ける。ついに始まるのかと、不安は膨張して、沢田綱吉は断腸の思いでその場に蹲る。その辺に寝っ転がって寝ている牛の奴が羨ましいばかりだ。

「ねえ、ボスまだかしら?私の晴れ舞台だっていうのに~」

「欠席みたいだね」

「あの男が他人の戦いに興味あるわきゃねえ……」

敵陣では、昨晩見たあの髪飾りの男の姿がないことに肩を落として愚痴をこぼしていた。沢田綱吉も去り際に男から睨まれたことが軽くトラウマで、あの男が出席しないと聞いて胸を撫で下ろした。

「あいつは来てないのか」

「あいつって、おじょーのこと?」

敵陣を見渡して彼女の姿が見当たらないと、山本武が思わずこぼした独り言を拾って、ベルフェゴールという男が口を挟んだ。異国人風のブロンドに王冠を乗せ、白い歯をニカッと見せた。

「来てねーよ。顔も見たくねえ奴がいるんじゃねーの」
ししし、と無邪気に振る舞いながら、山本武が動揺している様を明らかに楽しんでいた。
「あの野郎、なんかいけ好かねえぜ」とのちに対戦相手となるいけ好かない男を、彼の隣で睨む獄寺隼人だったが、山本武にすかさず牽制される。そいつは何でもないように、笑っているのだ。
獄寺隼人はそれ以上強く主張もできず、彼らとともに晴のリングのステージへと近づいていった。

そんなことはない。
自身の胸の内にその台詞を押しとどめ、ヴァリアーの黒服に身を包んだ紫乃は、屋上の一角から見下ろしていた。
そこから晴の舞台も、彼らが円陣を組む様子もよく見えた。まさかあの円陣を組む彼らを、上から拝む形になるとは。
一部の温度差があまりにも激しくて、紫乃も思わず声を堪えられずにいた。
あの時はモスカの後ろに隠れて難を逃れようとしたが、君達にああ言うしかなかったことを、紫乃は今も気に病んでいた。
まもなく晴の勝負が始まる。今はまだここで勝負の行方を見守ってやることくらいしか、紫乃が彼らにしてやれることはなかったが、最後まで見届ける覚悟だ。

明日にも守護者の戦いが控えている。
そして、あの男が必ず現れる。
固唾を飲んで、その目で今晩の勝敗の行方を見守った。

【十月十九日
晴の対決、笹川了平が白星をあげる。
初戦の晴のリングは、ボンゴレ側が征した。あの逆境が立ち憚る中、彼はよくやってくれた。やはり妹の存在は大きかった。
大空の戦いに全てがかかっているとはいえど、流れを掴むにはそれを崩すべきではない。何よりも、誰一人、失うわけにはいかないんだ。
息を吐く暇もなく、明日には雷の守護者の対決が迫っている。君のボンゴレとしての器が試される。私も是非この目に焼き付けておこう。死んでも仲間を救うためだけに灯した、君の覚悟を。】

雷への嫉妬　1

【十月二十日
　この日の天候は雨。これから巻き起こるリングの舞台には打ってつけの演出だ。】

　視界不良の中、彼らのいる屋上からは数メートル先に離れた別棟の校舎のポイントに紫乃は待機していた。
　彼女がポイントに着いて間もなく、彼らの姿が正門がある方向から確認できる。グラウンドを渡り、校舎を見上げる彼らは勝負の前からそれぞれに緊張感を張り詰めているように見える。
　その沢田綱吉の後ろから、長靴を履いた牛……ランボの姿も視認できる。
　彼らの緊張感の原因でもあるその子供が、あのステージの上で、これから一人戦わなければならない。当の本人は、アホみたいに雨の中を長靴で走り回っている。
　彼らと一定の距離を保ちながら、紫乃にもその場の緊張感は伝わった。拳が震えている。隊服の上から被ったコートに大粒の雨が降りかかるが、彼らの姿だけを一心に見つめていた。

　ボンゴレ達が屋上にたどり着くと、二時間もこの雨の中を待機していたという屈強な強面の男が待ち構えた。
　傘も刺さず、とんだ頭のイカれた野郎だと敵味方問わず噂されている。こんな面で変態なのだから、救いようがない。
　雰囲気だけは一丁前に醸し出す男を相手にせず、沢田綱吉達は円陣を組んでから勝負に臨むようだ。

「ランボ」

円陣を組んだ後には気持ちを切り替えて、沢田綱吉はランボを呼び止める。あのダメツナが、真剣な眼差しだった。

「嫌なら行かなくていいんだぞ」

真剣に、ランボがこんな戦いに巻き込まれることを心配している。彼の世話役はなんだかんだ彼が適任なんだろう。

しかし、アホな仔牛は意気揚々とステージの中央に向かっていく。あくまで遊びだと思っているようだ。沢田綱吉の親心が報われることもなく、彼らのいる屋上へと打ちつける雨はその勢いを増した。

彼がランボに心配の色を隠せない気持ちもわかる。

よりによって彼の相手は、女子供だろうと、容赦無く殺してきた悪魔……レヴィ・ア・タンだ。

「それでは、雷のリング、レヴィ・ア・タンＶＳ．ランボ――――勝負開始」

審判役のチェルベッロのその声が、雨が降りしきる屋外に響き渡った。

別棟から勝負の行方を見守る紫乃のもとにも、不穏な気配が迫る。この雨でも近くで奴らの気配を感じる。きっとここから遠くない場所で、同じくこの勝負の行方を見届けるつもりなのだろう。

邪魔が入らなければいい。だが、紫乃が身を焦がして待ち続けるあの男の姿はまだ現れない。

首筋にキラリと光る髪飾りに触れ、その時が来るのを今はまだ堪えていた。

雷への嫉妬　2

暗い空から落ちた雷が避雷針を巡回して、そばにある仕掛けに夢中になっていたランボに感電した。

誰もが息を飲んだ。あんな衝撃的な雷にあてられたらひとたまりもない。ランボの身を案じて、沢田綱吉達はランボが雷に打たれた場所から目が離せなかった。全身から血の気が引いた。

チェルベッロ機関が、ランボの生死の確認をしようとする。まさか、本当に……。

「いだあああああああい〜〜!!」

すると視界の悪い雨の中、ランボの泣き喚く声が彼らのいる屋外全体に響いた。紫乃がいる校舎の屋上まで、それが聞こえてくる。

呆れながらホッと胸を撫で下ろす。

「幼少の頃、繰り返し雷撃を受けることで稀に起こる体質変異――電撃皮膚（エレットウリコ・クオイオ）だぞ」

沢田綱吉達のもとにいる赤ん坊が、そう語る。紫乃にも思い当たるその内容を耳に入れた。

発達期に特定の衝撃を繰り返し与えることで、その衝撃に耐性が生まれることがある。しかし、全てにおいて成功するわけではない。並外れた資質と、体質との相性が重要である。

これが、暗殺に命を懸ける男の嫉妬に触れる。この世に生きることの生き甲斐を、あの男に一心に捧げる不器用な男。

自分よりも雷の守護者に相応しい子供がいたならば、その忠誠心はすぐさま嫉妬に怒り狂うだろう。

男は狂ったように攻撃の手を加える。その武器で、子供の身体を何度も地面に叩きつける。見ていられない光景だった。

しかし、勝負の邪魔をすれば、失格となってしまう。リングを二つ

も失うことになるのだ。誰も動くことができなかった。
泣き喚くランボは、どさくさに紛れて１０年後バズーカを取り出す。躊躇うこともなくそれを自らに向け引き金を引くと、その姿は煙に巻かれる。沢田綱吉の制止もままならず、煙が晴れた場所には、１０年後から強制召喚された大人ランボが現れた。
これが最後の晩餐かと悲観しながらそいつは餃子を口に運んだ。こんな調子だが、１０年分の歳月を積めば幹部の男といい勝負をしてくれるかと期待もしたくなる。
大人ランボの勝気な発言に、涙ぐみながら彼を応援する沢田綱吉。だが、その期待も徐々に薄れていく。
最初こそ調子を上げていったが、相手の電撃に１０年分の年月では耐えきれず、泣き崩れる。結局はあのランボのままだ。情けない。
逃げることも忘れて泣いている大人ランボに、沢田綱吉達が逃げろと催促する。しかし、標的を逃すまいと敵の槍が大人ランボの肩を射抜く。痛みにさらにぐずる。これじゃ悪循環だ。
そこでこの現状を変えたのは、子供のランボが置いていった１０年後バズーカだった。大人ランボがどさくさの中でそれを手に取り、自身に引き金を引く。
周囲が唖然とする中、煙が晴れてそこに現れたのは、端切れの布を繋ぎ合わせた少し古臭い服装に身を包んだ２０年後のランボだ。さらに１０年分の年季が入って、どっしりとした威圧感を纏っている。
沢田綱吉達は、ランボの２０年後の落ち着いた物腰を目の当たりにして、言葉も出ないようだ。
彼らがそんなことをしている間に、彼らに気づかれず目尻の涙を拭った青年は、静かな闘士を燃やして自身に殺気を向ける男を睨んだ。年季が入ったその殺気を向けられても、幹部の男は怯まず追撃の手を入る。
空中に７つの電気傘（パラボラ）が開き、レヴィ・ボルタという派手な電撃を浴びせる。そこにさらに避雷針から落ちた電撃が、２０年後のランボの身体を貫通する。
「ランボォォッ！」

普通の人であるならひとたまりもない電撃を身体に浴びたのだ。生きているのが絶望的な状況で、沢田綱吉は必死にその名前を叫んだ。

だが、返事をする声はない。

「奴は焦げ死んだ」

満足気にその男は背中を向ける。この光景を、自身のボスにも是非見てもらいたかったと。もしあの男が見ていたら、彼らを嘲笑うのかと、紫乃は思わず目を伏せた。

「やれやれ。どこへ行く?」

電撃の荒波の中から飛び出した声に、傍観者達の目が見開いた。そこから無傷の男が再び姿を見せると、全身に受けた電撃を地面に受け流した。一気に電流が重厚な校舎の壁を駆け抜け、その強烈な電流に耐えきれず窓ガラスが割れた。

「電気は俺にとっちゃ仔猫ちゃんみたいなもんだ。わかるかい? 俺は完璧な電撃皮膚を完成させている」

２０年後のランボが放ったその発言が、観覧席をざわつかせる。２０年の年月をかけて、電撃皮膚の技が完成したのだ。気の遠くなるような年月を感じた。それはまさにファミリーへの雷撃を引き受ける避雷針のようであった。

２０年後のランボに感心している間に、どこからともなく門外顧問の姿が屋上にある。一昨日の襲撃以来の顔触れだ。

その男の顔を、紫乃はじとりと観察した。

雷のリングを賭けた戦いも局面だ。

沢田家光が預けた角が巡り巡って２０年後のランボの手に渡ると、それを装着したランボの電撃角（エレットゥリコ・コルナータ）がレヴィ・ア・タンの槍を弾いた。

リーチの弱点をものともしない磨き抜かれた大技を喰らい、慢心を貼り付けていたレヴィ・ア・タンの顔つきは大きく歪む。こんな局面まで、あの男の名前を叫んで懇願している。

「剣を引け……これ以上やるとお前の命が……」

そこまで男が言いかけて、突然その姿が煙に巻かれた。

あれから五分が経ち、２０年後のランボが受けていた電撃を子供ランボが受けることとなってしまった。

倒れてその場から動かないランボを、沢田綱吉が懸命に起こそうと声を上げるが、届かない。一歩でも、彼らがエレットゥリコ・サーキットに足を踏み入れれば、失格となってしまう。

「電撃皮膚がどうした。消えろ！」

全身が焼け焦げた男の容赦無い足が、幼いランボを踏みつける。まだあんなに小さな子供だ。紫乃だって、見ていられない。

なのに、彼らの運命を変えられないと、感覚のない足が震えて、動くことができない。

雨雲の下の虚空に突き出した槍に電撃が絡みつき、彼の息の根を止めるトドメの一撃へと変貌する。

ボンゴレ達も息を呑む展開の中、紫乃はギリギリまで迷う。今、飛び出さなければ、取り返しがつかなくなるかもしれない。

「死ね」

一撃が振り下ろされる。

すると雨の視界を、柔らかなオレンジ色を帯びた炎が照らした。

その光の筋が紫乃の視界を掠めると、けたたましい轟音とともにエレットゥリコ・サーキットの全体が揺れ、高く建てられた避雷針が中

心に向かって倒れた。その芯が、熱を帯びている。

「目の前で大事な仲間を失ったら……死んでも死にきれねえ」

目の前の事態を飲み込めない観衆に、一人の少年の姿が注目を浴びる。煙がやがて晴れると、その姿は鮮明に捉えられる。

額とその拳には、ボンゴレを象徴する炎とグローブを嵌めている。

今、大空が、覚醒しようとしている。

雷への嫉妬　3

「いくら大事だって言われても……ボンゴレリングだとか……次期ボスの座だとか……そんなもののために、俺は戦えない」

決着が着こうとしたその直前――――勝負を妨害したその者の炎に、双方の陣地からどよめきが起こる。

あれが本当に沢田綱吉なのかと、彼の守護者達も俄には信じられないが、獄寺隼人は力強く、あれこそが自分が付いていくボスの姿だと確信した。

額に炎を灯した彼の揺るぎない信念の言葉が、静まり返るステージ上だけにとどまらず、紫乃の心にも突き刺さる。

彼は、迷わずランボを助けに行った。自分には、それができなかった。自分は彼に比べて、背負うものなんてほんの一握りだ。だけどこうして動けない自分の代わりに、彼に色んなものを背負わせてしまう。

情けなく思った。彼と気持ちは同じだというのに、沢田綱吉にあんなことを言っておいて、見返されてしまうのは自分の方だ。

山本武が殺されかけたあの場面に、自分はどうしてスクアーロの前に立つことができなかったんだ。怖かったんだ。彼を庇って、あそこで計画が全て崩れてしまうことが。自らの失態で君達を殺すことになることを、恐れたんだ。

弱まる気配のない雨の音だけが、深夜を回った屋外に響く。

「ほざくな」

どこからかその男の声がしたかと思うと、隙を突かれた沢田綱吉が鋭い攻撃に弾き飛ばされる。まだ鍛錬が不十分である沢田綱吉の肉

体は悲鳴を上げている。
そして彼らが見上げるところに、あの男の姿がある。あの人の髪飾りが、雨粒にキラリと反射する。

ＸＡＮＸＵＳの獰猛な目を、沢田綱吉はダメツナらしくたじろぐ様子を見せつつも、しっかりと睨み返した。
ついこの間まで腰を抜かしていたとは思えない彼の成長ぶりを目の当たりにしたＸＡＮＸＵＳの片眉が、ぴくりと吊り上がる。
「なんだその目は……まさかお前、本気で俺を倒して後継者になれると思ってんのか？」
口を開いた猛獣が問いかける。
そいつに睨まれた沢田綱吉は、肌に突き刺さる緊張と震えを隠せないようだが、その口で確かに自分の意志を告げた。

「そんなことは思ってないよ……俺はただ……この戦いで、仲間を誰一人失いたくないんだ！」

悲痛な叫びが凄惨な戦いの跡が残る屋外に響き渡った。

「そうか……てめぇ……！」

自分を陥れた人物の姿と重なったのか、それがＸＡＮＸＵＳの怒りに触れた。彼の手に、今にも熱を持って爆発しそうな炎の団塊が創り出される。
チェルベッロ機関の一人が無謀にも丸腰で奴の制止に入りかけたところを、彼女が咄嗟に投げた拳鍔が、間一髪のところで妨害する。
ＸＡＮＸＵＳの炎は拳鍔の本体に弾かれ、火花を激しく散らす。沢田綱吉達のもとには、何が奴の攻撃を弾いたのかまでは見えていなかった。
ＸＡＮＸＵＳが自身の手を見つめ、そして妨害した娘の顔を睨みつける。

「てめえ……この俺に楯突く気か」
「あなたのためだ。ＸＡＮＸＵＳ。彼女はこのゲームの審判だ。彼女に手を掛けて、あなたの立場が危うくなることがあってはならない」
怒りを滲み出すＸＡＮＸＵＳに、紫乃は冷静を努めて忠告する。
つい、手が出てしまった。否……沢田綱吉の言葉が、自分を突き動かした気がする。
「今後のためでもあるんだろう。無闇にその力を使おうとするのはやめてくれ」
勇気を振り絞った沢田綱吉に彼女も示しをつけるため、震えを隠して必死に冷静を装う。
激しさを増す雨天に振り乱した髪が晒されていることさえ気にもとめず、紫乃は彼の姿だけを視界に入れる。傍観席で見守る彼らの複雑な顔色にも触れず……。
こんな言葉が彼に八年の怒りを鎮火させることができるなんて、紫乃も思ってはいない。八年前の惨事を思い知らされる顔の痣を目の当たりにすると、息が詰まる。
紫乃を睨めつけるその男の鋭い眼つきには、八年前の怒りの色が窺える。

「……ほざけッ。てめえは俺に、この強大なボンゴレの力を使われるのを恐れているんだろうが。俺が塵ひとつ残らずカッ消した出来損ないどもを思い出すからな」
笑い話のようにそう言えば、紫乃が動揺するのが目に見えた。血の気がスッと引き、たちまち脅えた目で自分を見る。それを目の当たりにしてＸＡＮＸＵＳは、態とらしく鼻を鳴らす。
ＸＡＮＸＵＳのあまりに冷静な口振りに、怒りも悲しみも通り越し、紫乃は絶句する。あまりにも残酷すぎるこの男の仕打ちに、震える手を握り締めて、涙を堪えるので精一杯だった。
あのことを彼らが見ている前で公にして、どう思われてしまうかなんて嫌な思考も振りほどいて、紫乃は逃げるように視線を彼から外

す。

「この八年で随分と口が生意気になったじゃねえか。餓鬼の頃は俺に口答えもできやしなかったくせに、いい気になりやがって」

その男が怒りの拳を、立ち尽くす紫乃に向けるのかと、睨み合う二人を見守る彼らも終始落ち着かない様子であった。

過去の喪失感と悲しみに打ちひしがれる赤い色彩の目を無視して、厳かに男は口を開いた。

「……だが、俺はキレちゃいねえ。むしろ楽しくなってきたぜ」

緊迫したステージ上で、特に注目を集めるこの男が不意打ちに嗤う。

八年ぶりだという男の不気味な表情を目の当たりにし、ヴァリアー幹部の間でどよめきが起き、沢田綱吉には背筋が震え上がるほどの恐怖を植え付けた。

「やっとわかったぜ。一時とはいえ、九代目が貴様を選んだわけが……その腐った戯言といい、軟弱な炎といい……お前とあの老いぼれは、よく似ている」

ＸＡＮＸＵＳがそう言った真意を汲み取れないでいる沢田綱吉の動揺を見て、また豪快に愉悦を吐き出している。

それは、違う。彼女はこの戦いを、悲劇なんてもので終わらせるつもりはない。

「女、続けろ」

「はっ。では、勝負の結果を発表します」

ＸＡＮＸＵＳのその一言を皮切りに、チェルベッロの女が厳かに今回の試合結果を告げる。

「今回の守護者の対決は、沢田氏の妨害により、レヴィ・ア・タンの勝利とし――雷のリング並びに大空のリングは、ヴァリアー側のものとなります」

雷と大空のハーフボンゴレリングが、ヴァリアー勢に渡る。ボンゴ

レ側の野次が飛ぶ。しかしチェルベッロ機関の女は相手にせず、沢田綱吉のもとへと歩み寄る。

沢田綱吉のフィールド破壊と妨害が、今回の勝負において不正行為であることは認めざるを得ない。紫乃もかたく口を閉ざすだけだった。

沢田綱吉の首に提げられた大空のハーフボンゴレリングが、怒りを抱くあの男の中指で、大空のボンゴレリングとして復活した。

「これがここにあるのは当然のことだ。俺以外にボンゴレのボスが考えられるか」

大空のボンゴレリングを手に入れたのだ。これで奴の命で、いつでも彼らを殺せるというわけだ。

ボンゴレ側に付く沢田家光でさえ、よりによって最悪の男にボンゴレを象徴する大空のリングが渡ってしまったことに動揺しているように見える。

「だが老いぼれが後継者に選んだお前を、ただ殺したのではつまらなくなった。お前を殺るのは、リング争奪戦で本当の絶望を味あわせてからだ……あの老いぼれのようにな」

背筋が凍りつくほどの、彼の八年ぶりの笑顔だ。

八年間……ボンゴレの最奥に閉じ込められ持て余した彼の怒りが、暴走を始めようとしている。

雷への嫉妬　4

【雷の対決、レヴィ・ア・タンが、ギリギリのところで白星をあげる。
そして、沢田綱吉の不正行為により、大空のボンゴレリングがＸＡＮＸＵＳの手に渡った。

この日、一晩中雨が止むことはなかった。】

人気の全く寄り付かない並盛中学校の屋外では、二大勢力がぶつかり、激しい火花を散らした。
その話題の中心にあるのは、ボンゴレの次期後継者を争うリングの行方と、あの方の安否に纏わることだった。

「ＸＡＮＸＵＳ！　貴様！　九代目に何をした！」
今まで何とか押し黙っていた沢田家光がついに声を上げた。剣幕を帯びた顔は息子の前で取り繕う余裕はなく、ＸＡＮＸＵＳから受ける仕打ちと怒りに引き攣っている。
まさか、まさか、あの方の身に何かが……。
「ぶはっ！　それを調べるのがお前の仕事だろ？　門外顧問！」
ヴァリアー側の人間なら当然知るボンゴレの座を狙った今回の計画の一端である。当然それを知る者は、紫乃も例外ではない。
沢田家光の超直感はＸＡＮＸＵＳの言葉に、激しく警鐘を鳴らす。痛みさえ伴う暗黒のベールに包まれた不安材料に、沢田家光の顔にも焦りの色が窺える。
「きっ……貴様まさか……！」
「落ち着け、家光。何の確証もねーんだ」
彼をそう宥めるのは、友人でもあり、あの方とは旧友でもある、小さな殺し屋の男だ。
「お前こそ銃をしまえ」

「……」

頭にきていたのはこの男だけではない。

しかし沢田家光にそう嗜められ、トリガーに指をかけたグロック17を、リボーンは渋々と自身の懐に戻した。

やりきれない思いだが、今は自分の教え子達の成長の場だ。衝動的な感情で、彼らが殻を破るチャンスを台無しにするわけにはいかないのだ。

一方で沢田綱吉達は、この一連の会話の中で疑問に思うことも多々あるようだ。疑念を抱きつつ、沢田綱吉はＸＡＮＸＵＳの姿を見上げる。

すると次にＸＡＮＸＵＳは、中指に嵌めたリングを掲げて若きボンゴレ候補に提案してやった。

今後の守護者同士の対決の結果で、沢田綱吉達に軍杯が挙がることがあれば、この手にあるボンゴレの地位も名誉もくれてやると、ＸＡＮＸＵＳは断言する。

「だが負けたら……お前の大切なもんは全て……消える」

ＸＡＮＸＵＳの冷酷非道さを象徴する発言に、沢田綱吉は震え上がる。

彼は、本気だ。もうあとには引けないことを、今の彼らはどれほど頭で理解できているだろう……。

「精々見せてみろ。あの老いぼれが惚れ込んだ力を」

ＸＡＮＸＵＳが審判に合図して、チェルベッロ機関がこの事態の収拾と進行を続ける。

「では、明晩のリング争奪戦の対戦カードを発表します。明日の対戦は……」

静まり返るリングのフィールドで女の機械的な声が、彼らの運命を

切る。

「嵐の守護者の対決です」

発表された結果に逸早く反応したのは、嵐のハーフボンゴレリングを持つ獄寺隼人だ。

仲間に気づかれないように動揺を隠していたが、紫乃はちらりと銀髪の彼の様子を見る。まだ技が完成していないはずだ。

「ベルか……悪くねぇ」

対戦カードの結果に思いのほか満足している男のもとに、雷のボンゴレリングを携えた幹部の男が近づく。だが、冷淡な男は自分のボンゴレリング以外興味はないらしく、そいつを無視して雨が降る屋上から一人立ち去るのだった。

一度でも置き去りにする紫乃を振り返ることはなく、男の姿はいなくなった。

「ＸＡＮＸＵＳ……」

雨の音に掻き消されそうな彼女の声に答えてくれるその人は、当然いない。

紫乃の胸に、昔のしこりだけが残る。

炎の絶海に焼き払われた記憶……。

「待て。セラン」

その殺気に気づくと、紫乃の背後を取る黒い影がそこにあった。

しっかりとその赤子の手にグロックのトリガーを握り、いつでもその引き金を引けると紫乃を威嚇している。

今晩の戦いが終結すると、チェルベッロ機関は忽然とフィールドからいなくなり、沢田家光は直ちに九代目の詳細を確認するためボンゴレ本部へと戻り、沢田綱吉達は倒れているランボのもとへ駆け寄っていた。

「おめーが言ってたのは、この事だったのか。九代目の身に何かあったら俺は容赦しねえぞ」

〝伊波紫乃〟で最後に彼と面会した際、そんなことを彼の小耳に漏らした気がする。

今の紫乃には、赤ん坊が銃口を向ける理由も些細なことに思えた。

「待てよ、小僧」

牽制し合う二人の間に水を差すのは、これまでの成り行きを静観していたはずの山本武だ。

伊波紫乃が関わるといちいち首を突っ込んでくる。これぱかりはリボーンも手を焼いた。

「山本、どけ」

「落ち着けよ。話はよくわかんねえけど、そうピリピリすんなって。伊波もずっと黙ってたらわかんねえだろ?」

どうせ仲違い程度の喧嘩だと思い込んでいるこのちゃらんぽらんな奴の言い分が、不安定な彼女の気に無性に障る。

彼の前で演じた伊波紫乃は、本当の自分ではないのだ。

「茶番にはうんざりしていたところだ」

不躾に言い放ったその一言に、場は静まり返る。

視界の端にランボを抱えて紫乃達を唖然と見つめる沢田綱吉がいた。居心地が悪い。苛立ちを含んだ目を視界に憚る彼らに向ける。

「しかし、私は予め忠告してやったぞ。なのにこんな事になったのは、一体誰の落ち度だ? ボンゴレの危機管理はこんなにも杜撰だった

か？　門外顧問も慌てて本部に引き返す始末じゃないか」

殺し屋の逆鱗に触れる言葉が口々に飛び出す。彼も即座に言い返す真似はしない。紫乃の忠告を活かしきれなかったのは、彼の落ち度である。

紫乃にはあの時点でＸＡＮＸＵＳが九代目の替え玉を用意していると踏んでいた。その替え玉が上手く扮しているお陰か、こうしておしゃぶりの赤ん坊や門外顧問の男の動きを計画の内に組み込むことができた。

「ぅツ！」

屋上のフェンスまで、山本武の身体が吹っ飛ばされる。あまりの突然の出来事に、ボンゴレ達の動きが止まる。

紫乃の手には、鉄の拳鍔がしっかりと嵌められていた。

「君にも言ったはずだ。私の前に立つな。二度とその名を口にするなと。君が慕っていた伊波紫乃は、もうどこにもいない」

自ら山本武を冷たく突き放す。

そして豹変する彼女から腹部への強烈な攻撃を不意打ちで喰らった山本武は、口元に滲んだ血を噛み締める。痛みの感覚も麻痺し、精神的苦痛に打ちひしがれる。

「伊波……」

「もう聞き飽きた。押し付けがましい優しさも、生ぬるい君達の友情ごっこにも……沢田綱吉」

握り締める拳鍔にグッと力を入れ、紫乃がその真紅の瞳を向けるのは、第二次性徴期前の小さな背中がまだどこか頼りなく見える少年。つぶらな瞳は、紫乃を見て狼狽えている。

自分を標的にする男でも、偽物を好んだ男でもなく、紫乃は彼だけを見据えていた。

「前に君に言ったことを憶えているな。この醜い戦いで、君は本当の

絶望を味わうことになるだろう。楽しみにしているよ」

苦しそうに笑う。どうしてだか、沢田綱吉の目に彼女の表情はそう映る。

ああ、憶えている。

俺に迷子のランボを預けてああ言ってくれた言葉も、六道骸との対決で逃げようとしたダメツナを奮い立たせてくれた小言も……。

「伊波さん……」

弱るランボを抱きかかえて、今の沢田綱吉には、かつてのクラスメイトの女の子にそう返すので精一杯だった。

「行こーぜ、お嬢」

ししっと、明日の嵐戦の対戦相手であるベルフェゴールが、紫乃を連れて雨のフィールドを引き返す。

その後をスクアーロや小柄な隊服の守護者が続く。

フィールドにポツンと残されたボンゴレの面々は、誰も彼女が去るのを引き止めることができなかった。

突き飛ばされたフェンスにドサッと背中を預け、鉄の鈍器に殴られた痛みに唇を強く噛み締める。

一度も彼女に触れることができず、引き止められなかった自身の右手を見つめ、山本武の小言はこの日の雨に打ち消された。

誰が為に空は泣き続けるのか。

それぞれの胸に抱く悲しみを溶かして降り続く雨は、しばらく止むことはなかった。

嵐の憂鬱

時計の針が、間もなく１１時を刻む――――。

並盛中学校の校舎の三階に再び招集された、それぞれの守護者達。
ヴァリアーからは、暗殺部隊きっての天才と謳われるベルフェゴールが、いつまで経っても現れない対戦相手を悠々と待ち構えている。
沢田綱吉側の嵐の守護者である獄寺隼人の姿が、約束の時間になっても一向に現れない。彼の師範であるＤｒ．シャマルにストップをかけられているかもしれないと、山本武の肩にとまるリボーンが語った。
リボーンのその話を事前に聞いていた沢田綱吉達は不安の色を隠せないまま、向かいの校舎に掛けられた時計の文字盤を凝視した。ついに一分を切った制限時間、一同が息を呑む。
張り詰めた緊張の場面で、時計の長針が１１時ジャストを刻もうとした寸前――……その白い文字盤が、爆音とともに吹っ飛んだ。

「お待たせしました。十代目」

ド派手な銀髪に、嵐のハーフボンゴレリングを首に提げた獄寺隼人が、何食わぬ顔で登場する。
待ち焦がれた人物のお出ましに、ボンゴレ陣からワッと喝采が上がる。

「獄寺隼人、いけます」

ヴァリアーから嵐の守護者に選出されたベルフェゴールと、この校舎三階のフィールドで正面衝突することになる。

前髪で隠れたいけ好かない奴の顔面に、ガラの悪さに見合った鋭いガンを飛ばす。それでも相手はうししっとニヒルに笑っていたが。

「約束の時間に間に合いましたので、勝負への参加を認めます」

獄寺隼人は勝負に間に合ったが、その相手はこと暗殺においては一番のやり手であるというベルフェゴールだ。

その天才を相手にしなければならない獄寺隼人を思い、沢田綱吉の顔色は晴れないまま、今晩の対決の説明が始まった。

「今宵のフィールドは、校舎の三階全てです。もちろんこの棟と繋がる東棟も含まれ、廊下だけでなくこの階にある全ての教室を含みます」

獄寺隼人が好む遮蔽物のあるフィールド構成だ。

「ただし――」

双方の間を突然疾風が横切る。それに巻き込まれた机や椅子が廊下の窓ガラスを突き破り、校庭にバラバラと落ちた。

ハリケーンタービンと審判役の女が解説する機器が、校舎三階のあらゆるポイントに設置されている。それが人工的に最大級の突風を作り出す。タービンの四方にある吹き出し口からそれが放出されるという、まさに嵐の装置だ。

まともに食らえば、フィールド外に引き飛ばされ失格とさえなり得る。さらにそれは試合開始から十五分が経過すると、仕掛けられた時限爆弾が爆破するというのだ。

最悪十五分以内に勝負がつかなければ、二人とも死ぬことになる。

「そんな……」

チェルベッロの女達の説明を受け、沢田綱吉は狼狽えていた。

「最悪嵐の指輪ごと爆破してもいいってことだ。守護者のリングをどーでもいいと考えてんのは……あいつかもな」

「ＸＡＮＸＵＳ……！」

彼の脳裏に……昨晩の雷のフィールドで邂逅した恐ろしい男の顔が浮かんだ。

圧倒的なパワーと威圧であの場を征したＸＡＮＸＵＳという男……その恐ろしさは、あの晩にも十分に思い知らされることとなった。

「デスマッチかよ……おもしれぇじゃねーか」

獄寺隼人は、恐ろしいマシーンにも全く動じていない様子だ。しかし、沢田綱吉には不安が残る。

チェルベッロ機関の話が一通り終わると、Ｄｒ．シャマルがどこからともなく湧いてきて、唐突に彼女達にセクハラ行為をしている。すぐさま肘のダブルパンチを食らっていたが。

Ｄｒ．シャマルの乱入に敏感に反応していたのは、獄寺隼人だけではなかった。ヴァリアー陣のスクアーロや小さな赤ん坊が、その男の姿に反応している。

現役時代は、〝トライデント・シャマル〟の名を轟かせ、天才の異名を欲しいままにしたやり手の男だ。ことセクハラにおいても、その殺しの技が活かされている。

ヴァリアーの小さな赤ん坊の話では、二代前のヴァリアーに声をかけられたが全て断ったというほどの変わり者でもある。

その本人は、危なっかしい弟子の冷やかしに来たという名目で、今晩の争奪戦に駆けつけたとのことだ。獄寺隼人にはあからさまに嫌厭されていた。

初めは頑固に嫌がっていた円陣も、沢田綱吉の一言でさっさと済ませると、いよいよ対決の舞台に乗り上げる。

右腕の名に恥じぬよう、この戦いに挑んでくると意気揚々と決意表明をした獄寺隼人が舞台中央に向かう。その姿を見送る沢田綱吉だったが、勝負事にはいつも張り切りすぎる彼が心配であった。

ベルフェゴールの揺さぶりにも動じず、獄寺隼人は勝負への本腰を据える。自分が負けたら、もうあとがないのだ。そのことを守護者の誰よりも肝に据えていた。

「それでは嵐のリング、ベルフェゴールＶＳ．獄寺隼人――――勝負

開始」

ランボを預けた病院を後にした獄寺隼人は、飲んだくれたＤｒ．シャマルとの修業の最終段階に入る前に切らしたタバコを雨の中買い出しに行っていた。

買い出しに雨で全く人気のない片道をそそくさと早足に向かっていると、思いがけない人物を河原の河川敷で見つけた。

雨でぼやけるその人物の姿を確かに視界に入れて、獄寺隼人は思わずそちらに足を向けた。こんな雨の日に河川敷で一人佇んでいるそいつのもとまで一直線に向かって走る。

獄寺隼人が背後から近づくと、その気配を感じた相手が、遅れてこちらを振り返る。

「おいッ！」

獄寺隼人の鋭い剣幕に後退る彼女が逃げないよう、やや乱暴ではあったが上着の胸倉を掴んで引き寄せる。

あの時の屋外でのやり取りで、この女が去り際に沢田綱吉に言い放った侮辱を、獄寺隼人は聞き流すことができなかった。

この女を好いているらしい山本武にあんな仕打ちで返したのは一向に構わなかったが、なんだかんだで彼女のことを気にかけていた沢田綱吉の好意もあんな形で無下にしたことを彼は許せないのだ。

「てめぇ……！」

街でチンピラに絡まれた時のように、彼女にあの時の十代目への侮辱を訂正させようとしたが、獄寺隼人の動きがピタリと止まる。

今まで正面からまともに見たこともなかった彼女の目と目が合う。

その目尻には、冷たい雨に溶けてしまいそうな透き通る涙が、滲ん

でいた。

泣いて……いるのか……？　獄寺隼人は戸惑いつつ、口に出す言葉を模索する。

その女がここで泣いている理由が、彼にはさっぱりわからないが、これでは沢田綱吉への侮辱の言葉を責める気にもなれない。

「思い出したのか……？」

突然、その女がわけのわからないことを言う。その潤んだ目で、先程までの彼女とは別人のように弱々しい声を漏らして、至近距離で顔を見上げられると、獄寺隼人もこれまでの勢いを削がれてしまう。

「は……はぁ!?」

「……君は何も変わらないな」

そんなことも知らず知らず、見つめ合う紫乃の方から彼との距離を縮める。

こうして彼女の方から近づくとはじめの勢いはどこへやら、少年時代から変わらず頬を俄に染めてしどろもどろになるのだ。わかりやすいのは嫌いじゃない。

「っ……あんた……」

あの人のピアノの旋律が、昔の記憶を呼び覚ます。

〝ｓｈｈ――――……〟

――――大粒の雨の音が徐々に遠くなる意識から現実の戦いに思考を引き戻し、獄寺隼人はハッと目を醒ました。ナイフに切り裂かれた痛みを伴って、現状に目を凝らす。

なんで今……あの女のことが頭に浮かんで来るんだ。

それよりも、この戦闘で勝つには、切り裂き王子の見えない仕掛けをどうにか攻略しなければならない。

それには……獄寺隼人はこれまでの出来事を搾り出した。

そして、仕組まれたある仕掛けに彼は気づく。時間はない。理科室の人体模型にそれを括りつけ、この勝負の必勝法を模索した。

最終局面に達し、爆弾の制限時間が三分を切る前に相手の全ての手の内を見抜き、なんとかギリギリのところで敵を倒すことができた。獄寺隼人も全身が切り傷だらけである。ガクッと膝から力が抜けそうになり、モニター越しからＤｒ．シャマルにいびられている。

最後の仕上げに失神した相手の首から提げられたハーフボンゴレリングを手に入れる。

できることならぶっ倒れる前に、沢田綱吉への侮辱を訂正させたかったと、薄れる意識でぼやきながら、あの女のことが再び頭を巡る。

そうだ。あの女にも、沢田綱吉への侮辱を訂正させたかった。だが――……。

「勝つの……俺っ……！」

気を失っていたと思っていたヴァリアー幹部の男が、まだ粘る。獄寺隼人のハーフボンゴレリングを狙って手を伸ばしてきた。

獄寺隼人も振りほどきたかったが、この激戦の後では身体に上手く力が入らない。

まもなく爆破の予告時間となる。

別の教室から、次々とハリケーンタービンに仕掛けられた時限爆弾が爆破する。

Ｄｒ．シャマルからリングを敵に譲って引き上げろと告げられる。
このままでは敵とお陀仏だ。
だが、獄寺隼人も簡単には引き下がれない。自分が負ければもうあとがないのだ。
「手ぶらで戻れるかよッ！」そうやって意地になる彼の姿に、モニターを見つめる沢田綱吉はショックを受ける。
十代目とか、ボンゴレリングとか、そんなよくわからないことのために彼が命を落とすなんて馬鹿げてると思った。沢田綱吉にはそんなことより、彼に他に言いたいことがある。
円陣を組んだ時に君に言ったことを、もう忘れてしまったのか。彼の小さな拳が、わなわなと震えてしまっている。

Ｄｒ．シャマルに修業で教わったことを、彼も忘れてはいなかった。だから、一番の使いどころで、自分の命で十代目に貢献しなければと思った。
それが、今なんだ。

「ふざけるなッ!!」

誰の声にも耳を貸さなかった獄寺隼人の動きが、止まる。
肩で息をする沢田綱吉の声に、この場にいる全員が耳を傾ける。校内スピーカーがはち切れんばかりの、獄寺隼人への渾身の叫び。

「何のために戦ってると思ってるんだよ！　またみんなで雪合戦するんだ！　花火見るんだ！　だから戦うんだ！　だから強くなるんだ！」

いつも周りの顔色を窺うばかりだった沢田綱吉が、自分に帰って来いと必死に声を上げている。
霞んだ視界に雪合戦や花火の思い出が浮かんだ。リングを掴んで

いた手が緩んだ。

「またみんなで笑いたいのに……君が死んだら意味がないじゃないか!!」

城を飛び出してから、周りの大人達が汚く見えて、グレているばかりだった。

路頭を彷徨っていたところを九代目に拾われ、沢田綱吉と出会ってからの二年間は、彼の隣で心から笑えることが多くなった。嫌な奴と張り合うことも、バカな奴らに振り回されることも、一人でブラブラとマフィアを彷徨っていた時期よりずっと心躍る時間だった。

沢田綱吉が、この戦いに懸ける思いは、最初から変わっていない。ランボを助けた時もそうだったじゃないか。

この戦いで彼の願いは、次期後継者の椅子じゃない。このメンバーでまた当たり前の日常に帰ることだ。

「……十代目」

今なら、わかる気がする。

右腕として、友達として、その言葉を選んでくれた意味が……。

彼はそうしてリングから手を離した。

「思い出さないでくれて……よかったのに……」

少しだけ雨の気配が弱まる気がした。

ふと自分から視線を逸らし、恥じらうように目線を下げる。その言葉とともに憂いを帯びた視線に、不思議と惹き込まれそうになる。

獄寺隼人もロクに関わることのなかった女子生徒に、どう切り返していいのかわからない。

「なあ、ひとついいか？」

しっとりした女の声。

すぐさまこれまでの流れから切り替え、再びこちらの顔を覗き込むようにして見つめる彼女の視線が、イタイ。

「あぁ？」

半分照れ隠しのつもりで返事をする。濡れた彼女の髪や肌が、妙に艶っぽい。こんな土砂降りの中、河川敷の一角で、そんなことを考える。この女にゾッコンだという彼には少し申し訳ない。

「沢田綱吉が死ねと言ったら、君は死ぬのか？」

「なんちゅう縁起でもねえこと言ってんだッ!!」

その口調から想像にもしなかったえげつない内容の問いかけに、今までの張り詰めた空気もぶち壊して獄寺隼人は叫んだ。

全く縁起でもねえ。そんなことが現実に起きたら悪夢だ。しかしそれでも、彼はこう質問に答えた。

「ったく何かと思えばクソつまらねえこと聞いてくんじゃねえ。十代目の右腕なら、十代目のためにソッコーで死ぬ覚悟くらいできてんだ。あのお方の生涯右腕が務まるには、そんくらいの覚悟背負ってかねえと」

少しの迷いもない彼の口振りに、紫乃は安心した表情で素っ気なく返した。

「そうか。わかった」

愛想もない女はそれの答えを聞くと彼に興味をなくしたのか、視線を合わせることもなく寂しげな背中を向けて行ってしまった。

一度は引き止めようとしたが、真実を引き出すためのきっかけになる言葉が見つからず、結局は霧に消えゆく彼女の姿を見送った。

嵐のハーフボンゴレリングを捨てて、獄寺隼人は図書室を飛び出す。

爆発から逃れるために、最後の力で仲間が待っている場所に駆け出していく。

「へっ。そういうことかよ……」

空っぽの自身の手を見て、悔しさが一気に込み上げてくる。勝負に負けたのもあるが、あの時自分にとんちんかんなことを質問した女の真意が解けてしまったからだ。

あんな暗い女に自分のことをわかったように思われてしまうのが、獄寺隼人には癪である。

「カッコつかねえじゃんかよ……」

ボロボロになりながら一生の仲間に迎えられた彼が小さくこぼしたその小言を、聞いている者はいなかった。

【十月二十一日

嵐の対決、ベルフェゴールが執念を見せ、嵐のボンゴレリングを持ち帰った。

けれど、勝ち負けよりも、最後に命を取った君のここ一番の成長は素晴らしかった。

あの時、君なら沢田綱吉の気持ちに必ず応えてくれると思ったからだ。必要ないと思ったが、お節介をかけてすまない。

昔のことは、忘れていい。

まだまだ頼りない若きボンゴレのそばで、居場所がなかった君が心から笑っていてくれるなら、それでいい。】

愛の追想曲

森林の奥地の丘陵に佇む古城の内部では、月に一度の客人を招いた懇親会が開かれる。そこでは各界の著名人らや大富豪マフィアの重役も数多く招かれ、立食式の食事やオーケストラの生演奏に舌鼓を打つことができる。

この日の宴会では、六歳になったばかりの獄寺隼人も、客人にピアノの演奏を披露するよう父親から言いつけられていた。

だが、この日も当然バックレようとした彼は、しかしその逃亡に失敗し、城の執事や使用人から現在追われるハメとなっていた。

まだ六歳の子供とは思えない逃げ足の速さで追手を巻きつつ、城のどこに身を潜むか獄寺隼人は考えた。このくだらないパーティーがお開きになるまで絶対に見つからないところがいい。

彼の父親のメンツなど知ったことかと言った少年の残酷さのお陰で、今頃舞台の袖では大勢の大人達が混乱していることだろう。それくらいは彼にも予想がついた。

古城内部を探索しながらいい隠れ場所を探す彼の前に、一人の男の大きな影が被さった。

「君が脱走した例の少年か」

眼鏡の奥に鋭い眼光を光らせる得体の知れない男は、獄寺隼人の幼い容姿を見下ろして言った。子供が相手だというのに、それに見合う愛想を全く見せる様子もない。

しかし、獄寺隼人も並のクソガキではない。見ず知らずの男を相手にいきなり啖呵を切った。

「誰だよてめぇ」

「このパーティーに招かれた客人だ。君の執事から君が逃げたと小耳に挟んだので、私も協力することにしたんだ。お嬢様が招かれたパーティーを、こんな小僧に台無しにされては参るからな」

わけのわからないことを語る男の内情などどうでもいい。獄寺隼人は早く自身の隠れ場所を探すため、男を小型爆弾で振り切るとそこから逃走した。

遠くなる廊下の向こうから、クソガキッ！　と怒鳴る声が聞こえたが、してやったとばかりに獄寺隼人は足を弾ませた。

男から逃走してまもなく、人気も寄り付かない廊下の奥で行き止まりにぶつかった。引き返してしまえばあの眼鏡の男に見つかると思った獄寺隼人は最奥にある部屋にしばらく籠ることにした。

部屋はさほど広くはないが、人気もない静かなところで、部屋の中央にはグランドピアノが置かれている。ここでピアノを弾いてパーティーが終わるまでの時間を潰すのもいいと獄寺隼人は思った。

そしてピアノの奥に置かれたテーブルとソファーに目をやると、むくりと身体を起こす小柄な人影がいた。

「……だれ？」

彼の目に一番に飛び込んだのは、小柄な少女の透き通る肌と、彼を見つめる大粒の宝石のように輝く双眸。歳は変わらないように見えるが、獄寺隼人を見ても落ち着いた物腰が大人びた印象だ。小柄な身体に見合わない長い黒髪が彼女の白い肌とは対照的である。その華奢な身体に纏う飾り気のない白のパーティードレスが、その娘の淑やかな雰囲気によく映える。

彼女もこのパーティーの参加者なのか？　その質素に着飾る少女の姿を前に、幼い獄寺隼人は思う。

少しの間じっと獄寺隼人を観察していた彼女の色素の薄い唇から流暢なイタリア語で話しかけられ、言葉が詰まるのを実感しながらも強気に言い返した。

「あ、あんたこそ誰だよ。こんなところで何して……」

先客がいたことに動揺していたが、その時コンコンと部屋の扉を

ノックする音がした。心臓が飛び跳ねながら、まさかあの男が自分を追ってきたのではないかと、獄寺隼人は慌てて隠れる場所を探して部屋を見回す。

――すると、見ず知らずの少女の手が、獄寺隼人を引き止める。

「失礼致します。セラン様」
「オッタビオ……」

眼鏡の年若い男が、控え室の扉を叩いて入ってくる。二十代半ばの生真面目なその風貌には、他のマフィアとは一線を引く凛々しさがある。その端正な顔つきに反して、眼鏡の奥には野性的な眼差しを感じられる。

その男が、安静にする彼女のもとまで近づくと、柔らかな雰囲気を纏う。

「お嬢様、ご気分はいかがですか？」
「少し横になったから平気よ。ありがとう」
「では、お嬢様が楽しみにしていた演目までもうしばらくこちらでお休みください」

繊細な少女の身体を気遣い、優しい声をかけてくる。献身的に世話役を務める彼は、あの人がいなくなった後も残された部下達のために毎日忙しなく動いてくれた。

「……ところで、カーペットが汚れていますが、誰か部屋にお招きしましたか？」

部屋の焦げ茶色のカーペットが、汚れているように見える。それは靴跡のようだ。はじめこの部屋に入った時にあったものだろうか？

「さあ、知らないわ。ずっとこの部屋で一人で休んでいたもの。急に部屋を用意してもらったから、掃除が行き届いてなかったのかも」

普段と変わりないさっぱりとした少女の口振りに、オッタビオも彼

女の身体を労わってそれ以上は言及しなかった。

「時間までもう少し休んでいたいの。もういいかしら？」

「……それでは時間になればお呼び致します」

控え室の扉が完全に閉まり、男の足音が遠くなると、部屋の奥のクローゼットに呼びかける。

「行ったわよ」

カラッとした態度のその女に、恐る恐る押し込まれたクローゼットから顔を出した獄寺隼人は、歯切れ悪く言い返した。

「な、なんだお前。どうして俺を――」

焦る獄寺隼人を半ば強引にこのクローゼットに押し込んだ本人は、少し意地の悪い顔をして彼の疑問に答える。

「姉のクッキーを食べたくなくて、逃げ回っていたんじゃないの？」

「ど、どうして、それを……」

大勢の大人達から追われる面倒を起こしてまで、彼がこのパーティーから逃げ続ける理由を明確に突く女に、まだまだあどけない獄寺少年は、明らかに動揺している。

「あなた個人に義理はないけど、あなたの演奏するピアノは好きよ。綺麗な音色ね」

いきなりそんなことを言われるとは彼も思ってはいなかったので、初対面の女の子を前に言葉の歯切れはさらに悪くなる。

押し黙ったままでいる年下の少年に、その見た目とは裏腹に無邪気な一面を合わせる彼女は、ほんのりと顔が赤いように見える彼にこんなことを言った。

「ねえ、本当にパーティーには出ないの？」

「嫌だね。戻ったら親父に怒られて姉貴のポイズン料理を食わされて

イカれたようにピアノを弾かされるんだ。ぜってーに御免だ！」
意地でもパーティーには出たくないと押し切る幼い彼に、彼女も少し考え込む。
突然訪れる沈黙にも獄寺隼人には耐え難い。ここを出て別の隠れ場所を探すか、決断しようとしたところに彼女の完熟した果実のような瞳がこちらを見る。
「じゃあ、今ここでお聴かせ願える？　あなたのピアノ演奏。あなたを匿ったお礼に」
少女の思いがけない提案に、獄寺隼人はたじろぐ。
「はぁ!?　なんで今会ったばっかのお前にんなこと……」
「言ったでしょ。あなたのピアノが好きなの。こんなつまらない大人達のパーティーに出席したのも、あなたが演奏するピアノをちゃんと聴いておきたかったから」
赤い目の奥に獄寺隼人が汲み取れない感情を含んで、一心に自分の姿を見つめている。
「なんで、お前……俺のこと……」
その先の言葉を続けようか彼が迷うと、無邪気な眼差しを自分に向けた少女の顔色はみるみると萎んでいく。
まるで誰の目にも触れられず耐え忍ぶ可憐な花のように。

「さあ、なんでかしら。遠くから見ているだけでよかったと思っていたけど、君と私は少し似ているから」

悲しそうに微笑んだ理由が、彼にはよくわからなかった。軽やかな羽根飾りの真珠は、涙のようにキラリと光る。
その憂いを映す真紅の瞳に魅了されながら、幼い彼は白い鍵盤を弾いた。

彼と直接話をしたのは、あの一度だけ。
何度かゲストとして招かれたピアノの演奏会で、彼のピアノ演奏を一番楽しみにしていたことは、ずっと彼女の中で内緒にしているつもりだ。
君の母親譲りのピアノが、大好きだった。

昨晩、獄寺隼人と対峙したこの河原の河川敷で、紫乃は幼き日の過ちに耽る。
思い出さないでくれてよかった。今の君には仲間がいるから。
君を苦しめた辛い思い出は、もう必要ない。
あの日のピアノの音色は、私だけがずっと憶えているから。

右腕として奮闘する彼の姿を見届けることが叶わなかったのは残念でもあるが、紫乃は不安など微塵も感じていなかった。
君のそばには、沢田綱吉が付いているから。

並盛の夜景を目にして、紫乃は深く息を吐いた。
嵐のリング争奪戦に彼女が赴くことができなかった理由は、他にもある。
今頃、ボロボロに破壊された校舎を目の当たりにして、怒りに震えている頃だろうか。収拾がつかなくなる彼らのことを考えるだけで、自分が最悪のタイミングで顔を見せるわけにはいかないなと紫乃は思った。

【明日は、彼の出番が来る。
相手は、剣帝を倒し今の暗殺部隊にのし上がったほどの腕の男だ。

もしも君が万が一、倒されることがあれば、どう償えばいいか。そんなことばかり考えてしまうんだ。

伊波紫乃なんて偽りの自分で、あなたと出会わなければよかった。次にどんな顔をして、君に会えばいいのかわからないんだ。

でも、仕方ない。過去の時間は巻き戻せないんだ。引き返せないのなら、選択肢を誤ってはいけない。

これが彼らを守るための最善であると信じよう。そして、あなたを守るために、私にできること。

山本武。君なら、ボンゴレの業を洗い流す唯一の村雨になれる。この醜い血の争いを、君の一太刀で清算してはくれないか。】

恋敵　1

並盛の地から遠く離れた高山の竹林の一角では、まるで銃声のように互いの武器の交わる音がけたたましくその一帯に鳴り響く。

絶えまない不協和音の連続に自然界の生物はそこを立ち退いてしまったかもしれない。そこに残った者は、血をあちこちに垂らして静かな闘志を燃やす頭のイカレた男達だけだ。

彼らをそうさせる理由はそれぞれにあるのだが、互いに一致しているのは、どちらとも負けず嫌いの戦闘狂で、どちらとも無駄に頑固で最上級のプライドを持ち合わせているということだ。

最早痛覚の神経もイカレてしまったのではなかろうか。ここ数日平行線上にいる彼らの戦いを見守るロマーリオという男はぼやく。

膠着状態の睨み合いから先に先手を打ったのは、少年の手から繰り出すトンファーの一撃。

それを鞭で弾いた男に、今度はもう片手のトンファーをガラ空きの懐に食いこませる。だが、ギリギリのところで素手で止められ、仕掛けを発動する間もなく男の蹴りで身体を遠くまで吹っ飛ばされる。

竹林のひとつに激突した少年はそこでむくりと起き上がり、何も言わずまたトンファーを突き立てる。

この雲雀恭弥という少年の野心には、ただただ驚かされるというかビビらされるというか、こいつはある種の恐怖だ。ここまで力の差がある大人の男にズタボロにされても、降参するどころかさらに闘争心を燃やしている。

往生際が悪いと言っていいのか……彼の家庭教師を任されたディーノもお手上げだ。だが、引き受けたとなれば降りることは彼の念頭にもない。

それに自分の家庭教師だったあの男に頼まれたとあれば、ディーノも依頼をきちんと果たさなければならないプライドがある。

それはあの赤ん坊に、彼の生徒時代に植え付けられた恐怖の上に構

成されたかなり苦いものであるが、ディーノは無意識に考えないようにしている。今は自分がプライドをズタボロにしている場合ではないからだ。

しかし、最初は手加減するとヘラヘラ笑っていた男だが、延長戦に持ち込まれるとその余裕もなくなり、少年の急所を突いた攻撃に対する彼のやり返しが容赦無くなってきた。はじめは少年の攻撃十回に一でダメージを与えていたのが、五回で頭に血が上る始末だ。

そして男の本気の鞭に、負けん気の強い少年もさらに殺る気を起こす……というわけだ。

いつまでやってんだよあんたらと、付き添いのロマーリオが飽きてくるのも仕方ない。

拗らせた彼らの戦いがしばらく続いたが、この日は雲雀恭弥の意識がボーッとしているようであった。出血多量で貧血を起こしているようではなさそうだが、心配ではある。

「どうした。身が入ってないようだが」

最近になって戦いより別のことに気が逸れている様子が見えるようになった。

このまま無理に戦いを続けて雲雀恭弥に怪我をさせるのは本末転倒なので、ディーノはひとまず彼を休ませることにした。

「少し休むか」

彼がそう言えば、案外あっさりと雲雀恭弥が手を引く。互いに疲れが溜まっているのがわかる。ディーノも休まなければフラフラの状態で鞭を振るうところだった。

しかし、ディーノの心配事は、それだけではなかった。

「どうかしたか？　お前にしちゃ反応が悪いじゃねえか。置いてきた女の心配でもしてんのか？」

雲雀恭弥もそろそろ並盛のことが気になって仕方ないという様子だ。さすがはリボーンに聞いた通りの筋金入りの並盛マニア。

そんな彼に今はまだディーノとの修業に身を入れてほしいので、とにかく並盛のことから気を逸らす話題を取り入れてみる。

この気難しい小僧の気を引く話題が特になかったディーノは、少し考えたがやはりロクに出てこなかった。自ら地雷を踏んだとも知らず、その話に首を突っ込んでくる。

「……」

「ハハッ。そんな怖い顔するなよ。図星か？」

雲雀恭弥の機嫌が俄に悪いが、ディーノの前では常にこれだったのでその変化に全く気がついていない。

ディーノの前では暴れ馬だが、落ち着いた物腰でいればなかなかの美少年だし、周りの女子がほっとかないのではないか。中学生の時期は特に多感である。貧しい学生時代を送ったディーノには羨ましい限りだ。

まだ雲雀恭弥のことをよく知らない彼だからこそ踏める地雷である。そしてディーノも少し興味がある。

彼も昔、一人の少女に失恋をした経験がある。彼が経験した恋愛なんてそれくらいだった。

その娘のことを、どうしたら忘れられるか、今も彼は迷っていた。

「じゃあ、親睦会も兼ねてボスの失恋話聞くか？　あれはボスがお前さんくらいの頃……」

日も暮れが近い頃に焚き火を起こしながら、少年時代に返ったようにロマーリオのおっさんが言う。

ディーノは自身の惨めな思い出を掘り返されんとばかりにロマーリオに口止めをする。

「ロマーリオ！　勝手におっ始めるなよ！」

「見合いの話が入ってよぉ」

「続けるのかよ!!」

ディーノ、１４歳。
この年齢にして、キャバッローネのシマを束ねるマフィアの十代目である彼は、今朝突然舞い込んだとある報せに彼の書斎で声を上げた。

「はあ!?　俺が見合いだと!?」

それは耳を疑う話だった。
今は学校を休学して、一日でも早く親父のシマを立て直すために未熟ながらも奮闘する毎日を送っていたディーノには、そんな恋だの愛だのを悠長に言っている場合ではないのだ。
悠長にそんなことを言っているこの家庭教師の子供に文句を言ってやろうと書類に目を通すのをやめてその小さい悪魔のような格好を睨んだが、そいつにはまるで堪えていない。
「ああ。俺が了承しておいたぞ」
「そんなことしてる暇があるように見えるか!?　リボーン!!」
「三日後に見合い相手と面会があるから準備しとけよ。ロマーリオ達もノリノリだったぞ」
「話を聞けッ!!」

口答えの多い教え子を物理的に黙らせて、黒い悪魔はディーノの書斎を後にする。
かくして、不本意なお見合いにディーノは赴くことになった。

ああ、これが世に言う政略結婚か……と、若き日のディーノは権威ある大人達の恐ろしさというのもを学んだ。
しかし、これもキャバッローネの十代目を背負うために耐えるべきことなのかもと、ディーノは自分自身に言いつけるようにした。
通された控え室で、この日の見合いのために用意された上等なジャケットを羽織り、この際もう腹を括ろうとするが、でもやっぱり気持ちの整理ができない彼の優柔不断な部分が邪魔をする。

そんな一人芝居を繰り広げている間に、ロマーリオが自分を呼びに来てしまった。もう半ばヤケクソになってディーノは控え室を出る。いざとなれば、以前にマフィアの子供が集う学校のスクール寮を夜逃げしたように逃げ出してやればいい。

見合い会場となるシャンデリアが飾られた部屋で用意された席に先に着いたディーノは、余裕のない頭にそんな逃げ道を確保して、今日の見合い相手を待ち構えた。

しかし、こんな自分に見合い話を持ち掛けてくるとは、どこぞの物好きなだろうと、ディーノは相手が来る前にふと思考を巡らす。

事前にリボーンから聞かされてはいなかった。ほんの少しだけ興味が湧いてくる。

マフィアに見合いを持ち込む貴族や資産家は少なくはない。だが、それは名の知れた巨大マフィアの話だ。

今の苦境が続くキャバッローネに、見合いを申し入れる名家がいるとは考えにくい。余程の訳ありか？　ディーノは固唾を飲む。

そして、ディーノと数名の部下が待ち構える室内に、外から応答がある。

重厚な扉が厳かに開かれると、淡いブルーのドレスで着飾った少女と、付き人らしき男が扉を閉めて部屋に入ってくる。

「お初にお目にかかります。十代目。本日はお忙しい中御足労ただき、誠に感謝致します」

付き人の男が口を開く。進行は慣れたものらしい口調で、形式的な挨拶を述べていく。その男が纏う空気につられ、ディーノも異様に肩に力が入っていた。

「本日、十代目とご面談させていただきます、ボンゴレ九代目（ノーノ）のご息女であられる――セラン様でございます」

男が挨拶を終えて、この部屋に入ってきてからしばらく無口だった少女を促す。

「……」

「セラン様」

しかし、男が合図を送っても、少女は何も言わない。口を噤んだまま、俯きがちにしてディーノ達から目を逸らす。

「申し訳ございません。お嬢様は少々恥ずかしがり屋でして、本日はキャバッローネの十代目に会えてとても緊張しておりまして……」

苦し紛れに付き人の男が場を繋いで、ひとまず双方は見合いの席に着いた。

いざ席に落ち着いて見合いが始まってみても、彼らはお互いに持ち寄る話題もなく、双方に付き添う大人達の声かけでなんとか話が進んでいた。

「とりあえず、坊ちゃんも挨拶しとけよ」

「あ、ああ……。キャバッローネ十代目の、ディーノだ」

ディーノがしどろもどろになりながらそう名乗ると、何かの導火線がブツリと切れたように、目の前の少女が椅子を引き摺って立ち上がった。

「帰るわ。お見合いなんて、嫌よ」

肩で息をする少女の姿は、ディーノ達を唖然とさせた。こちらを全く見ようとしない彼女の目は、何かに怯えているように瞳孔を開いてテーブルの一点を見つめる。

「十代目に無礼ですよ。落ち着きください」

「嫌よ。あの人がどういうつもりなのか知らないけれど、お見合いなんて……」

その男が彼女を宥めようとしたが、彼女は全く聞く耳持たずだ。相手もこの見合いには不服であるらしい。

ディーノは、少し羨ましく思った。自分もあの家庭教師にもっと強く反論すれば、彼女を巻き込んでしまうこともなかったのではないか。

……いや、今よりももっと酷い拷問を受けていたかもしれない。こんな時に、一人背筋を凍らせる。

「ちゃおっス」
こんなタイミングで悪魔が降臨してしまった。
その小さな悪魔のシルエットを視界に入れた途端、椅子をひっくり返しかけたディーノだったが、なんとか十代目のプライドにかけて持ち堪える。
――が、そいつの登場に反応していたのは、彼だけではなかった。
「おめーだな。ディーノの見合い相手は」
「っ……！」
少女の目が、悪魔どころか、死神と対峙したように見開かれている。
多少オーバーな反応だが、この場に赤ん坊が現れて動揺するのも不思議ではない。
「そんなにディーノとの見合いを拒む理由はなんだ？　見合いを断るのはそれからだ」
愛らしい顔立ちとは裏腹に長年闇社会にのさばるおしゃぶりの赤ん坊の鋭い眼光を前にして、その売られた喧嘩を買うように少女の目つきにも鬼気迫るものを感じる。
そして、これまでかたく閉ざした口が、彼女の内面にある意思を述べる。
「……そんなの、決まってる。不本意な相手との見合いなんて誰が望むんだ？　迷惑なんだ！」
震える手をテーブルの上で握り締めた少女の叫びが室内に響いた。
彼女の気持ちもわかるが、自身も無理やり連れてこられた身であるディーノは、こうも見合い相手からボロクソに言われて、なんか泣きたくなった。
「……それに、彼のことを……ＸＡＮＸＵＳのことを、知らないはずがないだろう」
彼女の口から〝ＸＡＮＸＵＳ〟と――確かにその男の名が告げら

れた。
彼らの一連の会話を傍聴していたディーノは、そのやり取りの中に浮上した一人の人物に衝撃を隠せない。

ＸＡＮＸＵＳ――――それはマフィア業界を震撼させた男の名前だ。マフィア史上最大のクーデターを起こし、裏社会から消された男。

「承知してるぞ。その上でこの見合いを受けたんだからな」
「なんで……」
その名前を彼女の口から聞かされても、その赤ん坊は飄々としていた。さすがは悪魔の異名が似合う男である。
「九代目とは古い付き合いがあってな。それにうちのディーノはまだまだへなちょこのボスだ。女の扱いもぺーぺーだ」
こいつの言い分は、確かに間違ってはいない。間違ってはいないが、どうしてこんな大勢の前で恥晒しもいいところだと、ディーノは今すぐに穴があったら埋められたい気持ちだった。
「おめーは確かにディーノにはもったいねえ将来有望な女だが、安心しろ。現時点ではまだへなちょこだが、今に立派なキャバッローネのボスに育て上げてやるぞ。この俺が保証してやる」
家庭教師としての自信か、殺し屋としてのプライドか、鋭利な奴の眼差しとは対照に、緩んだ口元はニヒルに笑った。
だが、確実に言えるのは、この赤ん坊はあくまで自分の生徒を一人前にするために暴挙を起こしたこと。そしてそのためならば、手段を選ばないということ。

「まあいいぞ。今日はこれくらいで済ましておいてやる」
ひとまず今日は顔合わせで終わるようだと、ディーノは窮屈な空気をようやく吐き出した。
今日のところは、という彼の言葉のニュアンスに、その場ではすぐに反論はしない彼女だが、その奥歯で奴の言葉をギリリと噛み締め

た。悔しさがこみ上げる。

「安心しろ。お前はなかなかディーノの好みの女だぞ」

重苦しい空気をあの場に残して退散したキャバッローネ一行は、ロマーリオがハンドルを握る送迎車の車内にて、あの時の相手への仕打ちをディーノがカンカンに問い詰めているところだった。

「どういうつもりだよ！　リボーン！」

あんなに相手の機嫌を損ねて、部屋を後にする間際に背中に刺さる視線がとにかく痛かった。見合いを抜きにしたってあれは酷い。

「ああ、お前、メチャクチャ拒否られてたな。ディーノ」

「それを言うなよ！　悲しくなるから！　そうじゃなくて相手メチャクチャ怒ってたぞ!?」

図星を的確に突かれたディーノはつい本音も漏らしながら、悠々と銃の手入れをしている奴に詰め寄った。

「マフィアのシマを背負う奴ってのは、数多の女を転がしてやる器も必要なんだぞ。あれくらい気難しい女を片手で扱うことができたら、お前も一人前のマフィアのボスだ」

「お前の一人前の基準メチャクチャだろ!!」

暴論である。しかも赤ん坊の口からそんな話が出てくるとは思わなかった。親の顔が見てみたいとはこのことだ。

そんなことディーノにはできやしないと思いながら、見合い会場で最悪の形でお別れをした少女の姿を連想する。

「おめーの好みドンピシャだっただろ」

「そ、それはまあ……むしろどストライクだったが……いやいやそうじゃなくて！　お前がどうして俺の好みわかってんだよ！」

「生徒の全てを把握しておくのが一流のカテキョーだぞ」

「気色悪いわッ!!」

後日改めて二人の見合いの場を用意され、ディーノの意思とは裏腹に二回目の面談を余儀なくされた。送迎車の中で家庭教師に実物の銃口を向けられながら目的地に向かうディーノの心中は複雑なものだった。

悪い大人達の魂胆で、事前に用意された見合い会場は意図的にディーノと彼女の二人きりにされてしまった。沈黙がだいぶ気まずい。

こうなってしまったのも、二人を部屋に残す前にアイツが置いていった余計な一言が原因だ。

「今日の格好の方がディーノにはいい刺激だぞ」

なんてことぶっちゃけていったんだよあのクソガキッ！　とこの場にいなくなった家庭教師への暴言をディーノは心の中で吐き散らして、部屋に若い二人を残し扉は完全に閉められた。

ちらりと見合い相手を見れば、アイツが去った扉をじっと睨んだまま、ディーノには見向きもしていない。

「な、なあ……」

晴れ舞台には似つかわしくない室内の重苦しい空気が居た堪れず、試しにディーノは彼女に話しかけてみる。

「話しかけないで」

「す、すんません……」

撃沈する。すっかり黙り込んでしまうへなちょこディーノだが、白く透き通る少女の横顔がどうしても気になってしまう。

前回とは異なる黒のシックなドレスを着飾り、ドレッシーな雰囲気を纏う少女の姿に思わず釘付けになる。つい相手が気を逸らしている隙を見て、大胆に肩を露出したドレス姿に見惚れてしまう。

だから、そうじゃなくて！　あの赤ん坊のノリに乗っかってしまい

そうになるが意識を振り払う。
最初に彼女と対面してからまだほんの僅かしか一緒にいないのに、ディーノは彼女を無視して悠々と暇を持て余すほどメンタルがまだ出来上がっていない。
「ここでつっ立ってんのもあれだし、座ろうぜ。あれじゃしばらく誰も戻ってこねえよ」
ディーノが再びそう言えば、彼女がこちらを向く。気難しそうなお嬢様の視線が、自分を睨んでいる。
その敵意を剥き出しにしている目に単にビビっているのか、それを含めてお嬢様の美貌に自分は圧倒されてしまっているのか、確かにリボーンが言う通り彼の好みをなかなか突いている。つーかなんであの赤ん坊が知ってるんだよと不服に思ったところもありつつ、しばらく彼女と見つめ合っていた。
数分、ほんの数秒のことだったかもしれない。

「君だって、嫌だろう。不本意な相手と結婚させられるなんて」
落ち着いたトーンで、真っ赤な目をこちらに向ける大人びた少女が言う。
そりゃあディーノだって、こんなお見合い話は不本意だ。どんな相手だろうと。自分が好きだと思った相手と結ばれたいものだ。
けれど、自分の立場はよくわかっている。父が残したシマを守るためなら、気持ちを犠牲にすることだって仕方ないような気がした。先代のボスは皆そうしてきただろうから。
「まあ、アイツに無理やり連れて来られたのは確かだけど、親父達のキャバッローネを守るためなら覚悟はしてる。アイツが言ってたことも一理あるし。俺は自分の気持ち犠牲にしても構わねえからさ。今んとこそういう相手もいねーし」
彼の言葉に耳を傾けた相手の目の奥が、ほんの少し動揺しているように見える。彼女と向かい合うディーノにはなんとなくそう見えた。
「……すまない。こちらばかり取り乱してしまって」
「いいってそんな。あんたも大変だな。お互い様だよ」

この見合いに来る前には、散々駄々をこねていたことは黙っておくが。しかし、相手が少し丸くなってくれたのはいい兆候だ。

そういえば彼女はあのＸＡＮＸＵＳの妹である。しかしどうして彼女が自分と結婚させられる話になったのか。

その経過を彼女は淡々と語る。

「ＸＡＮＸＵＳがいなくなって、彼が指揮を取っていたボンゴレ直属の暗殺部隊は、衰退の危機にある。彼がボンゴレと部隊に与えた打撃は、残された者達の想像を超えて遥かに大きいものだった。存続のためには、今までのように任務をこなすだけでは難しいのだろう。同盟ファミリーに自分の娘を売り飛ばしたのも頷ける」

同年代だというのに、彼女の言動はそれを感じさせない凛とした芯の強さを感じさせる。しかし、その宝石のガーネットのように魅了する瞳は、暗い影に翻弄され輝きを失いかけている。

「結局、女なんて政治に利用されるだけの道具なのよ」

彼女自身がそんなことを口にするのが、ディーノにはとても悲しかった。自分を道具だなんて、シマの仲間を大事にするディーノには理解できない。

「そんなことねーだろ」

へなちょこだったディーノとは打って変わり、真剣味を増した鳶色の眼つきが射貫いた。

「自分のことそんな風に傷つけるなよ。そんな風に決めつけんな。お前を大事にしてくれる奴が絶対いるって。なんなら俺が一生大事に……」

自分が何を言っているのかも忘れかけるくらい、ディーノの中に熱がこもった。別に自分の中でこの話を受けることを覚悟したわけではないが、思わず言葉が口走っていた。

――とディーノが暴走しかけたところに、第三者の声が突然割り込んできた。

「やるじゃねーか。ディーノ」

いつの間にかテーブルの上でこれまでの話をコソコソ聞いていた赤ん坊に、すっかりいつもの調子に戻ったディーノは、椅子から転げ落ちるのをギリギリのところで踏みとどまる。

「リボーン！　おま、いつ部屋に……」

「んじゃ、これで示談成立ってことで」

「ちょおおおっと待てえぇぇ!!」

素早くそいつに待ったをかけた。そうでもしないと話が余計に拗れる。

「なんだ。お前今口説いてただろ」

「く、口説いてねー！」

「口説かれてない」

リボーンのからかいに二人で声を被せる。こんなところだけ妙に気が合うのがなんとなくディーノは悲しく思った。

「別に結婚までしなくてもいいんだぞ。ディーノの愛人になれ」

更なる爆弾を投下したこの赤ん坊のお陰で部屋の空気は凍りついた。少しだけ緩んでいたはずの空気はその悪魔の囁きによってぶっ壊された。

もう恐ろしくて、ディーノは彼女を振り返れない。

「マフィアの野郎は常に何人もの愛人を抱き込んでいるのがステータスだからな」

「生々しいわッ!!　つーか相手ドン引きしてるだろッ!!」

「ちなみに俺の全盛期は２００人の愛人を手玉にしてたぞ。お前も頑張るんだな、ディーノ」

「お前まだ赤ん坊だろうがッ!!」

……あの時は、ただ彼女が気の毒で、どうにかしてあげたくて、気づいたら勝手に口が動いたんだ。

自身の不可解なあの言動に、ディーノはそう頷くのだった。

恋敵　2

彼女の目に映るへなちょこな彼の真剣な顔つきは、大空の彼にとてもよく似ていた。

まだ会ったこともない記憶の中の若きボンゴレの少年と君は、よく似ている。

人がいいところも、ダメダメなところも、仲間を大事にする者の素質も、全て彼女にないものを、君達は持っている。羨ましかった。

だから、君を妬んだんだ。

数日後に彼女をキャバッローネのシマに招くことが、ディーノの知らぬところで話し合われていた。

ディーノがそのことを知ったのは、シマの港にボンゴレのプライベート・ヨットが到着してからのことだった。

「俺の知らないところで話が進んでたらしくて、その……すまない。止められたらよかったんだが……」

止めたところであの赤ん坊にフルボッコにされてどの道連れ出されてたのは目に見えていたが、嫌がる彼女を巻き込むのは申し訳ないと思った。

「君が謝ることじゃない」

城から無理やり連れ出されたお嬢様は、ディーノにそう言いつつ、しかしかなり機嫌を損ねているようだ。

こんな気難しいお嬢様のご機嫌取りなんて押し付けるなよとディーノは主犯である赤ん坊に言ってやりたかった。

今朝から姿を見せないが、どーせまたどっかでこちらの様子を見ているんだろう。

それにしても困った。ディーノは今朝来客を聞かされたばかりだから、これといったもてなしも用意していない。ここまで慌ててやって来たものだから、身なりも皺くちゃな白シャツの格好のままである。

手持ち無沙汰でこのお嬢様をどうするか、ディーノが手をこまねいていたところにシマの子供達が嗅ぎつけてきた。

「ディーノじゃん！　何してんだよ！」

「げっ！　ちょ、お前ら……」

「誰この人？　ディーノ兄ちゃんのお友達？」

「ちょうどいいや。俺達食堂に行くとこだからディーノ達も行こうぜ！」

あっという間にディーノ達を取り囲んだ子供達はやいのやいのと騒ぎ立てる。珍しい客人に興味津々であるらしい。

そんな子供達の話題にある場所に、意外にもお嬢様は反応を見せる。

「食堂？」

食堂というのは、ディーノが束ねる港街にある昔ながらの大衆食堂だ。ディーノも昔からよくそこを訪ねていて、度々シマの人々とも交流している。

特にあの食堂のピッツァは、ディーノも一番のお気に入りだ。せっかくなら庶民の味を知らないお嬢様にもシマの自慢の味をご馳走してやりたい。

「おしっ！　じゃあみんなで食堂のオバチャンにご馳走になるか！」

港からそう遠く離れていない食堂では、珍しい客人を招いた歓迎パーティーが行われた。

というのも、ディーノ達に最初に会った子供達が話を広げて噂を聞きつけた街の人々が集まってきて、気づけば食堂は満席になっていた。

わらわらと人が集まるシマの大衆食堂では、右も左もわからないお嬢様の客人を街の人々が次々ともてなし、自慢のピッツァを彼女にご

馳走した。
「ど、どうだ？」
一口食べて黙り込んだまま口をモグモグさせる彼女の反応がここ一番で気になってしまう。恐る恐るディーノは尋ねた。
「うん。とても美味しい」
「だろ！　やっぱオバチャンの焼くヤツは一番なんだよ！」
彼女がそう答えれば見る間に顔色をパアァっと明るくするディーノに、子供かとすかさず彼女からつっこまれた。目の前でご飯の取り合いをする子供達と自分は大して変わりないのか。こんな場だからディーノも軽く笑い飛ばした。
「こんなに大勢の人達に囲まれてきたんだな」
食事の手を止め、大勢の大衆に満たされた食堂の中を見渡して、隣にいる彼女は呟いた。
その目の奥が不意に寂しそうにしていたのに気づくが、自分の目がおかしいのかと、ディーノは不思議に思う。
「ああ、みんな俺の大事なファミリーだ。この食堂も、この街も、俺が守ってかなきゃな」
「……そう」
「親父が残した財産だからな」
「君の父親は……」
「半年前に亡くなったんだ。俺のせいで親父は死んだ。俺が、逃げてなけりゃ……」
自身の腕に受け継がれたキャバッローネの証は、父親を見殺しにした罪も一緒に背負っていくための覚悟を刻んだものだ。
今のキャバッローネのためにできることなら何だってやり遂げてやる。ディーノが受け継いだ使命であり、償いだ。
「……とっ、悪い。こんな暗い話しちまって。まあ、なんだ。俺がこれからキャバッローネを大きくしていくんだ。そのために周りの大人が色々手回して、あんたにも迷惑かけたけど……」

お気楽に笑っているディーノの顔には、余裕がなかった。それは彼の隣に座っている彼女にもわかっていた。

食堂での歓迎パーティーを済ませてから、ディーノ達のあとを付いてきた子供達を交えて、キャバッローネのシマを彼女に案内した。

自然が多く集まる彼らの土地は、古城に閉じ籠もる生活をしていたお嬢様には初めて見るものばかりなのか、子供達と無邪気に笑い合う年齢相応の姿にディーノは釘付けになった。

空が暗くなると、満天の星空が宙(そら)を彩る。

吸い込まれそうなほど煌めく星々の下で、若い二人の男女は歩幅を合わせながらどこまでも続く高原の中を歩いた。

星の不思議な輝きに目を奪われる彼女の黒髪を、闇が仰いだ夜風がさらりと撫でる。無邪気にそれが揺れる度、ディーノの胸はドキドキした。

「君の故郷は、星が綺麗だな」

「ああ。なんもねーとこだけど、俺にとっちゃこの場所が一番だ」

彼がそうやって何気なく言った言葉は、彼女が面を繕って隠そうとした古傷をチクリとさせた。彼が悪いわけではなかった。食堂の人々の笑顔も、この自然も、彼女には全部ないものだ。

俯いたままの彼女の胸の内を知る由もなく、彼女の隣では平然を装うようにディーノは真上に広がる夜空の絶景に気を逸らした。

それから二人は、月に一度は顔を合わせるようになる。

あれからもディーノのシマに度々遊びに来るようになり、あの食堂にもよく食べに来てくれた。お世辞ではなく食堂の味を気に入ってくれたことは、ディーノにとってとても嬉しいことであった。

食堂ではシマの子供達の遊び相手になってくれたり、地域の人々との交流も好意的にしてくれた。
しかし、ディーノが目を離している内にシマの男達に次々と口説かれているお嬢様には少し困ったものだ。少しも目を離しておけない。

「この髪飾り、似合ってるな。いつも身につけてるよな」
「ああ。君の刺青のようなものだよ」

ディーノの左腕にある刺青と似たようなものであるらしい。そうやって彼に微笑んでみせたのは、どういう意味だろうか？
ディーノがこの刺青を受け継いだのは、第一にキャバッローネやシマの人々のためだ。
彼女の髪飾りにもそんな意味が込められているのだろうか――？

「どうだ？　順調か？」
彼女との交流が増えた頃になると、この家庭教師が仕事中にちょっかいをかけてくることも恒例になってきた。
「なんだよ。冷やかしか？」
「まあな。お前にしてはよくやってるじゃねーか」
「ちげーよ。そんなんじゃ。彼女とはただの……」
ふと、その先が続かないことに、彼自身は気づいた。
彼女と自分は、一体なんだろう？　最初に出会った頃に、大人達の都合に振り回される彼女を気の毒に思ってから、ディーノは放っておけなくなった。最近ではくだらない話をして笑顔を見せてくれることが増えた。
でも結局、彼女との関係を明確に表す言葉は、この時まだ見つからなかった。

そんなことを頭の隅に抱えながら彼女との面会に向かうディーノは、慣れない気張った格好に身を包んで、人気のない古城の回廊を進む。

少し早い時間に着いてしまったが、城の内部へは問題なく通された。深い森林の奥地に聳えるこの古城に通うのはこれで何度目になるが、城の陰鬱とした空気といい、こんな閉鎖的な場所に彼女は閉じ込められているのかと彼も少し気に病んだ。

約束の面会室の扉を叩くと、人影がいた。

シャンデリアに明かりも灯さず、暗い部屋に一人でいるその人影は、彼がよく知る人物だった。

「どうしたんだ?」

ディーノがそう尋ねても、彼女は何も答えようとしない。頭は俯いたまま、部屋の隅の窓際から離れようとしない。

ディーノからそっと近づくが、その手を振り払われる。どうしてもこちらを振り向かない彼女だが、その肩は僅かに震えている。

ここで彼女を一人にしてやるべきか、ディーノは悩む。

けど、目の前にいるか弱い少女を放っておけなかった。

「秘密にしててやるから、辛いなら我慢するな」

彼女から一度振り払われた手で、もう一度彼女の身体に触れる。鼓動が伝わりそうなほど彼女と密着したのは、初めてかもしれない。

後ろから彼に抱き締められた彼女は戸惑う様子を見せたが、ディーノを強く拒むことはしない。

それから彼女の身体が自分から離れるまでは、ディーノはそばで彼女の啜り泣く声を静かに聞いた。

「……もっと、早く君から離れるべきだったんだ」

開口一番に彼女が口にしたのは、それだった。

「どうしてだ? 俺は、お前のことを……」

部下達やあの家庭教師の前では誤魔化し続けた自分の気持ちが、彼女を前にして形になり始める。

初めて生まれた感情に、彼女の悲しい言葉に、彼は戸惑うばかりだった。

「君は将来、キャバッローネを背負って立つ男だ。君を支えるのに、私は相応しくない。わかってくれ」

まだ涙が乾ききっていない瞳は、ディーノを一瞥する。ディーノの気持ちなど無視して、見なかったふりをして、突き放そうとする。

「なんだよそれ……そんなことで、ここで一人で泣いてたのか？」

「……」

「お前が思い詰めることじゃないだろ。俺が、まだまだへなちょこだから、不安にさせちまってるんだ。お前がそう思うなら、これから俺はもっと強くなってやるよ。ファミリーも、お前のことも、大事なもんが奪われないように、この手で守ってやる。それができるようなボスになってやるよ。お前が、一人で思い詰めることがないように」

人知れない場所で彼女が震えていたのなら、そばにいてやりたい。今の彼なら、少しずつそれができるような気がした。もっと力がほしい。そのために自分の血が流れても、彼は昔のように恐れはしないだろう。

「ディーノ」

小さく硝子のように繊細な声だが、初めて自分の名前を口にしてくれた。

自分の中に一気に力が溢れるような気がして、自分はまだまだへなちょこなんだと実感する。

「お前のことが好きなんだ。セラン」

幼き日のディーノの覚悟と誓い。
古城の窓から差し込む朧げな月明かりの下での二人だけの誓いを、長い髪を切り落とした彼女は、まだ憶えていただろうか？

その数年後に、彼の誓いは脆く儚く、破られることになる――――。

「セランッ!!」

ヴァリアーの所有するアジトへと逸早く駆けつけたディーノは、使用人が先に扉を開けるのを待ちきれず扉を押し開けた。
ここに来る数時間前にロマーリオに聞かされた内容に、ディーノは真っ先に彼女のことが心配になった。いてもたってもいられず、書類仕事も切り上げて彼女に会いに来てしまった。
部屋の中に入ると、テーブルを囲んでたくさんの使用人達の群れが飛び込んでくる。

「セラン……」
「ディーノ……」
数名の使用人が囲むその中心に、お嬢様の姿があった。
初めてディーノと会った頃よりも、大人の女性として魅力を増した恋人の姿は、ディーノがここに来るまで泣き腫らした目をして、かなり憔悴していた。それほどショックを受けているのだろう。
ディーノがそこに駆けつけると、あとを任せて使用人達はそそくさと部屋を出ていった。気を遣わせてしまった彼らにディーノは頭を下げて、椅子の上に崩れ折る彼女のもとに近づいていく。
ディーノの気配に気づけば濡れたハンカチを握る手を緩めて、静まり返る部屋に啜り泣く声を漏らす。

「本当なのか……オッタビオが、死んだって」

その問いかけに、コクリと頷くだけだった。

「ロマーリオから聞いた。城の内部で、何者かに殺られたって……辛かったな」

犯人は未だ判明していない。しかし、城の内部で起きたとなれば、身内の犯行である可能性が高い。

オッタビオは、兄を失った彼女に献身的に尽くしてくれたヴァリアー幹部の筆頭だった。信頼も厚く、暗殺部隊の立て直しにも尽力してくれたのが彼だ。そんな近しい人物が亡くなってしまった事実は、鳥籠のお嬢様の中でも大きなショックだろう……。

ディーノも、彼女と初めて対面した際に付き人役をこなしていた彼の姿はとても印象に残っていた。その眼鏡の奥に潜んだ鋭い眼つきが冷ややかに感じることもあったが、真面目な青年だった記憶がある。

酷く気を落としている彼女にかけてやる言葉がなかなか見つからず、華奢な身体を抱き締めてやるくらいしかできなかった。窶れた彼女の身体はディーノの腕の中でも震えていた。

ディーノはどうしてやるか、色んな思考を巡らせた。自分がどうすることが、彼女の中の不安を取り除けるのか、彼は考える。元気づける言葉ならいくらでもある。でも、もっと何かあるはずだ。

昔、彼女に誓った言葉を思い出す。

今なら、その想いを口にすることが赦される気がする。

「セラン……こっちを見てくれるか？」

優しい声で、耳元に口を寄せ彼女にそう囁く。

ディーノの指示に従い、俯いていた顔を恐る恐る恋人の方へと振り向いた。

「ごめんな。お前を悲しませないって……あれからお前のために強くなろうって誓ったのに、俺はまだまだへなちょこだ。またお前にそんな顔をさせてすまない」

彼女の前に跪くディーノが見上げている。もう少し彼が近づけば

口づけを交わすほどの至近距離である。突然そんな切ない言葉を彼からかけられるとは思わなかった。
「君が思い詰めることじゃない……」
「前にも言っただろ。お前を好きになるために、俺は強くなりたかった。今でもその気持ちは変わらねえけど、今はもっとお前のことを愛してしまったんだ」

出会った頃から、もう六年が経つ。
ディーノも腹を括る覚悟はできていたし、遅かれ早かれ自分はこうしていただろう。
親しい人の死の悲しみに打ちひしがれる彼女の涙を見て、抑えることができなくなった。
「お前のそばにいられるように、俺のそばにいてほしい」

こんな一途な彼の甘い言葉に酔いしれられたら、彼女も愛を手に入れることができたんだろう――。
「俺と、結婚してくれないか？」

そして、彼女は今から、最悪の形で彼の愛を奪うのだと、握りしめられた手を振りほどいた。
「ありがとう。ディーノ。嬉しかったよ……」
振りほどかれた手が、彼女の前で行き場をなくした。どうして彼女がそう言って微笑んだのか、彼にはわからなかった。
「セラン？」
「結婚はできない。この件で暗殺部隊は九代目の監視下に置かれている。君にも迷惑をかけてしまう。もう会わない方がいい」

「そんなの……納得いかねえよ」
どうして冷たいことを言うんだと、彼女の心を見透かすことができたなら、彼も乱暴な口づけを彼女にすることはなかっただろう。
想い描いた彼女との幸せな誓いは、彼の中で脆く崩れていく――。

「ディーノ……」
「守るっつっただろッ」
「うん。あなたは守ってくれた。もう十分だよ」
彼の頬に手を添えて、前髪を横にそっと流して、彼女は最後の口づけを彼にした。
彼の目の前で、彼女の髪飾りはゆらゆらと無邪気に揺れていた。

「さようなら、ディーノ――……」

ディーノの昔の惚気話を聞かされるはめになった雲雀恭弥は、真面目に彼の話を耳に入れたわけではないが、ここしばらく音沙汰無しの彼女のことが気がかりだった。
今の自分は、並盛から遠く離れた地にいる。
彼女のことを探し出すどころか、自分は戦いに逃げているようだ。逃げる、なんて、彼らしくもない。こんなことは、今までありえなかった。
伊波紫乃……その娘のことを考えると、ムカついた。

「……ただ咬み殺すだけでは、つまらない気がした」

簡単に手に入ると思った。

彼女の肉を裂いて、骨を砕いて、この手が彼女の血で汚れることを、以前は疑いもしなかった。

同じクラスの山本武に度々邪魔をされても、いつか必ず彼女を振り向かせられることができると、彼は疑いもしなかった。それは雲雀恭弥の執念だ。

並盛の他にも、彼が恐らく初めて見せる執着だ。自分でも少しばかり戸惑っている。

どうして、あの娘なのか。

伊波紫乃の存在は、どうしてこんなにも心を掻き乱すのか。動揺するのか。思考が彼女のことでいっぱいになる。

「他の小動物とは違う。もっと君のことを深く知ってから、グチャグチャに咬み殺すつもりだった。でも、咬み殺すだけでは何かが満足しない……」

咬み殺すことじゃない。もっと別の手段がある。

トンファーを降ろした自身の手を見つめ、雲雀恭弥はそんなことを思う。

まだ具体的には、形になっていない。ひとまずこの男との戦いが一段落したら、ゆっくり考える時間はある。今は目の前の戦いに集中しよう。

「恭弥……」

これまでは生意気な奴だと思っていたが、この時ディーノは彼のことを初めて可愛い奴だと思った。

雲雀恭弥の不器用で健気な姿は、思わぬところでオヤジ達の枯れた心に染みていた。

そして雲雀恭弥は、視界に立ち憚る金髪の男を、じとりと睨みつける。

この男を倒して、必ず君を見つけ出す。

もしも次に君を見つけられたら、今度こそこの答えが出るような、そんな曖昧な予感がしていた。

しかし、彼らはまだ知らない。

目の前にいる男が、己の恋敵であることを。

両者の想い人は一致し、しかしながらそのことに彼らがまだ気づいていないことを。

そして二人を引き合わせたのが、あの赤ん坊の策略であることを――……。

彼らが事実を知った時、一人の少女を巡る戦いは、一体どんな修羅場を巻き起こすのかと、その赤ん坊が密かに楽しみにしているとも知らず、二人の男達は再び壮絶な死闘へと繰り出すのだった。

――――じゃじゃ馬とのここ数日間の修業の中でそんなこともあったなと思い出に浸るディーノは、今や自分が若い奴らを引っ張る立場となった。

彼の隣に昔の彼女の姿はないが、今はこの戦いで、若い彼らの成長を見守ることがやり甲斐でもあった。

「で、ヒバリはどれくらい強くなったんだ」

奴の修業の成果を、この赤ん坊が単刀直入に切り出す。雲雀恭弥のこと以外のディーノの話には全く興味がないらしい。彼も少し苦虫を噛み潰す。

「どーかな」

「なっ!?　どーかなって何ですかソレ～～!?」

はっきりしないディーノの返事に、そばにいた沢田綱吉が声を上げる。

だが、ディーノもヘソを曲げて適当に返したのではない。相手が雲雀恭弥だからこそ、彼の成長への可能性は、今のディーノに断言できるものではない。

「あいつの成長は底なしだからな」

今の彼らにそれだけは言っておいた。

しかし、まだまだ安心できる流れではない。ディーノにその話を聞いた山本武は意気揚々としているが、彼には一番に伝えておくことがあるとディーノはそのために並盛中まで足を運んだのだ。

「スクアーロのことをお前に話そうと思ってな。攻略に役立つかもしれねーしな」

「ディーノさん、あいつ知ってんスか?」

「ああ……よく知ってる」

山本武の顔つきが俄に変わった。その男の名前を出した瞬間、鋭いものを宿したのをディーノは見逃していなかった。

「スクアーロは、ヴァリアーのボスになるはずだった男だ――」

昔と大きく変わったディーノに対し、学生時代の一時を共にした奴は、昔と殆ど変わらない男だった。

昔から型破りな男で、剣士でありながら自分のスタイルを持たず、古今東西の剣士を倒して剣技を吸収していった。そして今のS・スクアーロとなるに至るまで、ヴァリアーのボスであった剣帝を倒し、自身の剣技を完成させた……。

誰もがスクアーロが次期ボスであると疑わなかったが、しかしそれ

を一人の男の存在が覆した……。

「ＸＡＮＸＵＳに何か大きな謎があるのは確かだ。いくつか想像はできるが、真実は闇の中なんだ」

ＸＡＮＸＵＳの真実を知るには、やはりこの争奪戦で彼らが勝つしか道はない。

未完成な沢田綱吉達には確かに難しい道だが、まだ希望はある。

「山本、はっきり言っておく」

彼らの道を開くために、これから彼らにとって酷なことが数えきれないほど待っているかもしれない。

昔の自分自身のように――……。

「スクアーロはいくつもの流派を潰してきた男……流派に頼っちゃ勝機はないぜ」

けれどそれを乗り越えなければ、誰も守れないことはわかっているはずだ。

ボロボロになるまで突き進むしかない。

「奴を倒すには流派を超えるしかねぇ」

同時刻――……嵐の決戦を終えてホテルの一室に戻ったスクアーロは、部屋の中央で椅子を引いて寛いていたＸＡＮＸＵＳに戦況を報告した。

「ベルは勝ったぜ。しかも明日の勝負は俺だ」

明日の勝負に余裕で自身が勝ち、このくだらない遊びに蹴りをつけると意気込んでいたスクアーロの後頭部に酒が入ったままのグラスが投げつけられた。

彼の頭でそれが割れ、そいつの中身をモロに被ったスクアーロはすぐさま投げつけた本人を睨み返した。

「何だてめぇ……!!」

どきついアルコールの香りに鼻が潰されそうだと反吐を堪えるが、スクアーロが睨んだ相手はそんなの知ったことかとそいつに赤い目を寄越す。

八年前の復讐に血眼になる目が、獰猛な鮫を捉える。

「文句、あんのか?」

その男の赤い目に射竦められ、スクアーロは何も言い返すことができなかった。

――――あの八年前の光景が、ぶり返すからだ。凍りつくような、あの日の結末が。

「くっ」

やめておいた。あの日の出来事は、簡単に口にするものではない。スクアーロは自ら視線を外した。

ホテルに目的の人物の姿を探すが、どこにもいないことを不可解に思い、部屋で悠々としている奴に問い詰めた。

「セランはどこだぁッ!! あいつも今日来てなかったぞおぉお!!」

ボトルに直接口をつけ残りの酒をガツガツと煽るＸＡＮＸＵＳに居場所を尋ねるが、今度は視線を寄越しもしなくなった。

「知るか」

「知るかって、あいつはてめぇが連れてきたんだろおぉッ!!」

この兄妹は一体どうなってんだあぁッ!! とスクアーロはもどかしい思いに振り回され、しばらくホテルの部屋中を歩き回った。そし

てＸＡＮＸＵＳから空のボトルを投げつけられた。

「くたばる奴のことなんざ……」

流派を超えろ

〝奴を倒すには流派を超えるしかねぇ――――〟

嵐の争奪戦の後、ディーノから告げられた攻略法の話を、山本武はあれから何度も考えてみた。朝早く来てあさり組道場を開け、静まり返る道場の中で大の字に寝転んで、一人物思いに耽る。

流派を超えるとはいっても、簡単な話ではない。本番は今晩に迫っているというのに、彼の頭はすっからかんだ。これといったいい策が、何も思い浮かんでいなかった。

ここ数日、稽古の合間にも彼の頭を支配していることといえば、雨の日の屋上で最悪な形で別れたクラスメイトの一人の女の子のこと。

本当に、これ以上はない最悪の別れだったと山本武は思う。すっかり治ったはずの痛みが、胸の辺りで疼いている。

どうしたら、自分に止められたのだろう。

泣きそうな顔で自分達を睨んでいたあの娘を、どうしたら助けることができたんだ。

彼には難解な、堂々巡りの自問を繰り返していたところに、道場の戸を叩く音がした。

「あの……ごめん。邪魔しちゃったかな」

「ちゃおっス」

それは級友である沢田綱吉と、いつも彼の隣を彷徨いている小さな

赤ん坊であった。
友達の来訪に、山本武はいつもと変わらず屈託ない笑顔で迎える。少しも悩みなんかないような、人気者の笑顔。彼の悪い癖だ。

「どーだ？　流派を超えられそうか」
「ハハッ。その話か」
様子を見に来ていきなりその小僧から、核心を突かれてしまう。
修業もこれまで手を抜かずにやってきていたが、山本武は首を捻る。
「さーな。やってみねーとわかんね」
とぼけてみても、本番は今夜に迫る。
こんなことでいいのかと彼も思うところはあるが、跳ね馬から流派に頼るなと釘を刺されてから、自分の中でそれを上手く消化しきれずにいたのだ。
あんなことを言われても、自分がここまで真剣に向き合ったのは、この剣だ。

そんな考えを見透かされてしまったのか、沢田綱吉には難しい顔をされた。こんなことで今晩の戦いに勝てるのかと不安の色がありありと窺える。
これはダメだなと、友達の不安を吹き飛ばすために頭を切り替える。そこに沢田綱吉がいる道場の入口からは、寿司屋の格好の山本剛が顔を出した。
「よお。ツナ君じゃねーか！」
「こっ……こんにちはっ」
「あい、こんにちは」
「なんだよ、オヤジ？」
店の仕込みもあるというのに、こんな時間に道場に顔を出した父親の姿に、山本武は間の抜けた顔で問いを投げる。
「ったく、聞いてくれよ。うちの武ったらここんとこ浮かねえ顔ばっかしやがって。紫乃ちゃんにフラれでもしたか知らねえが情けねえ」

「ち、ちげーよ！　そんなんじゃ……」
「伊波さんのことは、今はちょっとややこしいことになってて、その……」
「話はよくわかんねーが、フラれたくれーで男がクヨクヨしてんじゃねえ。今日あたりなんだろ？　例のチャンバラ」
今晩の雨の戦いを彼の父親が把握していたことに、二人で目を丸くした。
「な、なんで知ってんの？」
「バーロー。わからーな。って……ほんとはツナ君のお父さんから聞いたんだけどな」
意外にも山本武の父親と沢田家光の交流があることに、沢田綱吉はここ一番で敏感になっていた。あのちゃらんぽらんな男が、他所で変なことを言い触らしているんじゃないかと、息子なりに気が気でないのだ。
「相手は恐ろしく強ぇ剣士らしいじゃねーか」
山本剛が、率直に訊く。その鋭い目つきに睨まれ、その息子は「ああ、強ぇよ」と、力強く頷いた。
それなら……と、父親から手渡されたのは、一本の竹刀だった。竹刀の割に、やけに重い。
「たりめーよ。鋼でできてんだからな」
鋼からできたという竹刀を手に収め、呆然と視界に入れる山本武に、彼は説明を付け加える。
「こいつは時雨蒼燕流継承者が八代前から受け継いできた……時雨金時だ」
見た目は普通の竹刀に見えるが、こいつを時雨蒼燕流で抜けば、刀身が潰れ刃を剥くと、彼はその鋭い鋼の刃を彼らの前に突きつけた。

二人が時雨金時に目を剥いている横で、呑気な赤ん坊が山本のバットの竹刀版だなとぼやいていた。

しかし、流派を超えなければならない相手に、その竹刀では不利だと沢田綱吉は思った。

「でも、今日はこの刀使えないんじゃあ……」

「なんでー、そりゃあ？」

「今日の相手は、いくつもの流派を潰してきた強者でさ。そいつに勝つには流派を超えた動きをしねーとダメなんだってさ」

息子にそんな弱音をこぼされれば、山本剛の中にある時雨蒼燕流への強いこだわりを逆撫でした。その江戸っ子訛りの口から飛び出す時雨蒼燕流への熱い想いと誇りに、山本武もたじたじになりながら彼を宥める。

「時雨蒼燕流はなあ！　完全無欠、最強無敵よぉ!!!」

道場全体まで響き渡り柱を揺らす勢いの山本剛の渾身の叫びに、彼の中でも引っ張られるように何かを感じる節があったようだ。

それを捨て台詞にして道場を去った山本剛の背中を見つめて、山本武は確かに手応えを感じた。

顔つきが俄に変わった山本武を真下から見つめ、これまでおとなしく傍聴していた赤ん坊は、彼を呼び寄せた。

道場の片隅に二人きり、内緒話のように低く落とした声が、微かに空気を揺らす。

「なんだよ、小僧」

「山本。いいか。真剣勝負において迷うことは負けだ。引き摺ったまんま今日の勝負に出たらまたあの男に負けるだけだぞ」

穏やかを装う彼も、二度も負ける屈辱は許せないものだ。だから、彼の内側にある大きな迷いの根源の芽を摘むことが最優先だった。

今もずっと彼の顔に書いてある。一人の女の子の名前が。

「落とし前つけとけよ」

山本武はまるで自分の中を丸裸にされたようで、ギクリと顔を引き攣らせ、そしてきごちなくはにかんだ。

そんな青い彼の反応を見て、この男が少しちょっかいを出したくなるのが、日頃から沢田綱吉を悩ませている体質だ。

「俺が言ってやんなくても、もう答えは出てるだろ？」

赤ん坊達が修業に戻るのをそっと見送り、一人きりになった冷たい道場内の空気に、深呼吸をして心を鎮めた。

今ならスーパーマンのように、彼には何でもできるような気がした。

野球で満塁ホームランを打つことも、あの男に勝つことも、あの娘に会うことも。

今晩の戦いに向けて、己の修業を極限まで磨くことに集中した。

父親から受け継いだ竹刀を握り、その鋼の重さを上回る覚悟を固めて山本武は一太刀を振り下ろした。

あの夜の土砂降りの雨に願った

【十月二十二日

今晩は、彼の対決だ。

彼と初めて会話を交わした並盛の河原に足を向けた。私には、彼の戦いを見届ける資格がないと思っていた。土砂降りの雨の日に、彼を殴った衝撃が、今もこの手に残る。】

その晩は、まるで人気のない穏やかな河原の夜景が水面に反射していた。

並盛中学校の敷地内では雨の守護者の対決が始まろうとしている頃に、紫乃がちょうどそこにやって来ると、突然として人の気配を察知する。

紫乃をここに呼び出した人物が、臆面もなく月光の下にその姿をさらして、彼女との接触を図る。

こんな夜に呼び出しを食らうはめになった紫乃は、苛立ちが起こる感情を隠さず口に吐き出した。

「私に何の用だ」

その兄譲りの目つきの悪い目に睨まれ、相手はそれに怯むどころか、学校の外でも通常運転を崩さず、機械的に彼女に話を切り出した。

「今晩の対決には、貴方様に特別席を用意しております」

チェルベッロ機関の女が、紫乃の目を覗き込むように見つめて告げた。実際には仮面の下に素顔が隠れているので、目が合うのか怪しいところだが、紫乃はその女の話を一通り耳に入れることにした。

「ＸＡＮＸＵＳ様から暗殺部隊幹部としての実力を認められた貴女様には、ボンゴレリングの行方を賭けたこの一連の戦いを見届ける資格があります。これはＸＡＮＸＵＳ様のご意向でもあります」

女はそう説明し、つまるところ紫乃に今晩の戦いに出向くことを強要した。

どうして、何故、今になってチェルベッロが、このリング争奪戦に関与させたがるのか、紫乃にはその魂胆がわからない。

観覧ブースを設けるほどの厳戒態勢を敷いているのだ。兄のように、この戦いを妨害する可能性のある彼女を招き入れることは、彼女達にとってどんな利益があるんだ。

「私どもも、貴女様の身の上の都合は理解しております。ですので、このような特別な措置をお取りしました」

「……」

彼女達は、何を知っているというのだ。

まさか、あの日のこと、あの人のことを、彼女達は既に調べがついている。そう言いたいのか――。

その口を今すぐに塞いでやりたい衝動が、紫乃の内側に渦を巻く。

こんな自分は、所詮あの男の妹なのか。

彼の顔を思い出すと、彼女達に突発的に湧いた怒りも殺意も、サッと水に流されるように引いた。彼のようになってはならないと、あの炎の記憶を思い浮かべる。

「今回の雨の対決の舞台（フィールド）です。アクアリオンのあらゆるところに設置した監視カメラからフィールド全体を見渡すことが可能です」

女がフィールドの説明を始めると、紫乃の目の前に広がる河原の景色に、忽然と液晶画面のようなものが浮かび上がる。未来の技術だろ

うか。液晶画面には、並盛中の校舎が映し出される。
紫乃は、終始彼女達の説明に耳を傾けるだけだった。
ここに来たからには、ある程度覚悟して来た。彼らの英姿を、ここから見届けるくらいなら、自分にもできるから。
こんな自分は、やっぱり卑怯者だと紫乃はこぼした。

『伊波、見てるか？』

液晶に映るあの男の顔が、自分を探していた。満身創痍で、ボロボロになりながら、その人は立ち上がる。

こんな時も、人のことを気にしている場合じゃないだろう。

「馬鹿」

彼とここで初めて話した時の景色を、今も憶えている。悲しい記憶を塗りつぶして埋めてくれるように、それは輝かしいものだった。

すべてはここから始まって、間違えた。

雨の一太刀

今晩の雨の対決は、大勢の関わる者が注目するものだった。
その理由は、雨の守護者候補である山本武が負けることがあれば、沢田綱吉側にはもうあとがないからだ。
そうというのに、当人の山本武はこの真剣勝負において、相手から苦境を強いられていた。その相手は、数多く剣豪を倒しのし上がった百戦錬磨の男――S・スクアーロだ。

序盤から時雨蒼燕流の型を抜く事態へと転がり奮闘する山本武であったが、その流派を強豪の相手には見破られていた。
彼が受け継いだ時雨蒼燕流は、先代の頃にこの男によって倒されていたものだったのだ。
流派に頼るな、ディーノのあの時の忠告が思い返される。

繰り出した時雨蒼燕流の型をこの男には躱され、鮫衝撃を受けた左腕はしばらく使い物にならない。男が撃ち出す斬撃の雨に為す術なく、彼はアクアリオンの最下層に突き落とされる。
鮫の男の鎮魂歌（レクイエム）の雨に撃たれる中で、山本武は歯を食いしばる。

こうも一方的なのか……何もできない自分に憤りさえした。自分の弱さで時雨蒼燕流が倒されたなんて、この技をくれた父親が知ったら、きっと悲しむだろうと……。

それに、やられる局面に彼の頭に浮かんだ一人の少女の存在――。

まだだ。こんなところで、諦めてしまうわけにはいかない。あの娘との約束が、残っている。
ここで自分が立ち止まったら、彼は二度と彼女に会えなくなる気が

した。あの日精一杯彼女へぶつけた言葉が、全部嘘になる気がした。

そんなの、カッコ悪いだろ。そんな無様な醜態をさらすわけにはいかなくて、彼の諦めのつかない思いは、戦禍に降り頻る雨の中でポツポツと響いた。

「伊波、見てるか？」

何百回と、口にした名前。

ただ一人のクラスメイトのことを想って、死ぬほど彼の頭を悩ませて、それでもやっぱり口にしたそいつの名前。今のあいつに、届いているだろうか。

「俺は、正直に言ってバカだ。お前の気持ちだって、ロクにわかってなかったんだ。お前に今まで無神経なことばっか言ってたかもしれない。こんなことになってわかったんだ。俺が言った言葉が俺の知らないところで……お前を傷つけてたかもしれねーって……」

校舎内に激しく打ちつける水音の中で、穏やかな彼の心に秘めたものは、静かに奮え出した。

彼の足元を緩やかに流れていく水面、滲み出す鮮やかな血に、あの娘の面影を浮かべていた。

あの娘の瞳に映る世界は、いつもこんな色だったのかと、教室でこっそり見ていたあの表情を思い出す。今更自分の脳天気さに、ほんとに腹が立った。

「ハハッ……ほんとバカだよな」

いざあの場で彼女の真実を知ると、彼には全部を受け止められなくて、こんな自分は、結局情けない奴だと思い知らされた。

これまで何度も辛い局面で、彼女に救われたというのに。

あの夜の冷たい雨が降ったように、雨のフィールドは静まり返った。

「うおおおぉぉい、！　負け惜しみが長げえええぇぇぞおぉッ!!　てめえはここで俺に無様にかっ捌かれるんだあ、!!」

彼の頭上から、あの獰猛な牙の男が唸った。一度目はボロボロに負かされた相手だ。ここで彼が負けるようなことがあったとしても、不思議ではない。

「じゃあ、やられる前に言っといてやるよ」

強敵に一方的にここでやられるだけじゃ、彼の虫が収まらない。たとえほんの数日の特訓でも、ここまで流した汗の努力は、本物だ。あの約束だって――。

ここ一番に、息を吸い込んだ。

「好きだ。伊波」

二度と口にするなと告げられたその娘の名前を、それでもまた口に

して、戦いでボロボロになる彼はまた笑ってみせた。
その笑顔は少し照れくさそうに見えたが、きっとどこかで見てくれている彼女に向けて、精一杯に自分の想いをぶつけているようだった。

「びっくりしたか？　ちゃんとお前に言いたかったんだけど、タイミングとか、わかんなくてよ。でも、やっと言えたぜ」

こんなことがなけりゃ、自分の気持ちを彼女に伝えることがもっと先になっていたと思った。
こんなことになって、鈍い彼もようやく気づいたのだ。素直に認めてしまった方が、ここから前に進めると――。

握り込んだ拳が、これまでのいろんな出来事を思い起こした。楽しい思い出だって、辛い記憶だって、そこにはある。
いつも周りを明るくする彼の落ち込んだような笑顔が、そこにはあった。

素直になれば、そのために彼はどこまでもまっすぐに突き進むことができる。

一度は負けた相手でも、彼は進むために、この戦いに挑んだ。

「けど……お前があんな顔をしていた理由が、こんなことのためだったんなら……俺がこの戦いの流れを変えることで、”自分が惨めだ”なんてお前がバカなこと言わねえで済むんなら……」

彼の周りの水面が揺れて、水音が跳ねる。
正面を睨んだ彼の目つきには、殺し屋のそれと似た鋭く突くものがあった。

「勝つぜ。この勝負」

ボロボロの身体で、それでも自力で立ち上がる男に、屋外で見守る誰もが目を離せずにいた。

彼が固めた意地に、野次を飛ばす者はおらず、その姿を見守り固唾を飲む音がした。

その屋内では、滝水の轟音が唸るフィールドの上から男の醜い罵声が飛んだ。

「うおぉ、おい、まだやるか？　得意の時雨蒼燕流で」

鮫の眼が、牙を突き立て竹刀を持ち直す奴の格好を見下ろしていた。

「どおしたぁ!!　継承者は八つの型すべてを見せてくれたぜぇ!!」

その男は言った。先代の継承者は、八の型〝秋雨〟を放ったとともに無惨に散っていったと――。

それを耳に入れて、山本武はひとつの考えにたどり着いた。

肩で息を吐きながら、にやりと口の端が動く。

「ああ。時雨蒼燕流は、完全無欠最強無敵だ」

敵が撃ち込んだ小型爆弾の爆発の中へと自ら突っ込んでいった。

斬撃の水飛沫がフィールドのあちこちで飛び散り、彼の肌を針のように刺す。

圧倒的力の前で挫けそうになる苦痛さえ、彼の内に秘めた闘志は燃やして、そして彼は前進することをやめなかった。

――〝篠突く雨〟は、八つの中でも、八番目にできた型でな。若い継承者が、大事な友達を助け出すって時に生まれた技らしいぜ。

崩れ落ちたアクアリオンのブロックを上り詰め、彼は再び竹刀を構えた。すると相手との距離を一気に詰めていく。竹刀の刀身は潰れ、刃を剥いた。

「さぁ打てぇ！　秋雨を!!!」

これまですべての時雨蒼燕流の型を見破られてきた。その山本武の顔つきには微塵も恐れはなく、相手の懐へと一直線に切り込んでいく。

篠突く雨――――時雨蒼燕流・攻式八の型を打ち出した彼の刃の峰は、鮫のように正面から食らいついた相手の懐にヒットした。

屋内に溢れる水面に血を垂らしながら、その男がすぐさま彼に問い詰めた。時雨蒼燕流以外の流派を使えるのかと。

山本武は、頭を振る。

「八の型〝篠突く雨〟は、オヤジが作った型だ」

その鮫の男だけでなく、屋外から見守る者からもざわめきが起きた。

その中で合点がいったように、ディーノの肩にとまる赤ん坊が口を開く。

「なるほどな。それで八代、八つの型なんだな」

「ん？」

「時雨蒼燕流にとって、継承とは変化のことなんだ」

「変化……？」

いち早く彼の声に反応した沢田綱吉が、どういうことかと家庭教師に問い返す。時雨蒼燕流の〝変化〟のことを、赤ん坊はこう見解した。

「恐らく山本の父とスクアーロが倒した継承者は、同じ師匠から一から七までの型を継承され、その後それぞれが違う八の型を作ったんだ」

それは受け継ぐ者が先代の型を受け継ぎながら幾通りの新しい型を生み出してきたが、一度きりというシビアなものだった。

変化には、進化だけでなく、退化がある。

常に自分で自分を追い込むように、その流派は受け継がれてきた。

故に、時雨蒼燕流は、気と才ある者途絶えた時、世から消えることも仕方なしとされた〝滅びの剣〟と呼ばれたのだ。

しかしこれで彼はすべての時雨蒼燕流の型を種明かしした。追い詰められた山本武に委ねられたのは、ひとつの覚悟。

〝流派を超えろ〟

篠突く雨を受けて立ち上がるスクアーロの前で、彼は突然と野球のフォームを構えた。水面が彼の膝の上まで上がりつつある閉鎖的な屋内で、そこに彼の影がゆらゆらと反射している。

「山本の奴……新たな自分の技を放つ気だぞ」

「なるほど。常に流派を超えようとする流派……もしそれができるのならば……確かに時雨蒼燕流は、完全無欠最強無敵！」

しかしこれは、大きな賭けだった。

彼がここで流派を超えることができなければ、即ち彼は時雨蒼燕流継承者としての資格がないと見なされるのだ。こんな場面で試練を課すのは、博打でもある。

それは彼自身もまた十分に理解していた。

ここで打たなければ、もうあとがないくらい、わかってる。だから必死だった。

彼の父親が友達のために流派を超えたように、彼にもここで守りたいものがある。

彼の友達のために、そしてあいつのために……。

自分が惨めだなんて、そんな悲しいことを、あいつが二度と言うことがなくなるように――

敵の重い剣に押されても、顔面が切り傷だらけになろうと、彼は引かなかった。全身全霊で目の前の敵を倒すことだけを考えて、行動した。

敵の一撃を避け、背後から刀を振り上げる。すると男の義手がそれを捉え、剣先が彼の腹部を貫いた。だが、手応えがない。

そして大波が男の視界を一瞬阻むと、正面から山本武が突っ込んだ。水面に映る影のフェイクを咄嗟に作り上げ、敵の意識を逸らした

のだ。

うつし雨――。

山本武が新たに生み出したその型を喰らい、その獰猛な男は水が覆う地面に伏して微動だにしなくなった。

その一太刀を浴びせた時に、敵のハーフボンゴレリングを時雨金時の剣先で跳ね返すと、自身の手の中に収めた。

彼の手の中で、雨のボンゴレリングが完成した。

「勝ったぜ」

苦しい戦いの最後に、それでも彼は笑っていた。

鎮魂歌の雨

山本武が差し出した手を自ら拒んだスクアーロの姿が、巨大な水槽の底に沈むまで、紫乃も映し出されるモニターから目を離さなかった。

最後まで見た彼の姿は、死を目の前にしてもあの人の背中を押すために、散ったのだろうか。唯一、己がボスと認めた男のことを。

【雨が、降っていた。

空にはぼんやりと薄気味悪い月が顔を出しているのに、この視界は濡れていた。私の視界を透明に濁す雨の粒は、輪郭をなぞって溢れ落ちる、小さなものだった。小さな水滴が、彼とのこれまでの思い出を物語る。】

「……どうして私にこれを見せたんだ?」

忽然と映し出された液晶画面から視線を外し、その奥で待機していたチェルベッロ機関の女達を睨みつけた。凍りつくような彼女の視線も、しかしその目の端に滲んでいる涙が、真っ赤な薔薇にある棘のようなその娘の鋭い印象を削る。

またひとつ、白い肌を伝う水滴が、殻に包んだ内側の声を漏らす。

「貴女達は……一体……」

彼女達のことは、紫乃にも謎多き存在であった。このリング争奪戦でＸＡＮＸＵＳと繋がりがあり、未来で白蘭の傘下にいた。

常に誰かの手下で動きながら、しかしそこに必ず彼女達の意思があ

るように感じた。

モニターに映る彼のボロボロの姿が、その液晶画面とともに消えるまで、彼女の意識はそこにしがみついていた。

こんな自分を愛してくれた人の悲しそうな横顔が画面から途切れるまで、紫乃は噛み締めた。極限の中で、彼が届けてくれた想い。

彼の好意を自分からフッておいて、あの言葉が嬉しかった。

どうしようもなく嬉しかったんだ。

この気持ちは、どうしようもなかった。

「っ……」

「明晩は、霧の守護者の対決となっております。どうされますか」

忘れられない人の言葉を遮り、彼女達の問いかけが紫乃を今ある現実に引き戻した。

もう彼の命懸けの戦いの痕跡（あと）は、どこにもない。穏やかな河原の風景が辺りに広がり、冷気が複雑な胸中に染み込んでいく。今でもあの頃の景色を忘れられずにいるこんな自分が、未練がましいと思う。

次の決戦には、霧の守護者同士が会い見えることになる。

まだ姿が現れない沢田綱吉側の霧の守護者だが、ここまで慎重に身を隠すのなら恐らくはあの男で間違いないだろう。沢田家光も復讐者の牢獄の死刑囚を、あの息子の守護者にさせようとはなかなかやる男だ。

あの襲撃事件以降、彼からの接触はなかったが、あまり紫乃とは相性がいい相手とも思えない。何より六道骸には、恨まれている。

決戦の場に紫乃が現れて、彼を余計に刺激するべきではないと思った。彼にはボンゴレのために無理をしてでも勝って次に繋いでもらわなければならない。

晴の決戦の時のように遠くから戦いを見守るだけでよかったが、嵐

戦の乱入以降、もうそれも容易にはできない。今回も欠席しようと思っていたが、判断を迷う彼女にチェルベッロ機関の女の一人は続けた。

「……明日の決戦は、貴女様も見ておくべき戦いではありませんか」

その女の発言に今更驚くことではないだろうと、口の端を固く結んだ。

黙り込んだまま自身の足元を見下ろし、彼女はコクリと頷いた。きっと彼女達はこれで満足だ。

「それでは、明晩こちらでお待ちしております」

嵐が去った静けさのような風が、河原の河川敷に残った彼女の頬を撫ぜた。あの後女達はそそくさと退散し、静かな夜を纏うこの河原で紫乃は途方に暮れていた。

彼らの戦いの跡もどこにもない雑草が生い茂るこの地で、彼女はまたひとつ犠牲となったものを考えた。その目はまだ潤んでいる。

あの人がいなくなるまで、紫乃があの場所を捨てるまで、まだ幼かった彼女の代わりに組織の指揮を執り支えになってくれた人だった。己の剣が折れるまで、我儘なあの人に付き従ってくれた献身的な人だった。

あんなことを言って傷つけたが、今でも信用している。

「スクアーロ……」

水中に沈んだ後、ディーノが手配した救助隊に助け出されたはずだと踏んでいるが、あの後病院で無事に一命を取り留めただろうか。

前日の夜に、泊まっている市街地のホテルの部屋で、二人きりで

会った時のことが思い出される――。

「待て、セラン」

ほとんどの者が寝静まる深夜、その男とホテルの共同スペースで遭遇したのは偶然だった。

暖色の電灯の明かりのもとで、お互いに目が合うと沈黙した。頭に被るタオルを左手で軽く握り、紫乃は彼から目線を外してそのまま部屋に戻ろうとした。

その手をスクアーロがおもむろに掴み、二人は正面から対峙する。彼の突然の行動に、紫乃は少しばかり自身の赤い目を見開いた。反動でタオルが床に落ちる。目を配る余裕もなく、彼女の視界には深く眉間を寄せたそいつの顔がある。

彼女がまだ幼い頃から、あの人の隣にいてくれた人だが、これまでこんなに近くで顔を合わせることがあっただろうか。

距離感が掴めず、思わず俯いた。湿った髪がまだ赤みが残る艶やかな頬に張り付いている。彼にあんな酷いことを吐いた手前、目を合わせることさえ気まづいのだ。

二人だけの静なる空間で、するとスクアーロから紫乃に一呼吸置き語りかける。

「あの男がジジイの地位までのし上がるために……そしてこいつは、八年前にお前の期待を裏切った償いだ。俺はこの戦いで必ず結果を残してみせる。必ずなあ〝ぁ……」

八年前の悲しみに囚われた感情と、この戦いに懸けた戦意の意志が

彼の鋭い目の奥に宿る。
紫乃だけではないのだ。この日のために、彼もこの八年間を牢獄のような城の中で耐えたのだ。

「見ていろ。俺は二度とお前達を裏切らねえ」

わかっていた。それでもあの男がああ言ってくれることを。
あの人の復活を願い、どれだけの血が流れようとも顧みず、血に飢えた鮫のように突き進むことを。それが彼の剣の強さだと。

だから彼が適役だった。
奴が、暗殺者として、剣豪としての混じりけない本気の殺意を向けることで、山本武は流派を超えることができた。一度目の敗北を経験した彼を、あの場で極限まで追い詰めた。そうしなければ彼には超えられない壁だっただろう。

そして剣士としての高き誇りを掲げた彼の敗北こそが、沢田綱吉側に劣勢だった流れを変えた。

風向きは変わりつつある。

これまでは紫乃の期待通りの結果だ。

次に来る霧の守護者の対決が、どう転ぶのか紫乃には一抹の不安が残る。六道骸に勝ってもらわなければ、計画は失敗だ。
しかし、歯車は少しずつ狂い出している。
自身という歪な存在が在る限り、どこかで歯車は噛み合わなくなる。そこに亀裂が入ってしまう日は、すぐそこまで近づいている気が

した。

【すべては彼の誇りを犠牲にして得たものだ。

あなたという存在がいなければ、今の彼はいないだろう。そしてあなたを失った今、彼は昔の自分を捨て、その残酷な力を以て、茨の道を突き進もうとしている。

彼を止められるだろうか。誰も信じていないという残酷なあの人を、我が身を捨ててでも、あの日の炎から守りきれるだろうか。

彼はまだ昔のことを憶えているだろうか。思い出すことがあるのだろうか。最愛の人の記憶を――……。】

霧の昔話

長く降り続いた雨が止むのを待ってから、紫乃は遅い時間にホテルに帰還した。寝静まるホテルのロビーには、ひとつの小さな人影が彼女を待ち構えていた。

亡霊と見紛いそうな黒衣の人物が待ち構えていたことに背筋がヒヤリとしたが、顔色を変えないようにその人を見つめた。フードに隠れた眼差しは、棘のようにこの胸を突き刺そうとしているようだ。

「随分と戻るのが遅かったね。守護者の対決にもめっきり顔を出さないくせに」

皮肉った指摘を受け、口元がつい引き攣る。

紫乃は、彼相手には下手なことは言えまいと思った。下手に口は滑らないよう、力を入れる。

「明日は僕の出番だよ。セラン。君は来てくれるんだろうね？」

彼がそう言ってくれるなんて、珍しいことだ。いや、見物料をたかっているだけか。抜かりがない。

マーモンとは、スクアーロ同様長い付き合いであるが、他の守護者達とは違って、彼女がＸＡＮＸＵＳの妹であろうと甘やかす真似はしなかった。

だから彼にしか頼めないことがあった。スクアーロに頼めば、きっと止められた。あの男は見かけによらず女々しいところがある。

それにいざという時は、やはり彼の能力が一番役に立つ。金に物を言わせれば、彼以上に物分かりのいい相手はいない。

「……それは、やめておいた方がいい」

相手から視線を落とし、血潮が散ったように赤黒いカーペットに目線を落とした。

八年前のクーデターで見た景色と一緒だ。何百という男達の死体の山があった。紫乃が知っている男達の顔もたくさんあった。みん

なが血走った目をして、死んでいる。あの時、紫乃には結局何もできなかった。

ＮＯと返事をすれば、彼は俄かに機嫌が悪くなっているようだ。

「僕の言葉にも耳を貸さないなんて、困ったものだね。君からも見物料を徴収できると踏んでいたけど……」

小言を言いながら、彼は考え込んでいるようだ。あの話のだろう。あの城でヴァリアーが集結した夜から数日後、マーモンの後ろに続いてＸＡＮＸＵＳのもとへ向かう道すがら、紫乃は彼にまたひとつ頼んだことがある。

紫乃は、彼女の手にある権限や財産のほとんどをマーモンに譲り渡した。二年前に彼女が突然姿を消した時に。真相を知るのは彼だけだった。いや、彼も彼女のすべてを知ったわけではない。

だからこんなタイミングで彼女が帰還したことや、彼女の頼みごとの内容を聞いて、納得はしていないようだった。

「僕には今でもわからないんだよ。セラン。僕は金のために動くことは厭わないけど、ここにいる以上はボスを信じている。八年前のクーデターでボスを失った後、僕に幻術を教えてくれと頼んできたことには驚いたよ。君はなんとしてもあの時ボスを助けたかっただろうけど、まだ9歳だった君のことが可哀想で、僕はＹＥＳと言った。けど、君にその素質はなかった」

六道骸と交渉するためには、幻術を手玉に取る必要があった。クーデターが失敗し失意の底にあるあの状況を利用すれば、最小限の条件でマーモンから術を引き出すことができると思った。

紫乃は、上手くやれると思っていた。マーモンを利用して、一人で戦える術を身につけられると……。

「誰にでも素質があるわけじゃない。賢い君ならすぐにわかってくれると思った。けど君はそれでも食い下がった。耐性くらいなら、並の人間でも鍛えられる。血を吐くような鍛錬が必要になるけれど、君は

それでも引き下がらなかった。そんな君が、今は真逆のことを言っている。正気なのかい？」

マーモンの言う通りだ。所詮は、なり損ないだ。頭では組み立てられても、彼らのような桁外れた戦いの素質があるわけじゃない。自分は所詮、なり損ないなのだ。

「僕にはさっぱりわからないな。二年前の君の逃亡を黙っているのも金を積まれたからだけど、今回の件は僕の負担が大きいし、保証はしないよ？」

――ああ。わかっているよ。

霧の戦いの行方を特別席から見届けた紫乃は、無惨にもボンゴレの若い精鋭に敗れたアルコバレーノのその散り様を静かに見つめていた。

そろそろ、海を渡った大陸では、あの人の影武者が動き出している頃だ。ＸＡＮＸＵＳの思惑で、ボンゴレ本部はＸＡＮＸＵＳを支持する過激派の手で収集がつかない事態に陥っている。

あの門外顧問が上手くやってくれることを信じていたいが、紫乃が並盛の空を仰ぐと、雲行きは怪しくなるばかりだ。

「セラン」

ホテルに戻ると、他の幹部は先に部屋に戻っていた。しかしそこに負けた幹部の姿はない。敗者は排除される。煌びやかなホテルの内

装がいつもより殺風景に感じる。
紫乃が誰にも会わず上の階の部屋に戻ろうとすると、呼び止められた。また酒のボトルを右手に握りしめているが、それをぶつける相手はここにはいない。

「ＸＡＮＸＵＳ……」
「明日の雲の対決はお前がやれ」
次の対戦カードは雲。雲雀恭弥との対戦だ。通常であれば、モスカの出番のはず。
思いも寄らないＸＡＮＸＵＳの命令だった。紫乃がそれを拒むことは許されなかった。誰も信じていない彼の信頼を崩さないため、一本しかない手綱を放さまいと必死だった。
「マーモンが負けた。己が負けると悟れば試合放棄でトンズラしやがった。奴の行方はモスカに探らせる。あのカスはとっ捕まえて始末する」
自分を信頼していた部下さえ切り捨てて、口封じに殺す。血が繋がっていようと安心できない男だ。
こんなにも残酷な人じゃなかったはずなのに。昔はもっと笑う人だったのに。
大きな力は、人を変えてしまう。
釣り合わない力は、その人を呑み込んでしまう。

「わかってるだろーな。お前は俺を裏切るような無様な真似はするな。死に損ないの老いぼれ達への怒りを忘れんな……」

私だって、信じたい。彼のこと。
でも、この目を見れば、もう手遅れなんじゃないかと不安さえ憶えてしまう。
もうあの頃の兄は死んでしまった。散々泣き腫らしたのに、いつまでも弱い自分が付き纏う。

【十月二十三日

激戦の末、バイパーを破り六道骸の勝ち越し。彼も今後は頼りない若いボンゴレの力になってくれるだろう。

最後に六道骸に敗れてしまったが、あなたに教えてもらったことを後悔していない。金にはうるさいが、なんだかんだで心配してくれていたことを知っている。

長きに続いた守護者の戦いも、明日で最終日だ。

雲雀恭弥。最後に会ったのはいつだったか。何も言わず逃げ出した相手とまた面会することになるのは気後れする。ディーノの修業の成果が、無駄にならないといいが。

もうすぐ、終わる。たとえ何者にもなれなくても。すべてが終わろうとしても、この一冊が、あなたの手に残っていてくれたらそれでいい。】

雲達の因縁　1

「いいか、てめーら!!」

深夜の校内の一端で、獄寺隼人の啖呵が高らかに響き渡る。

「何が何でも勝つぜ!!」
「戦うのはヒバリだぜ」
「お前がいきりたってどーするのだ?」
「ぐっ、んなこたわーってんだよ!」

同級生や上級生からことごとく論破され、口を吃りながら獄寺隼人は苦し紛れに続けた。
「十代目は俺らを信頼して留守にしてんだ。俺らの目の前で黒星を喫するわけにはいかねーだろーが!!」
これだけ彼らが熱くなるのも、この日は大事なひとつの区切りの日だ。今晩の戦いの勝敗で、彼らの今後のすべてが決まる。
日の出の前から仲良く揃って跳ね馬のもとに行ったのも、雲雀が勝たなければいけないからだ。獄寺はまだ不服だったが、この結末にすべてが委ねられている状況だ。自分達が直接手を出せないことがもどかしかったが、ここを空けている人の分も今日の戦いを見届けなければという彼なりの使命感を背負っていた。そしていざという時は、自慢の爆発で木っ端微塵にしてやる算段だ。
しかし自称右腕の高い志も、残りの二人にはさっぱり理解してもらえず、せっかくの熱が空回りしてしまうのだった。こんな時でもいつもの日常の光景が繰り広げられる。

「今日の主役の登場だぜ」
本番の時間が迫る頃になると、昼間と変わらず学ランを羽織った雲雀恭弥が姿を見せた。会場となる並盛中学校の猛者。

彼がどんな思いで、この戦いに挑むつもりかは彼らの知るところではなかった。少人数で群れていたら目障りだとあしらわれてしまう始末。

この傍若無人の男に自分達が命を削って戦い抜いた結果のすべてが委ねられていると思うと、言い知れない不安が襲う。

「そうか……あれを……咬み殺せばいいんだ」

不意に視線を外した先に、でかい図体が憚った。ゴーラ・モスカ。煙を噴き出しながら近づく堅物に、彼の眼つきが俄かに変わった。

今の雲雀恭弥は、どれくらい強くなっているのか――。

場所を移し、有刺鉄線で張り巡らされたグラウンドに足をつける。異様な空気が立ち込めているのが肌で感じられる。

クラウドグラウンド。

有刺鉄線の境界の内側には、ガドリングや隠されたトラップがあらゆるところに仕掛けられている。これこそが雲の守護者の使命を体現していると、チェルベッロの女が宣言した。

彼らがいる場所から離れたグラウンドには、既にヴァリアーの顔触れが待ち構えていた。ＸＡＮＸＵＳという男の顔もそこにはあった。

雷戦以降姿をくらましていた男に、警戒を張る。あの娘の顔もしばらく見ていないというのに。

山本武はふとまたその人のことを思い出して、顔色を曇らせるのだった。

彼らが今後の雲戦の行方に不安を募らせる頃に、遠くでは沢田綱吉が修業を完成させるために血を流し、イタリアの本部では多くの犠牲を生み出している。

全貌を知ることはなくとも、事態の重大性は彼らにも伝わっているはずだ。

「ハッ。モスカはてめーらが吠え面かいて逃げねえように寄越したまでだ」

ＸＡＮＸＵＳが吐き捨てた言葉を合図に、モスカが暗闇の方へ引き下がる。その異様な行動を疑う彼らに、足音を忍ばせる。

やがて雲が晴れ、月明かりが影を照らす。この暗闇に紛れて潜んでいた人物の姿が露わになろうとする。沈黙していた時間が終わろうとする。

ここで腹を括るしかない。後悔しないようにやると、この日を迎えたのだから。

「並中風紀委員長の威厳とやらを見せてもらおう。雲雀恭弥」

壊れたマリオネットのように、幼き頃からこの身に宿されたシナリオに精々躍らされてやろうじゃないか。

彼の怒りが世界を滅ぼす前に、やり遂げてやる――。

【十月二十四日

ヴァリアーの隊服に身を包み、雲雀恭弥とこの日初めて対峙することとなった。

こんな状況だろうと、あの化物は薄ら笑いを浮かべて、こちらの調子を狂わせる。彼まで伊波紫乃に執着していたのか。馬鹿馬鹿しい。

だけど、彼らからどれほど嫌悪されようが別に構わなかったはずなのに、この足が震えてしまった。】

雲達の因縁　2

同じ星空の下では、ボンゴレの炎が灯されている。彼女の希望の星が――。

「――それでは始めます。雲のリング、セランＶＳ．雲雀恭弥――――勝負開始」

直面しているこの現実は、彼の意識を置き去りにしたまま駆け足に進んでいく。

冷たい鉛の鈍器を、自分よりずっと小さな拳に嵌めたあの娘が戦っている姿を目の当たりにしても、山本武には受け入れ難かった。

「なんでだよ……」

どうしてお前は、戦わなければならなかったんだ。

お前が戦う代わりに、俺がお前を守ることはできなかったのか……。

飛んでいった野球のボールを拾ってくれた時から、こんなものを背負っていたのか。いつも一人で。

馬鹿みてえじゃねえか。野球ができなくなったくらいで、死にたくなったことが。

「伊波――」

彼が口にしたその名も、もう彼女に届くことはないのだろうか。

耳障りな金属音が、彼らの間で擦れ合う。

彼女の耳元で劈く音が聞こえ、トンファーの攻撃を受け止めた。それを押し返して、今度は男の綺麗な顔に殴りかかる。風紀委員会の暴君にパシられ続け、いつかはこんな機会を望んでいたかもしれない。しかし、その拳はそいつに易々と受け止められてしまう。

「へえ。君、そんな物騒な物振り回すんだ」

「……驚いているのか？」

「別に。やっぱり君は只者じゃなかったんだね」

「……お前のような鼻が利く強い奴は大嫌いだ」

この風紀の男は、昔から彼女が必死に隠そうとしていた本質を見抜いていたようだ。死に物狂いで隠し通した。君達の日常が壊されないように。

雲雀恭弥が不満そうにこちらを睨みつけている。

「それ、前も言ってたね。聞き飽きたんだけど」

「口を利くのも今日が最後だ」

挑発的な物言いで言い返して、彼のトンファーを打ち返すと一旦距離を置く。そういえば彼が部屋に押しかけた時にも、そんなことを言ったかもしれない。

一年前のことを思い出そうとすると、その隙を突いて雲雀恭弥がこちらへ距離を詰めてくる。今この場では自分だけを見ろと主張してくるかのように。

「嘘だろ……あの雲雀と互角にやり合ってやがる……」

同年代の女の子とは思えない凄まじい戦闘スキルに、それを繊細に操る軽い身のこなし。雲雀恭弥を相手にしてもまったく劣らない近接戦を展開している。

この目がまるで暗幕の空から吊るされた複数の糸で、彼女の手足を操っているかのように錯覚した。

しかも、驚くのは彼女の十分に鍛錬された技術だけではない。彼女の両手に嵌められた彼女の拳より一回りも大きな鉄の武器。

一般的なナックルダスターに比べれば、随分と重装備だ。装着すれば大男の拳ほどの威力を発揮するが、彼女の細い腕にはずっしりと重く負担が大きいだろう。

再び雲雀恭弥のトンファーと激しくぶつかると、右手の拳鍔から鉤が飛び出し彼の動きを止める。すかさず左からはサバイバルナイフほどの殺傷力がある刃物を振り上げる。雲雀恭弥も寸前でそれを躱して距離を取る。

「からくりがあるのは君の武器だけじゃないんだよ」

「わお。燃えるね」

デットヒートする雲戦の行方を静観していた野次馬の中にいたリボーンは、彼女のその戦闘スタイルを目の当たりにしてひとつの考えにたどり着く。

「……まさかあいつ」

「リボーンさん。どうしたんすか？」

近くにいた獄寺隼人にその微かな声を聞かれてしまい、リボーンの顔色は曇る。それが事実ならば、彼女はまだ9歳の少女だったのだ。

「ｅｒｒｏｒ……それがあの女のもうひとつの名前だ。壊れたマリオネット。八年前に死んだと思われていたが……」

まさか……彼女がその暗殺者だというのか。
彼もあの女の演技にすっかり騙されてしまったというわけだ。

八年前のクーデターの後で、ｅｒｒｏｒの死体はあがったと聞いた。たった一人でボンゴレの１／３を壊滅に追い込んだ刺客。
あの事件の中でもそいつの死の謎は残されたまま、今もボンゴレの内部でまことしやかに囁かれていた。